

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第131集

# 荒尾南遺跡B地区Ⅱ

## (第1分冊)

2015

岐阜県文化財保護センター

あら お みなみ  
荒尾南遺跡B地区Ⅱ  
(第1分冊)

2015

岐阜県文化財保護センター



## 序

肥沃な平野と大小の河川を有する大垣市は、北陸・近畿と東海とを結ぶ交通の要衝であるとともに、豊富な地下水の恵みにより水の都と呼ばれるなど、歴史的・文化的景観に恵まれる情緒ある町です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道建設事業に伴い、大垣市中心部の西方に所在する荒尾南遺跡の発掘調査を実施しました。

荒尾南遺跡では、これまでに弥生時代から古墳時代前期にかけての墓約 280 基、竪穴住居跡約 560 軒をはじめとして、溝状遺構や土坑など多数の遺構が見つかりました。そこからは約 370 万点もの土器類をはじめとして、多数の石器類や木製品、金属製品などが出土しました。このうち、本報告書は平成 18 年度から平成 23 年度に実施した荒尾南遺跡 B 地区の発掘調査の成果をまとめたものです。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました、関係諸機関並びに関係者各位、大垣市教育委員会、地元地区の皆様にご深く感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

岐阜県文化財保護センター

所長 宮田 敏光

## 例言

- 1 本書は、岐阜県大垣市荒尾町・桧町に所在する荒尾南遺跡（岐阜県遺跡番号 21202-08568）B地区の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、平成20年度までは財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター、平成21年度からは岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘作業及び整理等作業は、八賀晋三重大学名誉教授及び山田昌久首都大学東京教授の指導のもとに実施した。当遺跡は南北に長く、規模も大きいため、便宜的に北からA地区、B地区、C地区に分けて整理等作業を実施した。本書では、平成18年度から23年度に行ったB地区の発掘作業（面積19,288.6㎡）について、平成19年度から25年度に整理等作業を実施してまとめた。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆は藤田英博、河瀬実浩、宗宮隆司、吉田靖、山本厚美、小野木学が行い、それぞれの執筆箇所は目次に示した。また、第6章第11節の一部を岐阜県博物館の久保貴志氏に、同章第13節を中津川市立坂下中学校の千藤克彦氏に、同章第14節を立命館大学の青木哲哉氏に執筆頂いた。なお、編集は小野木が行った。
- 6 発掘作業における作業員雇用、現場管理、掘削、測量などの業務と、出土遺物の洗浄、注記は、株式会社イビソク（平成18・21年度）、国際航業株式会社（平成19年度）、株式会社アーキジオ（平成20年度）、株式会社島田組（平成22年度）、株式会社ユニオン（平成23年度）に委託して行った。
- 7 土器類実測図のトレース業務は、株式会社イビソク（平成20年度）、株式会社アルカ（平成21年度）、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成22年度）に、土器類の実測・トレース・観察業務は、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成23～25年度）、株式会社文化財サービス（平成23～25年度）、株式会社島田組（平成23年度）、株式会社エイ・テック（平成23年度）に、土器類接合・計測業務は株式会社イビソク（平成23年度）に、石器類、木製品、金属製品の実測・トレース・観察業務は、株式会社フジヤマ（平成19年度）、株式会社イビソク（平成20、23年度）、株式会社太陽測地社（平成21年度）、ナカシャクリエイティブ株式会社（平成22年度）、株式会社二友組（平成23年度）、橋本技術株式会社（平成24年度）、株式会社アーキジオ（平成24年度）に、木製品接合・観察業務は株式会社イビソク（平成23年度）に、整理等作業支援業務は株式会社イビソク（平成24・25年度）に、それぞれ委託して行った。
- 8 遺物の写真撮影は、アートフォト右文（平成22、24、25年度）、株式会社イビソク（平成23年度）に委託して行った。
- 9 放射性炭素年代測定、赤色顔料、花粉、プラント・オパール、堆積物粒度、種実同定、鉄関連遺物、金属製品、白色塊、粘土塊の各分析は株式会社パレオ・ラボ、樹種同定分析は株式会社パレオ・ラボと株式会社吉田生物研究所に委託して行い、その結果は第6章に掲載した。また、執筆は株式会社パレオ・ラボと株式会社吉田生物研究所による結果をもとに、河瀬と小野木が行った。

- 10 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略・五十音順)

青木哲哉、赤澤徳明、赤塚次郎、石井智大、石川ゆずは、石黒立人、石田由紀子、石野博信、伊丹徹、伊藤正人、伊庭功、扇崎由、大塚初重、大野薫、恩田知美、河合章行、川崎志乃、鬼頭剛、黒坂貴裕、黒沢浩、黒須亜希子、下濱貴子、鈴木元、鈴木とよ江、鈴木正貴、高木宏和、高野陽子、永井宏幸、中井正幸、中野晴久、長瀬治義、原田幹、林大智、早野浩二、樋上昇、久田正弘、深澤芳樹、福永伸哉、藤井整、藤川智之、藤澤良祐、藤田慎一、穂積裕昌、堀木真美子、豆谷和之、御嶽貞義、宮腰健司、森岡秀人、森下章司、矢野健一、渡邊博人、大垣市教育委員会

- 11 本文中の方位は、世界測地系の座標北を示し、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系で表している。

- 12 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2005・2007『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社)による。

- 13 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 目次 (第1分冊)

序

例言

第1章 調査の経緯	(河瀬・宗宮・小野木)	1
第1節 調査に至る経緯		1
第2節 調査の方法と経過		2
第2章 遺跡の環境	(小野木)	9
第1節 地理的環境		9
第2節 歴史的環境		10
第3章 調査の成果	(藤田・小野木)	12
第1節 基本層序		12
第2節 遺構の概要		14
第3節 遺物の概要		17
第4章 西部域の調査成果	(藤田・河瀬・宗宮・吉田・山本・小野木)	28
第1節 縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構と遺物		28
1 竪穴住居跡		29
2 単独柱穴		32
3 墓		33
4 溝状遺構		58
5 土坑		61
6 自然流路		82
第2節 弥生時代中期の遺構と遺物		115
1 方形周溝墓		118
2 溝状遺構		193
3 土坑		193
4 自然流路		195
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物		200
1 建物跡・柵跡		201

報告書抄録

## 第2分冊目次

- 第4章 西部域の調査成果
  - 第3節 弥生時代後期から  
古墳時代前期の遺構と遺物

## 第3分冊目次

- 第4章 西部域の調査成果
  - 第3節 弥生時代後期から  
古墳時代前期の遺構と遺物

## 第4分冊目次

- 第4章 西部域の調査成果
  - 第3節 弥生時代後期から  
古墳時代前期の遺構と遺物
  - 第4節 古墳時代中期以降の遺構と遺物
  - 第5節 遺物包含層出土遺物  
遺構一覧表  
遺物観察表

## 第5分冊目次

- 第5章 東部域の調査成果
  - 第1節 弥生時代前期の遺構と遺物
  - 第2節 弥生時代中期の遺構と遺物
  - 第3節 弥生時代後期から  
古墳時代前期の遺構と遺物

## 第6分冊目次

- 第5章 東部域の調査成果
  - 第3節 弥生時代後期から  
古墳時代前期の遺構と遺物
  - 第4節 古墳時代中期以降の遺構と遺物
  - 第5節 遺物包含層出土遺物

## 第7分冊目次

- 第5章 東部域の調査成果
  - 遺構一覧表  
遺物観察表  
遺構全体図分割図

## 第8分冊目次

- 第6章 自然科学分析
  - 第1節 分析の概要
  - 第2節 放射性炭素年代測定
  - 第3節 赤色顔料分析
  - 第4節 花粉分析
  - 第5節 プラント・オパール分析
  - 第6節 堆積物粒度分析
  - 第7節 樹種同定
  - 第8節 種実同定
  - 第9節 鍛冶関連遺物分析
  - 第10節 金属製品分析
  - 第11節 白色塊分析
  - 第12節 粘土塊分析
  - 第13節 昆虫遺体群集分析
  - 第14節 地形環境

## 第7章 総括

- 第1節 方形周溝墓の様相
- 第2節 B地区における建物跡等の概観
- 第3節 土器組成の概観
- 第4節 土器の時期細分
- 第5節 石器類
- 第6節 木製品
- 第7節 金属製品
- 第8節 遺跡の変遷

## 第9分冊目次

- 写真図版

## 挿図目次

図 1	遺跡位置図	1	図 43	SZ159 遺構図	54
図 2	荒尾南遺跡の調査地区位置図	3	図 44	SZ160 遺構図	55
図 3	B 地区調査地点位置図	5	図 45	SZ161 遺構図	56
図 4	周辺遺跡位置図	11	図 46	SZ162 遺構図	56
図 5	B 地区基本層序模式図	13	図 47	SZ163 遺構図	57
図 6	遺構断面の形状模式図	16	図 48	SZ164 遺構図	57
図 7	西部域の縄文時代晩期から 弥生時代前期の遺構分布図	28	図 49	SZ164 遺物実測図	57
図 8	SB446 遺構図 (1)	29	図 50	SD0985 遺構図	58
図 9	SB446 遺構図 (2)	30	図 51	SD0985 遺物実測図	58
図 10	SB446 遺物実測図	31	図 52	SD1000 遺構図	58
図 11	SB447 遺構図 (1)	31	図 53	SD1000 遺物実測図	59
図 12	SB447 遺構図 (2)	32	図 54	SD1011 遺構図	59
図 13	SP0941 遺構図	32	図 55	SD1011 遺物実測図	60
図 14	SP0941 遺物実測図	32	図 56	SD1022 遺物実測図	60
図 15	SZ137 遺構図	33	図 57	SD1022 遺構図	60
図 16	SZ137 遺物実測図	34	図 58	SK01894 下層遺構図 (1)	61
図 17	SZ138 遺物実測図	34	図 59	SK01894 下層遺構図 (2)	62
図 18	SZ138 遺構図	35	図 60	SK01894 下層遺構図 (3)	63
図 19	SZ145 遺構図	36	図 61	SK01894 下層遺構図 (4)	64
図 20	SZ145 遺物実測図	37	図 62	SK01894 下層遺物実測図 (1)	65
図 21	SZ153 遺物実測図	37	図 63	SK01894 下層遺物実測図 (2)	66
図 22	SZ153 遺構図	38	図 64	SK01894 下層遺物実測図 (3)	67
図 23	SZ154 遺物実測図	39	図 65	SK03776 遺構図	68
図 24	SZ154 遺構図	39	図 66	SK03776 遺物実測図	69
図 25	木棺墓・土坑墓位置図	40	図 67	SK04005 遺構図	69
図 26	SZ155 遺構図 (1)	41	図 68	SK04005 遺物実測図	70
図 27	SZ155 遺構図 (2)	42	図 69	SK04030 遺物実測図	70
図 28	SZ155 遺構図 (3)	43	図 70	SK04030 遺構図	71
図 29	SZ155 遺構図 (4)	44	図 71	SK04222 遺物実測図	71
図 30	SZ155 遺物実測図 (1)	45	図 72	SK04222 遺構図	71
図 31	SZ155 遺物実測図 (2)	46	図 73	SK04256 遺構図	72
図 32	SZ156 遺構図 (1)	47	図 74	SK04256 遺物実測図	73
図 33	SZ156 遺構図 (2)	48	図 75	SK04557 遺構図	73
図 34	SZ156 遺構図 (3)	49	図 76	SK04557 遺物実測図	74
図 35	SZ156 遺構図 (4)	50	図 77	SK04803 遺構図	74
図 36	SZ156 遺物実測図 (1)	51	図 78	SK04803 遺物実測図	75
図 37	SZ156 遺物実測図 (2)	52	図 79	SK04929 遺物実測図	75
図 38	SZ157 遺構図	52	図 80	SK04929 遺構図	76
図 39	SZ157 遺物実測図	53	図 81	SK04945 遺構図	77
図 40	SZ158 遺物実測図	53	図 82	SK04945 遺物実測図 (1)	78
図 41	SZ158 遺構図	53	図 83	SK04945 遺物実測図 (2)	80
図 42	SZ159 遺物実測図	54	図 84	SK04945 遺物実測図 (3)	81
			図 85	SK06085 遺物実測図	81

図 86	SK06085 遺構図	81	図 129	SZ123 遺物実測図	131
図 87	NR009 遺構図 (1)	82	図 130	SZ123 遺構図	131
図 88	NR009 遺構図 (2)	83	図 131	SZ124 遺物実測図	132
図 89	NR009 遺構図 (3)	84	図 132	SZ124 遺構図	132
図 90	NR009 遺物実測図	85	図 133	SZ125 遺構図	133
図 91	NR010 遺構図 (1)	87	図 134	SZ126 遺構図	135
図 92	NR010 遺構図 (2)	88	図 135	SZ126 遺物実測図	135
図 93	NR010 遺物実測図	89	図 136	SZ127 遺構図	136
図 94	NR014 遺構図	90	図 137	SZ128 遺構図	137
図 95	NR014 遺物実測図 (1)	91	図 138	SZ128 遺物実測図	138
図 96	NR014 遺物実測図 (2)	92	図 139	SZ129 遺構図	139
図 97	NR015 遺構図	94	図 140	SZ129 遺物実測図	140
図 98	NR015 遺物実測図 (1)	95	図 141	SZ130 遺構図	141
図 99	NR015 遺物実測図 (2)	97	図 142	SZ130 遺物実測図	141
図 100	NR016 遺構図	98	図 143	SZ131 遺構図	142
図 101	NR016 遺物実測図 (1)	100	図 144	SZ131 遺物実測図	143
図 102	NR016 遺物実測図 (2)	101	図 145	SZ132 遺物実測図	143
図 103	NR016 遺物実測図 (3)	102	図 146	SZ132 遺構図	144
図 104	NR016 遺物実測図 (4)	103	図 147	SZ134 遺物実測図	145
図 105	NR017 遺構図 (1)	105	図 148	SZ134 遺構図	145
図 106	NR017 遺構図 (2)	106	図 149	SZ135 遺構図	146
図 107	NR017 遺物実測図 (1)	108	図 150	SZ135 遺物実測図	147
図 108	NR017 遺物実測図 (2)	110	図 151	SZ136 遺物実測図	147
図 109	NR017 遺物実測図 (3)	112	図 152	SZ136 遺構図	148
図 110	NR017 遺物実測図 (4)	113	図 153	SZ139 遺物実測図	148
図 111	NR017 遺物実測図 (5)	114	図 154	SZ139 遺構図	149
図 112	西部域の弥生時代中期の遺構分布図	115	図 155	SZ140 遺構図	150
図 113	西部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図 (1)	116	図 156	SZ140 遺物実測図	151
	.....		図 157	SZ141 遺構図 (1)	152
図 114	西部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図 (2)	117	図 158	SZ141 遺構図 (2)	153
	.....		図 159	SZ141 遺物実測図	154
図 115	SZ115 遺構図 (1)	118	図 160	SZ142 遺構図	155
図 116	SZ115 遺構図 (2)	119	図 161	SZ143 遺構図	156
図 117	SZ115 遺物実測図	120	図 162	SZ143 遺物実測図	157
図 118	SZ118 遺構図	121	図 163	SZ146 遺物実測図	157
図 119	SZ118 遺物実測図	121	図 164	SZ146 遺構図	158
図 120	SZ119 遺構図	123	図 165	SZ147 遺構図	159
図 121	SZ119 遺物実測図	124	図 166	SZ147 遺物実測図	160
図 122	SZ120 遺構図	125	図 167	SZ148 遺構図 (1)	161
図 123	SZ120 遺物実測図 (1)	127	図 168	SZ148 遺構図 (2)	162
図 124	SZ120 遺物実測図 (2)	128	図 169	SZ148 遺構図 (3)	163
図 125	SZ121 遺構図	129	図 170	SZ148 遺物実測図 (1)	164
図 126	SZ121 遺物実測図	130	図 171	SZ148 遺物実測図 (2)	165
図 127	SZ122 遺物実測図	130	図 172	SZ149 遺構図	166
図 128	SZ122 遺構図	130	図 173	SZ149 遺物実測図 (1)	167

図 174	SZ149 遺物実測図 (2) .....	168	図 215	西部域の弥生時代後期から 古墳時代前期の竪穴住居跡分布図 (3) .....	203
図 175	SZ150 遺構図 (1) .....	169	図 216	SB183 遺物実測図 .....	204
図 176	SZ150 遺構図 (2) .....	170	図 217	SB184 遺物実測図 .....	204
図 177	SZ150 遺物実測図 .....	170	図 218	SB183 遺構図 .....	205
図 178	SZ151 遺物実測図 .....	171	図 219	SB184 遺構図 (1) .....	206
図 179	SZ151 遺構図 .....	172	図 220	SB184 遺構図 (2) .....	207
図 180	SZ152 遺構図 (1) .....	173	図 221	SB185 遺構図 .....	208
図 181	SZ152 遺構図 (2) .....	174	図 222	SB185 遺物実測図 .....	208
図 182	SZ152 遺物実測図 .....	175	図 223	SB186 遺物実測図 .....	209
図 183	SZ165 遺物実測図 .....	176	図 224	SB186 遺構図 (1) .....	209
図 184	SZ165 遺構図 .....	177	図 225	SB186 遺構図 (2) .....	210
図 185	SZ166 遺構図 (1) .....	178	図 226	SB186 遺構図 (3) .....	211
図 186	SZ166 遺構図 (2) .....	179	図 227	SB187 遺構図 (1) .....	212
図 187	SZ166 遺物実測図 (1) .....	180	図 228	SB187 遺構図 (2) .....	213
図 188	SZ166 遺物実測図 (2) .....	181	図 229	SB187 遺物実測図 .....	213
図 189	SZ167 遺構図 (1) .....	183	図 230	SB188 遺構図 .....	215
図 190	SZ167 遺構図 (2) .....	184	図 231	SB188 遺物実測図 .....	215
図 191	SZ167 遺物実測図 .....	185	図 232	SB189 遺構図 .....	216
図 192	SZ168 遺構図 (1) .....	185	図 233	SB189 遺物実測図 .....	216
図 193	SZ168 遺構図 (2) .....	186	図 234	SB190 遺物実測図 .....	217
図 194	SZ168 遺物実測図 .....	187	図 235	SB190 遺構図 .....	218
図 195	SZ169 遺構図 (1) .....	188	図 236	SB191 遺物実測図 .....	219
図 196	SZ169 遺構図 (2) .....	189	図 237	SB191 遺構図 .....	220
図 197	SZ169 遺物実測図 (1) .....	191	図 238	SB192 遺構図 (1) .....	221
図 198	SZ169 遺物実測図 (2) .....	192	図 239	SB192 遺構図 (2) .....	222
図 199	SD1009 遺物実測図 .....	193	図 240	SB192 遺物実測図 .....	222
図 200	SD1009 遺構図 .....	193	図 241	SB193 遺構図 (1) .....	223
図 201	SK03671 遺物実測図 .....	194	図 242	SB193 遺構図 (2) .....	224
図 202	SK03671 遺構図 .....	194	図 243	SB193 遺物実測図 .....	224
図 203	SK04311 遺物実測図 .....	194	図 244	SB194 遺構図 (1) .....	225
図 204	SK04311 遺構図 .....	194	図 245	SB194 遺構図 (2) .....	226
図 205	SK04888 遺物実測図 .....	195	図 246	SB194 遺物実測図 .....	226
図 206	SK04888 遺構図 .....	195	図 247	SB195 遺構図 (1) .....	228
図 207	NR005 遺構図 .....	196	図 248	SB195 遺構図 (2) .....	229
図 208	NR005 遺物実測図 .....	197	図 249	SB195 遺物実測図 .....	230
図 209	NR011 遺構図 (1) .....	198	図 250	SB196 遺構図 (1) .....	232
図 210	NR011 遺構図 (2) .....	199	図 251	SB196 遺構図 (2) .....	233
図 211	NR011 遺物実測図 .....	199	図 252	SB196 遺物実測図 .....	234
図 212	西部域の弥生時代後期から 古墳時代前期の遺構分布図 .....	200	図 253	SB197 遺構図 (1) .....	235
図 213	西部域の弥生時代後期から 古墳時代前期の竪穴住居跡分布図 (1) .....	201	図 254	SB197 遺構図 (2) .....	236
図 214	西部域の弥生時代後期から 古墳時代前期の竪穴住居跡分布図 (2) .....	202	図 255	SB197 遺物実測図 .....	236
			図 256	SB198 遺構図 (1) .....	237
			図 257	SB198 遺構図 (2) .....	238



図 258	SB198 遺物実測図	239	図 303	SB217 遺構図 (1)	275
図 259	SB199 遺構図	240	図 304	SB217 遺物実測図	275
図 260	SB199 遺物実測図	240	図 305	SB217 遺構図 (2)	276
図 261	SB200 遺構図 (1)	241	図 306	SB218 遺構図	277
図 262	SB200 遺構図 (2)	242	図 307	SB218 遺物実測図	278
図 263	SB200 遺物実測図	243	図 308	SB219 遺構図 (1)	279
図 264	SB201 遺構図 (1)	244	図 309	SB219 遺物実測図	279
図 265	SB201 遺構図 (2)	245	図 310	SB219 遺構図 (2)	280
図 266	SB201 遺物実測図	245	図 311	SB220 遺構図 (1)	282
図 267	SB202 遺物実測図	246	図 312	SB220 遺構図 (2)	283
図 268	SB202 遺構図 (1)	246	図 313	SB220 遺物実測図	283
図 269	SB202 遺構図 (2)	247	図 314	SB221 遺構図 (1)	284
図 270	SB203 遺構図 (1)	248	図 315	SB221 遺構図 (2)	285
図 271	SB203 遺構図 (2)	249	図 316	SB222 遺構図	286
図 272	SB203 遺物実測図	250	図 317	SB223 遺構図 (1)	287
図 273	SB204 遺構図 (1)	251	図 318	SB223 遺物実測図	288
図 274	SB204 遺構図 (2)	252	図 319	SB223 遺構図 (2)	288
図 275	SB204 遺物実測図	253	図 320	SB224 遺構図	289
図 276	SB205 遺物実測図	253	図 321	SB225 遺構図	291
図 277	SB205 遺構図	254	図 322	SB226 遺構図	292
図 278	SB206 遺構図	255	図 323	SB225 遺物実測図	293
図 279	SB206 遺物実測図	255	図 324	SB227 遺物実測図	293
図 280	SB207 遺物実測図	256	図 325	SB227 遺構図	294
図 281	SB207 遺構図	257	図 326	SB228 遺物実測図	295
図 282	SB208 遺構図 (1)	258	図 327	SB228 遺構図 (1)	296
図 283	SB208 遺構図 (2)	259	図 328	SB228 遺構図 (2)	297
図 284	SB208 遺物実測図	259	図 329	SB229 遺物実測図	298
図 285	SB209 遺構図 (1)	260	図 330	SB229 遺構図	299
図 286	SB209 遺構図 (2)	261	図 331	SB230 遺物実測図	300
図 287	SB209 遺物実測図	261	図 332	SB230 遺構図 (1)	300
図 288	SB210 遺構図 (1)	263	図 333	SB230 遺構図 (2)	301
図 289	SB210 遺構図 (2)	264	図 334	SB231 遺物実測図	302
図 290	SB210 遺物実測図	264	図 335	SB231 遺構図	303
図 291	SB211 遺構図	265	図 336	SB232 遺構図 (1)	304
図 292	SB212 遺構図	266	図 337	SB232 遺構図 (2)	305
図 293	SB212 遺物実測図	267	図 338	SB232 遺物実測図	306
図 294	SB213 遺物実測図	267	図 339	SB233 遺構図	307
図 295	SB213 遺構図	268	図 340	SB233 遺物実測図	308
図 296	SB214 遺構図 (1)	269	図 341	SB234 遺構図	309
図 297	SB214 遺構図 (2)	270	図 342	SB234 遺物実測図	310
図 298	SB214 遺物実測図	270	図 343	SB235 遺構図	311
図 299	SB215 遺構図	271	図 344	SB236 遺物実測図	312
図 300	SB216 遺構図 (1)	273	図 345	SB236 遺構図	313
図 301	SB216 遺構図 (2)	274	図 346	SB237 遺構図 (1)	314
図 302	SB216 遺物実測図	274	図 347	SB237 遺構図 (2)	315

図 348	SB237 遺物実測図	315	図 368	SB247 遺構図	333
図 349	SB238 遺構図	316	図 369	SB248 遺構図	334
図 350	SB238 遺物実測図	316	図 370	SB249 遺構図	335
図 351	SB239 遺物実測図	317	図 371	SB250 遺構図	337
図 352	SB239 遺構図 (1)	318	図 372	SB251 遺構図 (1)	338
図 353	SB239 遺構図 (2)	319	図 373	SB251 遺構図 (2)	339
図 354	SB239 遺構図 (3)	320	図 374	SB252 遺構図 (1)	340
図 355	SB239 遺構図 (4)	321	図 375	SB252 遺物実測図	341
図 356	SB240 遺構図	322	図 376	SB252 遺構図 (2)	341
図 357	SB241 遺構図 (1)	323	図 377	SB253 遺構図	342
図 358	SB241 遺構図 (2)	324	図 378	SB253 遺物実測図	343
図 359	SB242 遺構図	326	図 379	SB254 遺構図 (1)	344
図 360	SB243 遺構図	327	図 380	SB254 遺構図 (2)	345
図 361	SB244 遺構図 (1)	328	図 381	SB254 遺構図 (3)	346
図 362	SB244 遺物実測図	329	図 382	SB254 遺物実測図	346
図 363	SB244 遺構図 (2)	329	図 383	SB255 遺物実測図	346
図 364	SB245 遺物実測図	330	図 384	SB255 遺構図	347
図 365	SB245 遺構図 (1)	330	図 385	SB256 遺物実測図	348
図 366	SB245 遺構図 (2)	331	図 386	SB256 遺構図	349
図 367	SB246 遺構図	332	図 387	SB257 遺構図	350

## 表目次

表 1	調査体制表	8	表 7	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (4)	20
表 2	B地区遺構数量表	15	表 8	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (5)	21
表 3	B地区出土遺物数量表	17	表 9	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (6)	22
表 4	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (1)	17	表 10	石器類数量表	24
表 5	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (2)	18	表 11	木製品・繊維製品数量表	26
表 6	Ⅱ期からⅦ期の器種分類 (3)	19	表 12	金属製品数量表	27

## 挿入写真目次

写真 1	遺跡周辺の空中写真	9
------	-----------	---

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

荒尾南遺跡は、大垣市荒尾町・桜町に所在する（図1）。この遺跡内において、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下「岐阜国道事務所」という。）が、東海環状自動車道を建設することに伴い、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

荒尾南遺跡は、大垣市教育委員会が平成元年度～5年度に実施した市内遺跡詳細分布調査により確認された、弥生時代から中世に至る遺跡である（大垣市教育委員会1993）。分布調査結果に基づく大垣市遺跡地図の刊行後、平成6年度に県道50号（大垣環状線）建設に伴い、財団法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施し、弥生時代前期～古墳時代初頭を中心とした遺構や遺物が確認された（財団法人岐阜県文化財保護センター1998）。その後も市道建設に伴う試掘調査や発掘調査が大垣市教育委員会によって実施され、弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡が確認された（大垣市教育委員会2001など）。

この遺跡範囲内に東海環状自動車道が建設されることになり、文化財保護法第94条第1項に基づき、岐阜国道事務所長から県教育長あて発掘の通知（平成18年2月24日付け国部整岐調第242号）が提出された。そして、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について記録保存の措置が必要となり、県教育長から同事務所長あてに、発掘調査の実施（平成18年3月8日付け社文第40号の45）

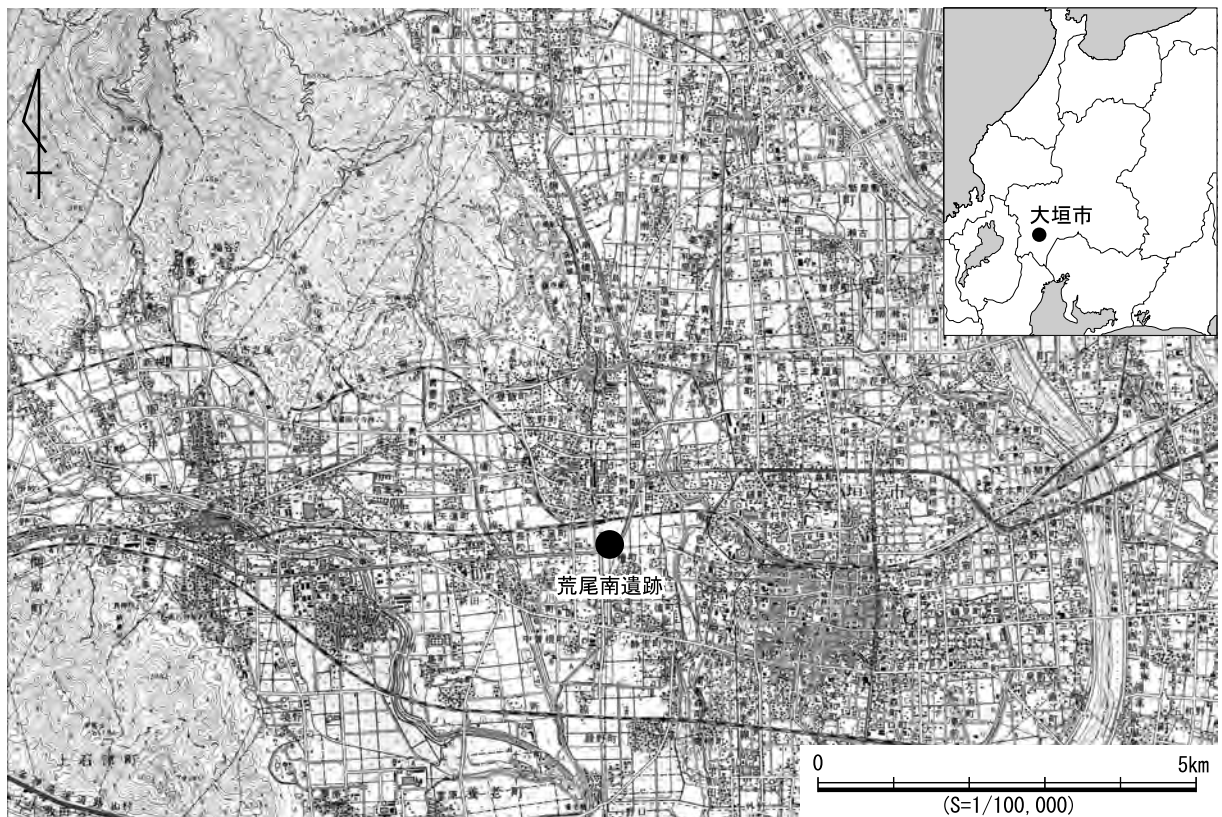


図1 遺跡位置図（国土地理院発行の5万分の1地形図（大垣）を使用した。）

## 2 第1章 調査の経緯

が勧告された。

発掘作業は平成18年度から、整理等作業は平成19年度から実施した。荒尾南遺跡は、東西約250m、南北約750mの規模があり、南北に長い遺跡であるため、JR東海道線から国道21号までの範囲のうち、北部をA地区、南部をB地区、国道21号より南側をC地区と区分した(図2)。平成18年度から平成20年度では、調査に先立ち文化財保護法第92条第1項の規定に基づき、岐阜県から委託を受けた財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター所長から県教育長あてに発掘調査の届出(平成18年4月6日付け財文保第8号、平成19年3月19日付け財文保第8号の4、平成20年3月21日付け財文保第83号)を提出し、県教育長から埋蔵文化財発掘調査についての通知(平成18年4月19日付け社文第45号の2、平成19年3月23日付け社文第45号の11、平成20年4月3日付け社文第3号の4)を受けて実施した。なお、調査の着手後、調査対象範囲の変更等について、平成18年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討委員会で検討を行った。平成21年度から岐阜県文化財保護センターは県教育機関となり、平成21年度から平成23年度では、岐阜県文化財保護センターが文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告(平成21年5月14日付け文財七第17号の2、平成22年4月28日付け文財七第23号、平成23年5月10日付け文財七第14号)を県教育長に提出し、県教育長から同所長あて埋蔵文化財発掘調査についての通知(平成21年6月12日付け社文第17号の2、平成22年5月26日付け社文第38号の1、平成23年5月18日付け社文第9号)を受けた。

本書は、平成18年度から平成23年度に実施した荒尾南遺跡B地区19,288.6㎡分についての発掘調査成果の記録である。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

発掘調査は、用地買収状況及び工事計画の優先度に応じて調査地点を協議して行った。遺跡の範囲は東西約250m、南北約750mと広大であるため、遺跡範囲を取り囲むように、世界測地系座標を基準に1辺100mで区画し(大区画)、北西から南東へアルファベット、A～ACを付した。さらにその内部を5m四方に区画して杭を設置し、調査区画の最小単位(グリッドと呼称)とした。杭には、南北列を北から1～20、東西列を西からA～Tと番号を付し、グリッドの呼称は北西隅の杭番号を用いた。このため、グリッドの名称は、大区画名と杭番号によって「AA1」のように表示した。また、調査地点の番号は、各年度毎に便宜的に使用した番号であり、調査年度を明示するため、必要に応じて西暦の下二桁を前に付けて、11\_5地点のように表示した。

基本層序は、過去の調査成果を基に、I層からVI層まで設定し、I層が表土層、II層が耕地整理等に伴う盛土層、III層及びIV層を遺物包含層、V層を遺構基盤層と設定した(第3章第1節参照)。このうちII層～IV層は、微地形の自然堤防上にあたる場所では、土地利用による形状の改変のため確認できない場所があった。なお、10\_1地点としたB地区北西部の調査地点ではA地区の堆積状況が続き、IV層上面で中世以降、V層上面で弥生時代以降の遺構を確認した。

発掘調査では、先ず重機により調査区全体の表土を掘削した後に、遺物包含層であるIV層を人力で掘削し、V層上面で遺構検出、遺構掘削作業を行った。遺構の調査記録として、写真撮影及び手測り



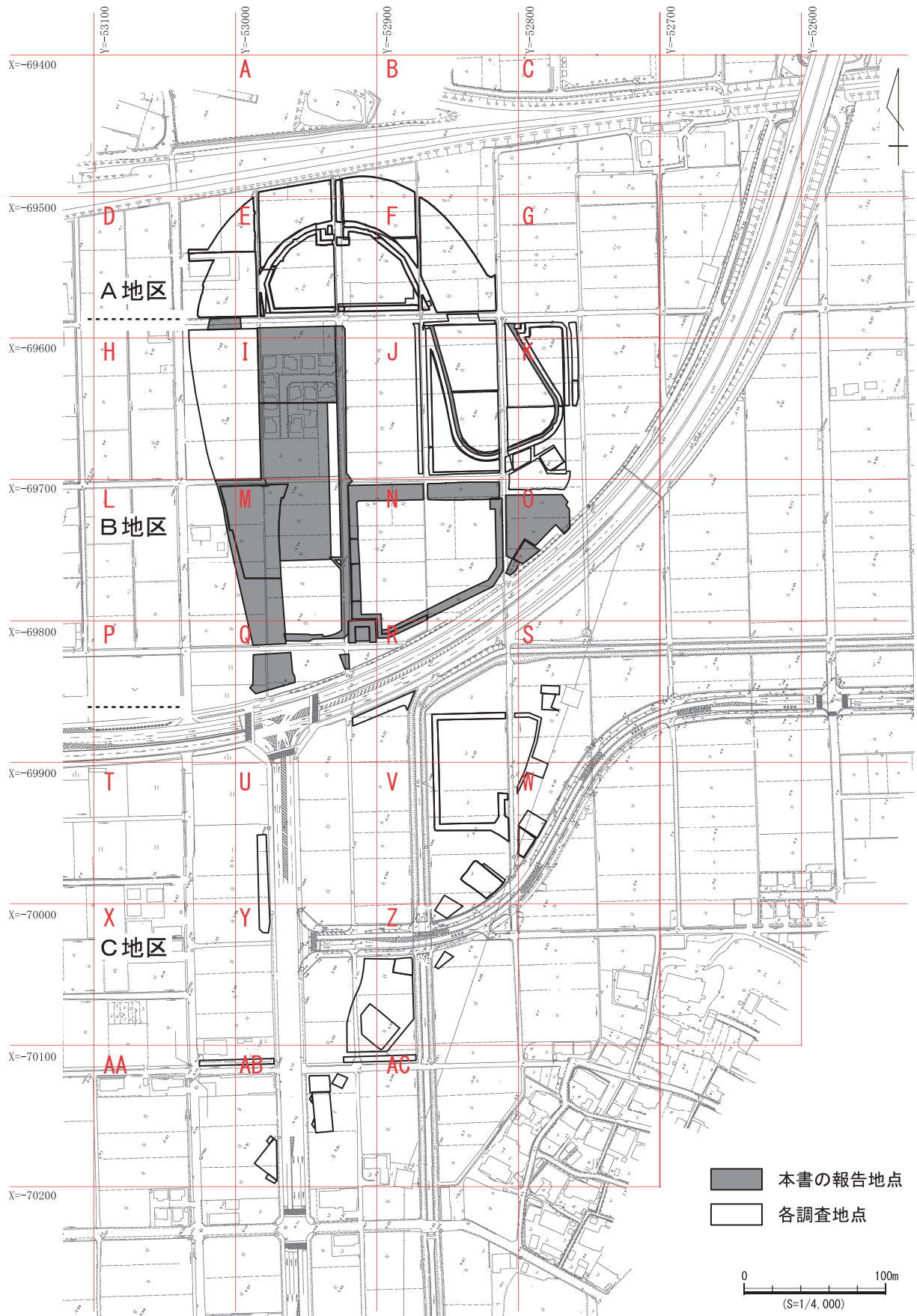


図2 荒尾南遺跡の調査地区位置図

#### 4 第1章 調査の経緯

実測、デジタル測量などを行った。検出した遺構は、検出順を原則として、暫定的に調査担当職員ごとの通番を付し、整理等作業時に遺構種別番号を新たに付した。遺物包含層から出土した遺物は、層位・グリッド単位、遺構から出土した遺物は、遺構内を概ね5cm単位の人工層位（a層、b層…として取り上げ）もしくは、分層した層位毎に取り上げたが、原位置性が高い遺物や、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、実測あるいは出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁とAM（遺跡名略号）」、「出土場所（遺構番号又はグリッド番号）」、「出土層位」、「取上日」、「備考」を記入し、この記録をもとに一次遺物台帳を作成した。

なお、出土遺物の洗浄及び注記作業、遺物台帳作成（一次整理作業）は、発掘調査支援業務の一部として現地で行った。

#### 2 調査の経過

以下、年度ごとに調査経過を記載する（図3）。

##### 平成18年度 発掘調査面積3547.4㎡（うち1527.4㎡を報告）

調整池堰堤部分と道路敷にあたる06\_7～11地点・06\_14～19地点の調査を行った。そのうち、平成20年刊行の『荒尾南遺跡B地区I』（岐阜県文化財保護センター2012b、以下、報告書Iと記載する。）にて報告済みの調査地点を除く、06\_15～19地点について本書で報告する。

5月19日から30日にかけて部分的な発掘調査を行い、弥生時代から古墳時代に至る遺構や遺物を確認し、V層上面に調査面を設定する必要があることが判明した。6月20日から重機による表土掘削を06\_17地点で開始したが、06\_15・16地点はIV層がなく、わずかにI b層を残して掘削した。その他の地点ではIV層上面まで掘削し、IV層を遺物包含層として人力で掘削した。V層上面では遺構検出作業を行い、弥生時代から古墳時代の溝状遺構や方形周溝墓、掘立柱建物跡を確認した。10月23日に三重大学名誉教授八賀晋氏に、10月30日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11月18日にはA地区及びB地区の一部を公開して現地説明会を開催し、403名の参加があった。その後、06\_15・16地点において検出した、幅約10mの大溝（SD0381）埋土中から倭鏡（銅鏡）が出土した。また、1月11日に大手前大学森下章司准教授に、1月15日に愛知県埋蔵文化財センター石黒立人氏に、1月17日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に、1月19日に三重大学名誉教授八賀晋氏に現地で指導を受けた。その間の1月16日に岐阜県教育委員会社会教育文化課による発掘調査実施状況の確認が行われ、1月23日の調査区全体撮影をもって現地調査を終了した。一次整理作業は3月10日まで現地で実施した。

##### 平成19年度 発掘調査面積3,837㎡（報告書Iにてすべて報告済み）

前年度調査地点の北側にあたる07\_35地点、07\_42地点、07\_43～46地点、07\_48地点、07\_49地点の調査を行い、いずれの地点も報告書Iにて報告した。

##### 平成20年度 発掘調査面積9,494㎡（このうち2,774㎡を報告）

調整池堰堤部分と道路敷にあたる08\_2～3地点、08\_5～9地点の調査を行った。そのうち報告書Iにて報告済みの調査地点を除く08\_3地点、08\_8・9地点について本書で報告する。

5月7日から08\_8・9地点の重機による表土掘削を開始した。08\_3地点は同日畦畔ブロック及び既設排水溝の撤去を行い、5月14日から重機による表土掘削を開始した。08\_8・9地点は5月8日

の表土掘削終了後、グリッド杭打設及び排水溝掘削と壁面観察を行い、遺構検出作業を行った。遺物包含層はほとんど残らず、ほぼ表土直下にV層が表出する状況であり、竪穴住居跡、方形周溝墓、溝等を検出した。08\_3地点の表土掘削は5月23日に終了し、5月27日から遺物包含層掘削を開始し、6月6日から並行して北東部から遺構検出作業に入った。6月11日に自然流路の東岸部を検出し、次第に南に向かって流路の検出を進めた。自然流路は調査地点のほぼ全域に広がり、東岸部から多量の土器や木製品が出土した。その他に、竪穴住居跡や自然流路から分流する溝などを検出した。9月25日に08\_8・9地点の調査を終了し、高所作業車による全景写真撮影を実施した。10月14日に三重名誉教授八賀晋氏に、10月22日に明治大学名誉教授大塚初重氏に、10月23日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地指導を受けた。11月15日にはB地区及びC地区を対象とした現地説明会を開催し、675名の参加があった。12月12日に08\_3地点の全体写真撮影を行った。12月18日には、立命館大学青木哲哉氏に現地指導を受けた。なお、一次整理作業は1月31日まで現地で実施した。

平成21年度 発掘調査面積5,710 m<sup>2</sup> (このうち2,891 m<sup>2</sup>を報告)

調整池部分と道路敷にあたる09\_4～7地点、09\_18地点、09\_19地点の調査を行った。そのうち報

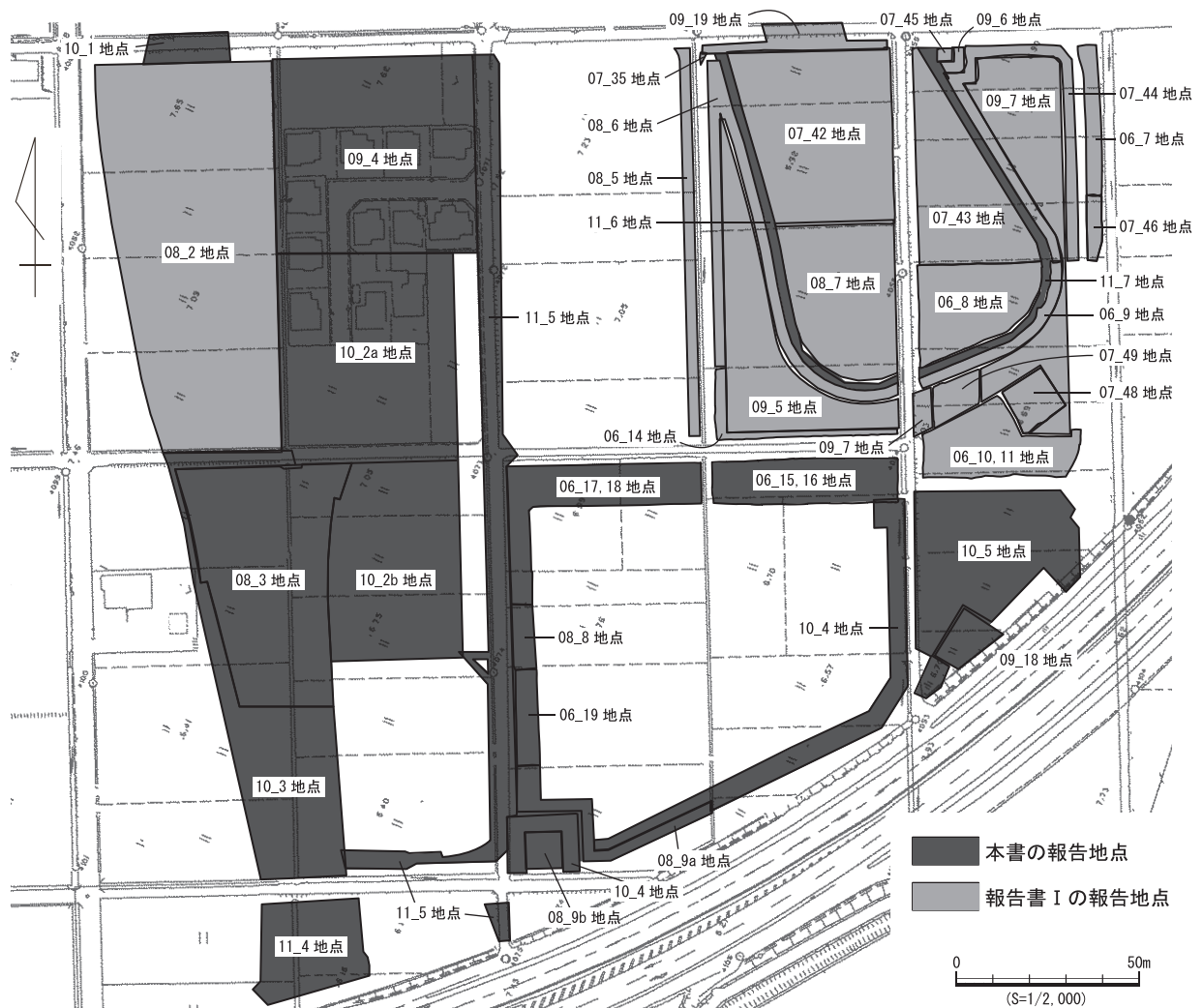


図3 B地区調査地点位置図



## 6 第1章 調査の経緯

告書 I にて報告済みの調査地点を除く 09\_4 地点、09\_18 地点について本書で報告する。

4 月 27 日から 09\_4 地点内にあった既設排水溝の一部撤去作業を行い、その後、表土掘削を開始し、5 月 12 日に終了した。09\_18 地点は 5 月 12 日表土掘削を実施し、同日終了した。いずれの地点も引き続き人力による遺物包含層掘削を調査区北東部より開始した。09\_18 地点は 5 月 20 日から遺構検出作業を行い、方形周溝墓の周溝を確認した。そして、6 月 2 日には調査区全体の景観写真を撮影し、調査を終了した。09\_4 地点は 5 月 14 日から遺物包含層掘削と並行して遺構検出作業を開始した。遺構検出作業は重複の著しい地点であることから遺構掘削作業と並行して引き続き継続することになり、11 月 26 日に終了した。09\_4 地点ではベンガラが遺存した竪穴住居跡 (SB195) などを確認した。10 月 5 日に三重大名誉教授八賀晋氏に、11 月 4 日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に現地で指導を受けた。11 月 14 日には A 地区と B 地区を対象として現地説明会を開催し、650 名の参加があった。11 月 30 日から 1 月 5 日までは、A 地区で発見された不発弾が他の地区にも存在する可能性があるため、安全確認がなされるまで掘削作業を中断した。その間、12 月 17 日には、立命館大学非常勤講師の青木哲哉氏に現地で微地形に関する指導を受けた。12 月 21 日から 25 日及び翌年 1 月 5 日にかけて、磁気探査による不発弾の有無確認を行った。これにより安全性を確認できたため、1 月 6 日から調査を再開し、1 月 22 日に全体写真撮影を行い、1 月 29 日で現地調査を終了した。また、2 月 2 日に再び青木哲哉氏による現地指導を受けた。一次整理作業は 2 月 19 日まで現地で実施した。

**平成 22 年度** 発掘調査面積 9,109 m<sup>2</sup> (すべて本書にて報告)

調整池堰堤部分と道路敷にあたる 10\_1 ～ 5 地点の調査を行った。

前年度の不発弾発見に伴い、発掘調査に先立ち対象地域の安全性を確認するために、水平磁気探査と掘削確認探査による事前確認調査を実施した。水平磁気探査の対象深度は 1 m であるため、掘削深度が 1 m を超える可能性のある地点及び該当箇所については 2 度にわたる確認調査を実施した。4 月 12 日より 10\_2a 地点、10\_2b 地点、4 月 23 日には 10\_1 地点と 10\_3 地点の水平磁気探査を実施し、4 月 26 日より金属反応のあった箇所について掘削確認探査を実施した。また、5 月 10 日に 10\_4 地点、10\_5 地点の水平磁気探査を実施し、その後、掘削確認探査を実施した。10\_3 地点と 10\_4 地点の大溝部分は掘削深度が 1 m を超えるため、表土掘削後に 10\_3 地点が 6 月 1 日に、10\_4 地点が 8 月 31 日に 2 回目の事前確認調査を実施した。なお、各地点の表土掘削等は安全確認後に実施した。

表土掘削は、4 月 26 日に 10\_2a 地点及び 10\_2b 地点を開始し、5 月 6 日に 10\_2b 地点が、5 月 10 日に 10\_2a 地点がそれぞれ終了し、引き続き人力による遺物包含層掘削作業を行った。10\_1 地点は 5 月 10 日重機による表土掘削を行い、5 月 11 日から第 1 面の遺物包含層掘削作業に入った。そして、5 月 13 日に遺構を完掘し、第 1 面全体の景観写真撮影を実施した。5 月 14 日から第 2 面の遺構検出作業を行い、6 月 2 日には完掘し、高所作業車による調査区全体の景観写真撮影を行った。また、10\_5 地点は 5 月 11 日から表土掘削を開始し、5 月 13 日から人力による遺物包含層掘削作業を行った。10\_3 地点は 5 月 25 日から表土掘削を開始し、6 月 8 日から遺物包含層掘削作業及び遺構検出作業を並行して開始した。6 月 3 日には 10\_5 地点で残りのよい方形周溝墓 (SZ212) を検出し、7 月 1 日、2 日に 10\_2a 地点の竪穴住居跡集中域で銅鏃が各日 1 点ずつ出土した。7 月 23 日には 10\_4 地点の表土掘削を開始し、8 月 2 日に終了した。また、7 月 27 日には 10\_5 地点で遺構掘削を完了し、8 月 5 日に高所作業車による調査地点全体の景観写真撮影を実施し、調査を終了した。8 月 9 日には 10\_4



地点の遺物包含層掘削作業を行い、引き続き遺構検出作業を実施した。10月6日と15日には10\_3地点で棺材が残る木棺墓を検出した。11月12日に10\_4地点の遺構掘削をほぼ完了し、調査区全体の景観写真撮影を実施した。その後、測量・図化作業を完了し、11月17日に調査を終了した。その間、9月28日に三重大学名誉教授八賀晋氏、10月7日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏、10月20日に大手前大学准教授森下章司氏に現地で指導を受け、11月13日に現地説明会を開催し、598名の参加があった。その後、11月18日に10\_3地点の遺構を、12月18日に10\_2a・2b地点の遺構をそれぞれ完掘し、同日3地点を合わせた全体景観写真をラジコンヘリコプターで撮影した。その後、断ち割り調査などを実施し、12月20日に全地点の調査を終了し、12月27日に立命館大学非常勤講師の青木哲也氏に微地形に関する指導を受けた。なお、一次整理作業は1月28日まで現地で実施した。

**平成23年度 発掘調査面積 2,987.2 m<sup>2</sup> (すべて本書にて報告)**

調整池堰堤部分と道路敷にあたる11\_4～7地点の調査を行った。

発掘調査に先立ち、対象地域の安全性を確認するために、前年度と同様に水平磁気探査と掘削確認探査による事前確認調査を実施した。水平磁気探査は対象深度が1mであるため、それよりも深く掘削する11\_4地点と11\_6地点の一部は、2回に分けて調査する必要があった。なお、11\_5地点は調査地内に上水道管が敷設されていたため、事前確認調査が実施できなかった。水平磁気探査は11\_4地点の1回目が4月20日に、同地点2回目が5月18日に、11\_6地点と11\_7地点の北側が8月9日に、同地点南側が9月6日に、それぞれ実施した。また、9月28日には11\_6地点の大溝部分の水平磁気探査を実施したが、金属反応は確認できなかった。掘削確認探査は11\_4地点の1回目が4月22日に、同地点2回目が5月19日に、11\_6地点と11\_7地点の北側が8月10日に、同地点南側が9月7日に、それぞれ実施した。なお、各地点の表土掘削等は安全確認後に実施した。

表土掘削は11\_4地点が5月6日から5月16日まで、11\_5地点南側が5月19日から5月26日まで実施し、その後、人力掘削は11\_4地点が6月9日から、11\_5地点南側が6月6日から開始した。11\_4地点では6月10日にNR013から四連の平鋤未製品が、6月21日には同じくNR013から木製舟形代が出土した。また、11\_5地点南側では6月24日に銅鏃1点が出土し、7月8日に総柱建物跡に隣接する土坑から舟形土製品が出土した。そして、8月4日に全体景観写真を高所作業車で撮影し、調査を終了した。また、11\_4地点は8月9日に全体景観写真をラジコンヘリコプターで撮影し、調査を終了した。11\_6・7地点北側は、8月18～19日に表土掘削を実施し、8月22日から人力掘削を開始した。一方、11\_5地点北側は8月8～9日に表土掘削を、9月12日から人力掘削を開始し、10月4日と10月6日に銅鏃各1点がそれぞれ出土した。11\_6・7地点南側は、9月8～9日と9月22～26日に残りの調査範囲の表土掘削を実施し、その後人力掘削を行った。その間、8月1日に愛知県埋蔵文化財センター赤塚次郎氏に、8月9日三重大学名誉教授八賀晋氏にそれぞれ調査現場にて指導を受け、9月20～22日にA地区とB地区を対象として現地見学会を開催し、276名の参加があった。また、9月13日と9月29日に立命館大学非常勤講師の青木哲也氏に微地形に関する指導を受けた。10月12日に11\_6地点の全体景観写真を高所作業車で撮影し、11\_7地点は9月から10月に3回に分けて脚立による景観写真撮影を実施し、調査を終了した。また、11\_5地点は10月28日に北側の全体景観写真を高所作業車で撮影し、調査を終了した。なお、一次整理作業は12月16日まで現地で実施した。

8 第1章 調査の経緯

なお、次の学校、団体の研修や見学、学校生徒による職場体験等を受け入れた。

安八郡中学校社会科研究会の研修、池田町立池田中学校生徒の職場体験、揖斐川町教育委員会主催の小中学校発掘体験、大垣市立宇留生小学校教職員の研修、大垣市立北小学校文化財愛護少年団による発掘体験、大垣市立北中学校生徒の職場体験、大垣市立興文中学校生徒の職場体験、岐阜県教育委員会主催の記念物及び埋蔵文化財等基礎講座の遺跡見学、岐阜県総合教育センター研修の遺跡見学、岐阜市立井奈波中学校生徒の職場体験、岐阜大学附属中学校生徒の職場体験など。

整理等作業は、平成19年4月から平成26年3月まで実施した。

3 調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、表1のとおりである。なお、平成21年度から岐阜県文化財保護センターは県の教育機関となった。

表1 調査体制表

職名	理事長 (H20まで)	副理事長 (H20まで)	センター 所長	総務課長	調査課長	調査第一係 長(発掘担 当)	調査第三係 長(整理担 当)	発掘調査 担当職員	整理等作業 担当職員	整理事業員
H18	高木正弘	伊藤克己 高橋宏之 中島正和	田口久之	後藤智	川部誠	大熊厚志	—	(成瀬正勝) 吉田 靖 (香田明彦) 春日井恒	—	家岡久美、石原美帆、板垣正明、伊藤良平、今尾さち子、今津理、岩田のり子、大西悦子、小川洋子、小木曾美智、小澤真紀子、加藤里佳、神村敦子、亀田勇治、亀山正夫、國井悦子、倉持和美、酒井田照子、酒衛成功、清水直美、高井道和、高里早苗、竹部泉、竹村小百合、玉木裕美、知本俊美、中島律子、西川明、丹羽香、橋本法子、長谷川晶子、長谷保真理子、林浩美、原幸子、平野里美、堀田圭子、堀三恵、三輪久子、村瀬俊哉、森山智晴、藪下加代子、山口久子、山下恭子、山田弘子
H19	—	伊藤克己 (兼理事長 職務代理 者) 岩田重信	田口久之	加藤美好	北村厚史	成瀬正勝	谷村和男	(石井照久) (香田明彦) 野々田光則 (春日井恒) 北村昌弘	林直樹	
H20	広瀬利和	伊藤克己 吉田康雄	梅村恒男	加藤美好	北村厚史	成瀬正勝	谷村和男	河瀬実浩 香田明彦 野々田光則 (春日井恒) 鷺見博史	林直樹 藤田英博	
H21	—	—	後藤満	長屋忠司	小谷和彦	早野壽人	谷村和男	河瀬実浩 北川真司 野々田光則 (春日井恒) (鷺見博史)	藤田英博 三島誠	
H22	—	—	高橋照美	長屋忠司	小谷和彦	早野壽人	春日井恒	河瀬実浩 北川真司 山本厚美 鷺見博史 小野木学 河合亮	藤田英博 宗宮隆司 三島誠	
H23	—	—	高橋照美	村瀬誠三	小谷和彦	河瀬実浩	春日井恒	山本厚美 鷺見博史 小野木学	藤田英博 宗宮隆司 三島誠	
H24	—	—	丸山和彦	村瀬誠三	小谷和彦	—	藤田英博	—	宗宮隆司 (三輪晃三) 山本厚美 (鷺見博史) 小野木学 近藤正枝 岩瀬岳	株式会社イビソクに 委託
H25	—	—	丸山和彦	二宮 隆	成瀬正勝	—	藤田英博	—	吉田 靖 山本厚美 小野木学	

※平成20年度まで、センター所長は常務理事兼センター所長、総務課長は経営課長、調査課長は調査部長。

※調査係長は、平成20年度まで調査課長、平成22・23年度が調査担当チーフ。

※担当職員のカッコは、A・C地区担当者。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

荒尾南遺跡は大垣市の北西部に位置し、揖斐川が形成した標高6 m前後の沖積地に立地する。その北方には、金生山から南に向かって舌状に延びる牧野台地と通称される低位段丘、北西部には相川によって形成された緩扇状地が位置する。当遺跡はその扇端部から氾濫源にかけて広がりを見せ、その範囲は東西約250 m、南北約750 mと広大な範囲に及ぶ。東西方向に走行するJR東海道線と境を接する遺跡の北縁付近が低位段丘面の末端部に相当する。また、遺跡周辺には中小の旧河川が網目状に幾筋も推定され（大垣市教育委員会1997）、当遺跡は扇状地の微高地部分の旧中州上から旧河道にかけて形成された遺跡といえる。

弥生時代から古墳時代前期の生活痕跡が残された基本層序のV層上面の標高値は、B地区内では中央北寄りに位置する09\_4地点が最も高く7.10 mである。そこから南東方向に位置する06\_17・18地点から10\_2b地点までが6.60～7.00 m、北西方向に位置する10\_1地点が6.90 mと比較的高い。その周辺では、中央北寄りの07\_42地点では6.30 m、北東端の06\_7地点では6.20 m、南東端の10\_5地点では5.90 m、南端の10\_4地点では5.60 m、南西端の10\_3地点では5.60 mであり、B地区西側の08\_2～3地点、10\_3地点、11\_4地点では縄文晩期以前から古墳時代前期にかけての自然流路が検出されている。

これらから、B地区の旧地形は、西側に自然流路、東側に微高地があり、微高地は西側が高く、東に向かって緩やかに傾斜していたと理解できる。

昭和23年に米軍が撮影した空中写真（写真1）では、遺跡西側の色調が暗く、東側が比較的明るい。モノクロ写真は、「旧河道が暗く、反対に自然堤防や中州などは明るい色調となることが多い」（大垣市教育委員会1997）とされており、発掘調査の知見とほぼ一致している。また、当遺跡B地区周辺の字名は、およそ東側が「高田」、北西側が「成瀬」、南西側が「深田」であり（大垣市教育委員会2001）、高田や深田は土地条件を反映した字名といえる。

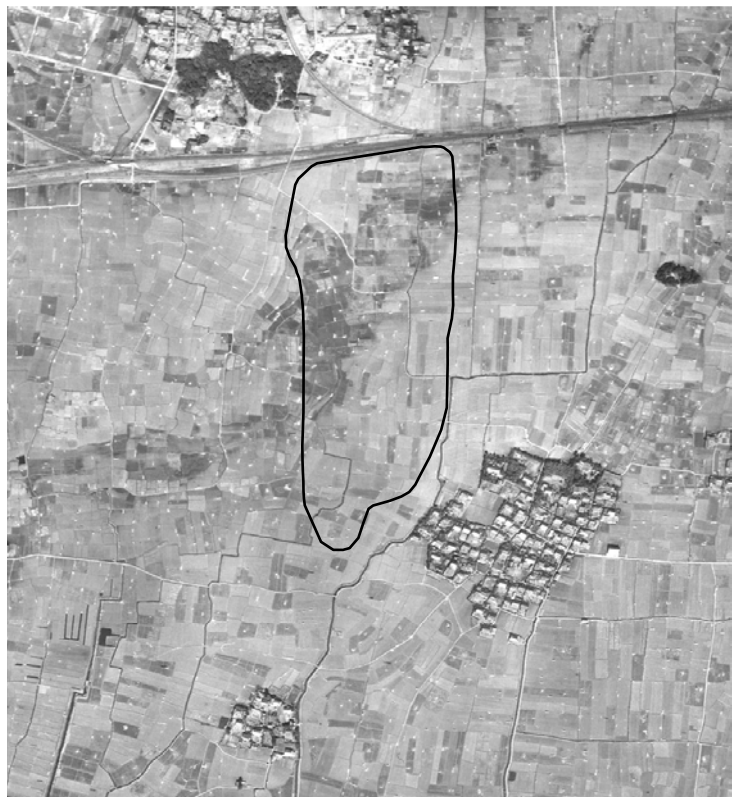


写真1 遺跡周辺の空中写真

[昭和23年米軍撮影。写真上方がJR東海道線。遺跡範囲(黒実線)を加筆]

## 第2節 歴史的環境

荒尾南遺跡周辺は、大垣市内でも比較的遺跡が集中する地域で、特に弥生時代から古代にかけての重要な遺跡が分布している（図4）。これらの遺跡の概況や過去の発掘調査については、近年刊行した報告書（岐阜県文化財保護センター2012a・2012b）に詳しく記述されているので、ここでは時代ごとの概況について述べる。

縄文時代の遺跡数は比較的少ない。東町田遺跡(24)では草創期の尖頭器、矢道B遺跡(30)では後期の土器片が出土している。また、荒尾南遺跡A地区では晩期の竪穴住居跡1軒を検出し、B地区では自然流路や土坑から晩期の土器片が出土した。荒尾南遺跡の北側に位置する御首神社遺跡(35)でも晩期の土器片が採取されている（大垣市2011、大垣市教育委員会1990、岐阜県文化財保護センター2012a）。

弥生時代には遺跡数が増加する。前期の土器がまとめて出土した遺跡は荒尾南遺跡のみであるが、中期になると牧野台地の東端にある一本松遺跡(19)で方形周溝墓約10基、西端にある東町田遺跡で環濠と考えられる溝2条と方形周溝墓14基、南端にある荒尾南遺跡で多数の方形周溝墓が確認されている。東町田遺跡では土坑からベンガラが付着した石杵が出土し、その理化学的分析により金生山産赤鉄鉱の利用の可能性が高いことが判明している。後期から終末期には更に遺跡数が増加し、荒尾南遺跡や東町田遺跡では竪穴住居を中心とする居住域が形成され、特に荒尾南遺跡では遺物数が増大する（大垣市2011）。

古墳時代前期には、西方の扇状地や昼飯町の台地部及びその周辺に、粉糠山古墳(11)、矢道長塚古墳、昼飯大塚古墳(13)など、大型の前方後円(方)墳が集中し、この地域に一大勢力が存在していたことをうかがわせる。一方で、東町田遺跡では短い前方部をもつ前方後方墳（大垣市教育委員会2004では前方後方形周溝墓）も発見されている。後期には金生山周辺に多くの古墳が営まれ、約200基が現存している。また、車塚古墳(16)からは杏葉、雲珠などの馬具が出土しており、大型前方後円墳にはじまる当地域の首長墓系列の最終段階に位置付けられている。一方、集落遺跡である荒尾南遺跡では前期の竪穴住居跡が多数検出されており、東町田遺跡では後期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡が確認され、須恵器三足壺や鍍金飾り金具などが出土した（大垣市教育委員会2004、大垣市2011）。

奈良時代以降、現在の不破郡垂井町に国衙が置かれたため、西濃地域は古代美濃国の政治的中枢となった。しかし、前時代と比較して荒尾南遺跡周辺では遺跡数が減少している。南一色遺跡(44)では「美濃」刻印を含む奈良時代の須恵器が採集されている。また、興福地遺跡(37)は奈良興福寺の荘園であった可能性が指摘されており、「福」と書かれた須恵器や製塩土器、緑釉陶器などが出土した。一本松遺跡では竪穴住居跡が検出され、鉄滓などが出土した。荒尾南遺跡の東側に位置する桧遺跡(47)では、10世紀後半の掘立柱建物跡が検出され、300点以上の緑釉陶器片や鉄鏃、鏡、銀象嵌の飾り金具などが出土している（大垣市教育委員会1997、大垣市2011）。

中世には再び遺跡数が増加しているが、荒尾南遺跡ではA地区を中心に水田遺構を確認したに過ぎない。なお、桧遺跡の南方一帯には、昭和30年代の圃場整備前まで不破郡条里と呼ばれる条里の一町方格網と判断できる地割が残っていた。その阡線方位は北に対して3～7度東偏している（岐阜県文化財保護センター2012a、大垣市教育委員会1997）。





- 1 八幡山古墳 2 社宮司窯跡 3 堤ヶ谷古墳群 4 東山田古墳群 5 東山田窯跡 6 東山田古墳 7 村北古墳群 8 村北遺跡  
 9 花岡山古墳群 10 金生山古墳群 11 粉糖山古墳 12 西町田遺跡 13 昼飯大塚古墳 14 東畑遺跡 15 大塚古墳群 16 車塚古墳  
 17 兜塚古墳 18 片原木遺跡 19 一本松遺跡 20 お茶屋屋敷跡 21 竜神塚古墳 22 岡山本陣跡 23 赤坂畑田遺跡 24 東町田遺跡  
 25 東町田古墳群 26 西牧野遺跡 27 荒尾古墳群 28 榎戸B遺跡 29 矢道地藏堂遺跡 30 矢道B遺跡 31 西瀬古遺跡 32 八幡前遺跡  
 33 赤坂新田遺跡 34 熊野遺跡 35 御首神社遺跡 36 池尻城跡 37 興福地遺跡 38 興福地村北遺跡 39 興福地向田遺跡 40 塚越遺跡  
 41 河間遺跡 42 河間村内遺跡 43 笠縫城跡 44 南一色遺跡 45 福田遺跡 46 福田城跡推定地 47 棧遺跡 48 木呂古墳跡 49 荒川遺跡  
 50 長松城跡・城下町 51 荒川南遺跡 52 正円寺経塚 53 十六遺跡 54 若森城跡

図4 周辺遺跡位置図 (国土地理院発行の2万5千分の1地形図(大垣)を使用した。遺跡の位置や範囲は、大垣市教育委員会1994をもとに転記した。なお、枝番号は古墳の号数を示す。)



## 第3章 調査の成果

### 第1節 基本層序

平成6年度から平成10年度にかけて、(財)岐阜県文化財保護センターや大垣市教育委員会が実施した発掘調査や試掘調査で確認した層序や、各土層から出土した遺物、遺構の時期を検討し、今回の調査を行うに当たって荒尾南遺跡全体の基本層序を検討した。遺跡全体で確認できるのは弥生時代から古墳時代の遺物包含層(Ⅳ層)と遺構基盤層(Ⅴ層)で、この2層を鍵として遺跡全体の状況を検討し、以下のようにⅠ～Ⅵ層までの基本層序を設定した(図5)。B地区の南東側及びC地区の多くの調査地点では、この基本層序に対応するものの、A地区やB地区中央から北西側ではⅡ層及びⅢ層の堆積を確認できていない地点が多い。なお、この遺跡が立地する地形を形成する土層は、基本的に河川による水成堆積によるもので、上部には耕地整理等の造成によるものが含まれる。

Ⅰ層 耕地整理時に形成された現代の土層で、a層(水田等耕作土)、b層(水田床土)、c層(耕地整理に伴う盛土)に細別できる。

Ⅱ層 鉄分沈着が見られる黒褐色ないしオリーブ黒色を呈する土層である。A地区では確認していないが、C地区の調査ではブロック状の土塊を一部含むことから、窪地を平坦化するための客土の可能性がある。

Ⅲ層 灰色シルト層で、A地区では確認していないが、C地区では古代以降の遺物包含層となる。

Ⅳ層 黒色～黒褐色を呈する粘質～砂質土層である。主に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を包含し、この上面では西部域で中世以降の水田遺構を確認した。なお、B地区では局地的にⅣa層とⅣb層が区分できる(『荒尾南遺跡A地区Ⅰ』参照)。

Ⅴ層 黄灰色～灰色を呈する粘質～砂質土層である。この土層の上面では、主に弥生時代中期の方形周溝墓や弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡など、多数の遺構を確認した。なお、Ⅴ層中から遺物は出土しなかった。

Ⅵ層 旧河道に伴う砂礫層である。基本的にⅤ層下で確認したが、09\_4地点から10\_2a地点にかけては北北東から南南西の向きでⅠ層下にてⅥ層が表出し、Ⅵ層上面で主に竪穴住居跡や方形周溝墓などの遺構を確認した。なお、Ⅵ層中から遺物は出土しなかった。

なお、B地区西側では、主に縄文時代晩期から古墳時代前期の遺物を含む自然流路を検出した。この自然流路の堆積層は、およそ上層が泥炭質土、下層が砂質シルト～礫であり(図5-①・⑥)、上層には弥生後期から古墳時代前期の土器が、下層には縄文時代晩期～弥生時代中期の土器が含まれている。そして、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡や木棺墓は、自然流路下層中あるいは下層掘削後に検出した。

また、自然流路の基底面では、基本的にⅥ層が表出する。このⅥ層中には遺物が含まれないものの、有機物の放射性炭素の年代測定とⅥ層上面で検出した遺構出土遺物の年代から、およそ縄文時代後期後葉から末葉頃に形成された自然流路(旧河道)の埋土であることが判明した(本書第6章第2節及び『荒尾南遺跡A地区Ⅰ』参照)。

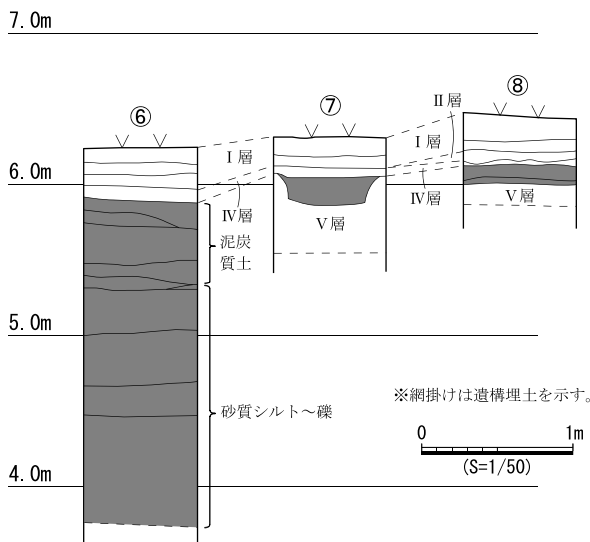
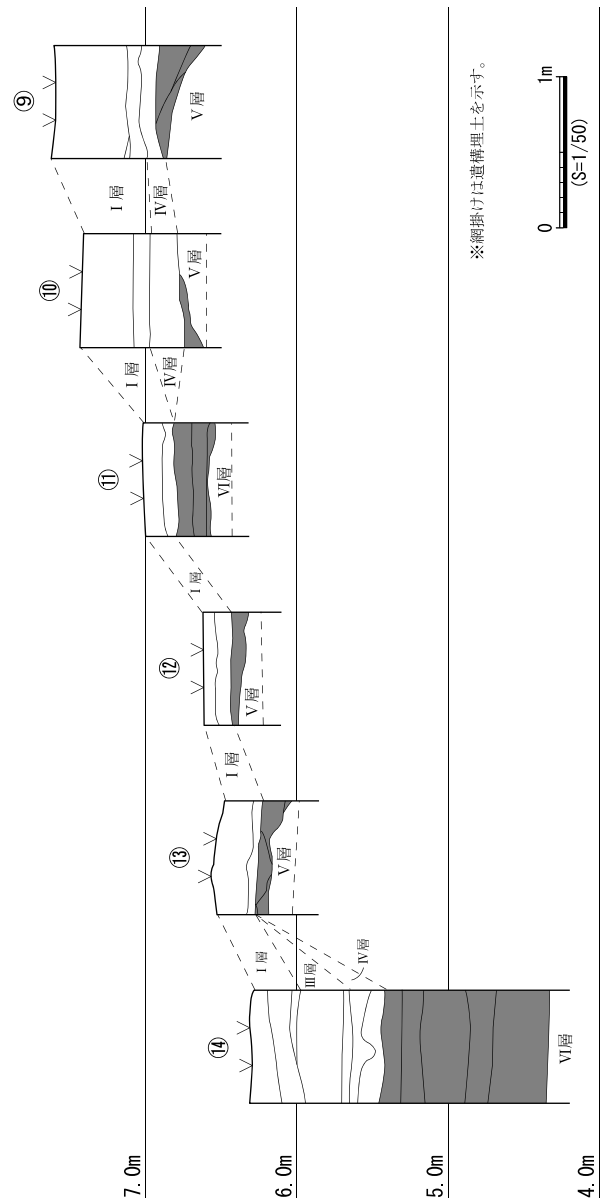
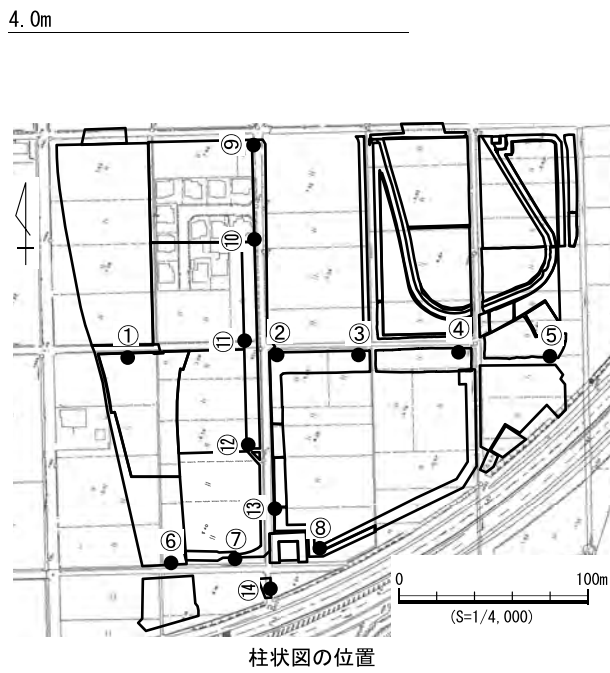
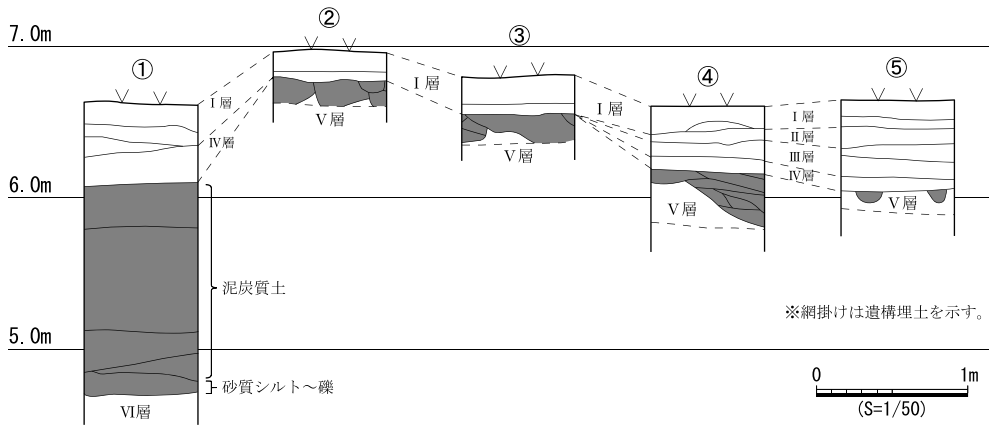


図5 B地区基本層序模式図

## 第2節 遺構の概要

今回の調査では、縄文時代晩期から中近世に及ぶ多数の遺構を検出した。本書ではそれらの遺構を、およそ11\_5地点を境に西部域と東部域に分けて第4・5章で記載する。また、それぞれの章を縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中期以降の4時期に節分けして報告する。このうち、自然流路や大溝は複数の時期を経て存在しているため、遺構の詳細を出土遺物の最も多い時期（自然流路は利用され始めた時期）で記載し、埋没過程においても利用され続けた場合は、その時期の利用状況や出土遺物などを説明した。

検出した遺構数は表2のとおりである。そのうち、遺跡の性格を反映する竪穴住居跡や方形周溝墓、掘立柱建物跡、水田跡、柵跡は、検出したすべての遺構を報告する。また、溝や土坑は検出数が多いため、区画溝などのように遺跡の性格を検討する上で重要な遺構や、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して報告した。なお、各遺構の所見は、発掘調査担当者の遺構所見をもとにして、整理担当者が記述した。

以下、各遺構の認定基準などについて記載する。

### 竪穴住居跡（略号 SB）

地表を掘り下げて床面をつくった建物跡。掘形、柱穴、壁溝、炉跡、貼床などの竪穴住居跡の構成要素のうち、一部の確認に留まっても竪穴住居跡の可能性のあるものとして報告した。なお、床面で検出した柱穴や小穴、土坑は略号Pとしたが、小穴や土坑は必ずしも竪穴住居跡に伴わない可能性がある。また、床面の説明で「貼床（整地土）」と記述したものは、埋土の説明で「掘形埋土」としたものに含まれる。

### 掘立柱建物跡（略号 SH）

床面が地表または地上にある建物跡。向かい合う2辺以上が確認できる、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成される。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

### 柵跡（略号 SA）

直線的、あるいは屈曲して並んだ複数の柱穴によって構成される遺構。なお、確認した柱穴の略号はPとした。

### 単独柱穴（略号 SP）

建物に伴う柱穴と同様の形状、又は柱痕跡や柱根が残存しているものの、規則的な配置が確認できず、建物遺構として認定できなかったもの。

### 焼土・炉跡（略号 SF）

被熱した痕跡のある遺構で、建物跡に伴わないもの。

### 墓（略号 SZ）

遺体を埋葬した穴であるが、その認定は人骨が遺存していないと困難である。ただし、方形周溝墓のように、方形や長方形に土地を区画するように溝を配置した遺構は、その区画内部に住居跡が想定できるような柱穴配置や竪穴掘形がない限り、埋葬施設である墓坑を確認できていなくても、原則として方形周溝墓とした。なお、溝による方形区画の内部に墓坑と思われるものが複数確認できた場合は、方形周溝墓をSZとし、墓坑は主体部1、主体部2と表記した。また、土坑墓の可能性を考えた



表2 B地区遺構数量表（今回の報告分のみ）

時代	荒尾南遺跡		SZ	SB	SH	SA	SD	SK	SP	ST	SE	SS	SF	SW	NR		
	大区分	小区分															
縄文時代	晩期	縄文		2			1	2							1		
弥生時代	前期	I期	21	1			6	8	1								
		II期	8				3										
	中期	III期	1														
			2	1	2				1								
			3			16				3	2						
	後期	IV期	1														
			2		52				3	13					1		
			3														
	古墳時代	後期	V期	1													
				2	2		8				5	16	4				
				3													
		前期	VI期 (廻間I)	1													
				2			21				4	12	1				
3																	
前期			VII期 (廻間I～II)	1													
		2				146	170	1	12	13	6	340	49	3594	7	774	
		3															
前期		VIII期 (廻間II～III)	1			17				1		4					
	2																
	3																
後期	IX期(松河戸)	1			11		3	1									
中期	X期(宇田)							4		2							
後期	古墳時代後期																
奈良時代	古代																
平安時代								3	11			1	2				
鎌倉時代～室町時代	中世						1	4				1					
安土桃山時代～江戸時代	近世						2	3			5	1					
時期確定困難			5		2		1	4		9							
合計			110		377	16	14	384	3729	797	30	3	2	1	1		

※本表では新たに認定した遺構に限って集計した。また、SB, SH, SA, SD, SK, SPのV期～IX期（もしくはV期～X期）の数はまとめてある。例えば、本文中にV期～VI期と記載したものでも、本表ではV期～IX期（もしくはV期～X期）の範囲に含めた。

遺構は、完形もしくはそれに近い形状の土器が出土した土坑や、木棺や土器棺もしくはその痕跡や破片を確認した土坑、それらと類似した形態である土坑、それらと群をなす土坑などである。

**溝状遺構（略号SD）**

上端の短軸（幅）に対して長軸（長さ）が5倍以上の長さとなるもの。ただし、5倍以上の長さがない場合でも、他の溝状遺構との関係から、溝状遺構の痕跡が土坑状の穴となって確認できたものと判断した場合は、溝状遺構に含めた。

**土坑（略号SK）**

地面に掘りくぼめられた穴のうち、明確に性格付けができないもの。遺物の出土状況や形状から墓坑、廃棄土坑といった可能性が考えられるものも含む。

**井戸跡（略号SE）**

帯水層まで掘り込まれている穴や、井戸枠や集水施設、またはその痕跡が確認できる穴。

**水田跡（略号ST）**

畦畔状の高まりによる区画。または、畦畔が確認できなくても、水田遺構に伴う鋤溝状の遺構を確認した範囲は水田遺構とした。

**自然流路（略号NR）**

幅が広く、自然の水流により形成されたと考えられる窪地。

水制遺構（略号 SW）

溝状遺構や自然流路内にある、堰や護岸施設などの土木構造物。

杭列（略号 SS）

杭または杭跡が複数続くと判断できるもの。

各遺構の基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目はやや異なるが、共通する基本項目については次のとおりである。

遺構の検出層位 基本層序と検出面で表し、V層上面で検出した遺構の場合「V上」、V層上面で検出したが、その上に堆積していたのがI層だった場合「I基」（I層基底面検出）などと表記した。

遺構埋土 分層した土層数と、堆積状況を次のように表示した。

- A－埋土が単一層 B－ほぼ水平な堆積 C－中央がU字状に凹むような堆積 D－凹みが片寄った堆積 E－ブロック状に土層が入り込む堆積 F－最上層が掘り込んだ状態となるもの  
G－柱痕跡状の土層があるもの H－その他

平面形 竪穴住居跡や土坑などは、短軸と長軸の長さの比から円形・正方形（1:1.2未満）、楕円形・長方形（1:1.2以上）、長楕円形（1:1.5以上）とし、形状があまり整っていない場合は不整円形、不整長方形などとした。他に調査区外に続く、あるいは他の遺構に削平され形状が明確でないものについては不明、不定形などとした。方形周溝墓については、次のようにアルファベットと数字を組み合わせて一覧表に掲載した。

- A－方形に溝が巡る B－4条の溝状遺構で方形に区画する（四隅が途切れる） C－辺の一部が途切れる D－不明 1－正方形 2－長方形 3－不明 4－円形

断面形 竪穴住居跡や土坑、溝など断面の形状（A～C）と、上面での短軸長と深さとの比（1～6）、底面（a～d）と壁面（1～5）の状況の4つの文字で表示した。

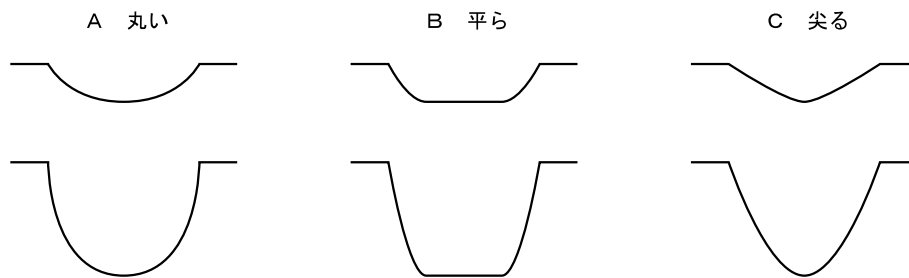


図6 遺構断面の形状模式図

深さ／上面での短軸長 1－0.3未満 2－0.3～0.7未満 3－0.7～1.1未満 4－1.1～1.5未満  
5－1.5以上 6－不明

底面の状況 a－丸いか平ら b－底が2段になる（小穴含む） c－底面が凸凹 d－不明

壁面の状況 1－壁が開く 2－壁が直立に近い 3－壁面に段がある 4－袋状 5－不明

遺構の規模（ ）で示したものは残存長を示す。

遺構の切り合い「新>古」の関係を示す。

出土遺物 次のように記号化して示した。

縄文土器：J 弥生土器・土師器：H 須恵器：P 灰釉陶器：K 中近世陶磁器：T 石器類：S

木製品：W 金属製品：I

## 第3節 遺物の概要

### 1 種類と数量

今回報告する発掘区域から出土した遺物は、弥生時代から古墳時代のものを中心として、縄文時代や古代以降の土器類、石器類、木製品、金属製品などがある。土器類は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中近世陶磁器類がある。弥生土器は出土量の多寡はあるものの、前期から後期までに属するものが出土した。弥生時代末期から古墳時代初頭の過渡的な時期の土器については、時代区分に諸説があるため、本書では弥生土器か土師器かの明確な区分は行っていない。このため、数量などは弥生土器と土師器を合わせて表示している。石器類や木製品、金属製品など、それ自体で時期が確定できない遺物については、伴出した土器や出土層位などによって所属時期を判断した。これらの各種遺物の出土点数は、表3のとおりである。掲載遺物の抽出方法は、遺構出土遺物のうち、遺構の性格や時期等を検討する上で必要なものや、遺物包含層出土遺物のうち、遺跡の性格を端的に示すものや分類別の代表的なものを中心に選択している。

表3 B地区出土遺物数量表（今回の報告分のみ）

種別 場所	縄文 土器	弥生土器 ・土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗・ 陶磁器類	土製品	石器・ 石製品	木製品	金属 製品	合計
I層		87,662	75	81	433	13	16	42	14	88,336
II層		54								54
III層		81		1	2		2			86
IV層	26	706,524	378	274	2,238	38	68	358	31	709,935
遺構	351	1,290,388	165	131	1,121	45	606	2,522	29	1,295,358
合計	377	2,084,709	618	487	3,794	96	692	2,922	74	2,093,769

### 2 時期区分

本書における時期区分は、大きく縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世とし（表2）、出土遺物・検出遺構数の多い弥生時代から古墳時代にかけては、『荒尾南遺跡B地区I』に示したように、既存の研究成果を参考にI期からX期に細別時期を設定した。なお、出土した遺物については、以下の方々から土器様式、器種、時期などの指導を得た。

弥生土器・土師器：赤塚次郎、石川日出志、伊庭功、石黒立人、深澤芳樹

木製品：山田昌久、樋上昇

### 3 弥生時代から古墳時代初頭の土器

『荒尾南遺跡B地区I』において、遺物量が多いII期からVII期については、表4～9のように器種分類を行ったため、本書でもその分類に準じた。また、他の時期については、既存の土器編年研究の成果を利用した。

表4 II期からVII期の器種分類（1）

時期	器種	分類	特徴・内容	
II	壺		口縁部の形状及び条痕の有無によってA～Cに分類。	
		A	口縁部が大きく外反する太頸壺。	
		1		口縁端部に押圧やキザミがあるもの。
			a	端部上下端にユビによる押圧があるもの。
			b	端部にキザミがあるもの。
		2	端部に押圧が認められないもの。	
B	頸部が長く直立して口頸部が弱く外反するもの。			
C	条痕のある壺などその他の壺。			

表5 II期からVII期の器種分類(2)

時期	器種	分類	特徴・内容
II	甕		口縁部形状及び、調整手法によってA～Cに分類。
		A	口縁部が短く外反し、ハケによる調整がみられるもの。
		B	口縁部がA類より長く外反する。外面はハケ調整。端部にキザミと押圧がある。
		C	器形はB類と同様で、外面に二枚貝による条痕調整を残すもの。
III	壺		口縁部形状及び文様構成によってABに分類。
		A	楡描文を施文する細頸壺。口縁部形状から細分。
		1	口縁端部が外反したままで終わるもの。
		2	口縁端部がわずかに内湾するもの。
	3	口縁端部が強く屈曲して直立するもの。	
	B	A類以外の壺。	
	甕		条痕文系の甕。
IV	壺		器形の形状によりA～H類に分類した。
		A	口縁端部に凹線文を施文する細頸壺。
		1	口縁端部が屈曲して直立し、数条の凹線をもつ。胴部は加飾されずハケ調整のみのものが大半を占める。
		2	口縁端部が袋状を呈し、3条～5条程度の凹線をもつ。頸部以下を加飾する。脚台が付く資料もある。
		B	口縁部が短く開く広口壺。
		1	口縁部が短く外反するもの。
		2	口縁部が短く外反し、端部が直立するもの。
		C	口縁部が大きく開く大型壺。端部下端を拡張するもの。
		D	口縁部が袋状となる大型壺。頸部に押圧が認められる突帯がめぐる。
		E	短頸壺。口縁が短くくの字状に立ち上がるもの。
	F	いわゆる無頸壺。口縁部が短く外反するもの。	
	G	上記分類に相当しない小型の壺。	
	H	外来的もしくは折衷的な要素の濃い壺。その他の壺。	
	甕		器形の形状及び口縁部の形状によりA～E類に分類した。
		A	口縁部が短くくの字状に屈曲する甕。
		1	口縁部端部に顕著な平坦面をもち、キザミやタタキ痕がないもの。
		2	口縁部が外反し、端部にキザミもしくはタタキ痕を残す。
		3	口縁端部が屈曲して直立する。
		4	口縁部形状はA2類と類似するが、胴部にタタキ痕が認められないもの。
		5	口縁部形状はA2類に類似し、脚台の付くもの。
		B	受口状口縁の甕。端部文様で細分。
		1	口縁部に波状文をもつもの。
		2	口縁部に刺突文をもつもの。山形文をもつものを含む。
	C	III期甕に類似し口縁部が短く外反する。条痕状のハケが外面に残るもの。	
	D	口縁部が外反し、端部が外傾して擬凹線が認められるもの。	
	E	上記分類にあてはまらないもの。	
	鉢		器形の形状でA～D類に分類。
		A	口縁部が袋状となるもの。
		B	口縁部がくの字に外反して端部に強い平坦面が認められる。
		C	口縁部が受口状口縁となる鉢。
	D	高坏の坏部に類似する形状をもつ。	
	高坏		口縁部の形状によってA～C類に分類した。
		A	口縁部が袋状を呈し、端部に凹線を有する。
B		口縁部が罅口状口縁となるもの。	
C	その他の高坏。		
V～VII	壺		口縁部の形状、法量によってA～K類に分類。
		A	口縁部が大きく開く大型の広口壺。口縁端部を上下に拡張したり、口縁部・胴部を加飾する傾向が強い。やや下膨れの形状。
		1	口縁部が外反し、端部を下方に拡張する。端部に擬凹線などを加飾するもの。
		a	口縁部が大きく外反して、端部を顕著に拡張するもの。
b	口縁部がA1a類に比べてやや短くなり、端部下方の拡張が弱いもの。		

表6 II期からVII期の器種分類(3)

時期	器種	分類	特徴・内容		
V～VII	壺	A	2	口縁部が強く外反し、端部を上方にわずかに拡張するもの。	
			3	口縁部が外反し、端部を下方へ拡張する。口縁部内面には段をもつもの。	
			4	頸部の立ち上がりやや垂直気味で、口縁部が強く屈曲して外方に開く。端部を大きく下方に拡張するもの。	
			5	口縁部が短く外反して立ち上がり端部を上下に拡張するもの。	
		B	口縁部が短く外反し、加飾のない大型の広口壺。		
			1	口縁部が大きく外反し、端部に顕著な平坦面をもつもの。	
				口縁部がB1類より短く強く外反するもの。B1類より器壁が厚く、粗いハケ目をそのまま残すものが多い。	
			2	a	口縁部が短く頸部から外反し、口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
				b	頸部がわずかに直立気味となり、口縁部が頸部から屈曲して立ち上がる。口縁端部に強い平坦面が認められるもの。
				c	B2a・b類より口縁部が短く立ち上がり、端部は強い横ナデのため端部下方が外方へ引き出され、端部が外傾するもの。
			3	口縁部が強く外反し、端部をやや丸くおさめるもの。	
		C	口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がる直口壺。		
		D	受口状の口縁をもつ壺。		
			1	口縁部の屈曲が顕著で、刺突文がみられるもの。	
			2	口縁部の屈曲の退化が著しいもの。文様を消失する傾向がある。	
			3	口縁部の屈曲が形骸化し、端部の平坦面もほとんど認められなくなるもの。	
				a	端部を直立させ、頸部も直立気味のもの。
		b	口頸部の外反傾向が強く、端部の屈曲が弱いもの。		
		E	二重口縁壺。		
		F	口縁部が短いもしくはわずかに直立する中型の壺。		
			1	口縁部がわずかに立ち上がるもの。	
			2	口縁部がやや直立するもの。	
		G	中型で頸部径の大きい長頸壺。		
			1	頸部径が口径と大きな差がなく、口径15cmを超える中型品。	
				a	口縁部が内湾しながら上方に立ち上がるもの。
			b	口縁部が顕著に内湾し、加飾が顕著なもの。	
			2	口縁部が内湾して立ち上がり、やや扁平な胴部をもつもの。1類より小型品。	
				a	口縁部に施文しないもの。
			b	口縁部に施文するもの。	
			3	口縁部が強く内湾し、端部に内傾面をもつもの。	
				a	口縁部に施文しないもの。
			b	口縁部に施文するもの。	
		H	中・小型壺の長頸壺。		
			1	口縁部が直線的に開くもの。	
				a	口縁部に施文しないもの。
				b	口縁部に施文するもの。
			2	口縁端部がわずかに内湾するもの。	
				a	口縁部に施文しないもの。
			b	口縁部に施文するもの。	
		3	口縁部が強く外反するもの。		
		I	口縁部が短く立ち上がる中・小型壺。		
			1	口縁部がくの字に外反するもの。	
			2	口縁部がやや内湾するか口縁部がやや直立するもの。	
		J	小型の壺。		
			1	小型の直口壺。	
			2	口縁部が内湾する小型の壺。	
				a	加飾のないもの。
			b	加飾のあるもの。	
			3	口縁部が短く直線的に開き、やや扁平な胴部をもつ小型の壺。G2類の小型品。	
		4	G3類の小型品。口縁部に多糸沈線などで加飾することが多い。		

表7 II期からVII期の器種分類(4)

時期	器種	分類	特徴・内容	
V～VII	壺	K	外来系もしくは折衷的要素の濃いもの。その他の壺。	
			器形の形状や大きさによってA～F類に分類。	
	甕	A	受口状口縁をもつ大型の甕。口縁部の形状で細分。	
		1	屈曲部から口縁端部までやや長く内傾し、端部に強い平坦面をもつもの。	
	2	口縁部が強いヨコナデにとともに短く明瞭に屈曲するもの。		
	a	a	頸部が直立気味で端部に顕著な平坦面をもち、端部直下内面に強い凹面が認められるもの。	
		b	口縁部の屈曲がやや弱まるもの。端部に平坦面をもつが、なかには断面が三角形を呈する資料も認められる。	
	3	頸部屈曲はくの字となり、口縁部の立ち上がりが長くなるもの。口縁部屈曲が形骸化するが、端部の顕著な平坦面は堅持する。		
	4	頸部・端部とも屈曲はやや弱く、口縁部の長頸化指向が顕著なもの。		
	B	くの字口縁をもつ台付甕。口縁部形状で細分。		
	1	口縁部が短く外反するもの。		
	a	a	口縁部の外反が弱く、やや立ち上がりが長いもの。	
		b	口縁部が短く外反する。端部が平坦であるもの。	
	2	口縁部が長頸化し、その立ち上がりが直線的となるもの。端部が平坦である。		
	3	口縁部が短く立ち上がり、口縁部及び端部に強い指頭圧痕が認められるもの。		
	4	口縁部が比較的長く立ち上がり、端部を丸くおさめるもの。		
	C	口縁部の形状がくの字を基本とするものや内湾するもの。		
	1	端部を丸くおさめるもの。		
	2	端部が平坦か外傾するもの。		
	D	S字状口縁台付甕。		
	1	S字甕A類。口縁部の屈曲が明瞭で、押引きがあるもの。		
	a	a	口縁部中段が垂直気味に立ち上がるもの。	
		b	屈曲部から口縁部下段が外方へ強く引き出されるもの。	
	2	S字甕B類。口縁部の屈曲は堅持するが、押引きが認められないもの。		
	a	a	口縁部形状はD1a類に類似するが、外面に押引きをもたないもの。	
		b	口縁部が短く明確に屈曲し、上段がわずかに外方へ引き出され、平坦面をもつ。	
	3	S字甕C類。口縁部の屈曲が形骸化し、上段の平坦面を消失して肥厚が顕著。		
	E	中・小型品の甕。		
	1	口縁部がくの字状となり、端部が比較的平坦な面をもつもの。		
	2	口縁部が短く外反し、胴部下半がやや膨らむ。B4類に類似する。		
	3	B3類と類似した口縁部形状をもつもの。		
	4	口縁部が外反して、端部をまるくおさめる平底の甕。		
	5	C類と類似して口縁部が内湾する小型の甕。		
	6	口縁部の立ち上がり著しく短く、器壁の薄い平底の甕。		
	F	外来系もしくは折衷的要素の濃いもの。その他の甕。		
	鉢			器形の形状によってA～H類に分類した。
		A	受口状口縁の鉢。口縁部の形状で細分。	
	1	口縁部が明瞭に屈曲して受口状口縁を呈するもの。		
	2	口縁部の長頸化して、端部の屈曲が形骸化するもの。端部の平坦面も形骸化して、断面形が三角形にちかくなる。		
	3	口縁部の長頸化傾向がさらに顕著となり、端部の屈曲が痕跡的となるもの。		
	a	a	端部外面がわずかに直立気味して、端部が尖り気味となるもの。	
		b	端部の屈曲がさらに痕跡的となり、肥厚した端部のような形状となるもの。	
	4	口縁部に屈曲部がなく、くの字状となる。		
	a	a	口縁部が短く外反するもの。	
		b	口縁部が長く外反するもの。	
		c	口縁部の立ち上がりが直線的となり、端部に平坦面をもつ。	
	B	大型の有孔鉢。		
	1	口縁部が緩やかに立ち上がり、胴部が深い形状のもの。		
	2	口縁部が大きく外傾しながら直線的に開くもの。		
	3	内湾傾向が強く、口縁部が内傾するもの。		

表8 II期からVII期の器種分類(5)

時期	器種	分類	特徴・内容		
V～VII	鉢	C	平底の底部から胴部がなだらかに立ち上がり、口縁部がわずかに内湾する小型品。		
		D	半球状の胴部をもつ台付鉢。		
		E	口縁部が直線的に外傾する小型の鉢。		
		F	半球形の胴部とやや突出した底部をもつもの。		
		G	その他の鉢。		
		H	外来的もしくは折衷的要素が濃いもの。		
	高坏	器形の形状や大きさによってA～J類に分類した。			
		A		口縁部が短く直立するか内傾して立ち上がるもの。	
			1	口縁部が屈曲して内傾しながら立ち上がるもの。	
		B	2	口縁部が短く直立するもの。	
				口縁部が強く外反する外反高坏。口縁部の立ち上がりの長短、口縁部形状の差異、口縁部の外反傾向から細分した。	
			1	口縁部が短く直立して、端部が外方へ引き出された平坦面をもつもの。脚部は付根から円錐状に開き、端部は屈曲して開き平坦面をもつ。	
			2		口縁部が短く外反するが、坏底部からの立ち上がりで直立指向が強いもの。
				a	口縁部が短く立ち上がり、端部のみを外方へ強く引き出す。脚部は柱状でやや長脚である。
				b	口縁部の外反傾向が強く、端部の外傾する平坦面が顕著なもの。脚部は付根から外方へわずかに開く円錐状を呈し、裾部で強く外反する。
			c	口縁部の外反傾向が強く、端部が外方へ引き出されるものの丸みをもつもの。	
			3	口縁部が坏底部から強く外反するもの。	
			a		口縁部が強く外反し、端部はわずかな平坦面をもつかやや尖り気味となるもの。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや外反する。
				b	B3a類より口縁部高が高く、口縁部と坏底部の屈曲が弱いもの。端部は丸い。脚部は柱状で裾部で外反する。
		C	有段(稜)高坏。		
			1		口縁部がやや外反するか直線的に外傾する大型品。脚部は付根から円錐状に開き、裾部でやや内湾する。
				a	口縁端部を尖り気味に丸くおさめるもの。
				b	口縁端部に内傾面をもつもの。また内面の段が顕在化する。
			2		C1類と類似するが、坏部底径がやや縮小し、口縁部の立ち上がりが開き気味となる。脚部は低脚化が進行し、透孔付近で強く内湾するか強く外反する。
				a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。
				b	口縁端部に内傾面をもつもの。
			c	口縁内面に多条沈線をもつもの。	
3				C2類に類似するが、坏底径の縮小がさらに進み、口縁部の開きが顕著となるもの。脚部の低脚化が著しく、透孔付近の屈曲は痕跡化してわずかに内湾する。	
			a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。	
b			口縁端部に多条沈線をもつもの。端部を肥厚して多条沈線をもつ例が多い。		
4				C3類に酷似するが、坏底径が脚部と付根径と大きな差がないほどに縮小化するもの。坏底部内面の段は堅持し、外面の坏底部の稜も比較的明瞭である。	
			a	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。	
			b	口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。	
	c		口縁部内面中位からやや下がった位置まで多条沈線のみを施文するもの。		
	d	口縁部内面を多条沈線間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文するもの。			
e	連弧文で加飾される高坏。文様帯は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。				
D	C4類の坏底径がさらに縮小して底部にあまり平坦な面がみられなくなり、口縁部はさらに外方へ開き、側面形状が皿形にちかくなる。内面の段は保持する。				
	1	端部を尖り気味にまるくおさめるか外傾するわずかな平坦面をもつもの。			
	2	口縁端部に内傾面をもつか、その部位にのみ多条沈線をもつもの。			
	3	口縁部内面中位からやや下がった位置まで多条沈線のみを施文するもの。			
	4	口縁部内面を多条沈線間に山形文、斜格子文を加えて、多様な文様を2帯～4帯施文するもの。			
	5	連弧文で加飾される高坏。文様帯は多条沈線・連弧文の3帯構成が多い。			
E	C類と類似するが、坏部断面形状が皿形を呈するもの。内面には直線文と連弧文が施文される。内面には段が認められる。				
F	B類に類似する中・小型の高坏。				

表9 II期からVII期の器種分類(6)

時期	器種	分類	特徴・内容
V～VII	高坏	G	C類に類似する中・小型の高坏。
		1	C1類に類似する中・小型品。
		2	C1類と坏部形状が類似するが、脚部裾部が強く外反する。
		3	C3・C4類に類似する中・小型品。
		a	加飾のないもの。
		b	口縁部直下のみに多条沈線を施文するもの。
		c	口縁部中位より下がった位置まで、多条沈線に加えて山形文などを施文し、多様な文様をもつもの。脚部にも施文する例が多い。
		H	坏部が椀状となる高坏。
		1	無文のもの。
		2	加飾のあるもの。
		I	ワイングラス形高坏。
		1	口縁部が直立し、坏底部が強く屈曲するもの。
		a	口縁部が内傾し、坏底部との境界で強く屈曲するもの。
		b	坏部の形状は1a類に類似するが、屈曲部がやや鈍化するもの。
	2	坏部は椀状を呈して屈曲部は形骸化し、口縁部が直立するもの。	
	3	口縁部が内傾し、全体の形状は1b類に類似するもの。	
	J	外来的もしくは折衷的要素が濃いもの。その他のもの。	
	器台		器形の形状や大きさによってA～D類に分類した。
	A		口縁部及び脚裾部の外反が強く、基部径が大きいもの。
	1		いわゆる中空器台で基部径が大きい。
	a		柱状部が長いもの。
	b		口縁部・脚裾部の外反が弱くなるもの。柱状部が縮小・短脚化して付根からすぐに外反する。
	2		脚部が付根から円錐状に開くもの。
	B		口縁部が付根から外方へ大きく開き、直線的もしくはわずかに外反する。脚部形状も含めて細分。
	1		口縁部の形状が直線的なもの。
	a		柱状部がわずかに直立するが、裾部は少し屈曲して円錐状に開くもの。
	b		付根直下から脚部が円錐状に開くもの。長脚となり透孔位置が上方に移動する。
	c		口縁部を下方へ拡張し、擬凹線・円形浮文を施文するなどの加飾する。
	2		口縁部が明瞭に内湾するもの。脚部形状で細分。
	a		受部形状はわずかに内湾傾向をもつが、脚部はB1b類の形状と類似するもの。
	b		長脚で付根からわずかに内湾傾向をもって円錐状に開くもの。
	3		受部の内湾が顕著で、脚部も内湾が顕著なもの。
	4		加飾の強い一群で、形状が上記の分類にあてはまらないもの。
C		口径10cmに満たない小型の器台。	
1		口縁部が短く直線的に外傾する。端部が平坦なもの。	
2		口縁部が短く円錐状に開くもの。	
3		受部が浅い皿状となるもの。	
D		口縁部が強く屈曲するもの。	
手捏ね		ユビナデで成形された小型品。一部にハケ調整を残すものも認められる。	
A		手捏ねで成形され、口縁端部がわずかに屈曲する。	
B		A類に類似するが、口縁端部の屈曲がないもの。	
C		手捏ね成形で口縁部が直線的に外傾する。	
D		手捏ねで成形され壺形土器に類似する形状をもつもの。	
E		手捏ねで成形され、上記分類に相当しないもの。	
手焙り形土器		手焙り形土器。覆部には斜格子文を施文し、胴部に突帯が貼付されることが多く、加飾傾向が強い。	
土製品		土製品を一括。蓋形や合子形に類似するものや、紡錘車、土製円盤などを含む。	
その他		上記分類に相当しない不明品。	



#### 4 石器類

今回報告する発掘区域内で出土した石器類は695点に及び、このうち遺構出土の石器類を中心に397点を図示した。数量的には砥石や叩石が多く、ほぼすべての発掘区域で出土しているが、とりわけ土器が多く出土している大溝（SD0381）や自然流路（NR002、NR012など）では砥石や叩石の出土も目立つ。一方、SK06082やSZ155では剥片が、SK03687では叩石が、SB320では砥石が、それぞれやや多く出土している。

以下、各器種の分類と出土石材等について示す。

**打製石鏃** 鋭利な先端部と柄に装着するための基部を作り出した小型の打製石器で、16点出土した。平面先端角が50°以上の先端部をもつものをA類、50°未満のものをB類とし、さらに、基部の形状から凹状のわずかな挟りが入るものを1類、丸みを帯びた深い挟りが入るものを2類、「く」の字状の浅い挟りが入るものを3類、いわゆる有茎鏃で、基部に茎部をもつものを4類に細分し、この組み合わせで分類した。その結果、B3類とB4類がやや多く、側縁が有段で平面形が五角形となるものが5点出土した。石材は、チャートが10点と最も多い。

**磨製石鏃** 鋭利な先端部と柄に装着するための基部を作り出した小型の磨製石器で、4点出土した。その内訳は、孔のあるもの2点、未製品の可能性のあるもの2点であり、石材は3点が泥岩である。

**石錐** 鋭利で細い先端部を作り出した小型の石器で、2点出土した。

**石鋸** 板状の石を利用し、擦り切りの機能を有する刃部を作り出したもので、1点出土した。

**刃器** 剥片の縁辺部に連続した剥離を施し、刃部を作り出した石器で、14点出土した。砂岩、泥岩、サヌカイトなどの石材が目立つ。

**楔形石器** 剥片の相対する二縁辺に、潰れ状あるいは階段状の剥離痕が発達する石器で、2点出土した。石材は黒曜石とチャートである。

**調整剥離を施す剥片（RF）** 剥片の縁辺部に二次加工を施すが、定形的な刃部をもたない石器で、19点出土した。石材は、チャートと泥岩が多い。

**微細な剥離痕を有する剥片（MF）** 剥片の縁辺部に微細な剥離痕が確認できる剥片で、10点出土した。石材は、チャートと泥岩が多い。

**剥片** 剥片剥離によって生産された素材で、74点出土した。石材は、チャートと泥岩が多い。

**石核** 素材剥片を剥離した残核を総称して石核とした。3点出土した。

**打製石斧** 略長方形の形態を呈し、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部をもつ石器で、6点出土した。石材は、ホルンフェルスが多い。

**磨製石斧** 略長方形の形態を呈し、長軸の一端に刃部を研磨によって作り出しているもので、13点出土した。石材は、ハイアロクラスタイトが4点と多い。大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧が多く、鑿状片刃石斧や柱状片刃石斧は少ない。

**石包丁** 楕円形を呈する偏平な磨製石器のうち長辺に刃部のあるもので、3点出土した。石材はいずれも泥岩である。

**叩石** 主に楕円状・棒状の礫の側面及び長軸端に、剥離を伴うような敲打の痕跡がみられるもので、扁平な面に凹みを持つものもここに含めた。166点出土し、石材の内訳は126点が砂岩で、他に安山岩、花崗岩などが多く使用されている。

**磨石** 主に拳大の円礫の平坦面や側面に磨面が観察できるもので、6点出土した。その石材は砂岩が多い。

**砥石** 礫の表面に溝状あるいは平面的に砥面が認められるもので、285点が出土した。石材は砂岩が最も多く200点で、他に凝灰岩、凝灰岩質砂岩、泥岩などが使用されている。

**石杵** 底面に顕著な磨滅が認められるもので、2点出土した。いずれも砂岩製で、1点はL字状を呈し、1点は水銀朱が付着している。

**台石** 人頭大の礫に敲打痕が認められるもので、4点出土した。石材はいずれも砂岩である。

**石錘** 礫の表面を一周して凹線をつけたもので、1点出土した。

**投弾** 球形を呈し、ほぼ全面に研磨痕が認められるもので、1点出土した。

**軽石製品** 軽石は、平坦面や溝状の刻みなどの明確な使用痕跡が認められるものと、それが不明瞭なものがある。その使用痕跡から、木製品のような比較的柔らかいものを研磨する道具として使用された可能性がある。25点出土した。

**玉類** 管玉15点、勾玉1点、小玉1点、丸玉1点が出土した。弥生時代前期の木棺墓SZ156からは3点の管玉が出土した。石材は緑色凝灰岩が多い。

**石製品** 石棒3点、石鍋1点、被熱による赤変と黒斑が明瞭に残る石材6点、その他3点、合計15点を石製品とした。石材は、石棒3点が緑色片岩、石鍋が滑石である。

表10 石器類数量表

石材	器種	打製石鏃	磨製石鏃	石錐	石鋸	刃器	スクレイパー	楔形石器	R F	M F	剥片	石核	打製石斧	磨製石斧	石包丁	叩石	磨石	砥石	石杵	台石	石錘	投弾	軽石製品	玉類	石製品	合計
深成岩																								1		1
玄武岩													1													1
ハイクラサイト											1		4			2										7
塩基性岩													1													1
安山岩	2										5	1	1		16	1	4								1	31
ガラス質安山岩					1																					1
サヌカイト	2				1	2			1	1	5															12
下呂石	2									1	2															5
黒曜石								1			1															2
流紋岩													1		1	1	2			1						6
閃緑岩															3		2									5
花崗岩															7		1									8
花崗閃緑岩															2		1									3
砂岩					4					1	8				126	4	200	2	6	1	1		1	3		357
凝灰質砂岩					1										1		20								5	27
泥岩		3			3				6	4	28		1		3	2	15									65
頁岩					1				2		2		1													6
チャート	10		1			1	1		7	3	20	1	1													45
粘板岩													1												1	2
凝灰岩		1											1		3		36							3		44
砂質凝灰岩													1		1		2									4
緑色凝灰岩																									12	12
軽石																			1				25			26
片岩				1	1																					2
緑色片岩												1	1												3	5
黒色片岩											1															1
ホルンフェルス					2				2		1	4			2		1									12
紅簾片岩									1																	1
大理石																									1	1
ヒスイ																									1	1
滑石																									1	1
合計		16	4	1	1	14	3	2	19	10	74	3	6	13	3	166	6	285	2	7	1	1	25	18	15	695

## 5 木製品

今回報告する発掘区域内で出土した木製品は2,922点に及び、このうち形状が明確なものや用途が推定できるもの、明瞭な加工痕跡を残すものなどを496点図示した。木製品の多くは大溝（SD0381）と自然流路（NR002、NR012など）から出土し、他に方形周溝墓や土坑などからも少量出土している。その分類は『荒尾南遺跡C地区』で示したものに従った。

以下、各器種の分類等について概要を示す。

### (1) 器具

特定の器種に分類できる製品を器具と称する。

**木材加工具** 木材加工に関わる鉄製工具の柄や楔が出土した。しかし、柄については、起耕・整地具の柄である可能性も残る。

**起耕・整地具** 起耕・整地作業に用いる道具で、農耕のほか、灌漑・造墓などの土木工事にも使われたと考えられる。器具の中では最も多く器種認定ができ、鍬、鋤、泥除、えぶり、未製品などが出土した。鍬は直柄平鍬、直柄横鍬、曲柄平鍬、曲柄又鍬、鋤は払い鋤などがあり、直柄平鍬と直柄横鍬、泥除、鋤、曲柄は未製品が出土している。なお、これらの素材となるミカン割材なども出土した。未製品や素材は遺跡東側を流れる大溝でも出土しているが、遺跡西側を流れる自然流路内での出土数が多く、さらにその出土箇所は散在するのではなく、ある範囲にまとまる傾向がある。

**収穫具** 稲などの植物を刈り取るために使用する道具で、手鎌が出土した。

**水田作業具** 水田作業で用いる道具で、田下駄や大足、田舟が出土した。本書では、枠のない板田下駄と円形枠をもつ輪樫（輪カンジキ）型田下駄を狭義の田下駄とし、縦枠と棧（横木）によって構成される方形枠田下駄を大足と呼ぶこととする。

**敲打・潰砕具** 敲く、打つ、砕く、潰すなどの作業に用いた道具で、横槌、横杵、縦杵が出土した。縦杵は握部の中央に節帯があるもの1点と、節帯のないもの2点が出土している。

**編物・織機関連具** 糸を紡ぎ、布を織る、藁製品を編むなどに使用した道具で、枠、布巻具、木錘などが出土した。

**運搬具** 陸上において物資を運搬する際に用いた道具で、天秤棒が出土した。しかし、全体形のわかる資料はなく、建築部材の可能性も残る。

**漁撈具** 漁撈に用いたと思われる道具で、網杵が3点出土した。

**武器・武具** 弓と鞘が出土した。弓のうち1点は赤漆と黒漆を交互に塗った飾り弓である。

**容器** 削り物、曲物、組物、未製品などが出土した。器具の中では起耕・整地具に次いで多く、特殊な製品として、弥生時代前期以前の削り物や大型桶の蓋未製品などがある。

**祭祀・儀礼関連具** 形代、斎串、竿、儀器などが出土した。形代のうち2点は舟形で、いずれも自然流路からの出土である。また、斎串は河原に相当する場所から数本がまとまって出土した。

**葬送具** 部材が残存している木棺墓を3基検出した。そのうち2基は底板、側板、小口板などの棺材が組み合った状態で出土した。

**家具・生活雑具** 椅子、枕、台（机）、火錐臼、杓子、匙未製品などが出土した。椅子は組み合わせ式の脚、杓子の1点は削り抜き式の縦杓子である。

**装身具** 古墳時代の下駄形の履物と、中世以降の差齒下駄の齒などが出土した。

表11 木製品・繊維製品数量表

区分	器種	分類	点数
器具	木材加工具 小計194点	柄	2
		楔・楔状木製品	2
		直柄鋏（平鋏）	2
		曲柄鋏（平鋏・又鋏）	5
	起耕・整地具 小計76点	横鋏	1
		払い鋏	3
		鋏・鋏	2
		えぶり	2
		掘棒	1
		柄	6
		泥除	4
		未製品（鋏・鋏・泥除等）	20
		農具素材	30
		収穫具	手鎌
	水田作業具 小計8点	田下駄	5
		大足	2
		田舟	1
	敲打・粉碎具 小計5点	横槌	1
		横杵	1
		縦杵	3
	編物・織機関連具 小計7点	木錘	1
		棹	3
		布巻具	1
		編組製品	2
	運搬具	天秤棒	2
	漁撈具	網杵	3
	武器・武具 小計3点	弓	2
		鞘	1
	容器 小計31点	刳物・槽・盤	8
		曲物・曲物蓋・曲物把手	10
		組物・指物	6
		未製品（桶蓋）	1
		栓	4
漆器・膳		2	
祭祀・儀礼関連具 小計22点	形代	5	
	斎串	12	
	竿・削り出し棒	3	
	儀器	2	
葬送具	棺材	16	
家具・生活雑具 小計11点	椅子（腰掛）	1	
	枕	1	
	台か机	2	
	発火具（火鑽臼）	1	
	杓子	1	
	未製品（匙）	1	
	その他（箸・扇等）	4	
	装身具	履物	5
部材 小計143点	建築部材 小計81点	柱材（柱根・柱材・礎板）	29
		屋根材（垂木・破風・棟木）	3
		横架材（台輪等）	7
		扉部材	3
		その他（梯子・床板・壁板等）	39
	土木部材	杭・矢板・分割材	40
	器具部材	器種認定できないもの	2
その他の部材 小計20点	井戸杵	18	
	構造部材	2	
加工材・残材 小計152点	板材	50	
	棒材	62	
	その他の加工材	19	
	残材	18	
	樹皮材	3	

## (2) 部材

建築物、土木施設、器具などの構造物の一部を部材と称する。

**建築部材** 柱材、屋根材、横架材、扉部材、梯子、床板などが出土した。柱材は掘立柱建物跡の柱穴から柱根のみ出土した場合や、自然流路内で根入れ腐食が明瞭に残り上端に輪薙込が残る掘立柱のように、良好な状態で出土した場合もある。

**土木部材** 杭が出土した。大半は芯持ち材で先端を尖らせただけのものである。

**器具部材** 器具の一部と思われるが、器種認定が困難なものをここにまとめた。

**その他の部材** 井戸枠や木樋、構造部材である。

## (3) 加工材

特定の器種や部材に認定・推定できないものを加工材として扱った。

**板材** 原木を縦に割り裂き扁平にした材。扁平な面が材面、年輪線の現れる面が木口、木口と直交する面が木端（こば）である。木口に現れる年輪線により大きく柾目・板目に分けられる。

**棒材** 細長で、手のひらで握れる程度までの太さの材を棒材と称する。棒材は、芯持の丸木材と分割材利用の削り出し棒材に分けられる。

**その他の加工材** 手のひらにおさまらないための丸木材（丸太材）、木材を繊維方向に割って作出した分割材、分割材を角柱状に仕上げた角材のほか、様々なかたちに整形された不定形な加工材がある。

**残材** 製材や加工の過程で生じた切れ端を残材（もしくは端材）と称する。

**樹皮材** 剥ぎ取った樹皮を同じ幅に切り揃えたもの。器具の補修や曲物容器の留め具などに使用されたと考えられる。

## 6 金属製品

今回報告する発掘区域内で出土した金属製品は74点に及び、このうち形状が明確なものや用途が推定できるものを50点を図示した。数量的には弥生時代から古墳時代の銅鏃14点と、中世以降の銭貨17枚、近世以降の煙管11点が多く、大半の銭貨や煙管は遺物包含層から出土している。なお、その他として倭鏡（銅鏡）2面や銅鐸の飾耳1点などが出土した。

銅鏃14点の内訳は有茎鏃12点、無茎鏃2点である。有茎鏃の多くは全長3.0～5.0cmであり、鏃身は長三角形か膨長三角形を呈する。基部は平基が多いものの、腸袂のラインが明瞭に残る個体が多い。無茎鏃はやや幅広で、いずれも多孔鏃である。

倭鏡（銅鏡）はいずれも重圏文鏡である。1つは直径8.5cmで、06\_15・16地点の大溝（SD0381）から出土し、もう1つは直径3.0cmで、10\_2a地点の遺物包含層から出土した。銅鐸の飾耳は近畿式銅鐸の双頭渦文片で、06\_19地点の遺物包含層から出土した。

表12 金属製品数量表

位置	銅鏡	銅鐸片	銅鏃	鏃	鉄滓	鉄砲玉	火打金	銭貨	煙管	釘	釣針	不明	合計
I層		1						6	3	2	1	1	14
IV層	1		7		1	1		6	6	1	1	7	31
遺構	1		7	1	4	2	1	5	2	2		4	29
合計	2	1	14	1	5	3	1	17	11	5	2	12	74

## 第4章 西部域の調査成果

### 第1節 縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構と遺物

西部域の縄文時代晩期から弥生時代前期（I期）の遺構として、竪穴住居跡2軒、単独柱穴1基、墓15基、溝状遺構4条、土坑11基、自然流路6条について、以下に報告する。



図7 西部域の縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構分布図



### 1 竪穴住居跡

西部域南西側において、2軒の竪穴住居跡（SB446、SB447）を検出した。いずれも遺物を含まない旧流路埋土（VI層）上での検出である。

SB446（遺構：図8・9、遺物：図10）

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。NR010埋土掘削後に、VI層上面で検出した。検出した各遺構の埋土は粘性の強い粘土であり、平面形はいずれも明瞭であった。本遺構は竪穴住居跡の掘形を検出できていないが、小穴が環状に巡ることは本遺跡A地区の縄文時代晩期のSB001と類似する（岐阜県文化財保護センター2012）。そのため、竪穴住居跡の可能性のあるものの、小穴の埋土は自然堆積の可能性があり、疑問も残る。

**形状** 中央部に小穴2基、それらを取り巻くように小穴9基が環状に位置する。小穴間の外縁の距離は、南北長約4.5m、東西長約4.7mである。なお、検出面は南東側に傾斜しているが、これはNR010底面の傾斜である。

**床面** 明確な床面は検出できていない。VI層上面にて小穴を11基確認した。小穴は長軸長約0.6m～1.5m、深さ約0.05m～0.3mであり、平面形は不定形である。P1では棒材3本が出土した。いずれも朽ちて表面の損傷が著しかったが、南東壁に接して斜位で出土した。棒材の周辺の土層にはブロック土が認められたことから、住居に伴う構造物材である可能性が高い。また、それらを覆うように

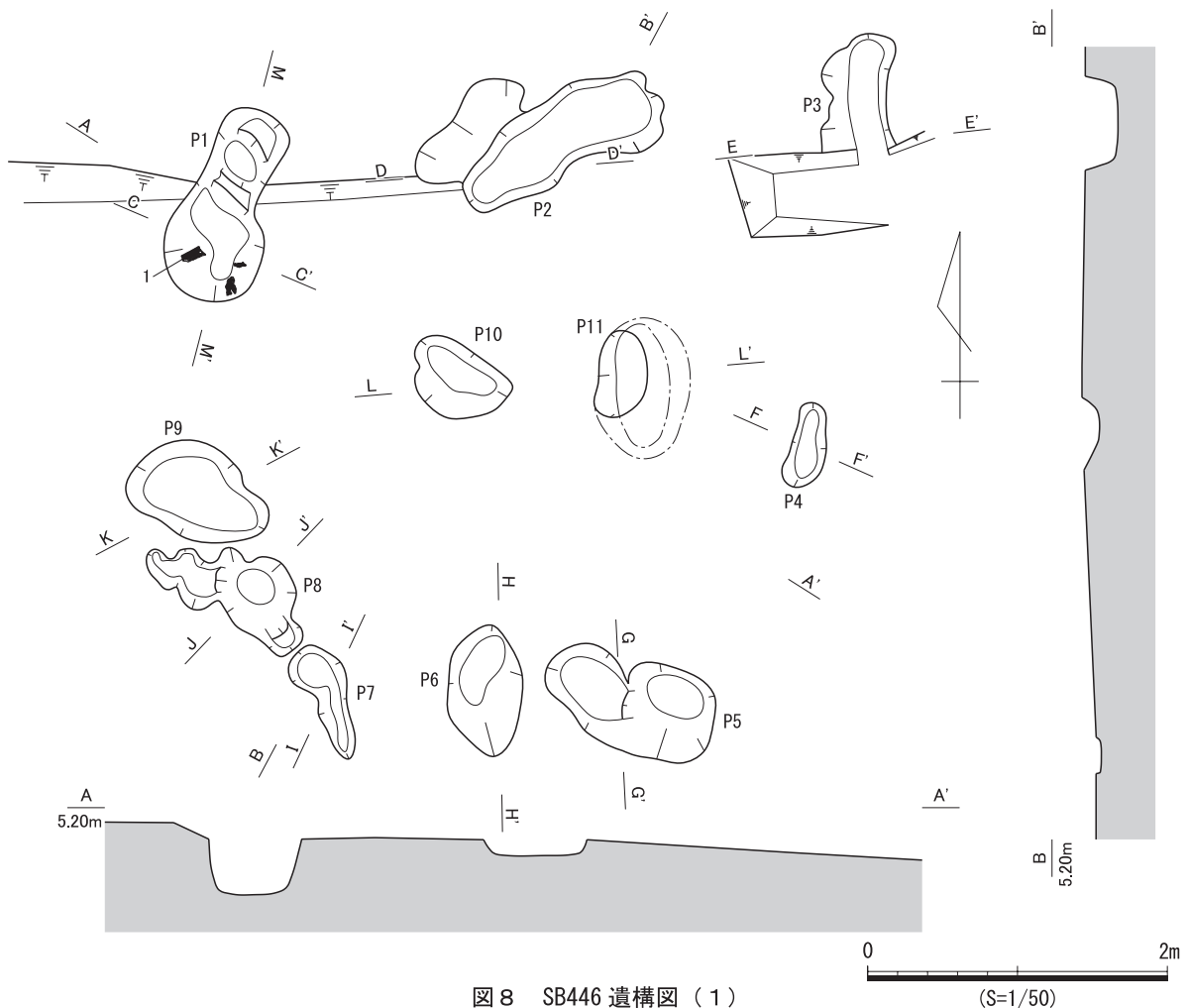


図8 SB446 遺構図（1）

砂礫層（3層）が堆積している。P2は2層に分層したが、埋土が北西方向と南東方向にずれている。中央の小穴2基（P10、P11）は東西に並列しており、P11は埋土が南東方向に潜り込み最下層には粗砂が堆積している。P1下層を除き、いずれの小穴も埋土の主体は粘土であり、粘土の中に植物遺体や粗砂、炭化粒などを含むものが多い。また、P1の3層のように粗砂が筋状に入ることもある。そのため、埋土の大半は自然堆積の可能性がある。

**遺物出土状況** 小穴から土器15点、P1から木製品3点が出土した。P1埋土上層からはI期の破片が横位で出土し、他にP5、P6、P10からも小片が出土した。なお、P1出土の棒材の年代測定を実施した結果、縄文時代晩期末～弥生時代前期の年代範囲が測定された（第6章第2節参照）。

**出土遺物** 1は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部が内傾し、端部が強く外側に肥厚する。肥厚した端部の直下に突帯を貼付し、その断面高は高い。その上には横長のO字状の二枚貝による押圧が認められる。その下には二枚貝による条痕が横走する。

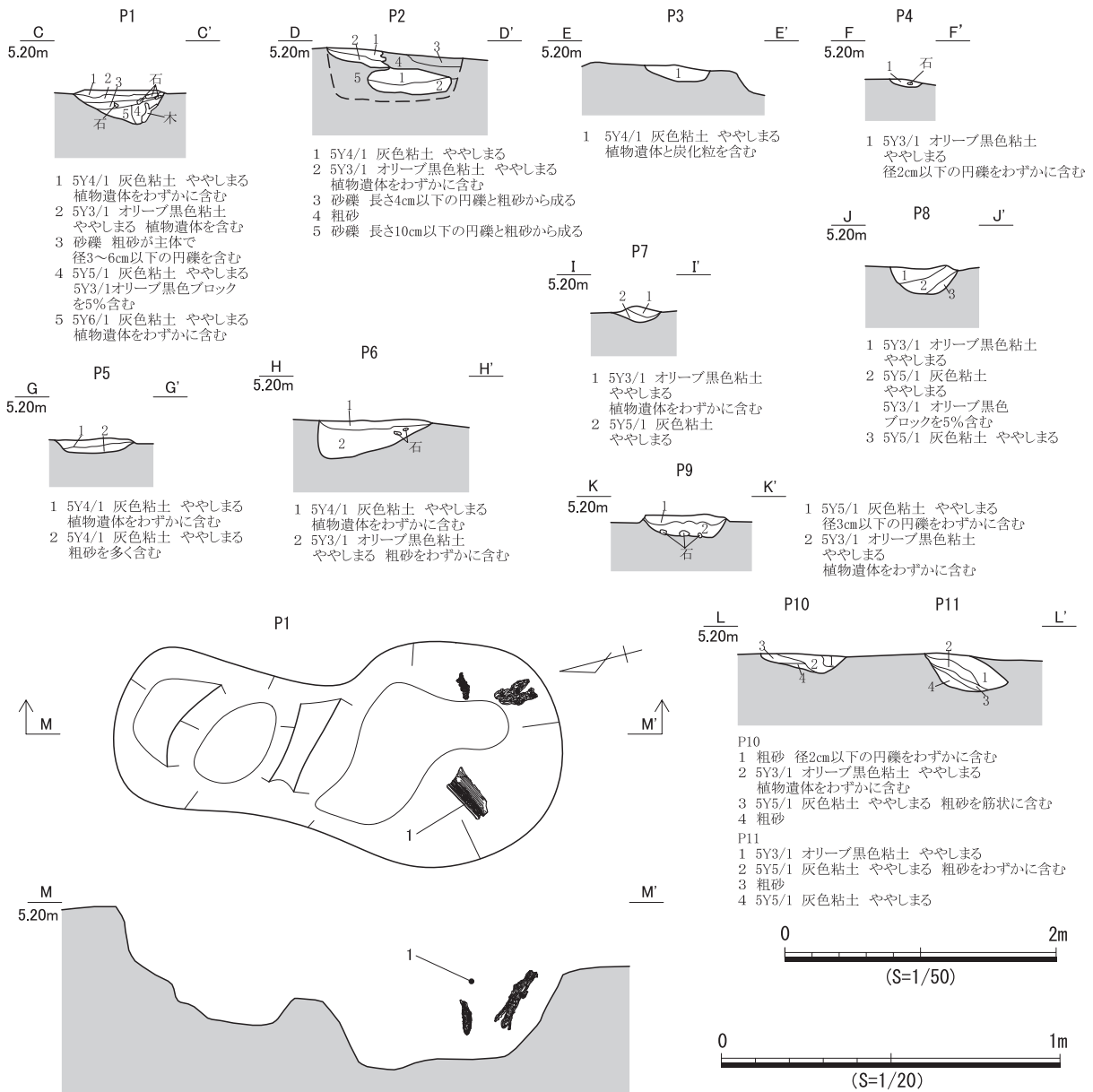


図9 SB446 遺構図（2）



**時期** 縄文時代晩期のNR010底面で検出したことや、出土遺物の時期、棒材の年代測定結果などから、縄文時代晩期後半と考えられる。

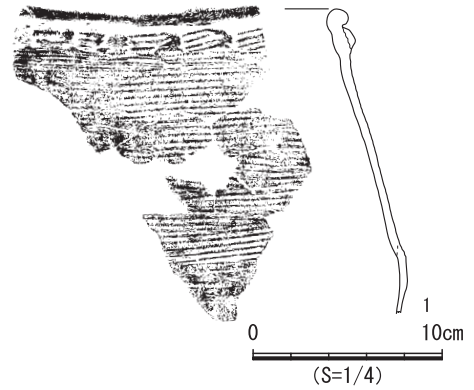


図10 SB446 遺物実測図

**SB447 (遺構：図11・12)**

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。NR011埋土掘削後に検出し、平面形は明瞭であった。SB446と同様に、小穴が環状に巡ることから、竪穴住居跡の可能性がある。

**形状** 中央にP11、その周辺に小穴10基が環状に位置する。

小穴間の外縁の距離は、南北長約3.5m、東西長約3.6mである。なお、検出面は南西側に傾斜しているが、これはNR013底面の傾斜である。

**床面** 明確な床面は検出できていない。VI層上面にて小穴を11基確認した。中央に位置するP11は長軸長1.01m、深さ0.21mであり、中央が窪む堆積である。P11周辺に位置するP1～P10は、長軸長約0.2m～0.4m、深さ約0.05m～0.2mであり、平面形は円形から楕円形を呈する。その埋土の大半は灰色シルトであり、成因は不明である。

**遺物出土状況** P1から土器1点、P11から土器3点が出土した。いずれも縄文土器片であるが、小片で摩滅が著しいため、図示していない。

**時期** 出土遺物の時期とSB446との共通性から、縄文時代晩期と考えられる。

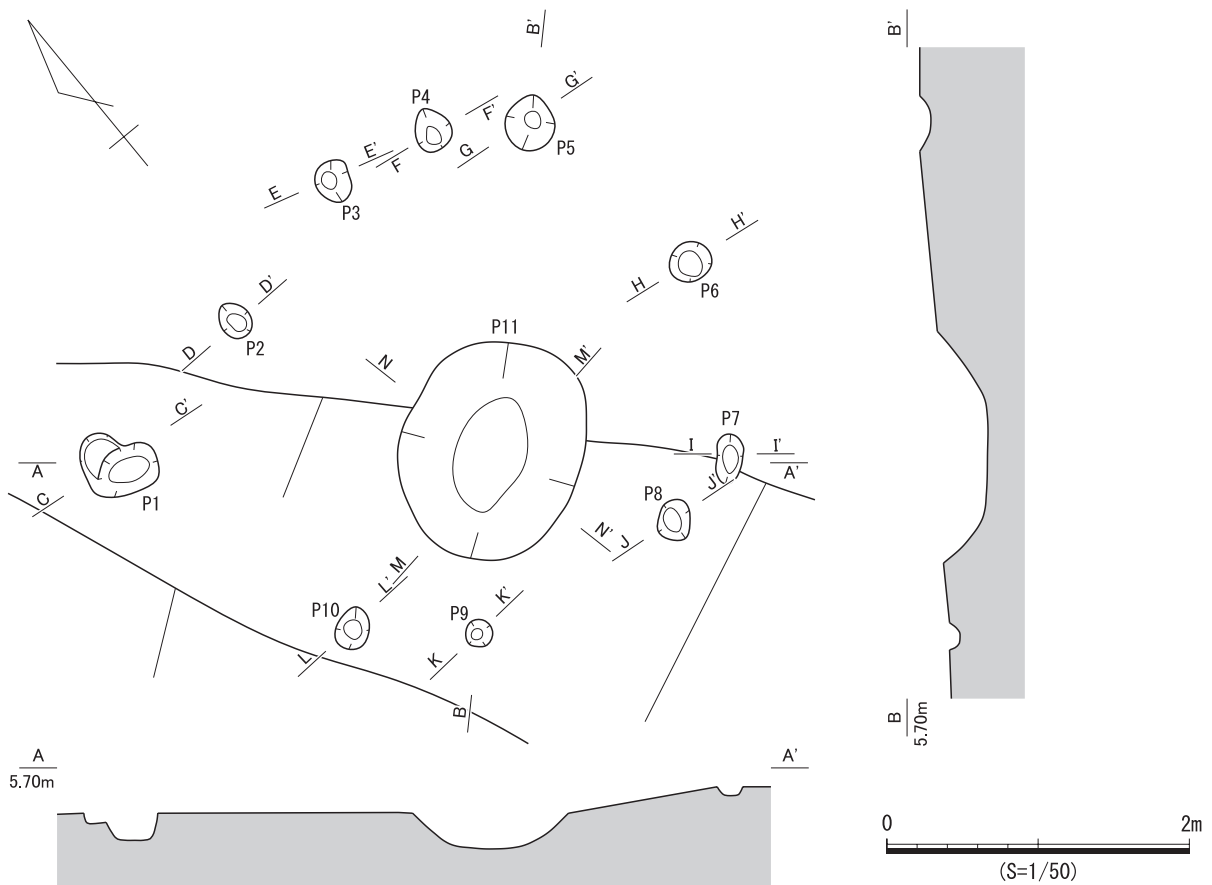


図11 SB447 遺構図(1)

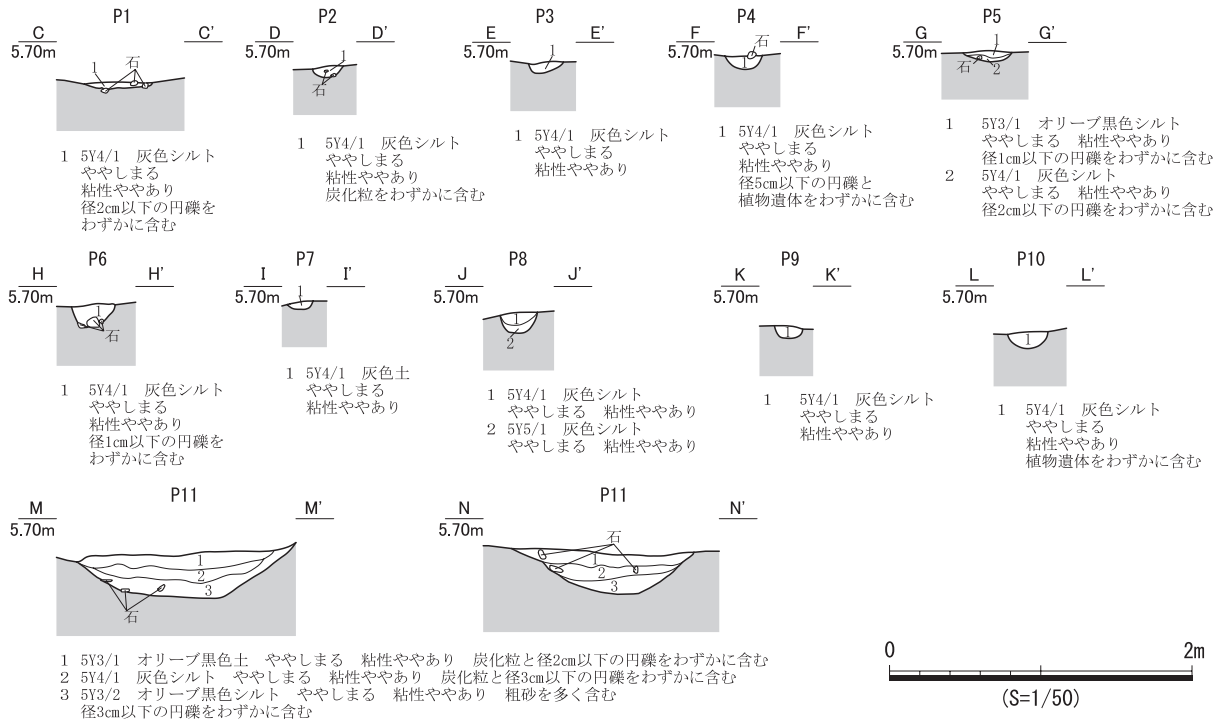


図 12 SB447 遺構図 (2)

## 2 単独柱穴

SP0941 (遺構：図 13、遺物：図 14)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。NR012の埋土掘削後にNR010埋土上面で検出し、平面形は明瞭であった。検出時に木材の上端がみえていたことから木棺の小口板の可能性を検討したが、対応する小穴は検出できなかったため、単独柱穴として報告する。

**形状** 不整形円形を呈し、長軸長0.20m、深さ0.20mである。壁面の傾斜は急であり、木材は遺構の中央に垂直に据えられていた。

**埋土** 2層に分層した。上層は灰色シルトであり、NR011に被覆されているI期の土坑と同一埋土である。下層はシルトであり、木材固定のための埋め戻し土と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から木製品1点が出土した。

**出土遺物** 2はその他の加工材である。表面には縦方向の加工痕が残り、裏面は分割後の加工がみられない。底面は斜めに切断してある。

**時期** 検出時の状況がI期の他の遺構と同じであるため、I期と考える。

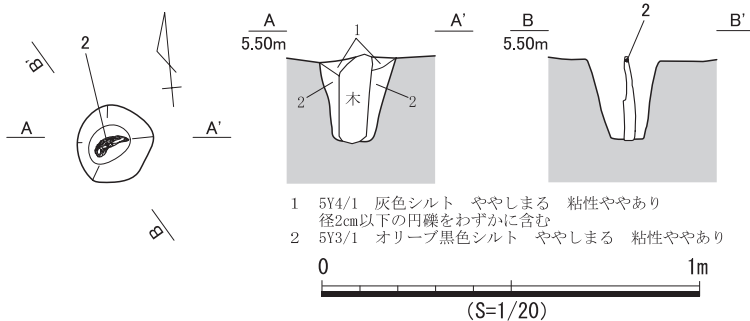


図 13 SP0941 遺構図

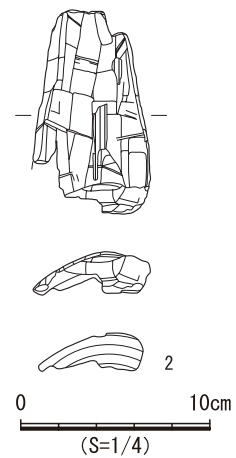


図 14 SP0941 遺物実測図

3 墓

方形周溝墓5基、木棺墓9基、土坑墓1基を検出した。以下、順に記載する。

(1) 方形周溝墓

SZ137 (遺構：図15、遺物：図16)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB342とSB367の床面で検出した。後出するSZ138とSZ141により周溝の一部が失われている。なお、東溝はSZ138と共有する可能性がある。

**方台部** SZ141によって南辺が失われている。東溝をSZ138と共有していると仮定すると、東西長は約2.7mとなる。周溝外縁の形状から、方台部の形状は南北に長い長方形である可能性が高い。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

**周溝** 確認できたのは北溝、西溝、南溝で、いずれも深さ約0.1～0.2mと浅い。断面形状は皿形で、周溝外縁はやや弧状を呈する。幅は約1.5m～1.7mで方台部の規模からすると、やや幅広である。隅部は北東部以外がやや浅くなる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器197点が出土した。各周溝の上層からは縄文時代晩期からⅡ期、Ⅵ期～Ⅶ期の土器片が出土したが、Ⅵ期～Ⅶ期の遺物は混入と考えられる。

**出土遺物** 3はⅠ期壺。頸部片で、削り出しの突帯をもつ。4と5はⅠ期深鉢の胴部片。外面に粗い条痕が認められる。

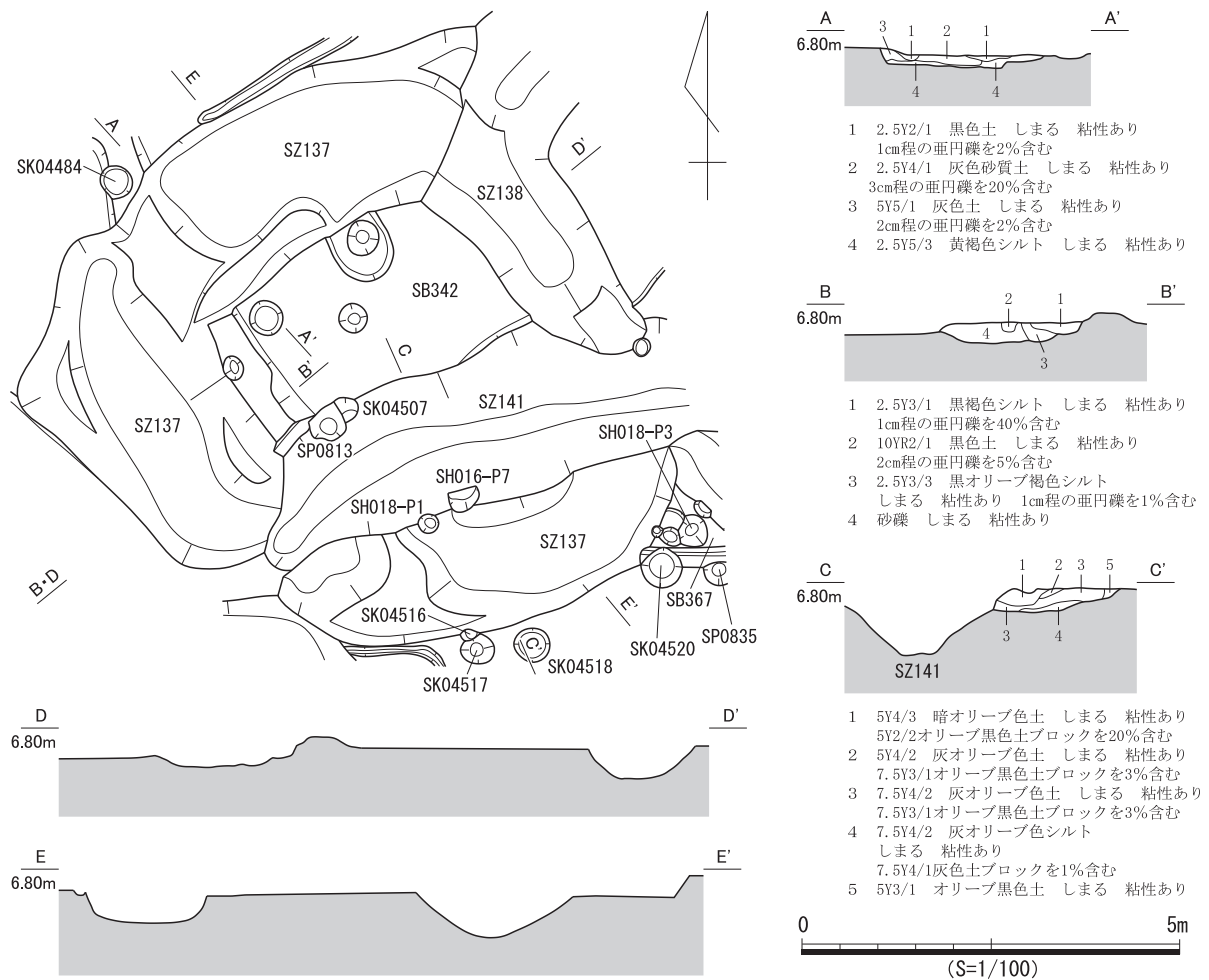


図15 SZ137 遺構図

**時期** 供献土器が出土しなかったため、出土遺物のみから時期の推定は困難である。一方、遺構の重複関係では、I期のSZ138に切られるか、もしくは同時に存在する。そのため、本遺構はI期の可能性がある。



図16 SZ137 遺物実測図

**SZ138 (遺構：図18、遺物：図17)**

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB342、SB361、SB367、SB374の床面で検出した。南西溝はSZ137の東溝を切っていると判断したが、共有している可能性もある。また、東隅部はSZ139に、南隅部周辺はSZ141に切られている。

**方台部** 規模は北西-南東長約6.5m、北東-南西長約5.5mであり、平面形は北西-南東に長い長方形である。各辺とも直線的だが、南西辺のみやや南側に向かって広がる。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

**周溝** 北隅部の周溝が途切れ、V期のSZ133東溝南端が位置するものの、明確な重複関係は認められなかった。各周溝とも直線的で、幅が約1.5m~1.6mと均一である。深さは残りのよい北西溝で0.5mを超え、その断面形は逆台形状である。南西溝も逆台形状の断面形を呈する。北東溝と南東溝は深さ約0.2mと他の周溝より浅く、底面が丸く壁面の傾斜が緩やかである。埋土は4~7層に分層でき、南西溝の上層ではブロック土の堆積が顕著であった。

**遺物出土状況** 埋土中から土器375点、石器類1点が出土した。各周溝の上層から縄文時代晩期~I期、V期~VII期の土器片が出土したが、V期~VII期のものは混入と考えられる。また、北西溝の底面付近及び墳丘側の壁面裾から、I期壺(6)が3箇所に分かれて出土した。墳丘側からの転落の可能性があり、供献土器と考える。

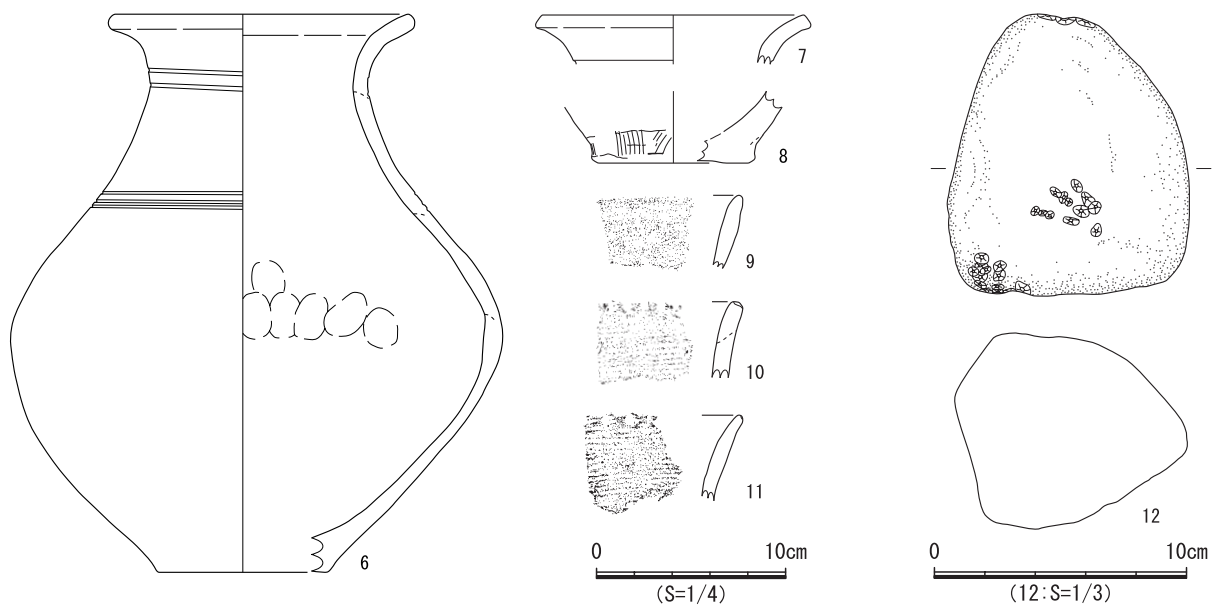


図17 SZ138 遺物実測図

**出土遺物** 6はI期壺。遠賀川系の壺で、口縁部が短く外反し、口頸部と頸胴部の境に太い沈線がそれぞれ2条、3条と施文される。胴部は頸胴部境からなだらかに膨らみ、肩部が強く張る。7はI期壺。口縁部が短く外反し、口頸部の境に削り出しの段をもつ。8はI期の壺底部。9は縄文時代晩期後半の鉢。10、11は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部がわずかに外反し、端部に押引きが認められる。12は叩石。垂円礫の中央と縁辺部に明瞭な敲打痕が残る。

**時期** 供献土器の可能性のある遺物の時期から、I期後半と考えられる。

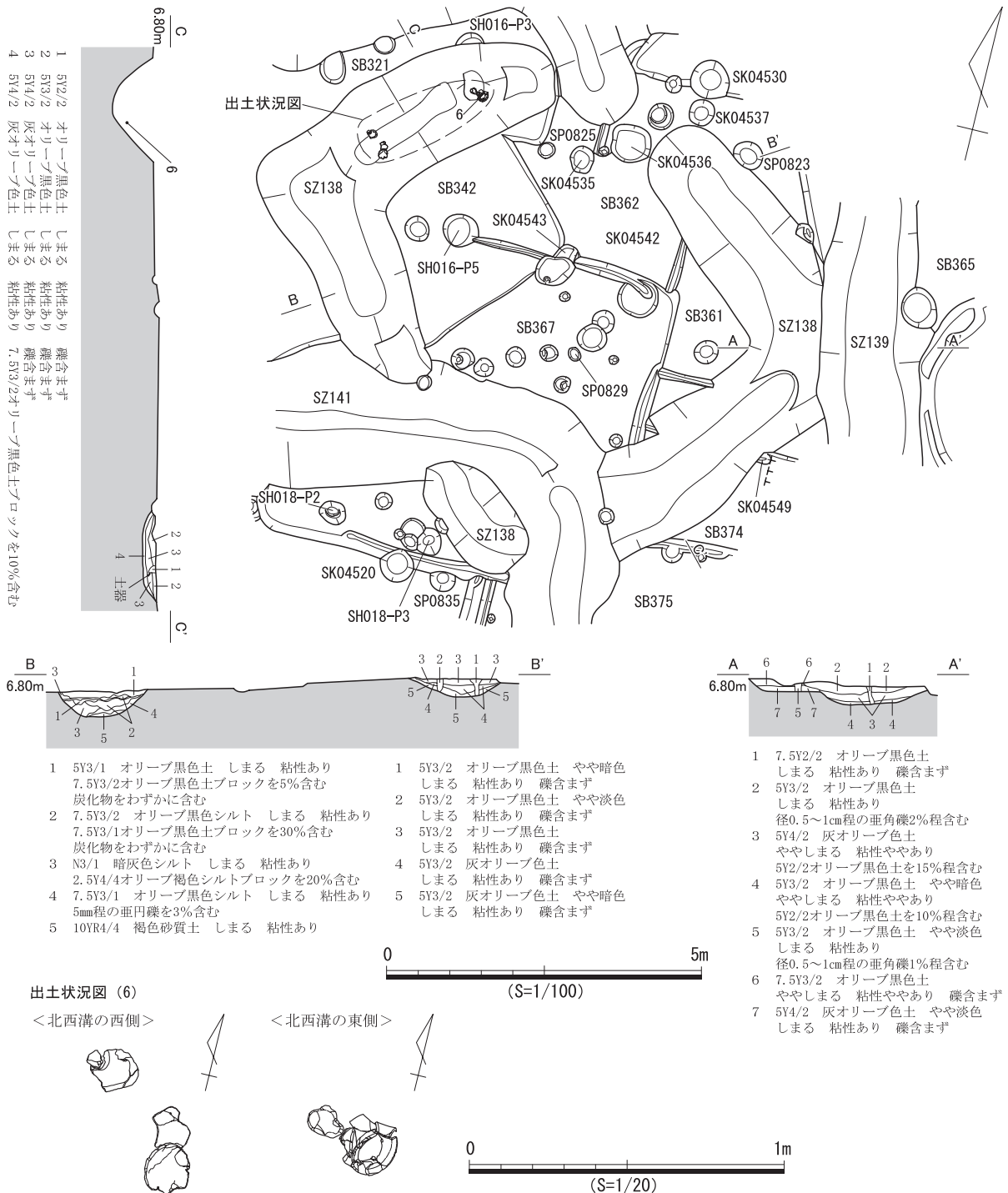


図 18 SZ138 遺構図

SZ145 (遺構：図19、遺物：図20)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB345～SB350、SB356～SB360、SB403、SB408、SB409の床面で検出した。

**方台部** 南北長約7.2m、東西長約6.8mである。全体形は隅丸長方形状であるが、後出する竪穴住居跡との重複が著しいためか、各辺とも不整形である。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

**周溝** 溝の幅は約1.0m～1.5mであるが、南溝の南壁面上方は幅広い平坦面を有する。深さは約0.2m～0.3mで、底面はほぼ平坦であるが、南東隅部で一段深くなる土坑状の落ち込みを確認した。北

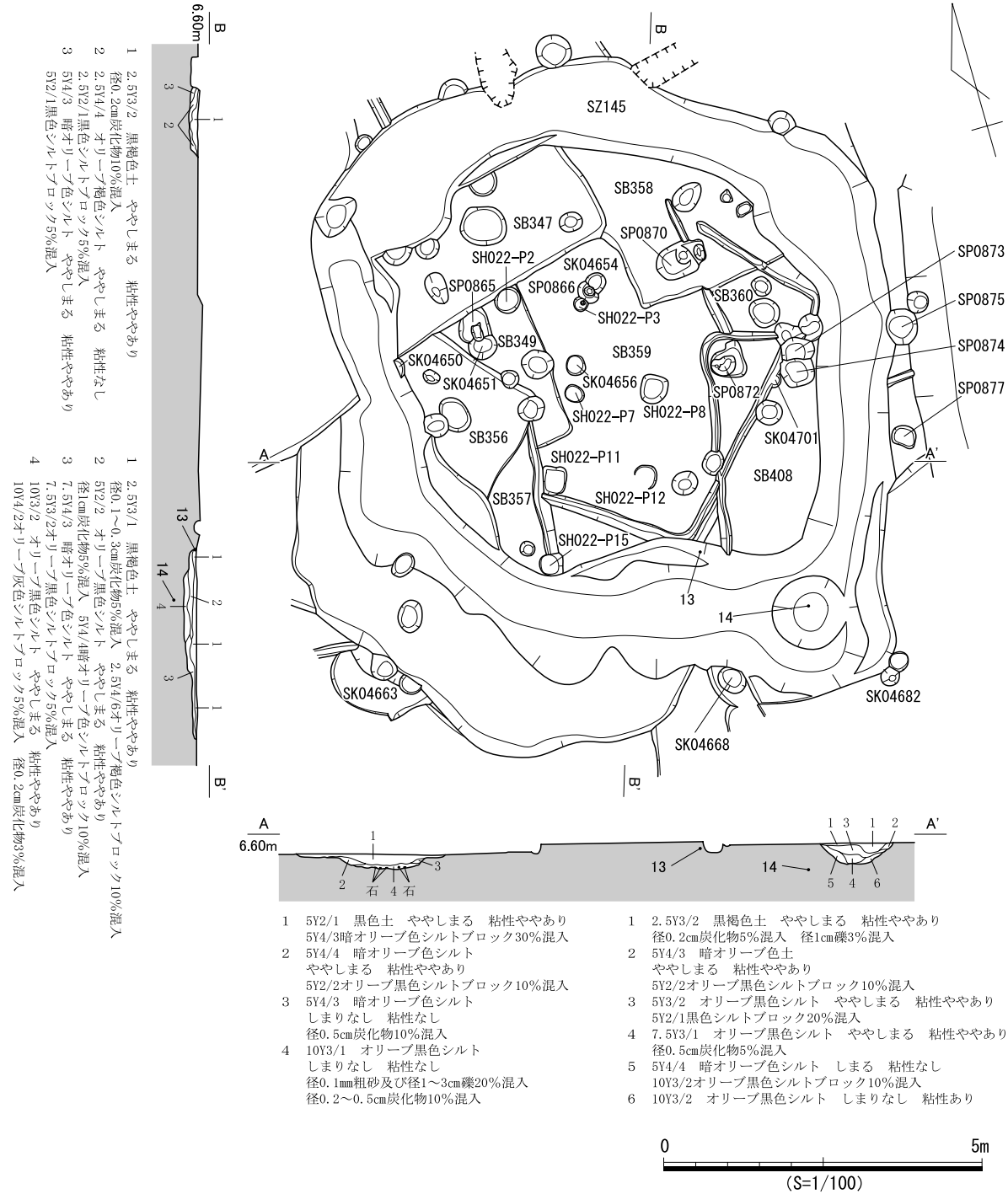


図19 SZ145 遺構図



溝は直線的だが、西溝から南溝にかけてやや丸みをもち、弧状を呈する。埋土は3～6層に分層でき、上層から下層までブロック土の混入が認められることから、壁面崩落土の堆積とともに人為堆積も想定される。

**遺物出土状況** 埋土中から土器289点が出土した。上層からはVI期～VII期の土器片が出土したが、東溝上層のVII期鉢(13)を除いて細片が多い。また、北東隅部の落ち込みからI期の壺(14)が出土し、底面付近から出土した残りのよい土器であるため、時期決定資料とした。

**出土遺物** 13はVI期～VII期の鉢E類。小型品で底部から口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部はやや尖り気味である。14はI期壺。小型品で口縁部が短く外反する。頸部に3本の細い沈線が認められる、頸部は内傾して、頸胴部の境に削り出しの段を形成する。段の上に3本の細い沈線を加え、さらに斜行する4本の細い沈線が認められる。

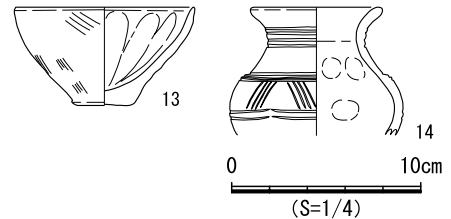


図20 SZ145 遺物実測図

**時期** 底面付近出土遺物の時期から、I期と考えられる。

SZ153 (遺構：図22、遺物：図21)

**検出状況** 西部東側中央に位置する。後出するSZ152により北溝と西溝の一部は滅失するが、コの字状に巡る溝を確認したため方形周溝墓と判断した。なお、南側は調査区域外に及ぶ。

**方台部** 南北長、東西長とも不明で、平面形は方形というよりも、不整形に近い形状を呈する。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

**周溝** 全形を確認できた東溝は幅約2.5mと広く、底面中央付近が窪む。断面形は底面が平坦な逆台形であり、10層に分層した。壁面に沿う堆積や底面直上のブロック土を含む堆積から、当初は壁面崩落により埋没したと考えられる。また、上層の壁面際にもブロック土が堆積することから、壁面が継続して崩落しつつ自然に埋没していったと考えられる。西溝と北溝はSZ152に大きく削平されており、埋土もほとんど残っていない。

**遺物出土状況** 埋土中から土器251点、石器類1点が出土した。土器はI期のものと少量の摩耗したV期～VI期の破片である。I期の土器は壁面沿いから底面付近にかけて出土しており、東溝から壺(16)が出土した。

**出土遺物** 15はI期壺口縁部。口縁部が短く外反して、口頸部の境に削り出しの段を形成する。16は小型のI期壺胴部。胴部が強く膨らみ、頸胴部の境に沈線が認められる。17はI期後半の壺胴部。頸胴部の境に多条の太い沈線が認められる。18はI期壺胴部。やや突出気味の底部から胴部が強く

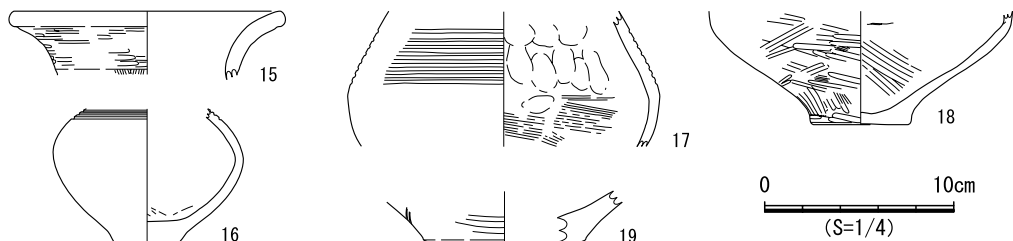


図21 SZ153 遺物実測図

膨らむ。19はI期壺底部。側縁に羽状にみえる文様が認められる。

**時期** 出土遺物の時期とIV期のSZ152に先行することから、I期と考えられる。

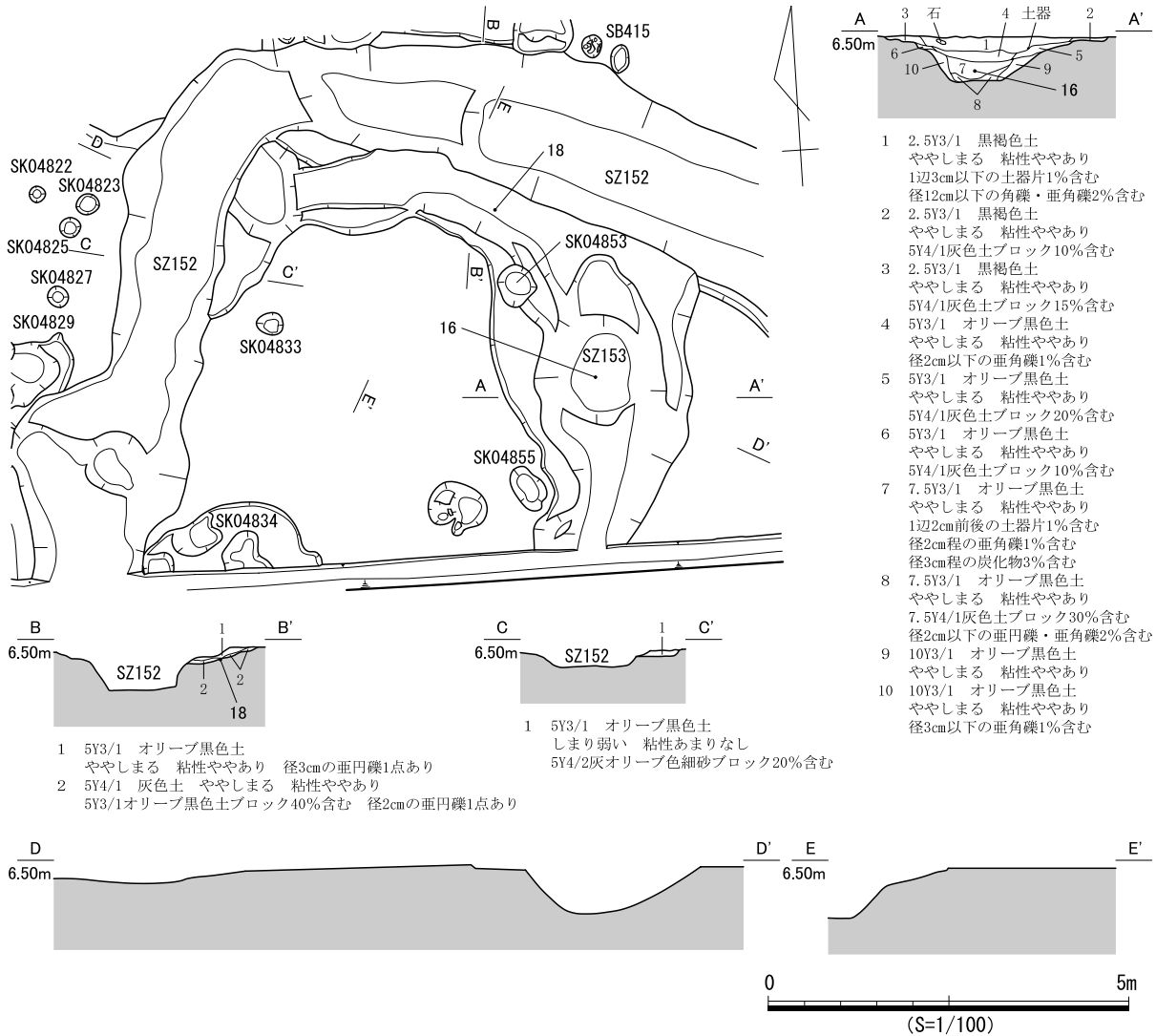


図22 SZ153 遺構図

SZ154 (遺構：図24、遺物：図23)

**検出状況** 西部東側中央に位置し、SB425、SB427、SB429～433、SB435～437床面で検出した。2条の溝が方形の二辺に対応する位置で検出でき、その底面からI期の供献土器が出土したため方形周溝墓と判断した。なお、南溝の平面形は明瞭であったが、東溝はSZ150に切られているためか不明瞭であった。

**方台部** 全体の形状は不明であるが、南辺と東辺は丸みを帯びている。なお、墳丘と主体部は確認できなかった。

**周溝** 南溝は長さ約7.0m、幅約1.2mで、断面形はV字形である。西側は深さ約0.5mと深く、壁面傾斜は急である。東側では深さが約0.3mと浅くなり、壁面傾斜は緩やかとなる。東溝はSZ150に切られているため、全形は不明である。南溝は3～4層に分層した。埋土は中央が窪む堆積であることから自然堆積と考えられるが、1層のみブロック土が含まれVI期の土器も出土したことから、付近

の整地の際に上部のみ埋め戻している可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器170点が出土した。土器は上層から少量の摩耗したVI期の破片が出土し、東側の底面直上から口縁部を西に向けて横位でI期壺(20)が出土した。出土状況から供献土器の可能性はある。

**出土遺物** 20はI期壺。小型品で完形品。口縁部が短く外反して、端部は外傾する平坦面を形成する。胴部は肩部が強く張り、底部が突出する。口頸部、頸胴部の境界にそれぞれ1条、4条の太い沈線を施文する。

**時期** 供献土器の可能性のある遺物の時期から、I期と考えられる。

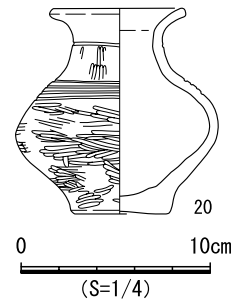
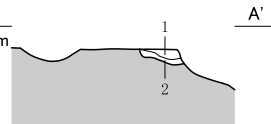
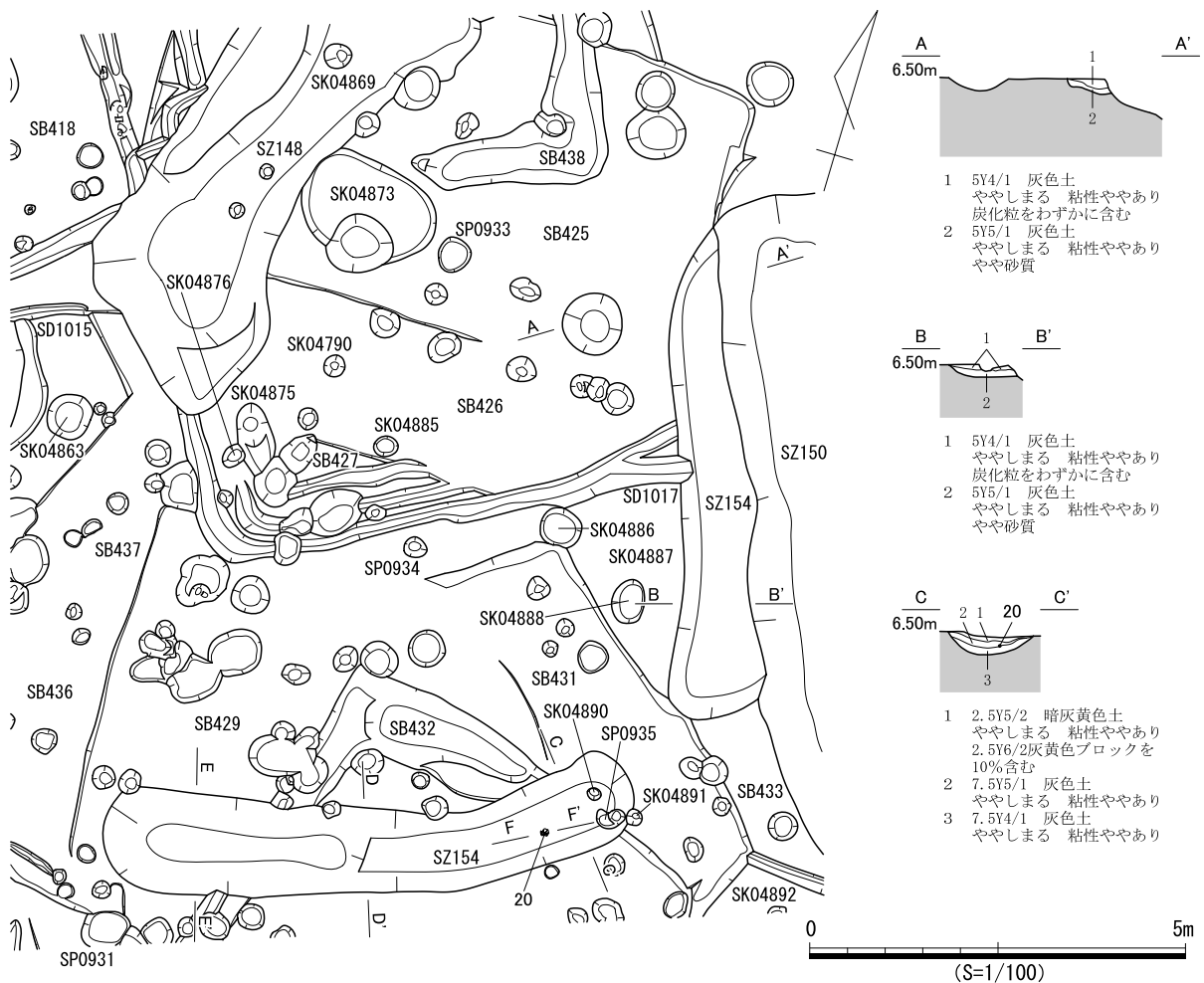
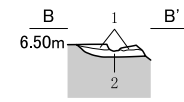


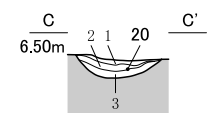
図23 SZ154 遺物実測図



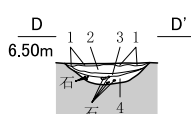
- 1 5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
炭化粒をわずかに含む
- 2 5Y5/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
やや砂質



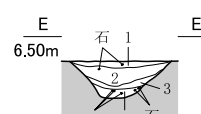
- 1 5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
炭化粒をわずかに含む
- 2 5Y5/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
やや砂質



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 2 5Y6/2 灰黄色ブロックを  
10%含む
- 2 7.5Y5/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 3 7.5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 2 5Y6/2 灰黄色ブロックを10%含む
- 2 7.5Y5/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 3 7.5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 4 7.5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
径4cm以下の亜円礫を含む



- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 2 5Y6/2 灰黄色ブロックを10%含む
- 2 7.5Y5/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 3 7.5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり
- 4 7.5Y4/1 灰色土  
ややしまる 粘性ややあり  
径4cm以下の亜円礫を含む

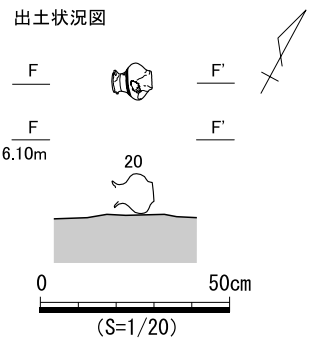


図24 SZ154 遺構図

(2) 木棺墓

木棺墓は底板と側板、小口板が残存している2基 (SZ155、SZ156) と、底板が残存していない7基 (SZ157～163) の、合計9基を検出した。前者は掘形短辺に溝状もしくは楕円形状の掘り込み (いわ

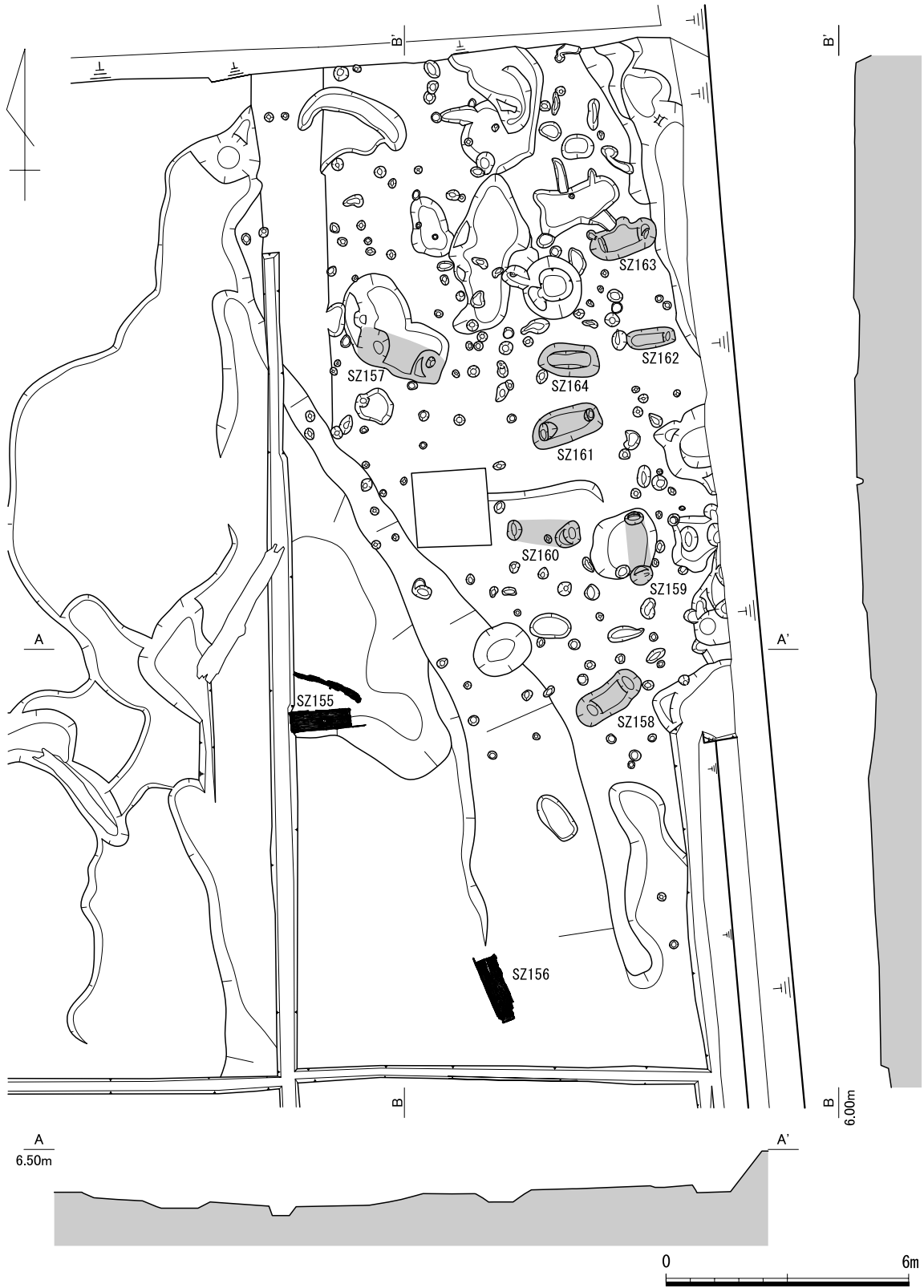


図 25 木棺墓・土坑墓位置図

(S=1/150)

ゆる小口穴)を設けている。後者は棺材がほとんど残存していなかったが、小口穴を検出したことから木棺墓、あるいは木棺墓の可能性のある土坑と考えた。その分布は遺跡の西部西側南寄りにまとまる(図25)。また、SZ155とSZ156は他の木棺墓より標高が低い位置に構築されたため、今日まで棺材が残存したと考えられる。

なお、SZ157、SZ158、SZ160を除く遺構は、埋土中の微細な遺物を検出するために遺構埋土をすべて持ち帰り、5mmメッシュの洗浄カゴを用いて水洗選別を行った。

**SZ155 (遺構：図26～29、遺物：図30・31)**

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011底面にて検出した。調査区中央に設定した排水用トレンチをNR011調査時に再掘削したところ、側板の木口面を確認し木棺の存在が明らかとなった。本遺構の掘形は図26A-A'の14層上面で確認しており、縄文時代晩期のNR010埋土上面を掘削して構築されている。また、トレンチ掘削により掘形西側の平面形は不明であるが、少なくともA-A'ラインまでは掘形が及んでいない。トレンチの断面で木棺の存在が判明したため、棺材の上方から平面精査を行った。側板や小口板の上端が見えた状態が図26であるが、木棺の周辺にはNR011底面の凹凸が確認できたのみで、棺材に伴う掘形は確認できなかった。その後、棺材周辺を砂礫層(A-A'14層)上面まで掘削すると、棺材南側から東側にかけて明確な掘形を検出した。

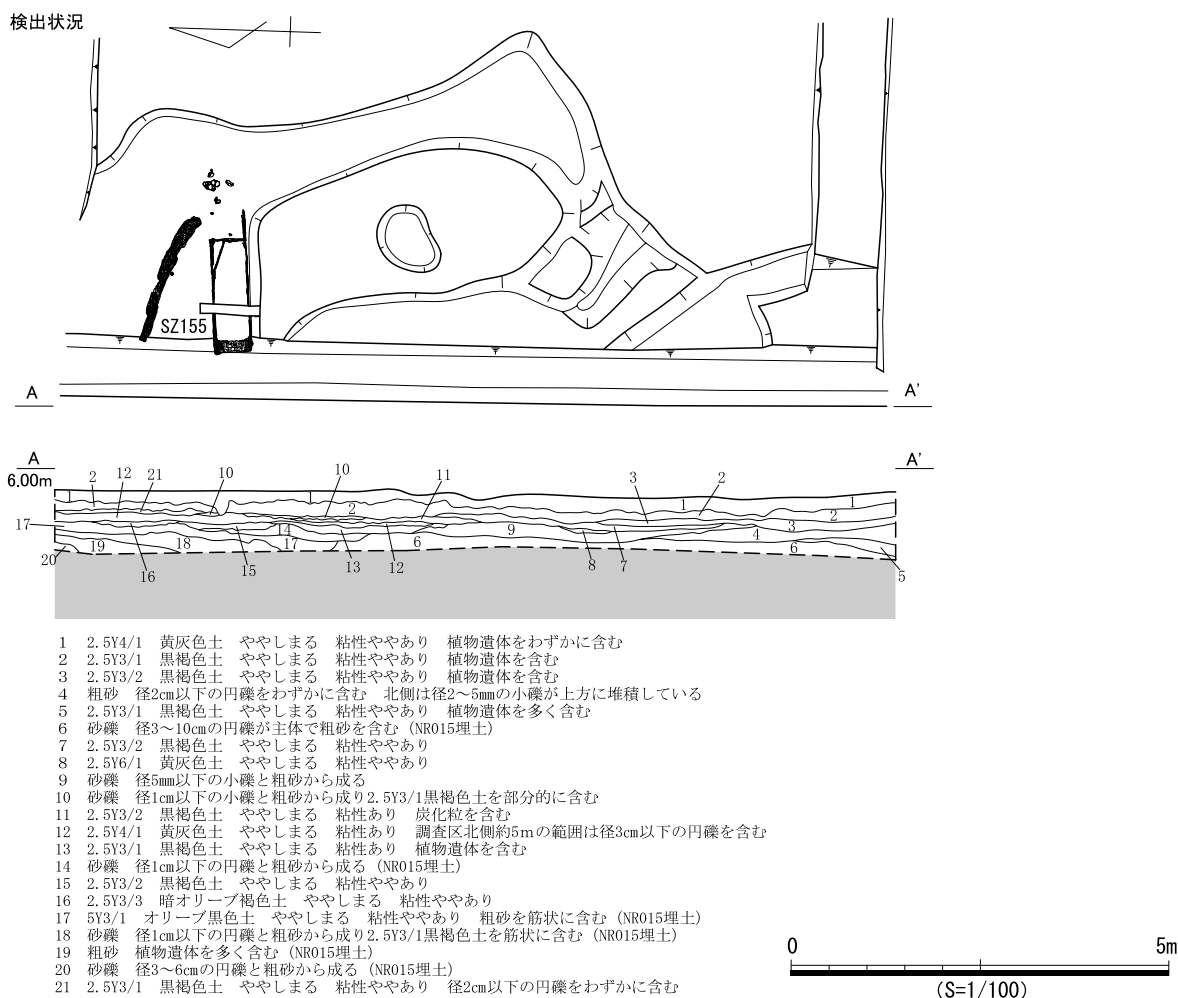


図26 SZ155 遺構図(1)

棺材検出状況

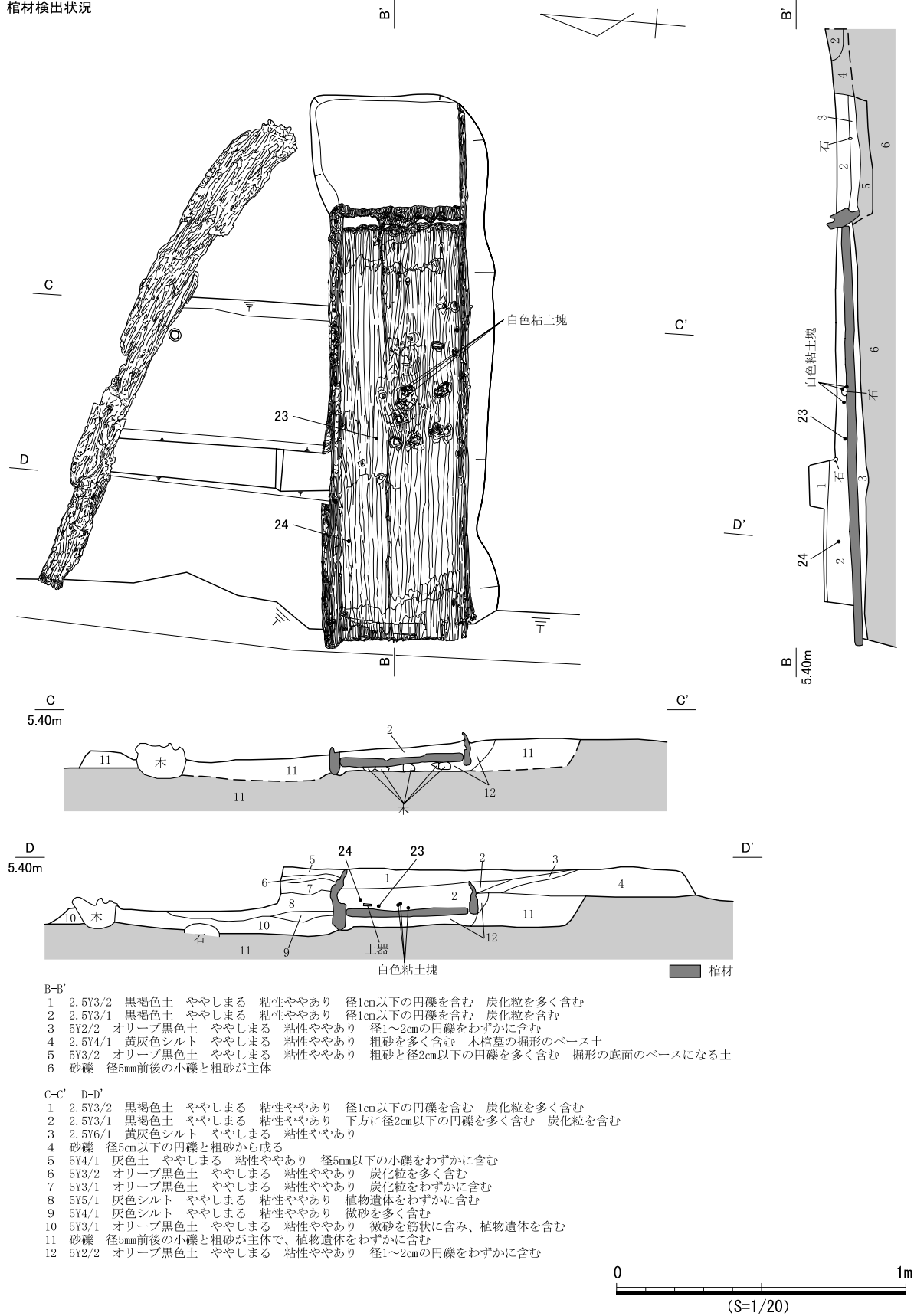


図 27 SZ155 遺構図 (2)



**形状** 掘形は平面形がやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸長1.84m以上、短軸長0.55m、深さ0.18mであり、北側板は掘形壁面に密接させている。木棺は組合せ式箱形木棺で、側板、小口板、底板が残存していた。木棺の内寸は、長さ1.46m、幅0.43mである。小口板は東側のみ残存しており、やや内傾して据えられている。また、側板は小口板を挟み込んで組まれている。2枚の側板は西側の木口面がそろっているのに対し、東側は北側板がほぼ小口板の外縁にあわせて切断されているが、南側板は木口板からさらに東へ延びる長い板を使用している。また、小口板と側板底面は、底板裏面よりも低い位置にある。底板は掘形底面からわずかに浮いており、その上面は東端のほうが西端に比べ約3cm高い。底板を取り上げると底板裏面に2本の棒材が密着しており、1本の棒材は掘形埋土中に

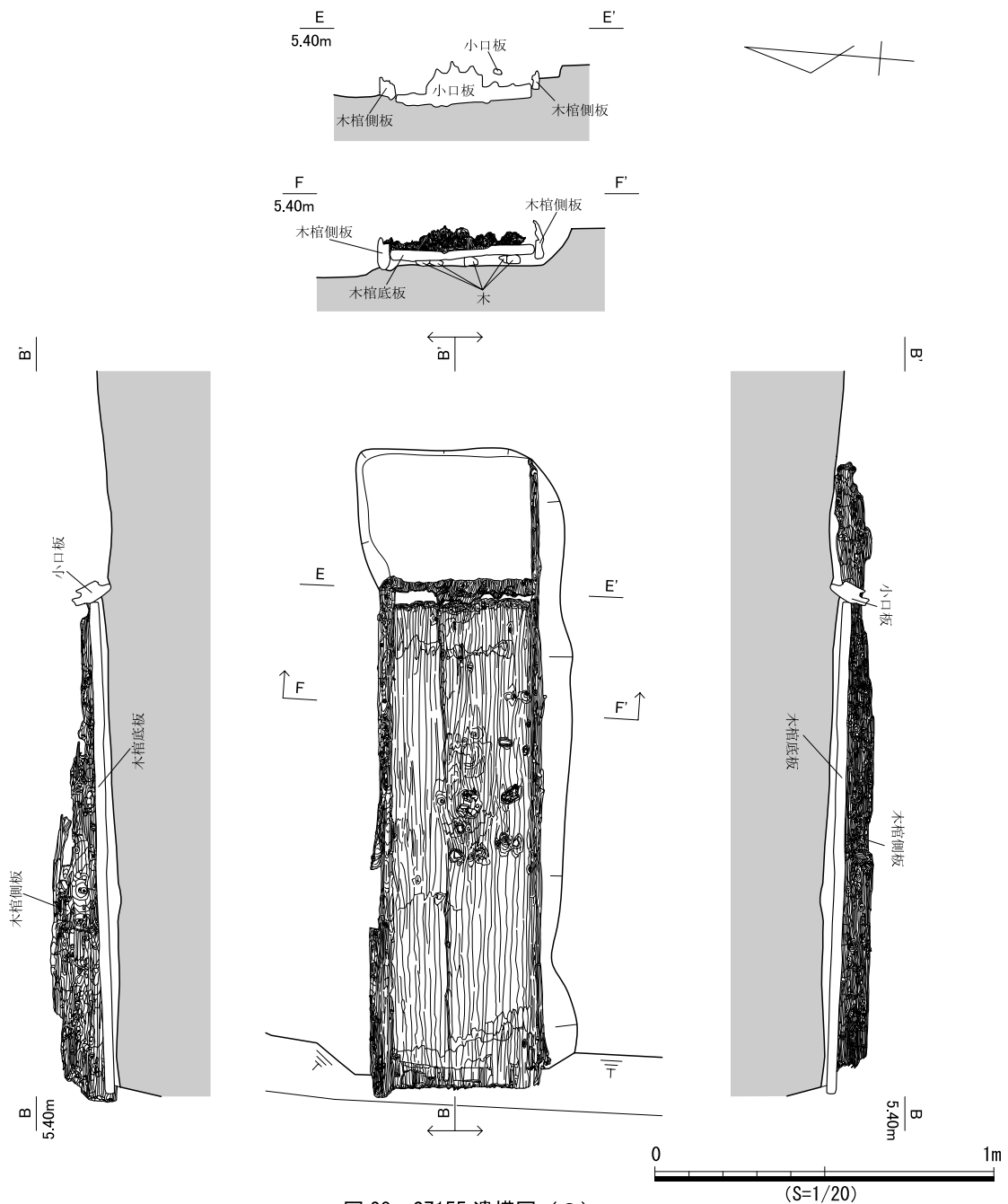


図 28 SZ155 遺構図 (3)

残っていた。底板裏面には3本の棒材の痕跡が明瞭に残っていたため、この棒材は底板設置前に掘形底面上に据えられた材と判断し、本来の位置に戻して図化したものが図29である。3本の棒材は東端をほぼそろえて据えられているが、平行しておらず、長さにも規則性がない。掘形上端の南辺は南側板から約15cm離れた位置で確認し、南東隅は南側板の東端にて屈曲している。北辺はトレンチを設定して確認したが、北側板の外縁には掘形の痕跡を見いだせなかったため、北側板は掘形壁面に密着させて据えられたと判断した。掘形底面はやや凹凸があり、北側板に伴う溝状の凹みが北壁に沿って確認できた。また、東小口板の東側の底面は、木棺底板が設置された箇所と比べてわずかに低い。

**埋土** 木棺内は2層に分層した。上下層ともに1cm以下の礫が多く含まれ、棺材を覆う土とほとんど区別ができなかった。木棺内外を通して設定した土層観察用畦の堆積状況から、木棺外部の堆積と内部のそれとは連続しており、NR011の流水のため掘形上面まで流失が及んでいると判断した。なお、北側板より北側の土層は、掘形の基盤となる旧流路(NR010)の埋土であり、木棺北側に図示した横位の樹木も旧流路内に伴う流木である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器89点、石器類14点、木製品2点(棺材除く)が出土した。埋土及び底板直上、掘形埋土等から、縄文時代晩期～I期の土器片が出土した。また、底板直上の中央付近にて小さな白色粘土塊が3つ出土した。

掘形完掘状況

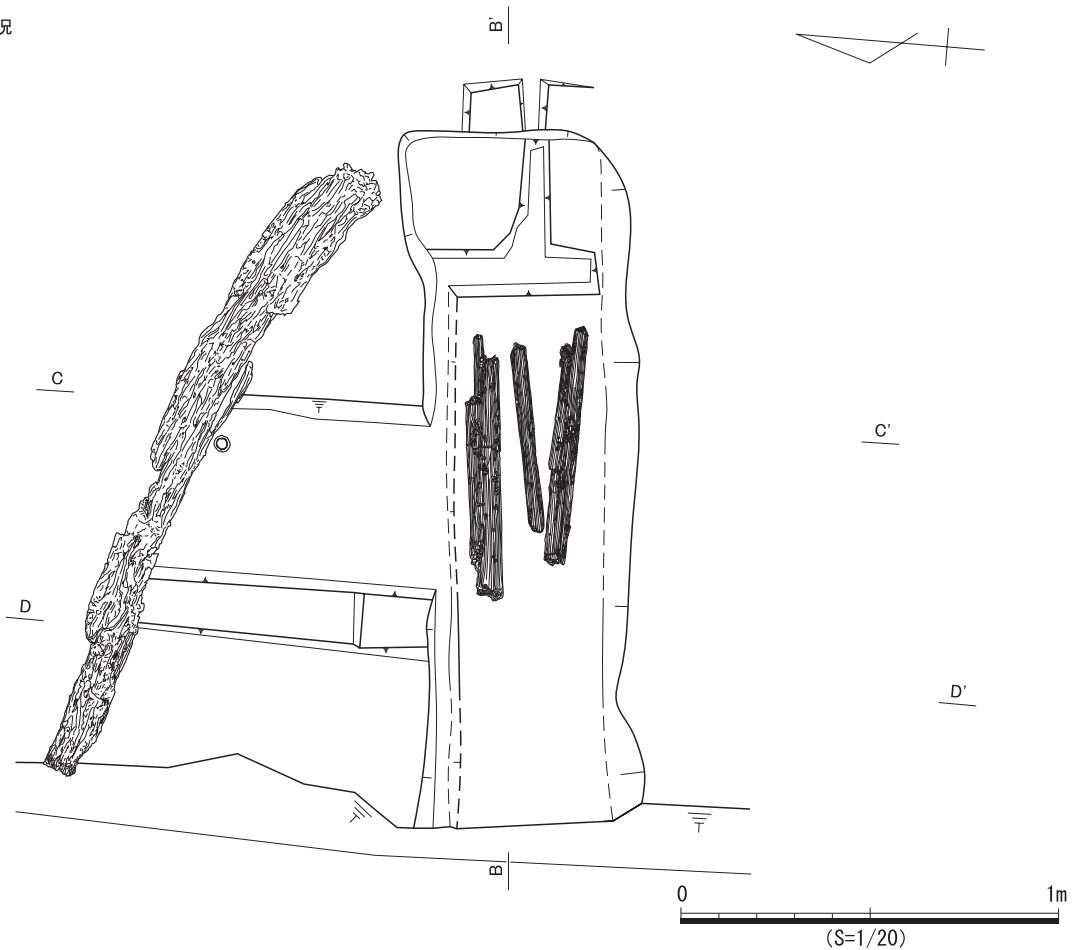


図29 SZ155 遺構図(4)

**出土遺物** 21はI期壺口縁部片。口縁部が外反し、端部に刺突文が認められる。22は縄文時代晩期後半の深鉢。磨耗の著しい胴部片で、わずかに条痕が認められる。23はチャート製のRFで、横長剥片を素材とし、右側面に細かい剥離が観察できる。24はチャート製の縦長剥片である。25は木棺東小口板で、底面には面がある。底板に接していた面は残りがよいものの、外面は腐食が著しい。26は木棺底板で、ほぼ完存している。表裏面は平坦で、上下面はほぼ垂直、側面は棺の外面側が斜めに切断されている。棺の内面側には黒色の付着物が多く観察でき、棺の外面側には縦方向の石斧による加工痕が残る。27～29は木棺底板の下に据えられた棒材であり、27は断面方形、28と29は一面のみが平坦である。30は28と同一破片の可能性が高い。31は北側板の東端から出土した残材。32は

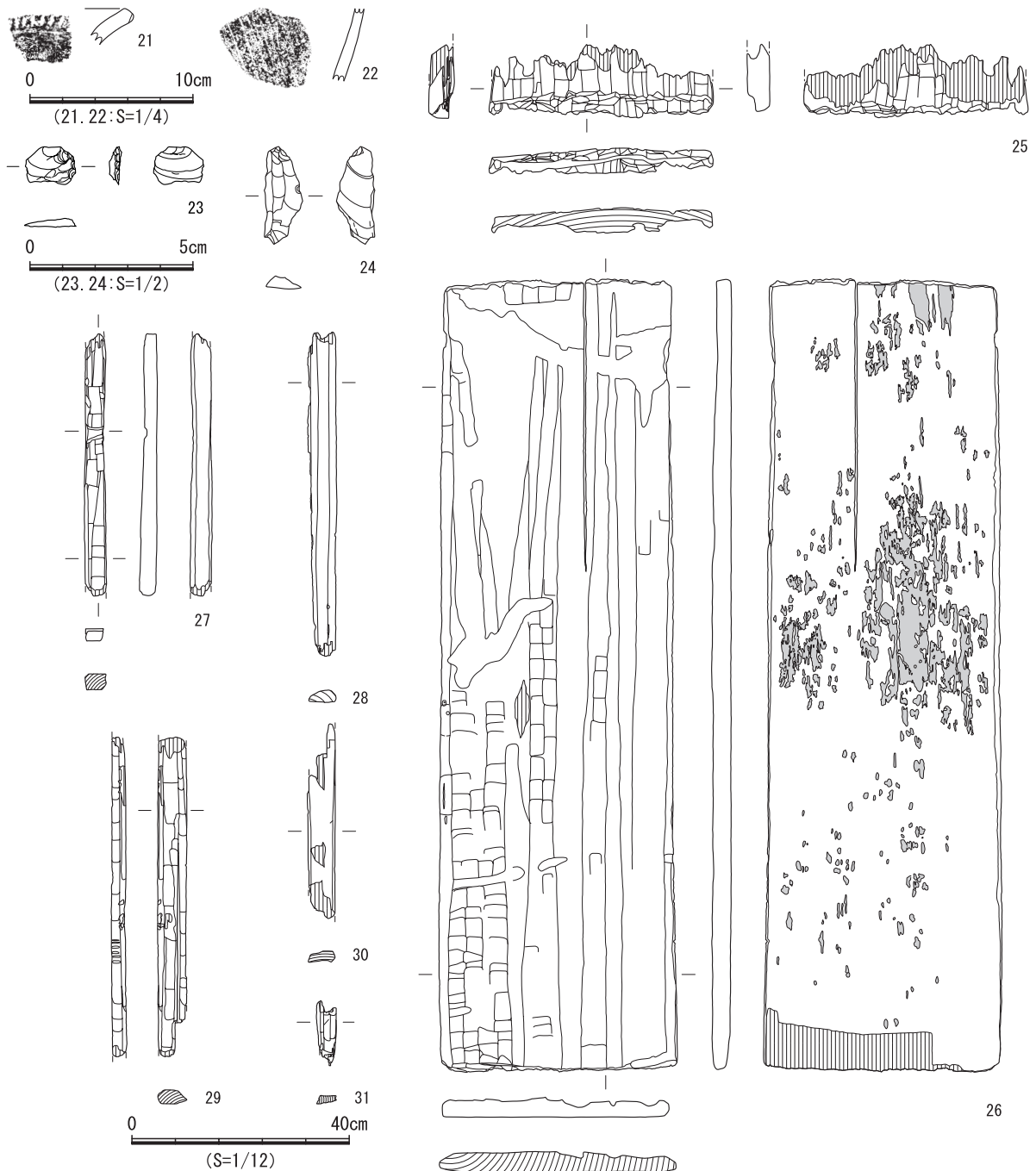


図30 SZ155 遺物実測図(1)

木棺北側板で、33は木棺南側板である。いずれも石斧による加工痕が残り、棺の底面に対応する面は平坦であり、棺の上方に対応する側面の腐食が著しい。

**時期** 棺内や掘形埋土から縄文時代晩期～I期の土器が出土していること、本遺構は縄文時代晩期のNR010埋土上面に構築され、IV期以前のNR011埋土に被覆されていること、小口板と底板の年代測定結果が縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の範囲であったこと（第6章第2節参照）などから、I期と考える。

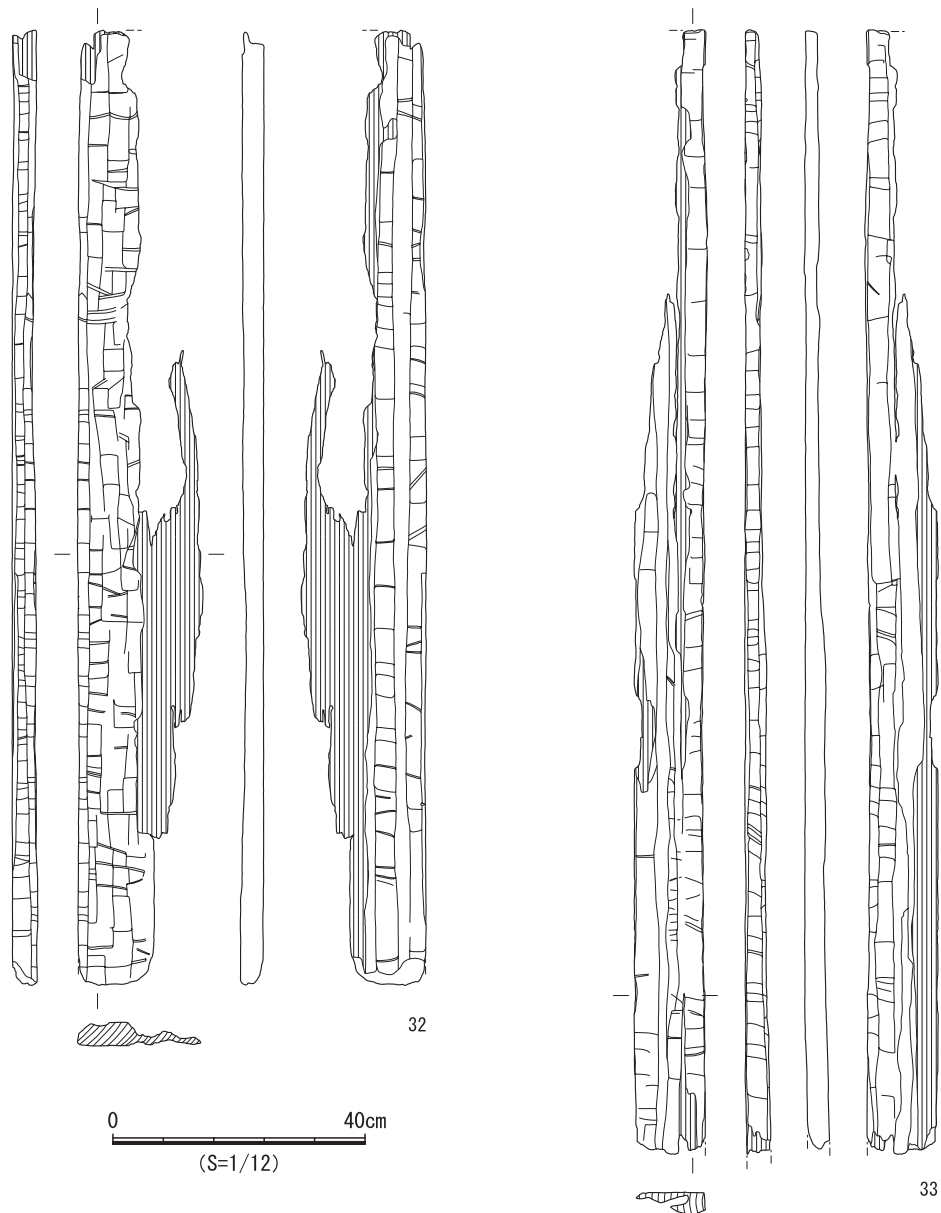


図31 SZ155 遺物実測図(2)

SZ156 (遺構：図32～35、遺物：図36・37)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR013埋土中もしくはその底面にて検出した。調査時には、本遺構直上に排土運搬用のベルトコンベアを配置していた。そして、その周辺のNR011埋土掘削中に棺材の存在に気づいたため、その周辺のみ方形に埋土を残して調査した。また、本遺構の南側では東

西方向にNR011埋土観察用畦と排水用トレンチを設置しており、本遺構の掘形は図32A-A'の11・12・14層が平面的に縞状に見える面から掘り込まれていることを確認した。

**形状** 掘形は平面形がやや不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸長1.87m、短軸長0.61m、深さ0.21mであり、西側板は掘形壁面に密接させている。木棺は組合せ式箱形木棺で、側板、小口板、底板が残存していた。木棺の内寸は、長さ1.56m、幅0.43mである。小口板は南北側とも残存して

検出状況

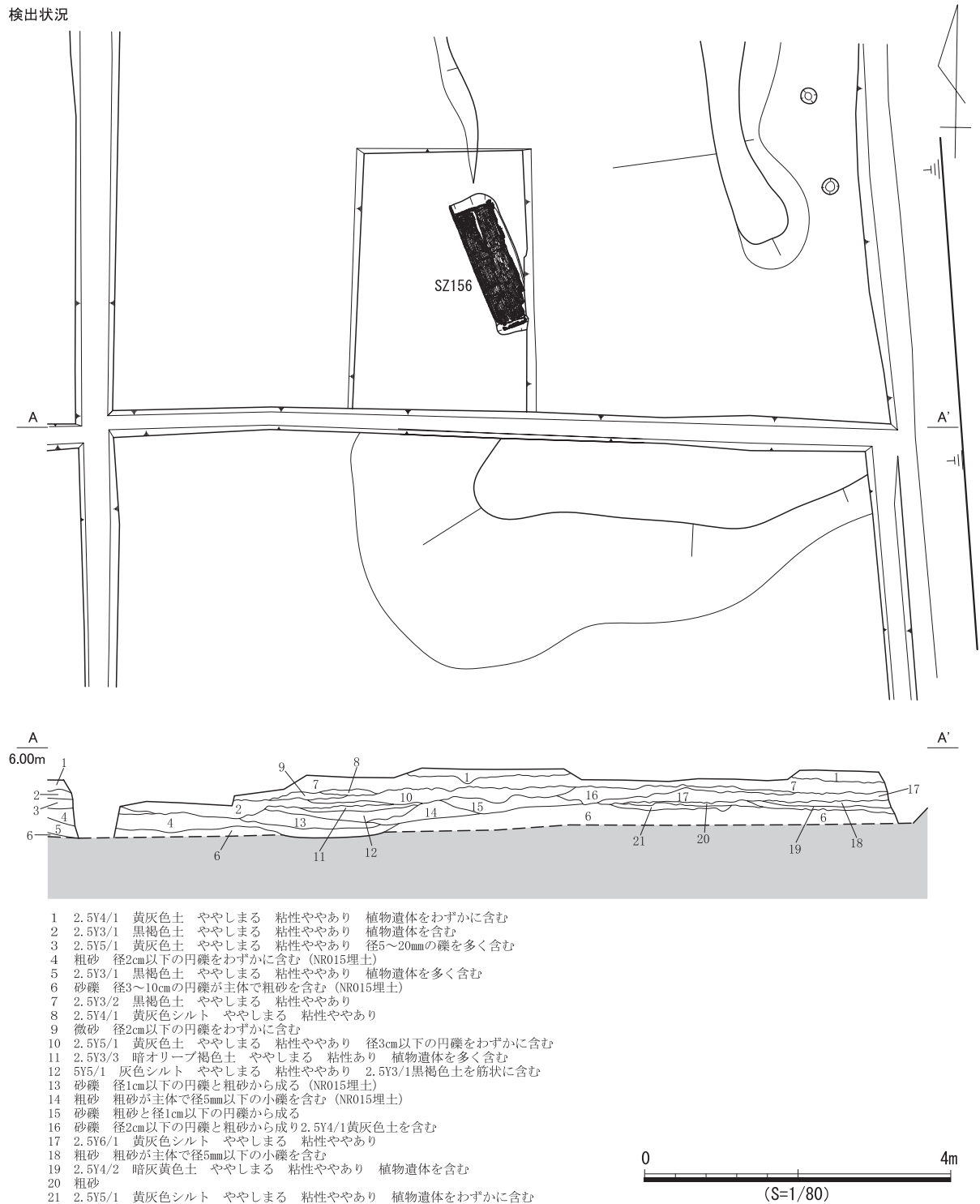


図32 SZ156遺構図(1)

おり、北側のものは深くほぼ垂直に立てられていたが、南側のものはやや斜めに浅く据えられていた。また、側板の南側は腐食のため不明であるが、北側は小口板を挟み込んで組まれている。また、東側板は北小口板から約3cm北へ、西側板は北小口板から約13cm北へそれぞれ延びている。また、小口

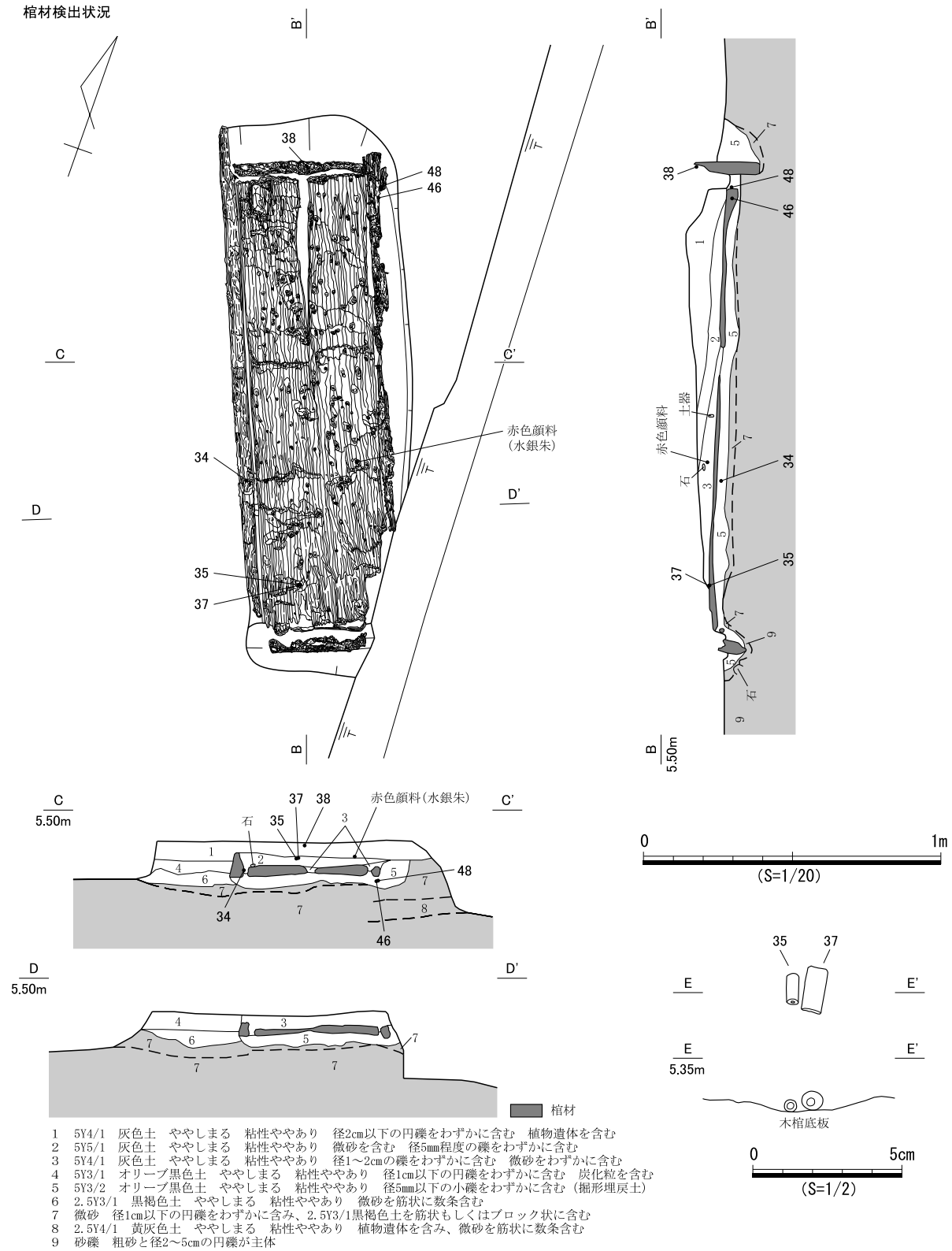


図 33 SZ156 遺構図 (2)



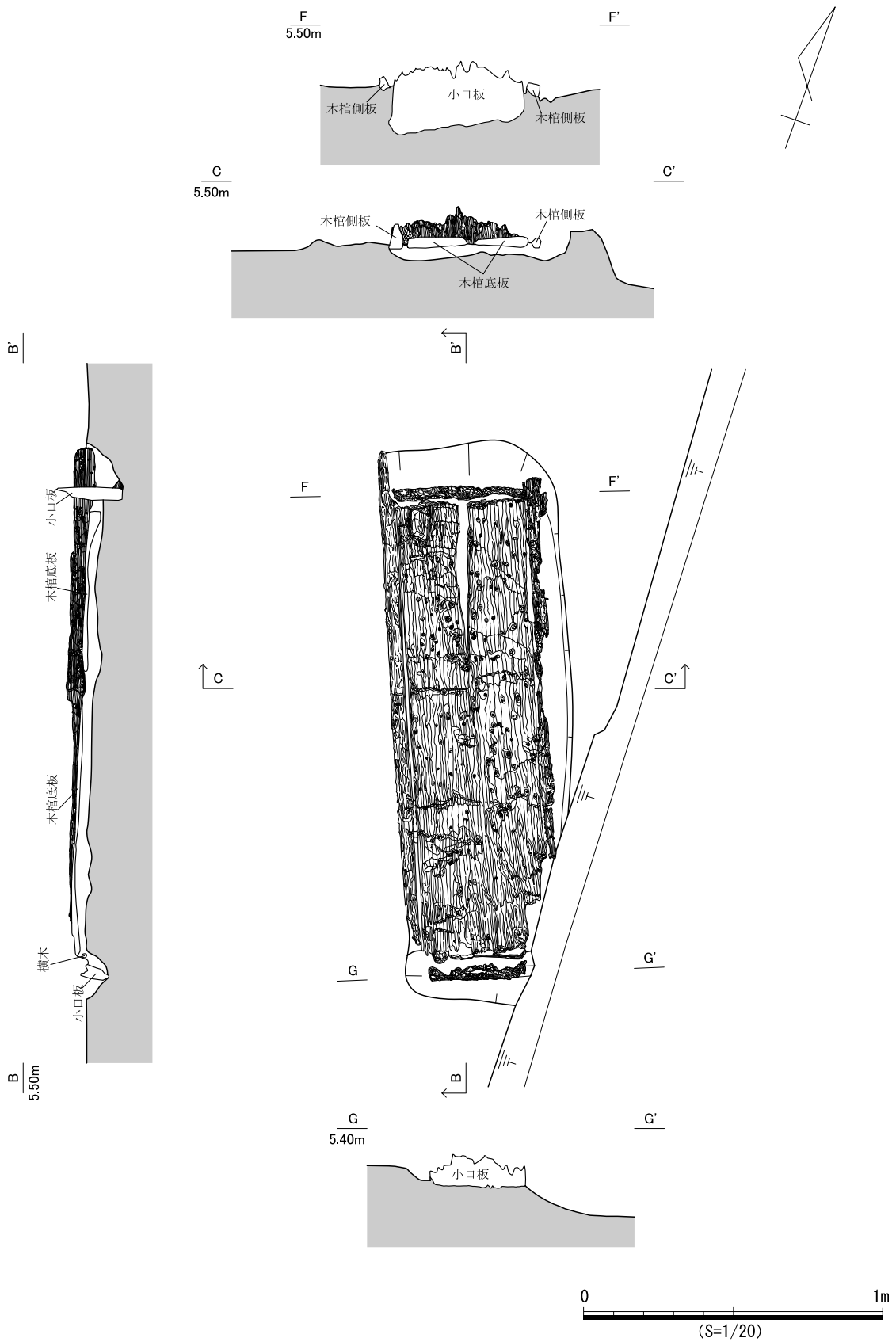


図34 SZ156 遺構図(3)

板の底面は底板裏面よりも低い位置にあるが、側板は西側板がほぼ同じ高さで、東側板が同じかやや低い位置にある。底板は掘形底面からわずかに浮いており、その上面は南端のほうが北端に比べ約5 cm高い。底板南端直下には、底板の短辺に平行する棒材が据えられていた。掘形上端は南辺、東辺、北辺が棺材から約0.15 m～0.30 m離れた位置で確認できた。西辺はトレンチを設定して確認したが、西側板の外縁には掘形の痕跡を見いだせなかったので、西側板は掘形壁面に密着させて据えられたと判断した。掘形底面はやや凹凸があり、南側より北側が低い。北小口穴は南壁がほぼ垂直、北壁が斜めに傾斜しており、北小口板は小口穴の南壁に接して据えられていた。

**埋土** 木棺内は3層に分層した。埋土は南から北へと下降する堆積層であり、管玉は3層に被覆され、赤色顔料は3層下方から出土した。管玉2個は底板直上にて並列して出土したことから原位置を保っている可能性が高く、3層は洪水等の堆積ではないと考えられる。また、2層が3層上に斜めに堆積していることは、蓋材が腐朽により北側から崩落した結果を反映している可能性もある。仮にそうだとすれば、2層は棺材を被覆していた盛土の可能性もある。1層は掘形上面を広く覆っている土で植物遺体を含むことから、流路埋土と判断した。

**遺物出土状況** 埋土中から土器21点、石器類13点、木製品7点（棺材除く）が出土した。底板直上の南側にて管玉2個（35・37）が南北方向を向いて並列して出土した。また、中央南寄りにて底板からわずかに浮いた状態でわずかな量の赤色顔料が出土した。この顔料は分析の結果、水銀朱であることが判明している（第6章第3節参照）。もう1点の管玉（36）は埋土の水洗選別時に確認でき、中央南東側の3層中からの出土である。土器片は縄文時代晩期～I期の小片であり、底板上や掘形埋土から散在して出土し、34は西側板直下の掘形埋土からの出土である。棺材を除く木製品はいずれも残材であり、掘形埋土や小口板や側板周辺から出土した。なお、残材の樹種は47を除き、側板や小口板と同様にスギであった。

**出土遺物** 34は口縁部が短く外反する甕の口縁部。胎土はI期に類似するので、I期甕と考えられる。35～37はいずれも緑色凝灰岩製の管玉で、穿孔は上下方向から穿たれている。38は木棺北小口板、

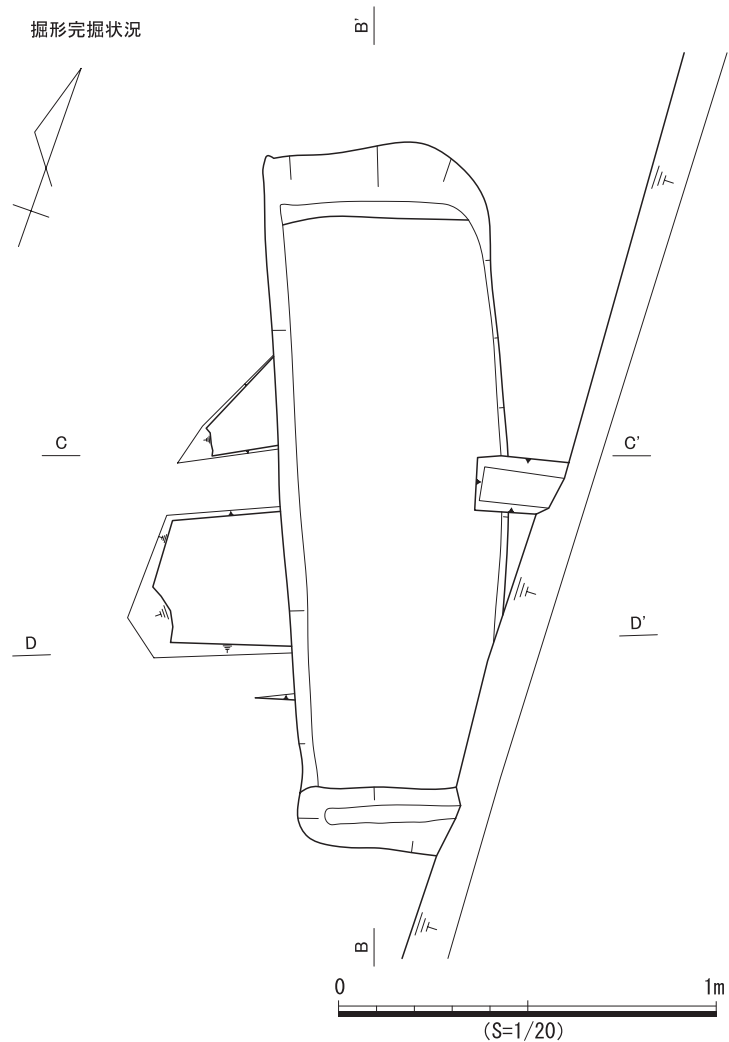


図35 SZ156 遺構図(4)

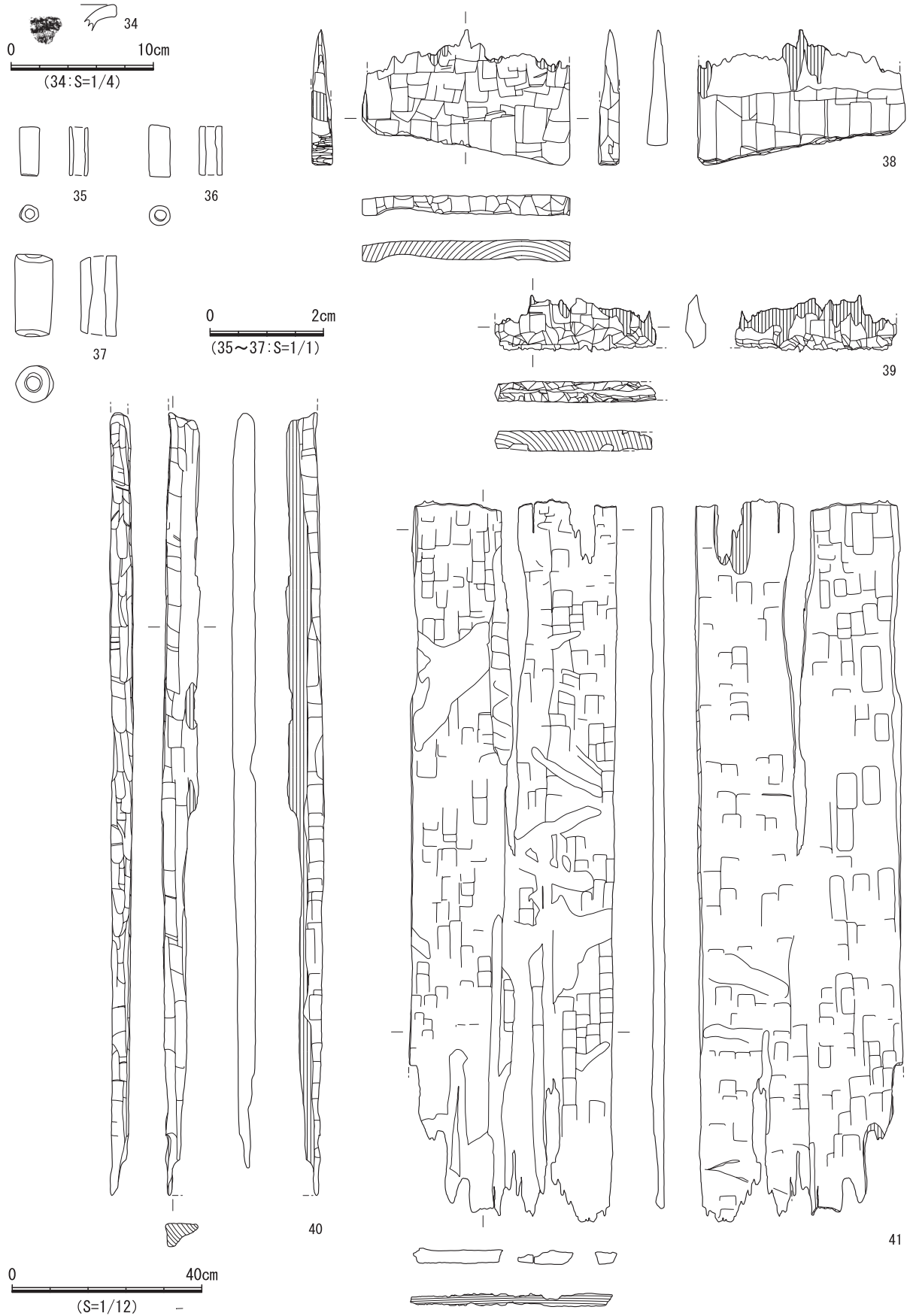


图 36 SZ156 遺物実測図 (1)

39は木棺南小口板で、38の底辺は側辺に対して斜めに切断してある。41は木棺底板で、表面に縦方向の石斧による加工痕が残る。40は木棺西側板で、42は木棺東側板である。いずれも石斧による加工痕が残り、棺の上方に対応する側面の腐食が著しい。43、46～48は残材であり、43は木棺東側板北端から、46と48は木棺底板下の掘形埋土から、47は北小口板外面の下端部からそれぞれ出土した。44は木棺底板直下で出土した棒材で、加工痕は観察できない。45は木棺西側板に接して出土した材であるが、側板に接合できなかったため、側板とは別材と判断した。

**時期** 棺内や掘形埋土から縄文時代晩期からI期の土器が出土していること、本遺構は縄文時代晩期のNR010埋土より上位で構築され、IV期以前のNR011埋土に被覆されていること、小口板と底板の年代測定結果が縄文時代晩期後葉～弥生時代前期の範囲であったこと（第6章第2節参照）などから、I期と考える。

SZ157（遺構：図38、遺物：図39）

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。NR012埋土掘削後にオリーブ黒色土が埋土の主体となる不整楕円形の土坑（SZ157-P1）を検出したが、その南側底部が一段深い窪みとなった。さらにその東側に重複して平面形が隅丸方形の土坑（SZ157-P2）を検出した。両土坑の下端には一段低い掘り込みがあり、その平面形や規模、掘り込み間の距離が、他の木棺墓の小口穴と類似するので、木棺墓の可能性があると考えた。

**形状** 検出時は不明瞭ながら2基の土坑が切りあう状況を判断した。このことから上部には別遺構が存在し、下部の木棺墓を破壊していると考えられる。両端の深い掘り込みの距離は中心間で1.26m

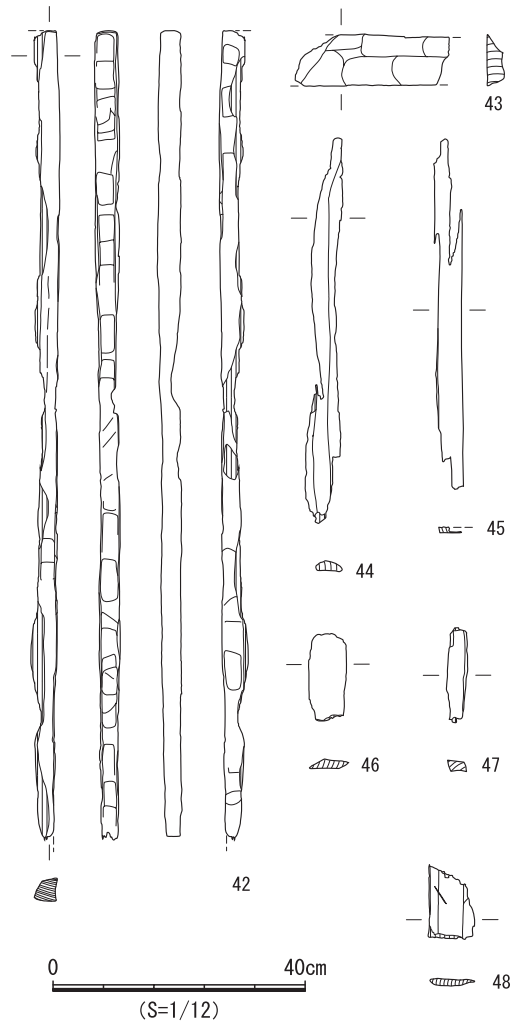
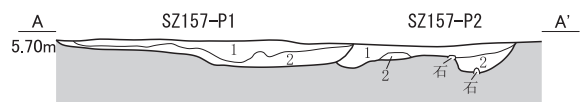
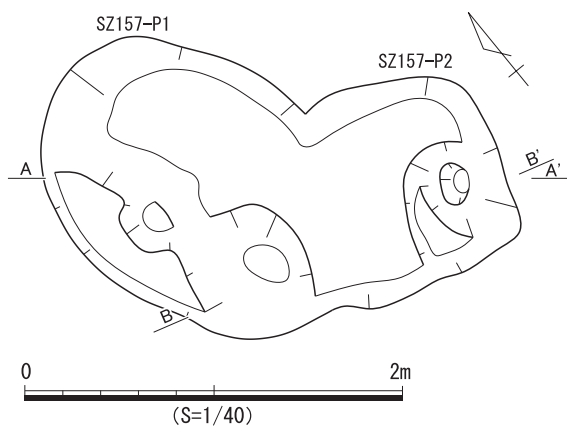


図37 SZ156 遺物実測図（2）



- SZ157-P1
- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3cm以下の円礫を含む
  - 2 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 径5cm以下の円礫を含む
- SZ157-P2
- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の円礫をわずかに含む
  - 2 5Y2/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり

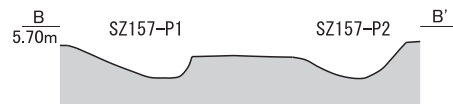


図38 SZ157 遺構図

であり、北西-南東方向に主軸をもつ。

**埋土** 上部遺構と合わせて2層に分層した。SZ157-P1埋土と、SZ157-P2の1層は上部遺構の埋土と考えられ、SZ157-P2の2層が木棺墓掘形の埋土である。

**遺物出土状況** 上部遺構も含めて、土器が4点出土した。いずれも小片である。

**出土遺物** 49は縄文時代晩期後半の深鉢。ケズリが認められる。

**時期** 出土遺物の時期から縄文時代晩期後半以降と考えられ、周辺の木棺墓がI期であるため、縄文時代晩期後半～I期と考える。

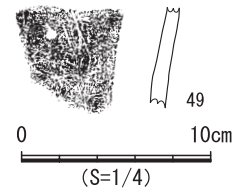


図 39 SZ157 遺物実測図

**SZ158 (遺構：図41、遺物：図40)**

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。平面形は不明瞭であった。

**形状** 長軸長2.58m、短軸長2.20mで、不整形を呈する。底面にて隅丸長方形を呈する土坑を検出したが、遺構の半割時に気づくことができず、上層の埋土と連続して掘削してしまった。そして、完掘後に両端に一段深い楕円形状の掘り込みがあり、他の木棺墓に共通することから、本遺構も木棺墓であると判断した。そのため、本来は木棺墓の上に別遺構が存在していたと考えられ、検出時の平面形の確定時に誤認したと考えられる。なお、両端の深い掘り込みの距離は中心間で1.09mであり、南西-北東方向に主軸をもつ。

**埋土** 上部を含めて2層に分層した。下層は植物遺体をわずかに含む。

**遺物出土状況** 埋土から土器6点が出土した。いずれも小片である。

**出土遺物** 50、51は縄文時代晩期後半の深鉢。50は口縁端部に押圧が認められ、50・51ともに貼付突帯上にD字状の二枚貝による押圧が認められる。

**時期** 遺物出土の時期から縄文時代晩期後半以降と考えられ、周辺の木棺墓がI期であるため、縄文時代晩期後半～I期と考える。

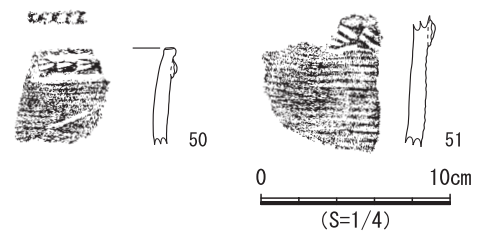


図 40 SZ158 遺物実測図

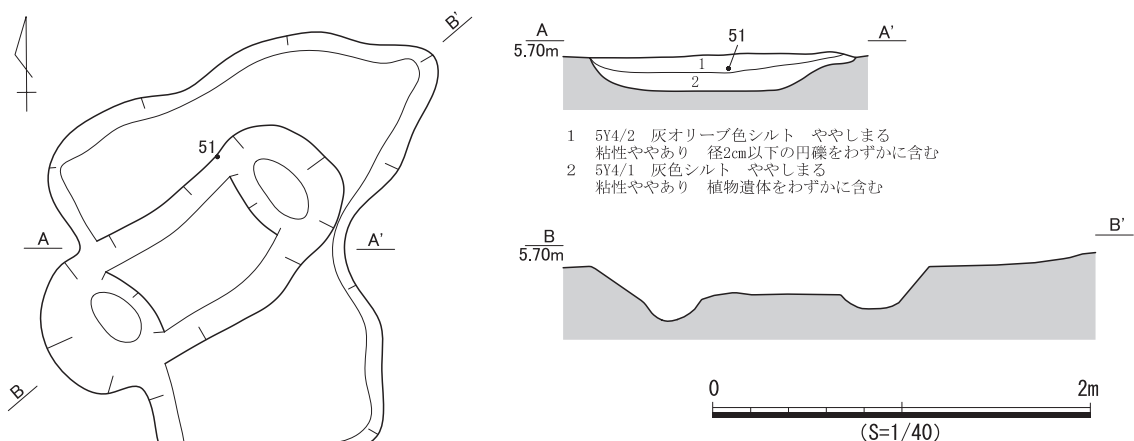


図 41 SZ158 遺構図

SZ159 (遺構：図43、遺物：図42)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、SK05149底面及びNR011底面にて板材が残存する楕円形の土坑 (SZ159-P1・P2) を検出した。一对の板材が向き合って出土したため、木棺の小口板と判断したが、その掘形が深すぎるので木棺墓の可能性のある遺構として報告する。なお、平面形は明瞭であった。

**形状** P1は長軸長約0.5m、深さ約0.5m、P2は長軸長約0.6m、深さ約0.5mであり、いずれも楕円形を呈する。P1の壁面は北側が深く抉ら

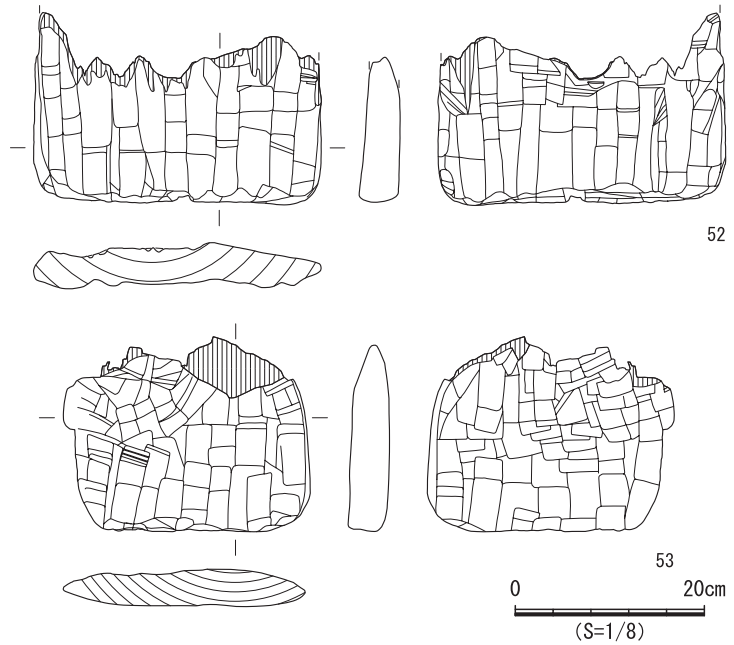


図42 SZ159 遺物実測図

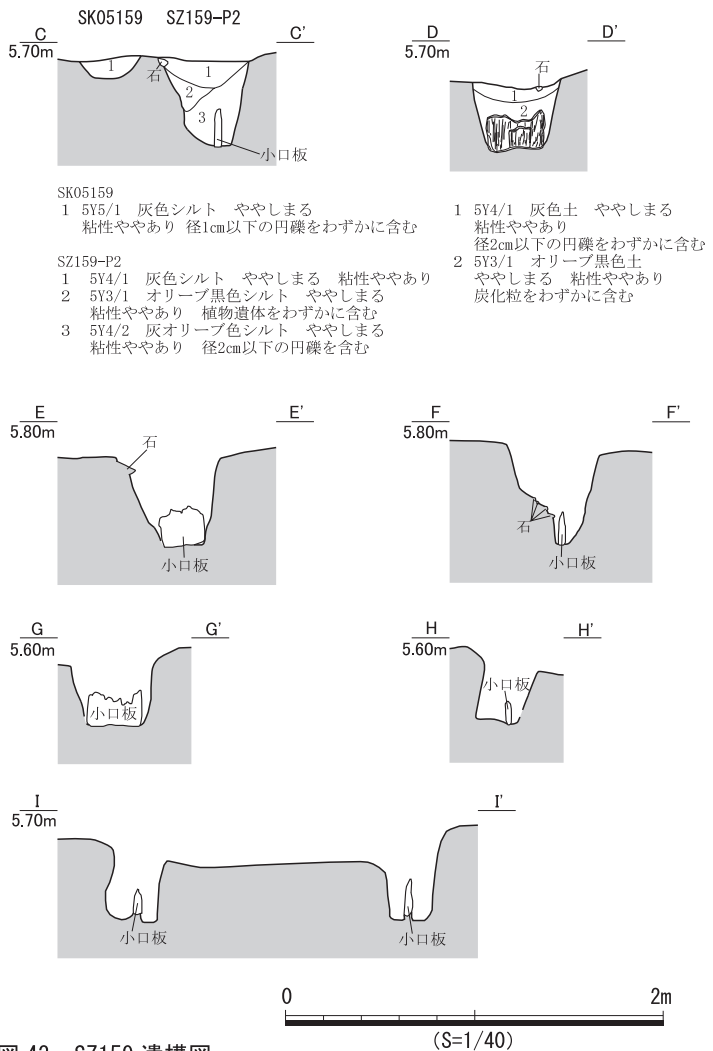
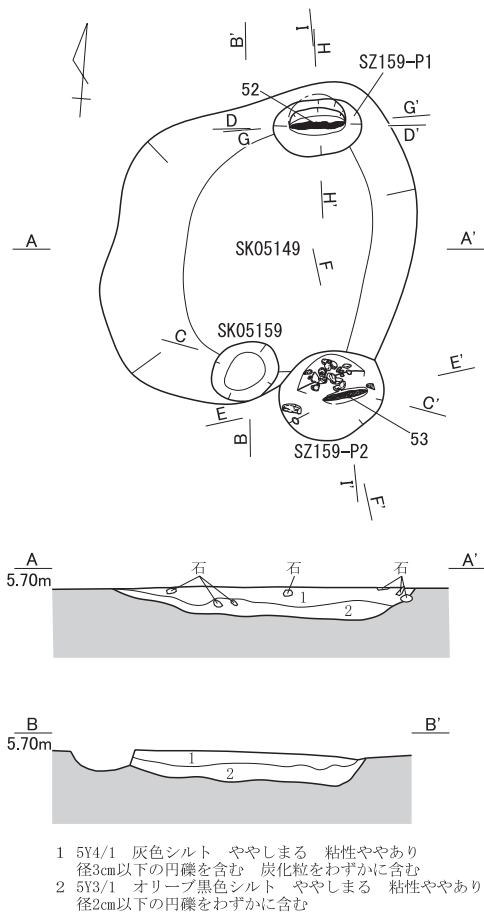


図43 SZ159 遺構図



れており、他の面の傾斜は急である。P2は北壁中程に多数の礫があり、緩やかな平坦面がある。また、いずれの遺構でも底面で小口板が垂直に残存しており、小口板間の距離は内寸で1.39mである。なお、木棺墓の掘形底面はSK05149により消滅している。

**埋土** P1は2層に分層した。上層は中央が窪む堆積である。P2は3層に分層したが、最下層は十分に確認できなかった。2層中に植物遺体を含む。

**遺物出土状況** SZ159-P1の埋土から土器1点、小口板1点、SZ159-P2から小口板1点出土した。

**出土遺物** 52はP1出土小口板で、53はP2出土小口板である。いずれも石斧による加工痕が明瞭に残り、底面には平坦面が認められる。

**時期** 出土した土器から遺構の時期を推定することは困難だが、P2出土の小口板の年代測定結果が縄文時代晩期後葉～弥生時代前期初頭の範囲であったこと（第6章第2節参照）と周辺の木棺墓の時期から、縄文時代晩期後半～I期と考えられる。

**SZ160（遺構：図44）**

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。直径約0.5～0.6mの不整楕円形を呈する土坑が、東西に約1.5mの距離をおいた状況で対をなしている状況から、木棺墓の小口穴の可能性があると考えた。なお、両土坑とも比較的平面形は明瞭であった。

**形状** P1は長軸長約0.5m、深さ約0.2m、P2は長軸長約0.6m、深さ約0.2mで、両土坑の距離は中心間で1.47mであり、SZ155やSZ156とほぼ同じ距離である。

**埋土** いずれも2層に分層した。P1は中央が窪む堆積、P2はほぼ水平堆積であり、ブロック土などは確認できなかった。

**遺物出土状況** いずれの土坑とも、遺物は出土していない。

**時期** 本遺構を木棺墓と推定できるのであれば、周辺の木棺墓と同様に縄文時代晩期後半～I期の可能性がある。

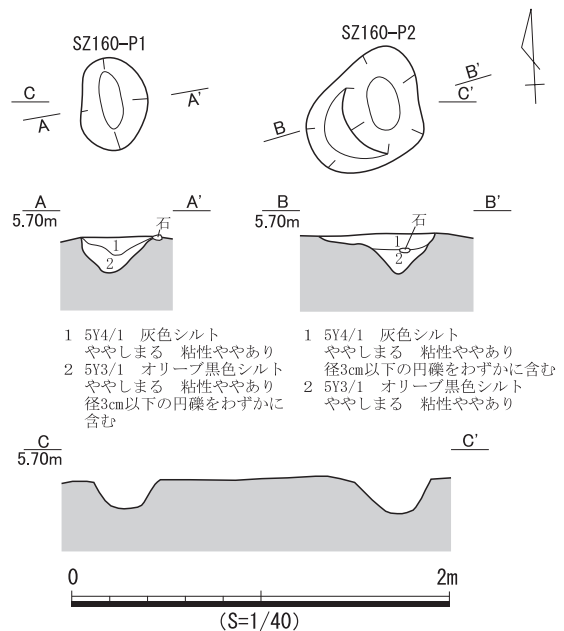


図44 SZ160 遺構図

**SZ161（遺構：図45）**

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。平面形は明瞭であった。

**形状** 東西に長い不整楕円形を呈し、南辺と東辺は直線気味である。長軸長1.75m、短軸長0.89mであり、底面中央は深さ0.13～0.14mでほぼ平坦であるが、東西両端が一段深く楕円形状の掘り込みがある。掘り込みの長軸はいずれも掘形短辺に平行し、その距離は中心間で1.25mである。規模はやや小さいものの、掘形両端部に小土坑を有することから、木棺墓と判断した。

**埋土** 埋土は5層に分層した。底面平坦部まで3層、両端落ち込み部は2層で、いずれもほぼ水平堆

積である。埋土中にブロック土などの人為堆積の痕跡は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土から土器2点が出土したが、いずれも水洗選別で検出した小片であり図示していない。

**時期** 出土遺物から時期の推定はできないが、周辺の木棺墓と同様に縄文時代晩期後半～I期と考える。

#### SZ162 (遺構：図46)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。遺構の中央西寄りがくびれているが、平面形は明瞭であった。

**形状** 西側は長軸長約0.5mの土坑状の凹みとなり、それに連結するように東側に長軸長約1.2mの隅丸形状の土坑が位置する。両端が深く落ち込むことから一連の遺構と判断した。掘形は長軸長1.56m、短軸長0.50mである。底面中央部は凹凸があり、全体的に西側がやや高い。東西両端は楕円形状の掘り込みがあり、西端北壁は深く抉り込んでいる。両端の掘り込み間の距離は、中心間でSZ161と同じ1.25mであり、SZ162と同様に木棺墓と判断した。

**埋土** 中央部の埋土は2層に分層し、中央が窪む堆積である。東西両端の落ち込みは単層で、西側には小礫が混入していた。

**遺物出土状況** 埋土をすべて水洗選別したが、遺物は出土しなかった。

**時期** 出土遺物はないものの、周辺の木棺墓と同様に縄文時代晩期後半～I期と考える。

#### SZ163 (遺構：図47)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。平面形は比較的明瞭であり、東側は上部遺構(SB443-P11)により滅失しているが、わずかに一段深い落ち込みの底部のみ残存していた。

**形状** 東西方向に長い不整楕円形を示し、長軸長1.72m、短軸長0.78m、中央付近の深さ0.18mである。東西両端部は一段深く楕円形状に掘り込まれ、周辺で検出した木棺墓と同様の遺構と判断した。西側の掘り込みの下端長軸は土坑長軸とほぼ直角方向をなし、木口板の掘形と考えられる。東側もほぼ同様の構造と考えられるが、上部は大きく破壊をうけ、その形状が不明である。なお、両端の掘り込み間の距離は中心間で1.21mである。

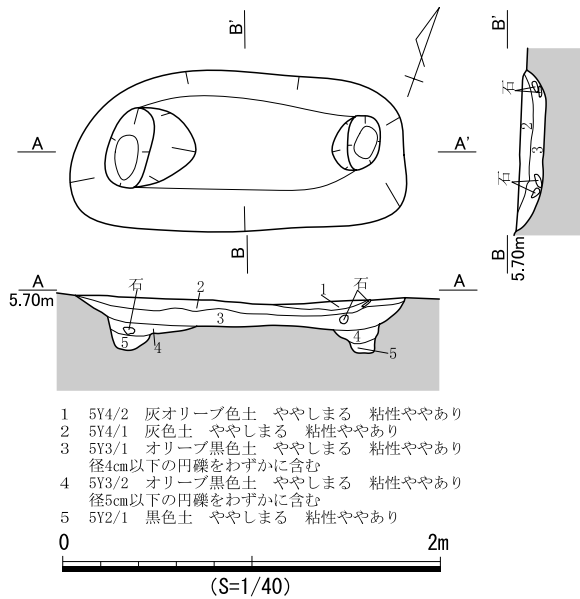


図45 SZ161 遺構図

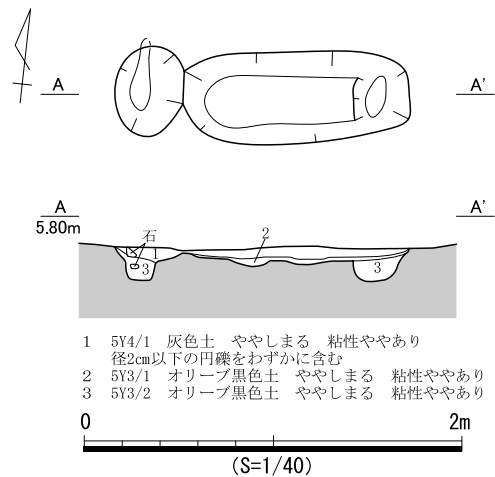


図46 SZ162 遺構図

**埋土** 中央部はほぼ水平堆積を示し、2層に分層した。東西両端の掘り込みは2層と酷似する埋土であるが、やや暗色を呈し、混入する礫がわずかに大きかった。

**遺物出土状況** 埋土から土器9点、石器類3点が出土した。土器はいずれも細片で、石器類は水洗選別で検出した5mm以下の剥片であるため、図示していない。

**時期** 出土遺物から時期の推定はできないが、周辺の木棺墓と同様に縄文時代晩期後半～I期と考える。

(3) 土坑墓

SZ164 (遺構：図48、遺物：図49)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置する。NR013の底面にて検出し、SZ161と並列していた。検出時の埋土は周辺の木棺墓と類似し、底面が舟底状に窪むため土坑墓の可能性はある。

**形状** 東西に長い不整楕円形を呈し、長軸長1.50m、短軸長0.82m、深さ0.22mである。長軸方向の壁面は緩やかに立ち上がり、底面は他の木棺墓の掘形に見られる両端部の一段深い掘り込みが確認できず、ほぼ平坦であった。短軸方向は中央部がやや一段深くなる状況で、壁面はわずかに段をもち、底面は丸みを帯びる。

**埋土** 3層に分層した。西側に傾斜する堆積であり、円礫をわずかに含む。

**遺物出土状況** 埋土から土器2点、石器類14点が出土した。土坑の中央南壁沿いの埋土2層から石鏃1点が横位で出土した。

**出土遺物** 54は打製石鏃である。表裏面ともに細かい剥離調整がなされ、先端角は35°で、基部は浅い抉りが入る。

**時期** 時期は不明であるが、周辺の墓坑と埋土の様相が似ているため縄文時代晩期後半～I期頃と考える。

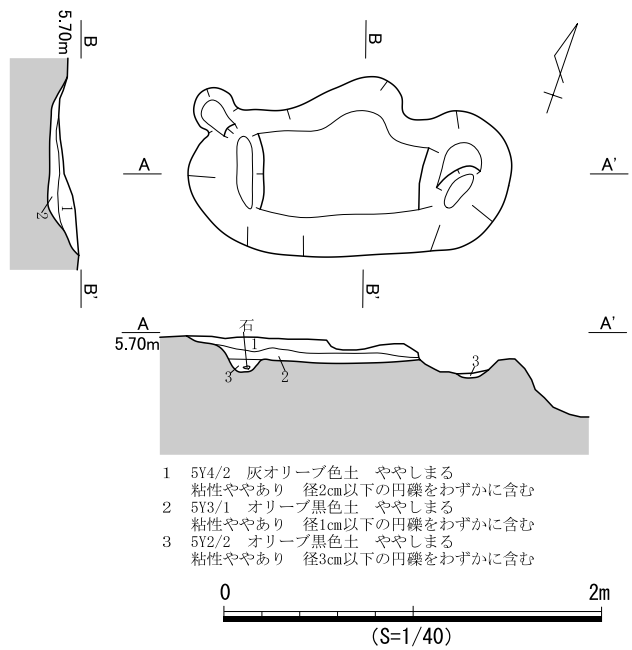


図47 SZ163 遺構図

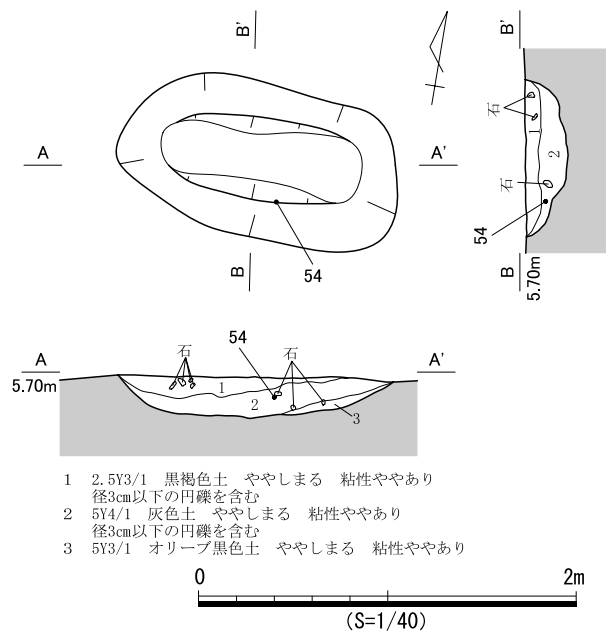


図48 SZ164 遺構図

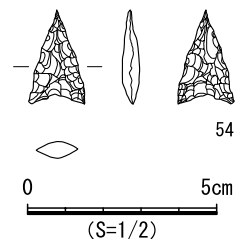


図49 SZ164 遺物実測図

4 溝状遺構

SD0985 (遺構：図50、遺物：図51)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB295、SK04403に切られる。

形状 東西長約5.0mで、西端は丸く収束し、東端は南側にやや屈曲して収束する。幅約1.4m、深さ約0.6mで、断面逆台形を呈する。西端はテラス状となり、底面が丸みを帯びる。

埋土 3層に分層した。礫の混入が多いものの、中央が窪む自然堆積と考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土器107点が出土したが小片が多い。I期甕(55)はA-A'土層観察用畦のやや東側において、南壁際の3層中から出土した。

出土遺物 55はI期甕。口縁部が弱く外反し、端部に刺突文が認められる。胴部は上半がなだらかに膨らみ、下半は直線的である。

時期 埋土最下層の出土遺物(55)の時期から、I期と考えられる。

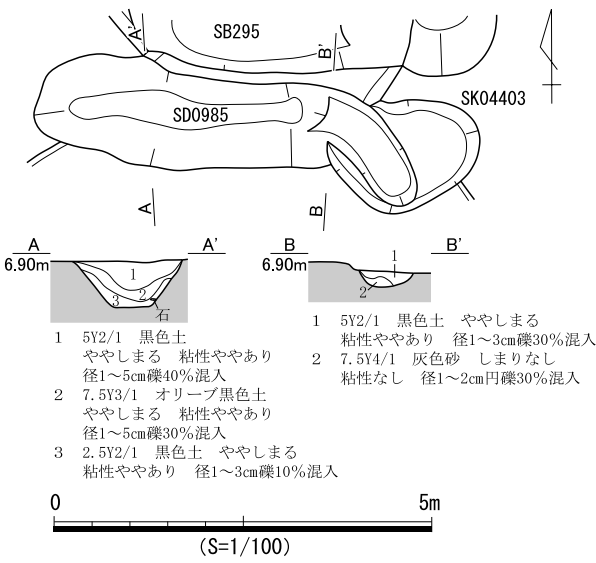


図50 SD0985 遺構図

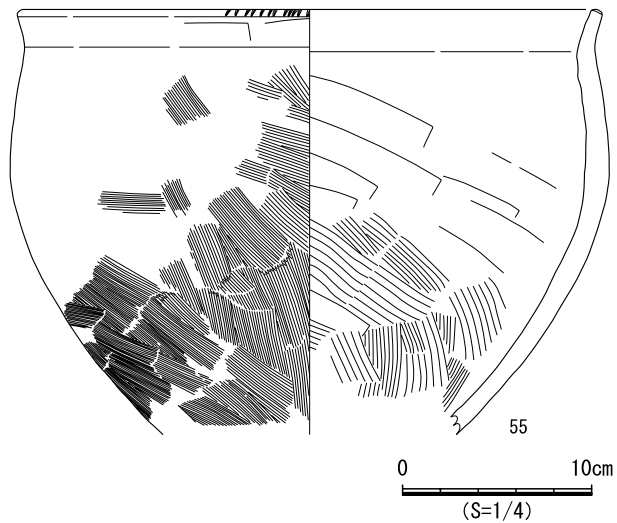


図51 SD0985 遺物実測図

SD1000 (遺構：図52、遺物：図53)

検出状況 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。東西方向に伸びる溝で、SB353とSB354床面で検出した。本溝と同様にI期の土器が出土した溝(SD1011)が南側に約7m離れたところに位置

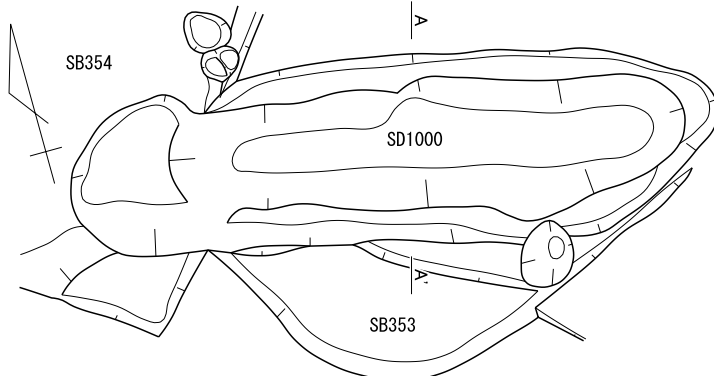
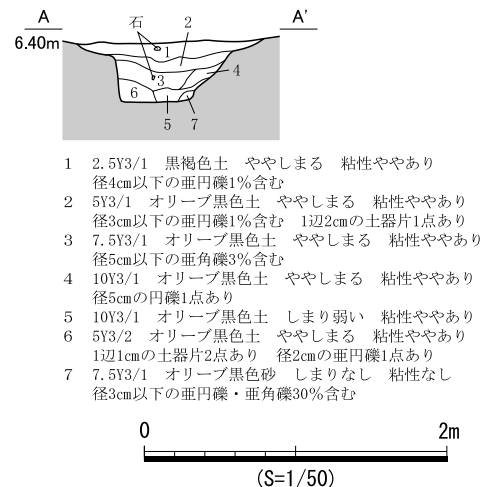


図52 SD1000 遺構図



(S=1/50)

し、本溝と対となる可能性があるものの、他に組み合わせる遺構は認められなかったため単独の溝と判断した。

**形状** 長軸長約4.2m、短軸長約1.1m、深さ約0.4mである。断面形は逆台形で、北側の壁面は直立気味である。

**埋土** 7層に分層した。下層は崩落土と考えられるブロック状の堆積があり、上層は中央が窪む堆積である。自然堆積である可能性が高い。

**遺物出土状況** 埋土中から土器195点が出土した。上層からはⅤ期～Ⅶ期の土器片が少量出土し、下層からⅠ期壺(56)が出土した。

**出土遺物** 56はⅠ期壺。口縁部が大きく外反し、頸部に刺突のある突帯を貼付する。頸部から胴部上半はなだらかに内傾しながら、大きく膨らみ、口径より胴部径が大きい。胴部中央やや上位に6条の太い沈線が認められ、中央に刺突のある突帯が2条貼付される。

**時期** 出土遺物(56)の時期から、Ⅰ期と考えられる。

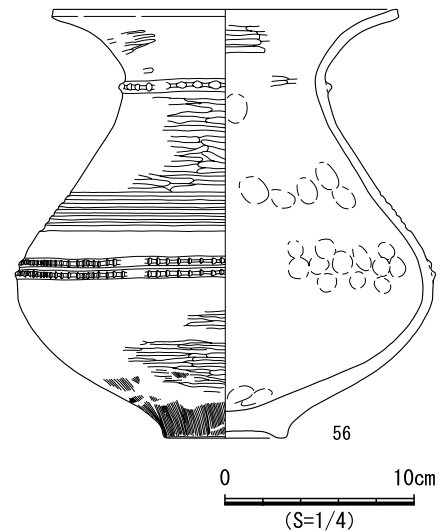


図53 SD1000 遺物実測図

SD1011 (遺構：図54、遺物：図55)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置する。土坑の可能性はあるものの、断面形状が周辺の溝と類似し、位置的にSD1000と対になる可能性があるため、溝として報告する。

**形状** 長さ約3.1m、幅1.6mを測る。深さは0.5mで、断面形は底面がやや丸みを帯び、壁面の傾斜は南側が急で、北側はやや緩やかである。

**埋土** 4層に分層した。中央が窪む堆積で、下層に礫の混入が目立つ。自然堆積の可能性が高い。

**遺物出土状況** 埋土中から土器228点、石器類1点が出土した。上層では少量のⅤ期～Ⅶ期の土器片

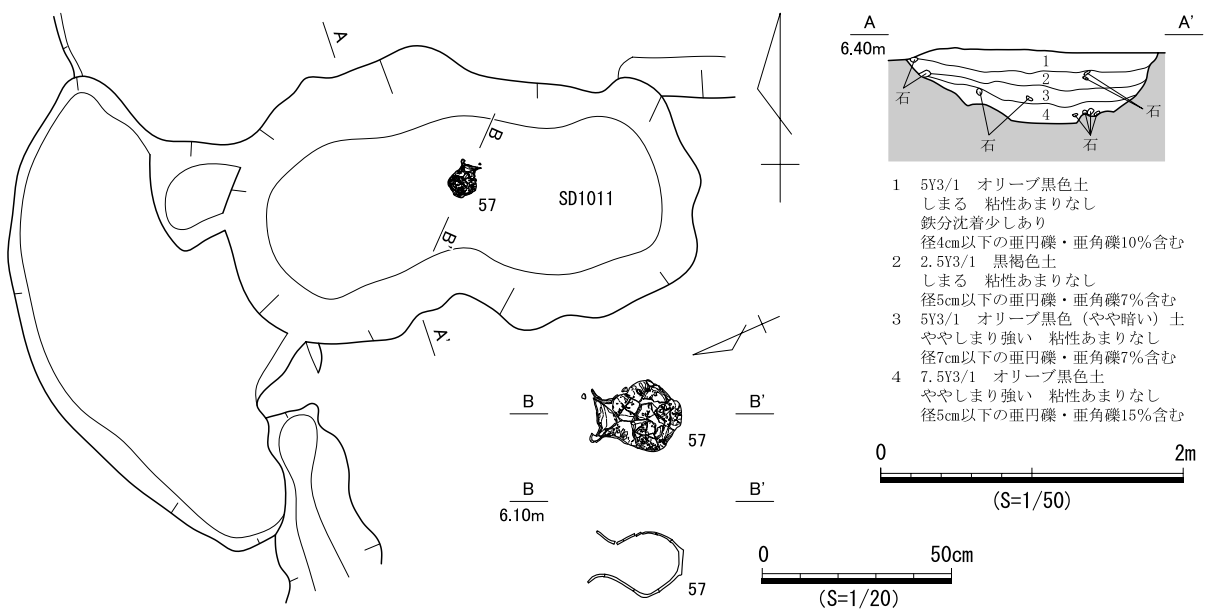


図54 SD1011 遺構図

- 1 5Y3/1 オリーブ黒色土  
しまる 粘性あまりなし  
鉄分沈着少しあり  
径4cm以下の亜円礫・亜角礫10%含む
- 2 5Y3/1 黒褐色土  
しまる 粘性あまりなし  
径5cm以下の亜円礫・亜角礫7%含む
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色(やや暗い)土  
ややしまり強い 粘性あまりなし  
径7cm以下の亜円礫・亜角礫7%含む
- 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色土  
ややしまり強い 粘性あまりなし  
径5cm以下の亜円礫・亜角礫15%含む



が出土したが、底面にてI期後半の壺(57)が横位で出土し、同時期の土器片が下層に認められた。

**出土遺物** 57はI期末頃の壺。口頸部が緩やかに外反して、端部は直立する平坦面を形成する。胴部はなだらかに膨らみ、最大径は胴部中央にある。器面は入念なミガキが認められ、器壁が薄く丁寧な作りである。58はI期壺底部。

**時期** 底面の出土遺物の時期から、I期と考えられる。

SD1022 (遺構：図57、遺物：図56)

**検出状況** 西部西側中央に位置し、SK01894(下層)の深い窪地を連結する溝である。SK01894との重複関係は認められず、同時期に埋没したと考えられる。平面形は明瞭であった。

**形状** 幅約1.5mであり、壁面は蛇行している。底面はやや丸みを帯びており、壁面の傾斜は比較的急である。

**埋土** 4層に分層した。シルトや砂礫が主体であり、流水堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器11点が出土した。

**出土遺物** 59は縄文時代晩期後半の深鉢。突帯以下に左下がりの条痕、内面に横走る条痕が認められる。

**時期** 出土遺物の時期と、SK01894(下層)と同時期に存在していることから、縄文時代晩期後半～I期と考えられる。

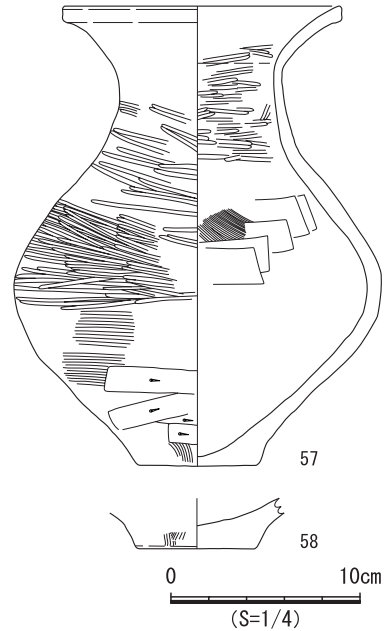


図55 SD1011 遺物実測図

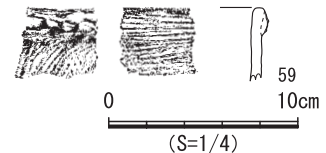


図56 SD1022 遺物実測図

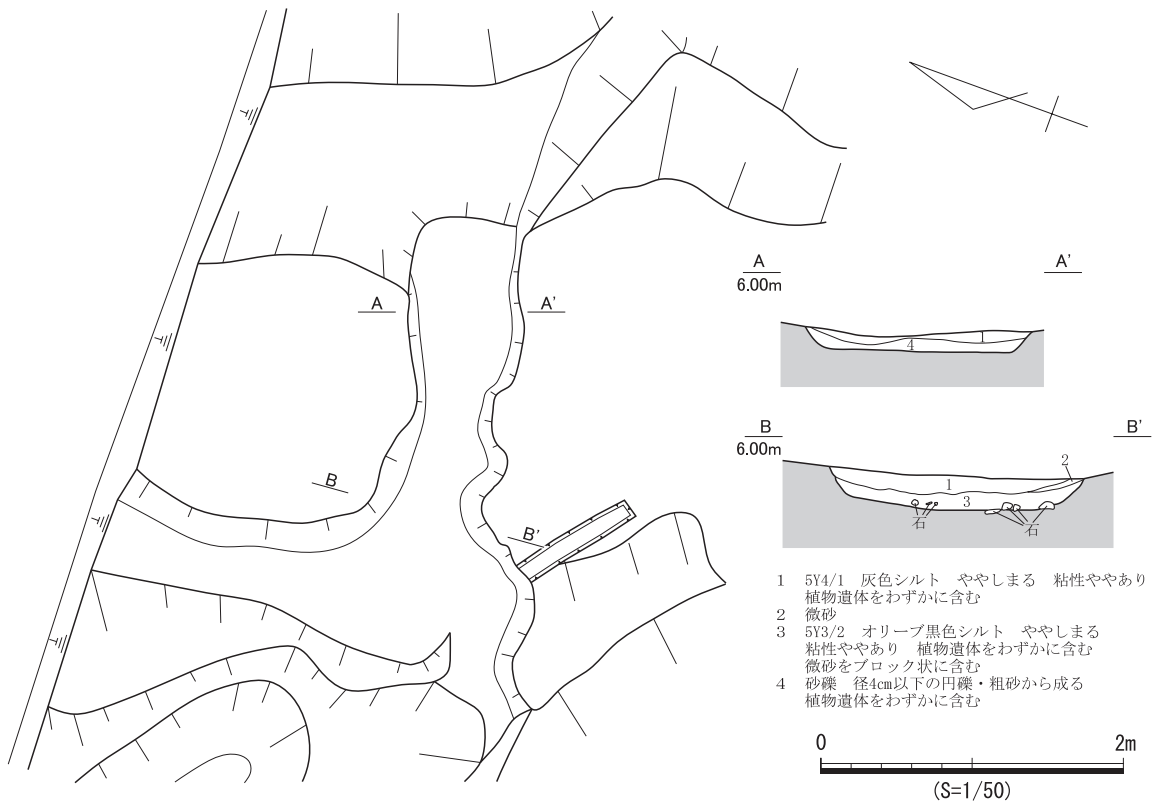


図57 SD1022 遺構図

- 1 5Y4/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む
- 2 微砂
- 3 5Y3/2 オリーブ黒色シルト ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む 微砂をブロック状に含む
- 4 砂礫 径4cm以下の円礫・粗砂から成る 植物遺体をわずかに含む



5 土坑

SK01894（下層）（遺構：図58～61、遺物：図62～64）

検出状況 西部西側中央に位置する。本遺構は北側と南側を2008年度に、中央を2010年度に調査し、北側は『荒尾南遺跡B地区I』にて報告されている。また、すでに報告されているように埋土が上層

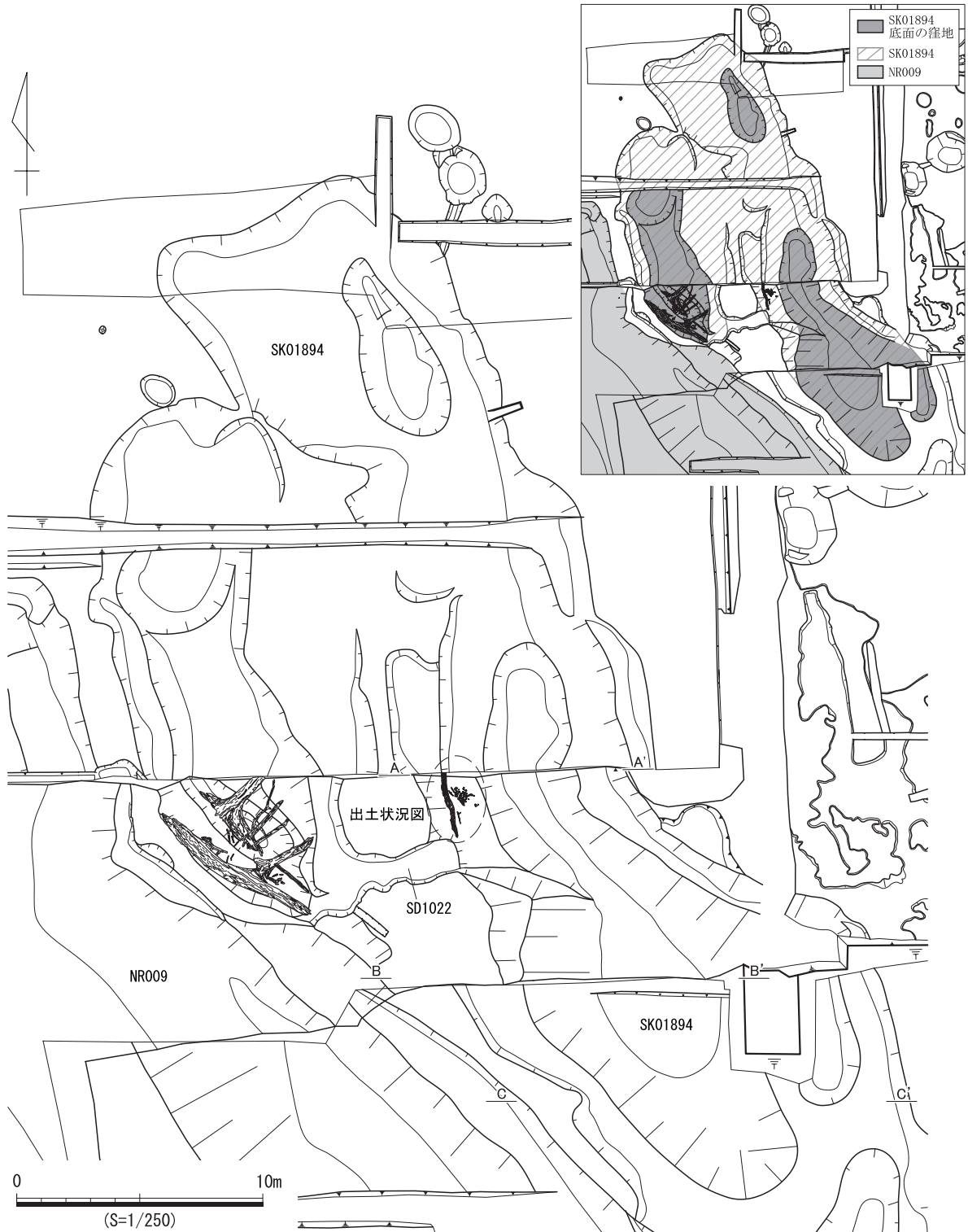


図58 SK01894下層遺構図(1)

と下層に分かれ、2010年度調査ではそれぞれに伴う平面形が異なることを確認した。そして、上層からはVI期～VII期の遺物が、下層からは縄文時代晩期～I期の遺物がそれぞれ出土したため、本書では上層と下層に分けて報告する。なお、本遺構は縄文時代晩期～I期のNR009の北東部に位置し、SD1022と同じ埋土であったため、本遺構とSD1022は同時に埋没していると判断した。

**形状** 北西から南東方向に長くのびる不整形を呈する土坑であり、長軸長約44.3m、短軸長約20.0mである。底面は凹凸が顕著で、北隅と西隅、南東隅の3箇所は窪地状に深くなっている。南東隅の深さは検出面から約1.3mであり、壁面の傾斜は比較的緩やかであった。また、西隅窪地とNR009との境界には平坦面があり、窪地内から長さ約7.3mの倒木が出土した。

**埋土** 南東隅の埋土は13層に分層した。上層は植物遺体を多く含む黒褐色土であり、底面付近では砂礫や微砂、植物遺体を含む黒色土などの互層堆積を確認した。そのため、当初はNR009などの流水が流れ込んでおり、埋没が進行する頃には淀んだ状態であったと考えられる。また、西隅窪地では、倒木が出土した当初に護岸施設の可能性を検討したため、検出時の埋土を記録した。検出時の埋土は、倒木の南西側（川表側）でラミナ堆積や微砂を確認し、北東側（川裏側）では植物遺体や堅果類をと

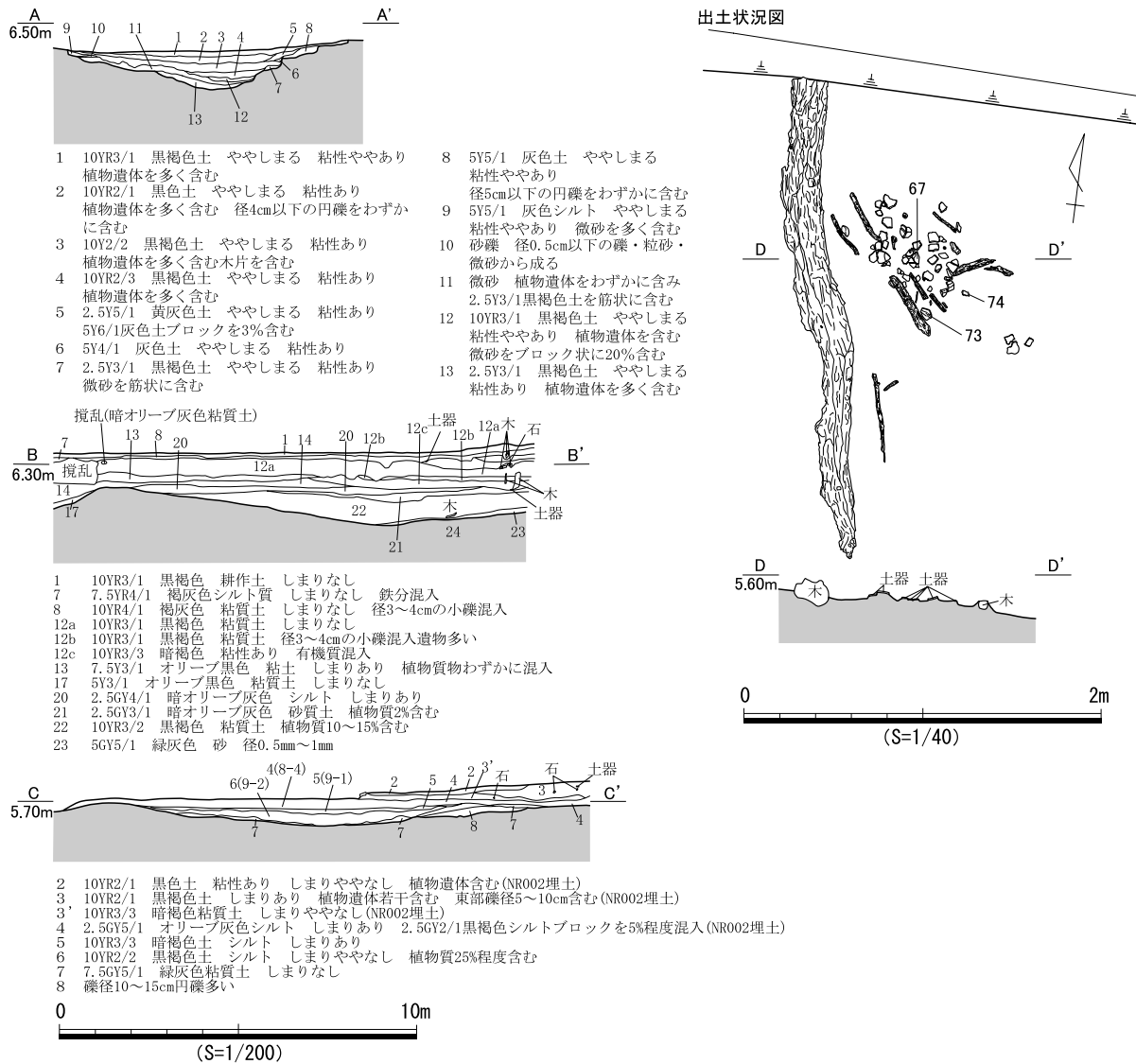
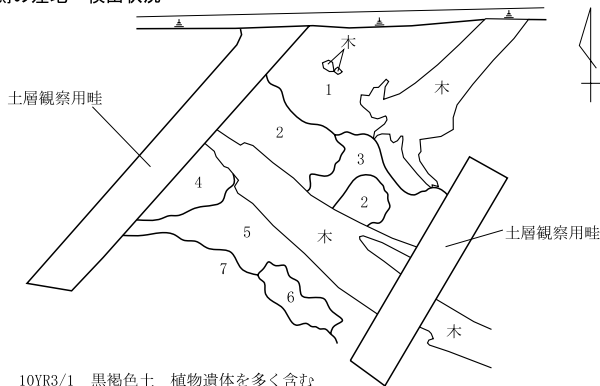


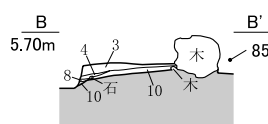
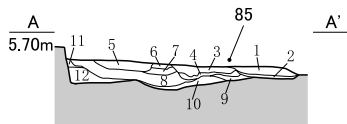
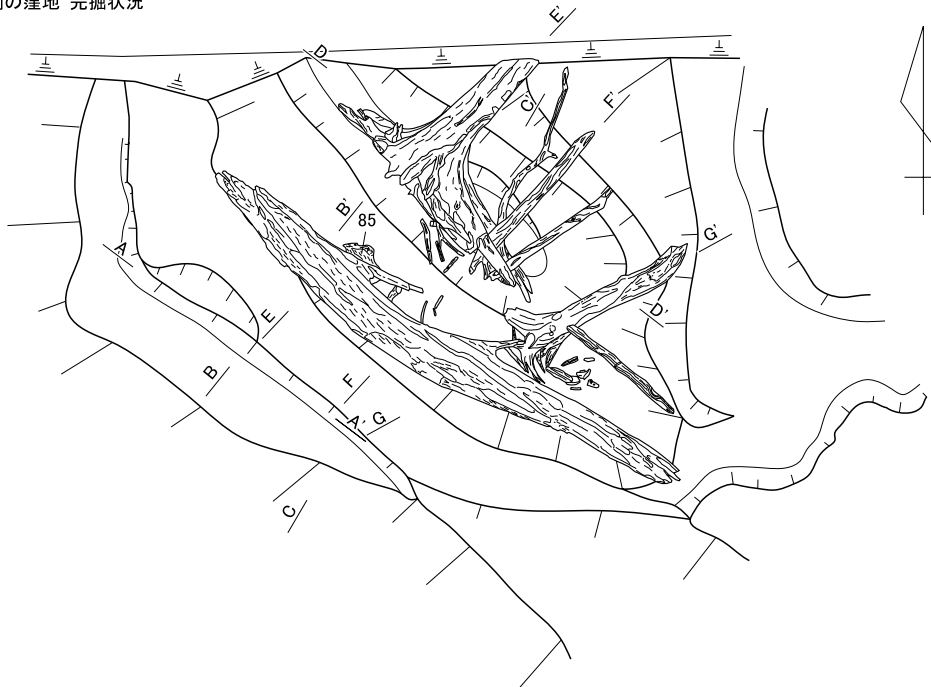
図 59 SK01894 下層遺構図 (2)

西側の窪地 検出状況



- 1 10YR3/1 黒褐色土 植物遺体を多く含む
- 2 2.5Y3/2 黒褐色土 植物遺体や堅果類をととも多く含む
- 3 微砂 黒褐色土を帯状に含む 植物遺体を多く含む
- 4 微砂 植物遺体をわずかに含む
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 微砂をブロック状に50%含む 微砂のブロックは7~10cm程度の不定形 部分的にラミナ状の堆積となる 植物遺体をわずかに含む
- 6 微砂
- 7 2.5Y3/1 黒褐色土 植物遺体をわずかに含む

西側の窪地 完掘状況



- 1 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり 植物遺体をわずかに含む 微砂を筋状に含む
- 2 微砂 径3cm以下の円礫をわずかに含む
- 3 2.5Y4/1 黄灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 微砂を筋状に含む
- 4 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む
- 5 2.5Y4/1 黄灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 微砂を筋状に含む
- 6 10YR2/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む
- 7 微砂 2.5Y4/1黄灰色シルトの互層堆積
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり 微砂を筋状に多く含む
- 9 微砂 2.5Y4/1黄灰色シルトを筋状に含む
- 10 5Y4/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 微砂を筋状に多く含む
- 11 微砂 5Y5/1灰色シルトが水平に筋状に堆積する
- 12 細砂 5Y5/1灰色シルトが水平に筋状に堆積する

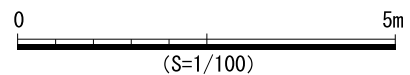


図 60 SK01894 下層遺構図 (3)

でも多く含む堆積を確認した。その埋土は微砂を筋状に多く含む流水堆積であり、NR009から頻繁に浸水していたことがわかる。窪地内からは、北西から南東方向を向く長さ約7.3mの倒木と、その川裏側に北東から南西を向く倒木4本が、それぞれ横位で出土した。いずれも窪地の底面よりわずかに浮いている。なお、これらの樹木に伴う杭や盛土等は確認できなかったため、これらが自然堆積か人為的に運ばれたものかの判断はできなかった。倒木の樹種については第6章第7節を参照されたい。

**遺物出土状況** 埋土より土器640点、石器類17点、木製品49点が出土した。南東隅の窪地の西壁で南北方向を向く樹木が出土し、その直下から縄文土器片が複数の木片とともにまとまって出土した。また、この窪地では底面付近から複数の縄文土器片とともに、土偶(81)や石棒(82)も出土した。西隅の窪地では、樹木間から縄文土器片(79)が出土し、長さ約7.3mの倒木の直下で大型の削り抜き容器(85)が内面を下にして出土した。

**出土遺物** 60、62、63、65、68、70、72、77は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部がやや尖り気味で、端部からわずかに下がった位置に突帯を貼付する。60は突帯上にヘラによるD字状の押圧が認められる。63は端部を折り返す。62、63、65、68、70、72は突帯上に貝によるO字状の押圧が認められる。72の突帯は断面高が低く、突帯以下には横方向のケズリが認められる。61は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部直下にある断面の低い突帯上に、ヘラによるD字状押圧が認められる。64は口縁部がわずかに内傾する深鉢。端部はやや丸みをもち、外面の条痕は横方向である。66は口縁部が外反する縄文時代晩期後半の深鉢。下半にはケズリが認められる。67は直線的に口縁部外傾する縄文時代晩期の鉢。口縁部は尖り気味で、縦方向のケズリが認められる。69、73、74は口縁部が弱く外反する深鉢。端部は丸みをもち、外面には輪積み痕が顕著に認められる。71は縄文時代晩期終末の深鉢。口縁部が直立気味で、端部からやや下がった位置に断面の低い突帯を貼付する。突帯上には貝による弧状の動きの押圧が認められる。75は縄文時代晩期後半の深鉢底部。底部はやや突出気味で、外面には左上がりの条痕が認められる。77は口縁部の突帯高が低く、O字状の押圧が認められる。胴部にも突帯が認められ、その上部は貝殻の条痕、下部はケズリが認められる。78は縄文時代晩期終末の変容壺。

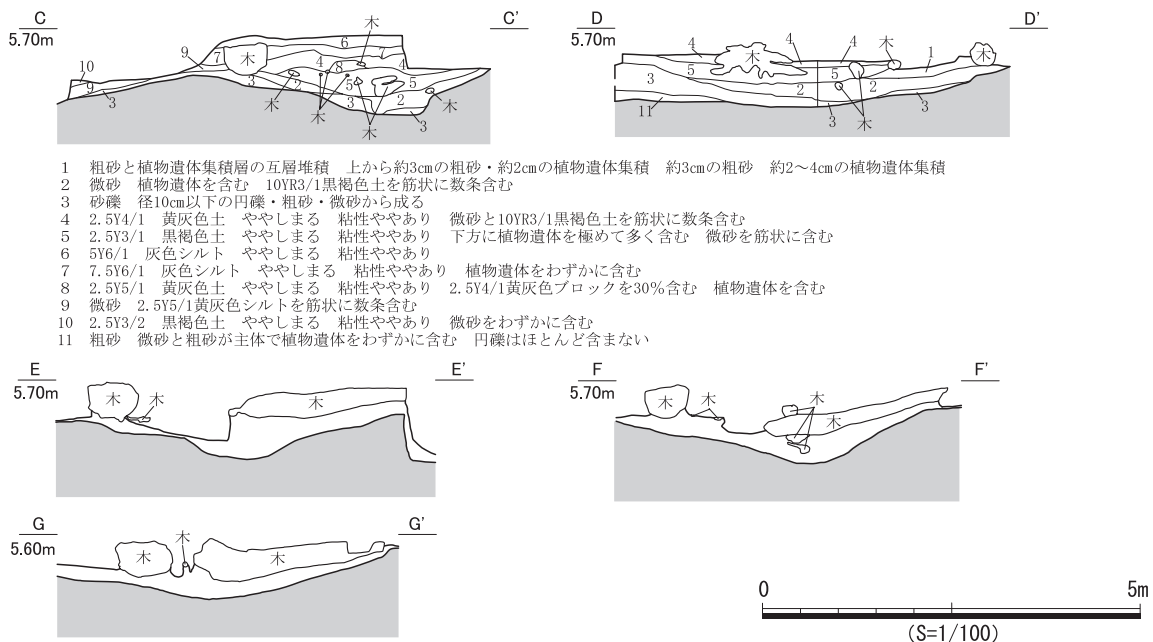


図 61 SK01894 下層遺構図 (4)



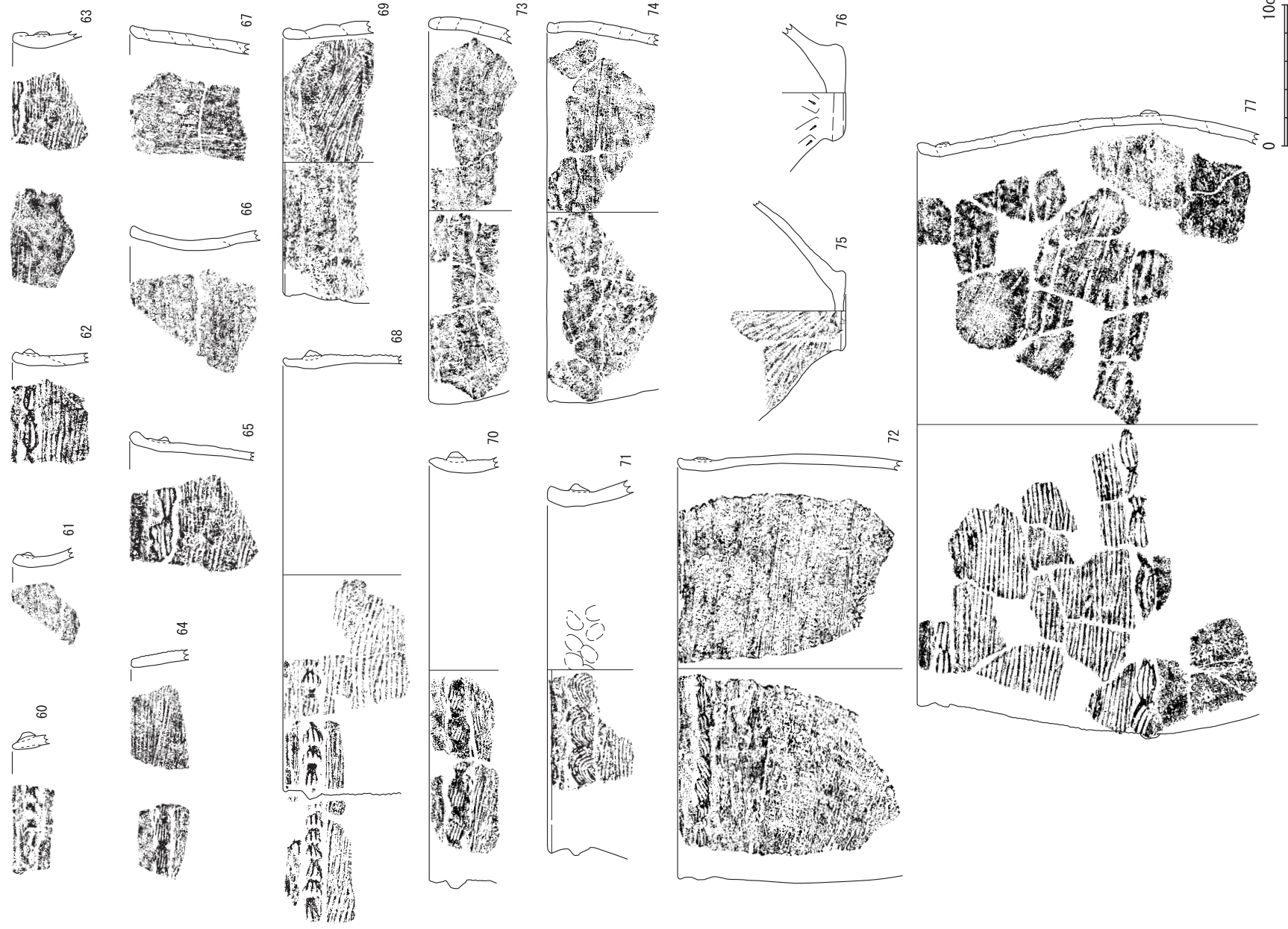


図62 SK01894 下層遺物実測図(1)

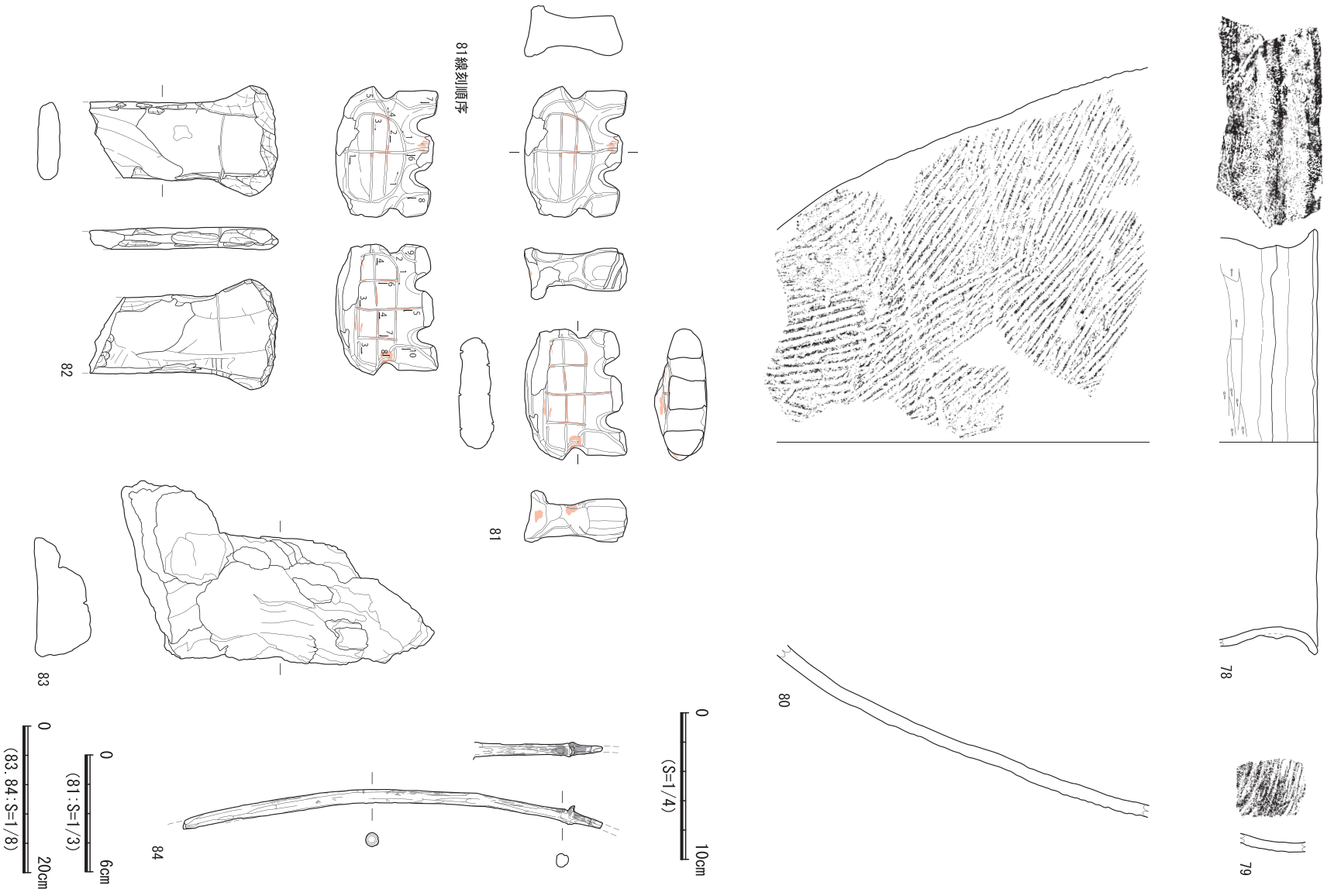


図 63 SK01894 下層遺物実測図 (2)



口縁部がわずかに肥厚して、外反する。頸部には断面高の低い素文突帯が貼付される。胴部はなだらかに膨らみ、わずかに条痕が認められる。79はI期壺。外面に貝殻条痕が認められる。80は縄文時代晩期～I期前半の大型の深鉢胴部片。右下がりの大ぶりの貝殻による条痕が認められる。81は台式土偶。縄文時代晩期後半の土器が多く出土しているので、同時期の可能性が高い。上端が3つに分かれて欠損している。欠損のため、全長は不明である。残る部位の幅は6.8cmで、底面は平坦で平面形は緩やかな弧状を呈す。断面形は下端が両側に肥厚する。外面に線刻が認められるが、外形に沿って楕円形の意匠を描く面が表面と考えられる。まず、中央に楕円形の意匠を線刻してから、左右、さらには上下の直線の線刻を加えている。これらの意匠の外側にも線刻が認められる。それぞれに切り合い関係が認められないので、正確な描順は不明である。楕円形の意匠に連なる左側の線刻をまず描いたと考えた。右側には同様の線刻はなく、右側には最初に描いた楕円形の意匠と外形の端部にまで空白となる部位が認められる。この空白部分を埋めるために、楕円形の意匠に連なる左側の線刻があるものと考えた。裏面にも線刻が認められる。表面と類似する意匠だが、縦位の線刻が2本増え、全体に格子状である。最初に中央に長楕円状の線刻を施す。一本の線刻ではなく、直線と弧状の組み合わせによって構成し、長楕円状の意匠を完成させている。その一方で、左上の区画のみは後から線刻を充填している。左上の部位を除く長楕円形の意匠を完成した後は、まず、中央の縦位の線刻を施し、その後、両側の縦位の線刻を施したと考えられる。線刻の部位には部分的に赤色顔料の付着が認められる。本来は線刻部位全体に赤色顔料が付着していた可能性がある。82は板状の緑色片岩を素材とする石棒。縁辺部を剥離成形してから頭部を作り出し、縁辺部を中心に敲打と研磨を加え、頭部下のくびれ部に

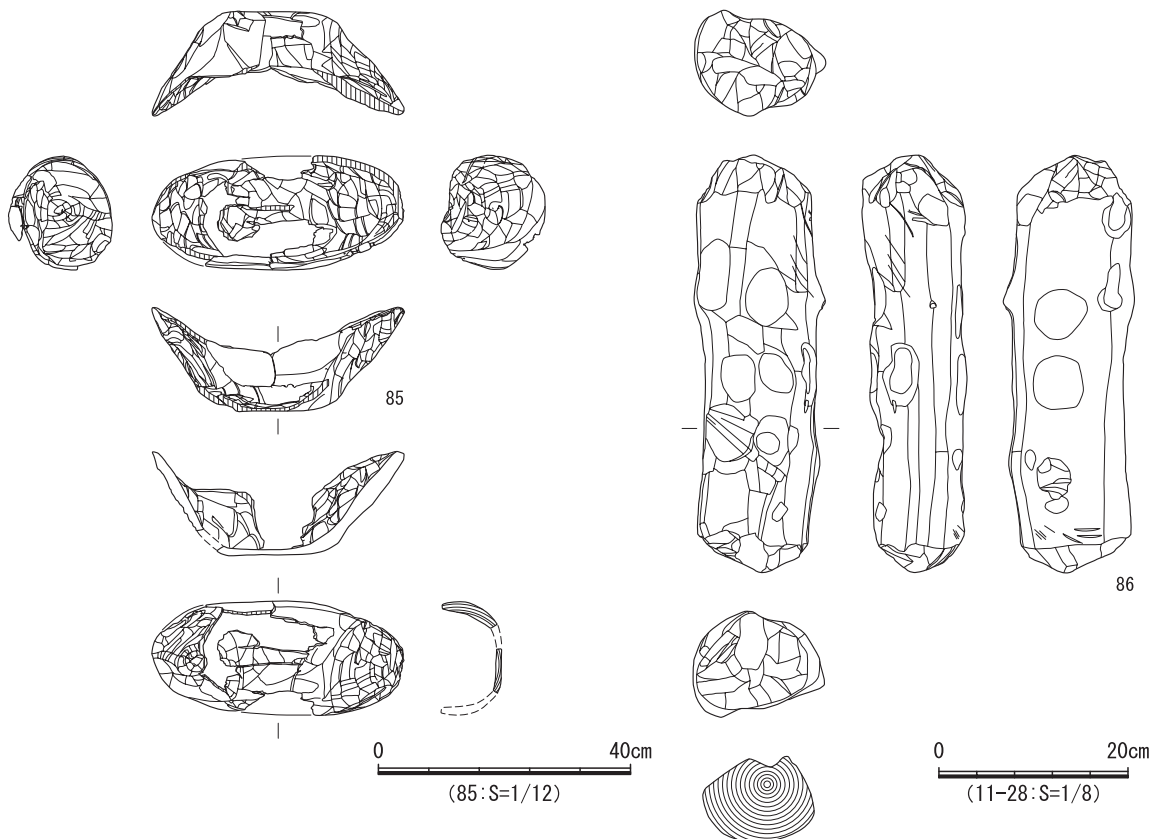


図64 SK01894 下層遺物実測図(3)

線状痕を巡らす。なお、胴部と下部は折損している。83は板状に剥離する緑色片岩の素材で、一部に原礫面を残す。84は飾り弓で、黒漆が所々に残っており、本来は全面に塗ってあった可能性が高い。弓幹は緩やかに湾曲しており、先端の弭はほぼ直角に欠き切れ、弦が掛かる部分のみ黒漆が帯状に擦れている。85は大型の刳物。楕円形状を呈し、底面はほぼ平坦である。表面のほぼ全面に加工痕が残るが、腐食が著しい。86は棒材で上下端部は石斧による加工痕が残る。裏面が平坦であることから、簡易な作業台の可能性もある。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期後半からI期前半と考えられる。

SK03776 (遺構：図65、遺物：図66)

**検出状況** 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域にあり、SK03786の北東側に位置する。

**形状** 長軸長約2.2mで、南北に長い不整形を呈する。中央やや北寄りに高さ約0.2mの段差がある。底面はやや凹凸が認められ、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 2層の埋土が認められ、下層には礫が混じる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器112点が出土した。土器片1点のみ北側で出土しているが、残る土器片はすべて一段深くなった南側で出土している。検出面から埋土上層にかけてI期の条痕文系土器(87)が出土した。口縁部片の1点のみが北側のやや離れた箇所でも出土したが、残る破片は南側でまとまって出土した。大型の壺で土器棺墓として用いられる可能性が高い土器だが、接合率が低く、破片で出土している。

**出土遺物** 87はI期前半の壺。口縁部がやや外傾して、端部は平坦面を形成する。突帯は袋状を呈する。突帯直下から頸部にかけては条痕が横方向で、胴部から右下がりとなる。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。

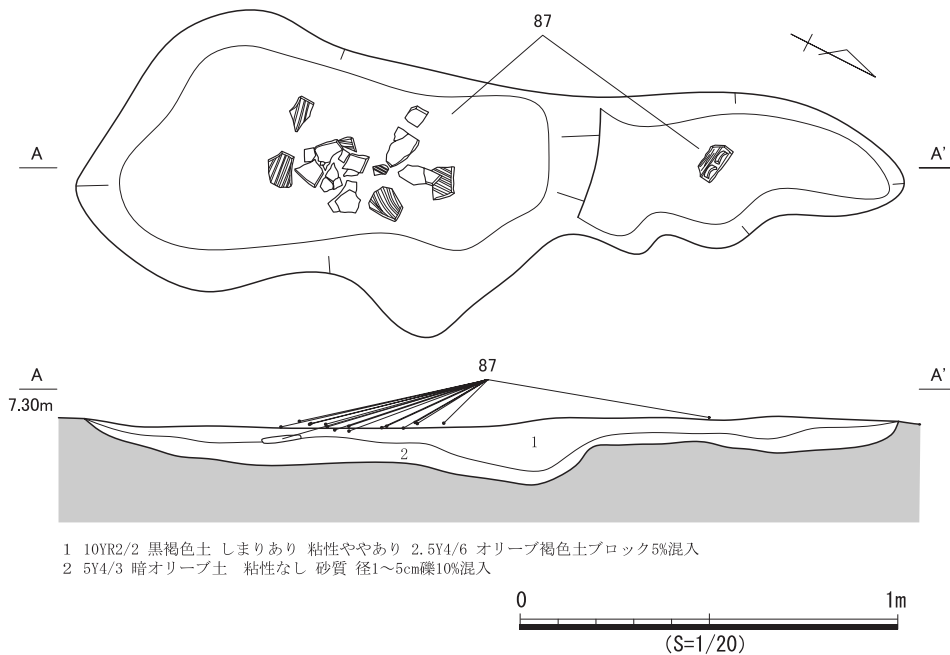


図65 SK03776 遺構図

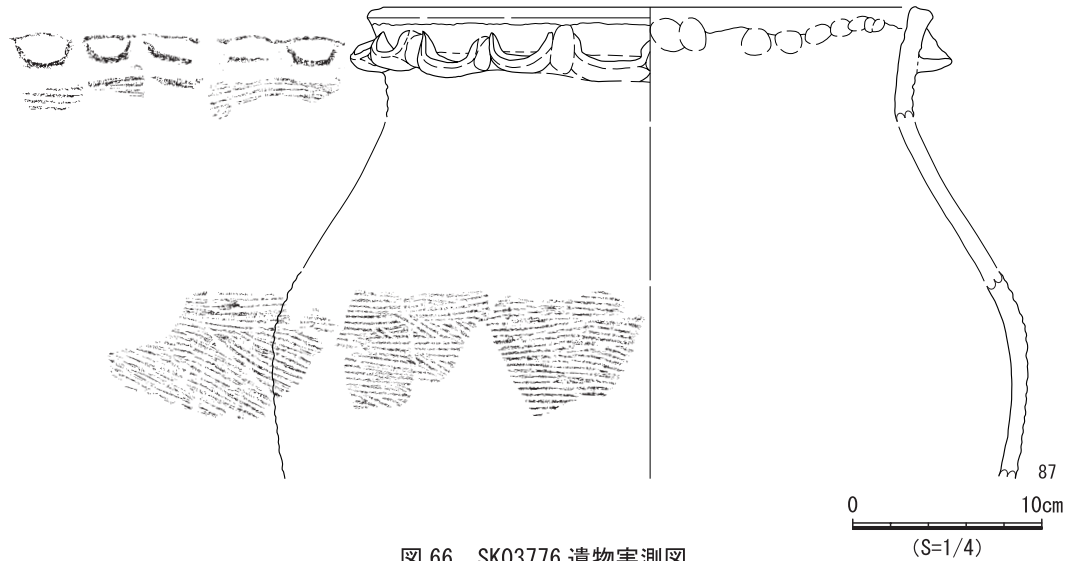


図 66 SK03776 遺物実測図

SK04005 (遺構：図 67、遺物：図 68)

**検出状況** 西部東側北寄りの竪穴住居跡密集域に位置する。西側を南北に縦走する攪乱により滅失し、東側はSK04006に切られている。縄文時代晩期後半前葉の土器2個体分を破片ではあるが確認したので、合口の土器棺墓の可能性はある。

**形状** 確認できる南北長は約1.4mで、平面形は不整楕円形を呈する。底面は中央部分が東西方向に一段深くなり、その南北側は平坦面を有する。深さは最深部で約0.3m、南北の平坦面で約0.1mを測り、壁面の傾斜は緩やかである。なお、東西方向に一段深い部分の底面標高はSK04006とほぼ同一であり、壁面傾斜もほぼ垂直であることが類似する。そのため、最深部はSK04006と一連の遺構と考えられ、平面形の確認時に誤認した可能性がある。

**埋土** 礫の混じる黒褐色土が単層で堆積している。

**遺物出土状況** 埋土中から土器71点が出土した。縄文時代晩期後半前葉の砲弾形の深鉢(89)と屈曲深鉢(88)の2個体分の破片であり、いずれも横位で出土した。なお、出土遺物から土器棺墓の可能性もあるが、2点とも半分以上が残存していないことから、土坑とした。

**出土遺物** 88は口縁部が外傾する縄文時代晩期後半の深鉢。端部は平坦でキザミを加える。口縁部は条痕、胴部にはケズリ調整が認められる。89は砲弾形を呈する縄文時代晩期後半の深鉢。右下がりの条痕が認められる。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期後半と考えられる。

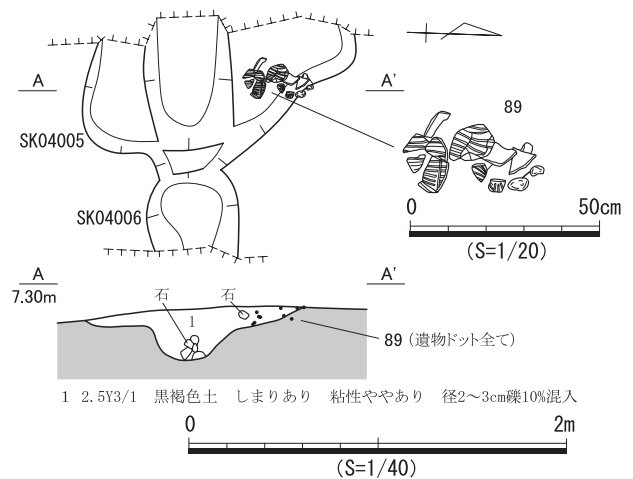


図 67 SK04005 遺構図



図 68 SK04005 遺物実測図

SK04030 (遺構：図70、遺物：図69)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、西側は攪乱のため失われ、東側はSK04302に切られる。

**形状** 長軸長約3.0m、深さ約0.7mで不整円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は比較的緩やかである。

**埋土** 8層に分層した。検出面から底面まで礫の混入が目立ち、下層はシルトが堆積している。

**遺物出土状況** 埋土中から土器69点が出土した。土器は上層から下層まで散在して出土しており、埋土1層にてVI期～VII期の小破片が数点認められたが、他はすべてI期以前の土器片である。そのため、VI期～VII

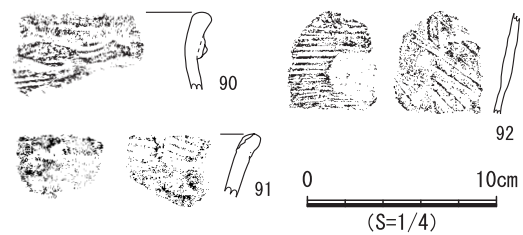


図 69 SK04030 遺物実測図

期の土器片は混入と考えられる。

**出土遺物** 90、91は縄文時代晩期後半の深鉢。90は口縁部が弱く外反し、やや下がった位置に突帯を貼付する。突帯の断面形状は低く、O字状の押圧が認められる。91は内面に押圧が認められる。92はI期深鉢胴部。条痕が横走する。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期後半～I期と考えられる。

**SK04222 (遺構：図72、遺物：図71) 検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SK04223を切る。

**形状** 長軸長約1.7m、短軸長約1.0m、深さ約0.25mで、長楕円形を呈する。底面中央が楕円形状に深く窪んでおり、壁面は北壁を除き平坦面が巡り、平坦面より上位は急傾斜である。

**埋土** 3層に分層した。礫の混入が多く、層界の凹凸が顕著であるため、人為堆積と考えられる。なお、土層図中の杭は、後世に打ち込まれたものである。

**遺物出土状況** 埋土中から土器72点が出土した。埋土1層にVI期～VII期の土器片がわずかに含まれるが、大半はI期以前の土器片である。そのため、VI期～VII期の土器片は混入と考えられる。

**出土遺物** 93、94は縄文時代晩期後半の深鉢。93は口縁部が弱く外反し、端部からやや離れた位置に突帯が貼付される。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期後半～I期と考えられる。

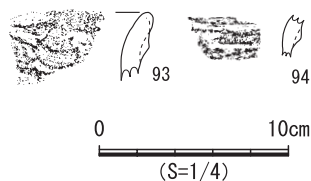
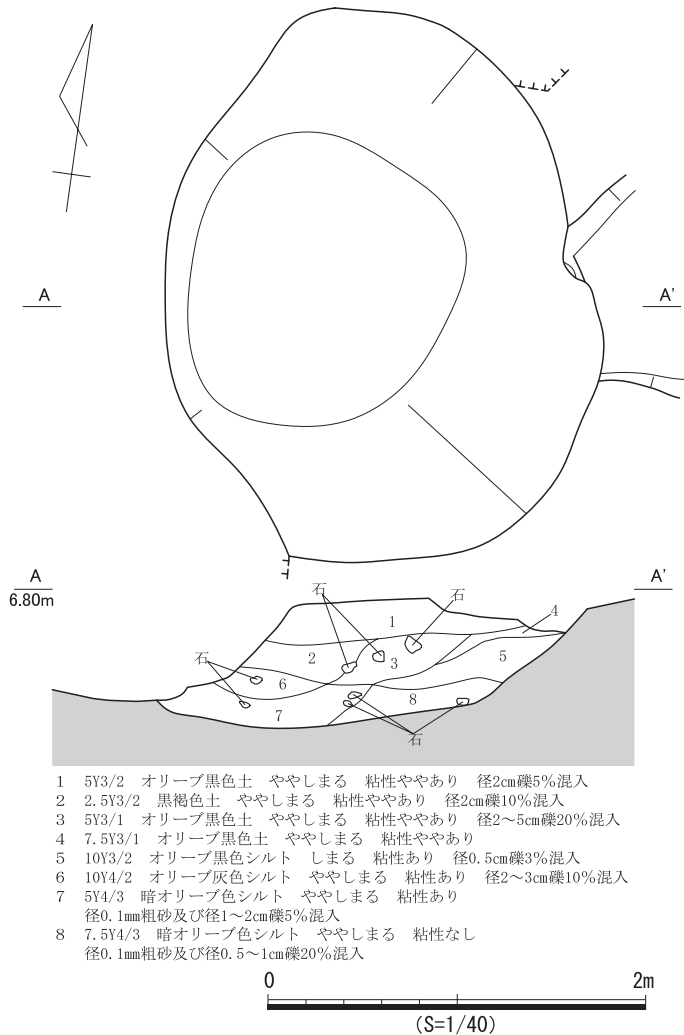
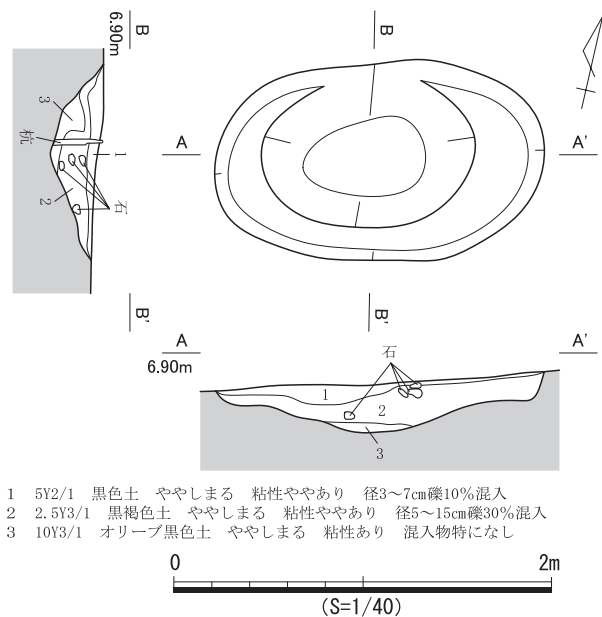


図71 SK04222 遺物実測図



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径2cm礫5%混入
- 2 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径2cm礫10%混入
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径2～5cm礫20%混入
- 4 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 5 10Y3/2 オリーブ黒色シルト しまる 粘性あり 径0.5cm礫3%混入
- 6 10Y4/2 オリーブ灰色シルト ややしまる 粘性あり 径2～3cm礫10%混入
- 7 5Y4/3 暗オリーブ色シルト ややしまる 粘性あり 径0.1mm粗砂及び径1～2cm礫5%混入
- 8 7.5Y4/3 暗オリーブ色シルト ややしまる 粘性なし 径0.1mm粗砂及び径0.5～1cm礫20%混入

図70 SK04030 遺構図



- 1 5Y2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径3～7cm礫10%混入
- 2 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径5～15cm礫30%混入
- 3 10Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 混入物特になし

図72 SK04222 遺構図



## SK04256 (遺構：図73、遺物：図74)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居跡密集域に位置し、SB285とSK04253の完掘後に検出した。

**形状** 長軸長約4.0m、深さ約0.7mであり、不整楕円形を呈する。底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかであるが、東側は一段の平坦面を有する。

**埋土** 9層に分層した。7・9層は底面に沿って薄く堆積しており、6層はブロック状の堆積であることから、当初は壁面崩落が進行した可能性がある。なお、1層は再掘削後の堆積である。2層は層界の凹凸がみられることや、底面の出土遺物の時期と異なるV期以降の小土器片が含まれることから、V期以降の集落造成等に伴い埋め戻された可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から土器232点、石器類1点が出土した。2層まではV期の遺物が含まれ、それより下位では縄文土器のみの出土である。95、99、100などは西側から中央にかけての底面から壁面沿いで横位でまとまって出土した。

**出土遺物** 95、100は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部が内傾し、胴部の膨らみは緩やかである。95は端部がやや直立気味で、端部からやや下がった位置に突帯を貼付する。突帯は扁平で、O字状の押圧を施す。胴部最大径より上位の条痕は横方向、下位は縦方向である。100は端部直下に突帯を貼付し、

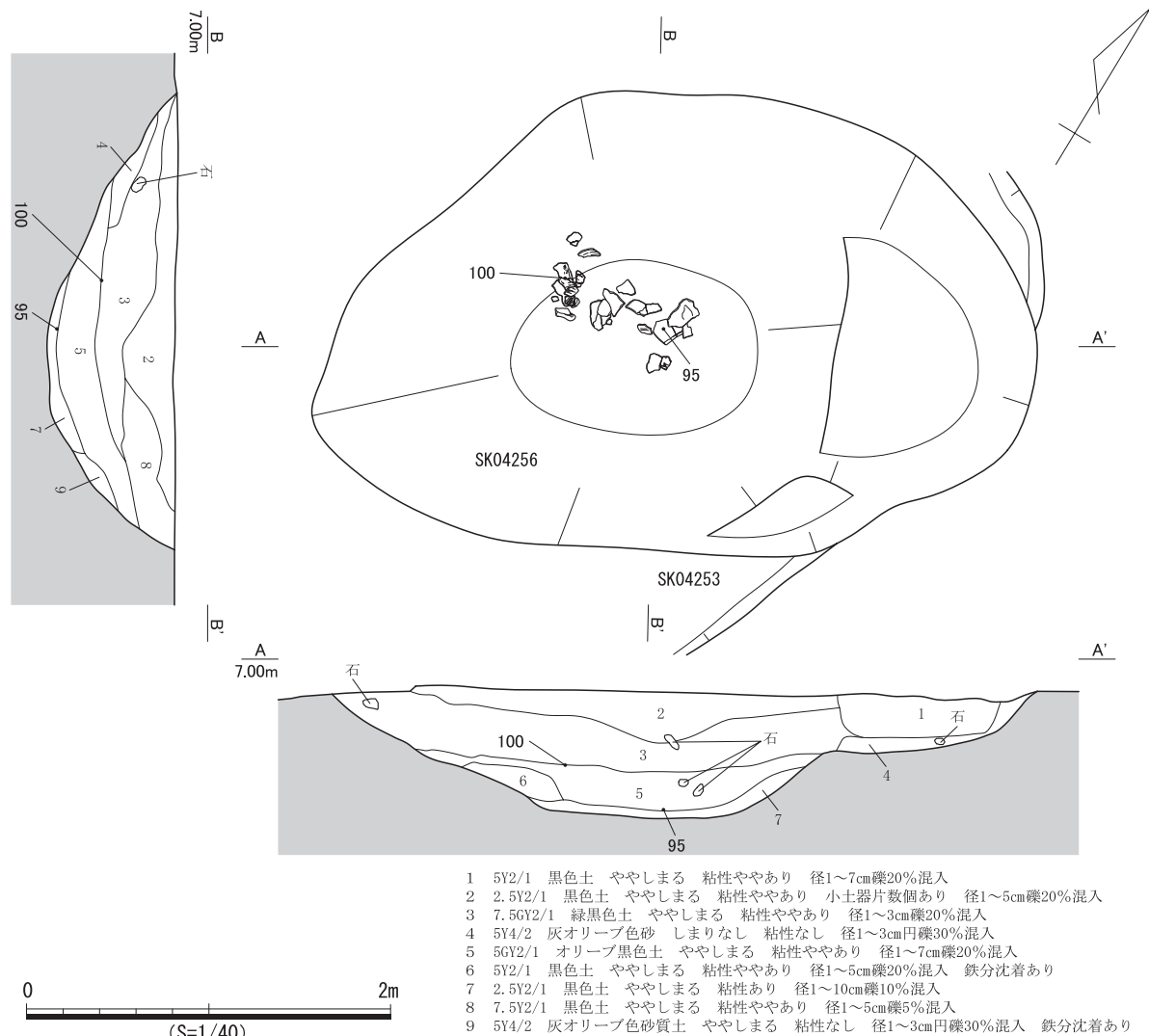


図73 SK04256 遺構図



○字状の押圧を施す。96、99は縄文時代晩期末の変容壺。口縁部が外反し、素文突帯1条が認められる。99は突帯下に一部条痕が認められる。他の条痕はナデによって滅失している。97、98はI期変容壺。97は緩やかに口縁部が外反し、半截竹管による沈線がめぐる。98は頸部片で偏平な素文突帯を2条貼付し、その下に列点状の刺突を施す。中央から2条の沈線が垂下する。101は土製品。円盤状で中央に未貫通の穿孔が認められる。

**時期** 底面付近でまとまって出土した遺物の時期から、縄文時代晩期後半～I期と考えられる。

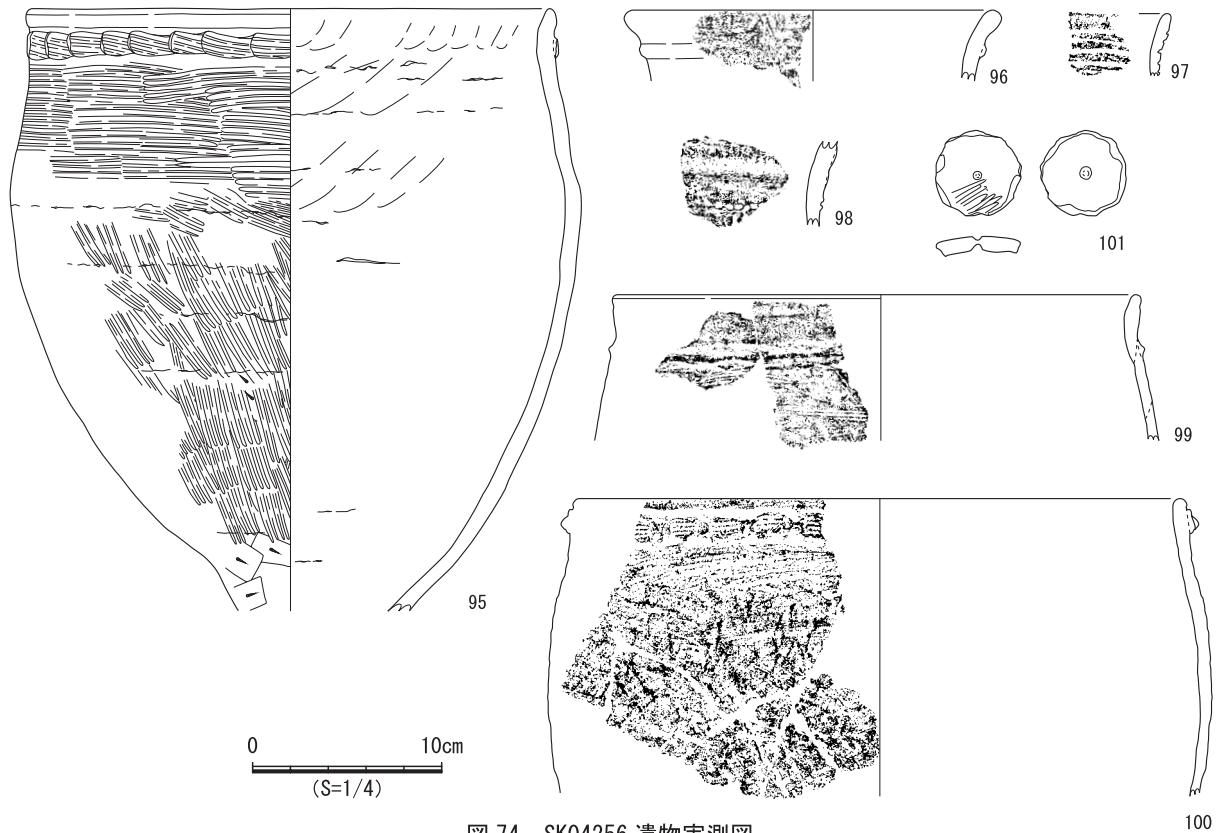


図74 SK04256 遺物実測図

SK04557 (遺構：図75、遺物：図76)

**検出状況** 西部東側中央の竪穴住居密集域に位置し、SB376床面で検出した。土坑内からは竪穴住居跡より先行するI期の土器片のみがまとまって出土したので、I期の土坑と判断した。

**形状** 長軸長約0.8mの楕円形を呈する。深さは0.15mで、底面は平坦である。

**埋土** 黒色土が単層で堆積するが、その成因は不明である。

**遺物出土状況** 埋土中から土器31点が出土した。土器は、I期の甕の破片のみである。

**出土遺物** 102、103はI期の甕。口縁部が短く弱く外反し、端部にキザミが認められる。頸部には2本の太い沈線が認められ、胴部はなだらかに膨らむ。最大径は胴部中程より上位にあり、胴部下

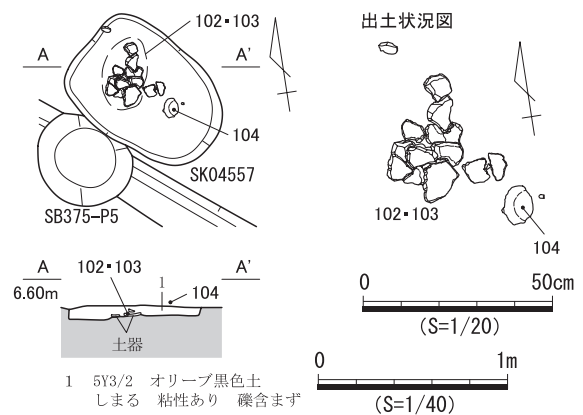


図75 SK04557 遺構図

1 5Y3/2 オリーブ黒色土  
しまる 粘性あり 礫含まず

半は直線的に底部に向かう。  
104はI期甕底部。外面にハケ目が残る。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。

SK04803 (遺構：図77、遺物：図78)

**検出状況** 西部東側中央の

竪穴住居跡密集域に位置する。SB342とSB412の底面で検出し、SK04637とSD1011に切られる。平面形は不明瞭であった。

**形状** 長軸長約4.4mで、不整形を呈する。深さは0.3mで、底面の凹凸が著しく、南側が大きく窪む。

**埋土** 11層に分層した。全体的に礫とブロック土の混入が目立つ。また、層界の凹凸が顕著である

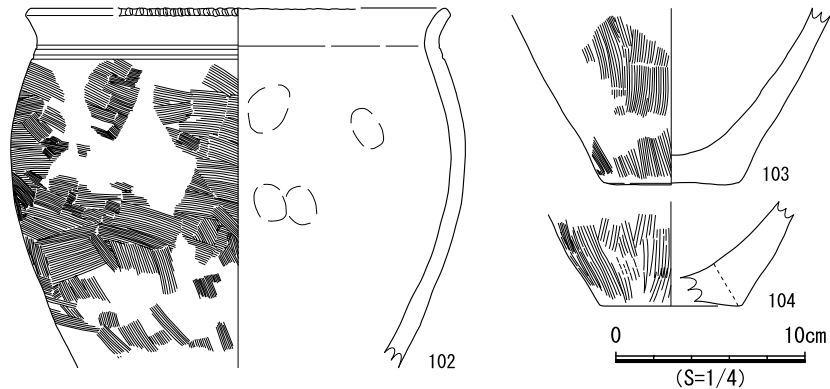
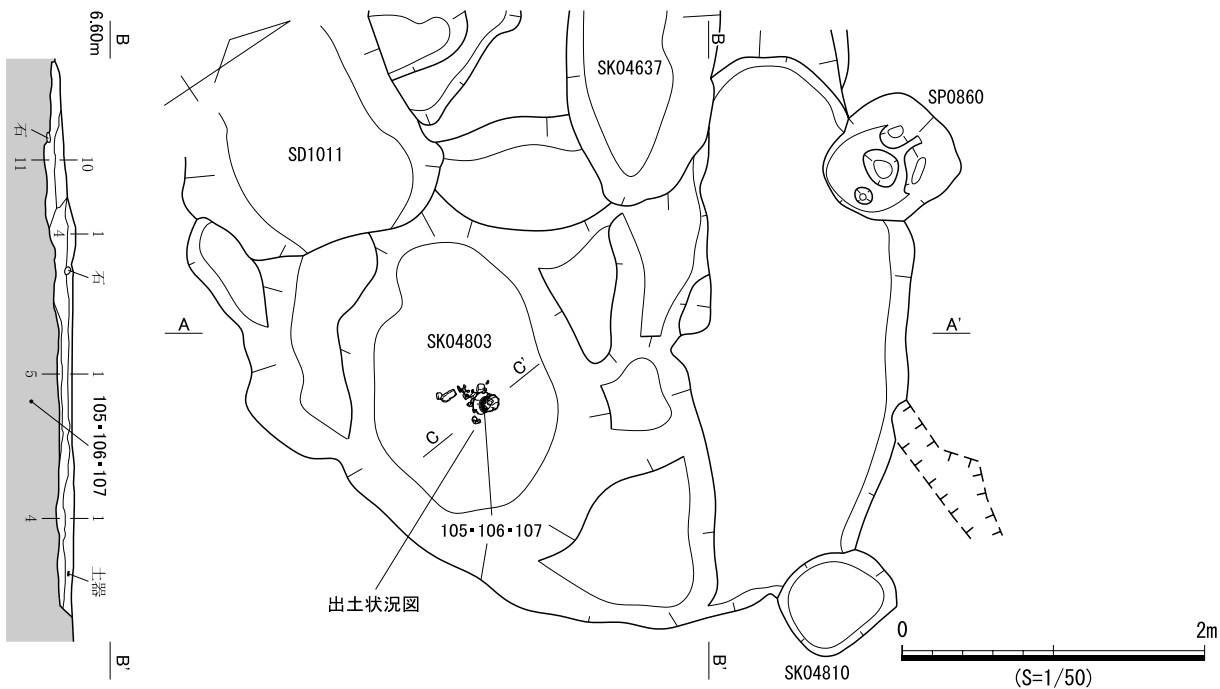
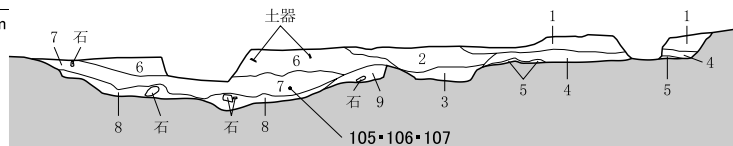
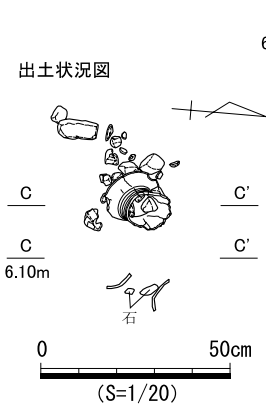


図76 SK04557 遺物実測図



出土状況図



- 1 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あまりなし 7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む 1辺3cm以下の土器片わずかに含む 径2cm以下の垂円礫1%含む 径5mm以下の炭化物わずかに含む
- 2 2.5Y3/1 黒褐色 (やや暗い) 土 しまる 粘性あまりなし 径2cm以下の垂円礫・垂角礫7%含む
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色 (やや暗い) 土 しまる 粘性あまりなし 径4cm以下の垂円礫・垂角礫10%含む
- 4 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰色土ブロック40%含む 径2cmの垂角礫1点あり
- 5 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 2.5Y3/1黒褐色土ブロック10%含む
- 6 2.5Y3/1 黒褐色土 しまる 粘性あまりなし 1辺4cm以下の土器片1%含む 径3cm以下の垂円礫・垂角礫3%含む
- 7 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あまりなし 径5cm以下の垂円礫・垂角礫5%含む
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あまりなし 径10cm以下の垂円礫・垂角礫20%含む
- 9 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あまりなし 径5cm以下の垂円礫・垂角礫3%含む
- 10 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまる 粘性あまりなし 7.5Y4/1灰色土ブロック10%含む 径4cm以下の垂円礫・垂角礫3%含む
- 11 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あまりなし 7.5Y4/1灰色土ブロック30%含む 径2cm以下の垂円礫・垂角礫2%含む

図77 SK04803 遺構図

ことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器344点、石器類6点が出土した。中央やや南寄りにてI期壺(105~107)が口縁部を下にして、礫とともに出土した。

**出土遺物** 105~107はI期壺で、同一個体の可能性が高い。口頸部は外反し、頸部には7条の太い沈線を施文する。頸胴部境にも同様の沈線が認められ、胴部下半はすぼまる。108は叩石。扁平な円礫の下端に敲打痕が複数観察できる。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。

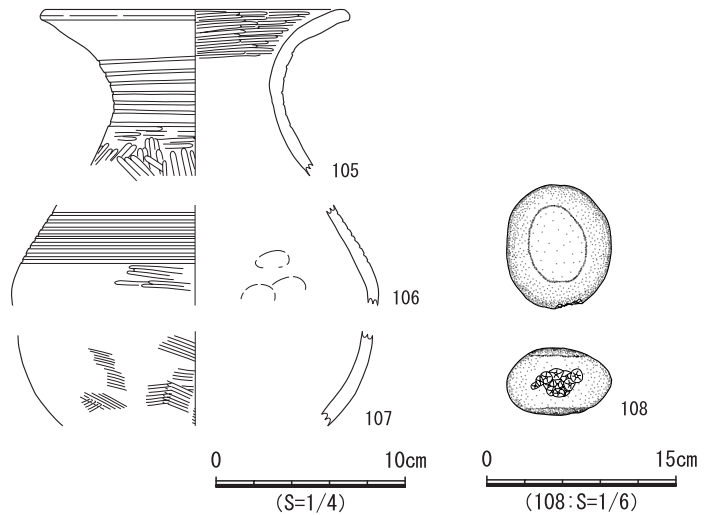


図78 SK04803 遺物実測図

SK04929 (遺構：図80、遺物：図79)

**検出状況** 西部西側中央に位置し、NR002の7層除去後に検出した。本遺構はNR009埋土上面に位置する可能性が高い。

**形状** 長軸長約4.1mの大型土坑で、平面形は楕円形である。深さは約0.5mであり、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** 6層に分層した。中央が窪む堆積であり、底面直上に砂礫が堆積している。上層は粘性のある黒色土であり、長期間で自然に埋没したと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土中から土器61点、木製品3点が出土した。いずれもの縄文時代晩期後半の土器片であるが、磨耗が進行した土器片が目立った。

**出土遺物** いずれも縄文時代晩期の深鉢である。109は口縁端部を折り返し、その直下に突帯を貼付する。突帯上に貝殻によるO字状の押圧が認められる。110は111に類似して、口縁端部外側に接して突帯を貼付するが、その断面は低い。端部は内傾する凹面を形成する。突帯上はO字状の押圧が認められる。111は口縁端部直下に断面三角形の突帯を貼付する。突帯上は間隔の狭いO字状の押圧が認められる。内面には沈線が1本認められる。112は緩やかに口縁部が外反し、平坦な端部には磨耗が進んでいるが、ヘラによる押圧が認められる。外面にはケシ状の工具による縦位の条痕が認められる。113はケズリの痕跡が顕著な胴部片。114は平底の底部。外面にはケズリの痕跡が認められる。

**時期** 本遺構は縄文時代晩期からI期の土器を含むNR009の埋土上に形成されている可能性が高い。

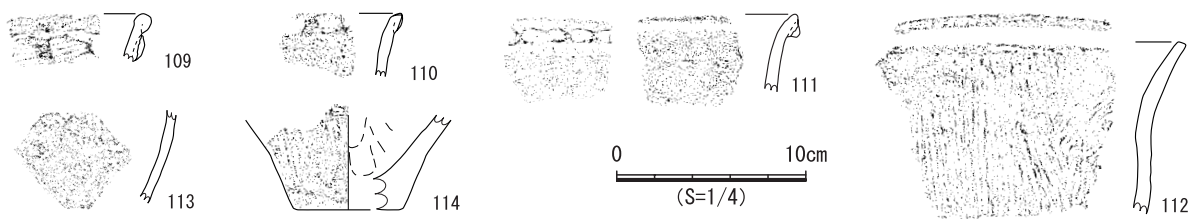


図79 SK04929 遺物実測図

出土遺物は縄文土器のみであるが、摩耗していることや遺構が自然堆積層であることなどから、これらの遺物は流水等による混入と考えられる。本遺構は、SK04945と同様にNR002の上層除去後に検出し、SK04945と埋土の様相が類似していることからI期と考える。

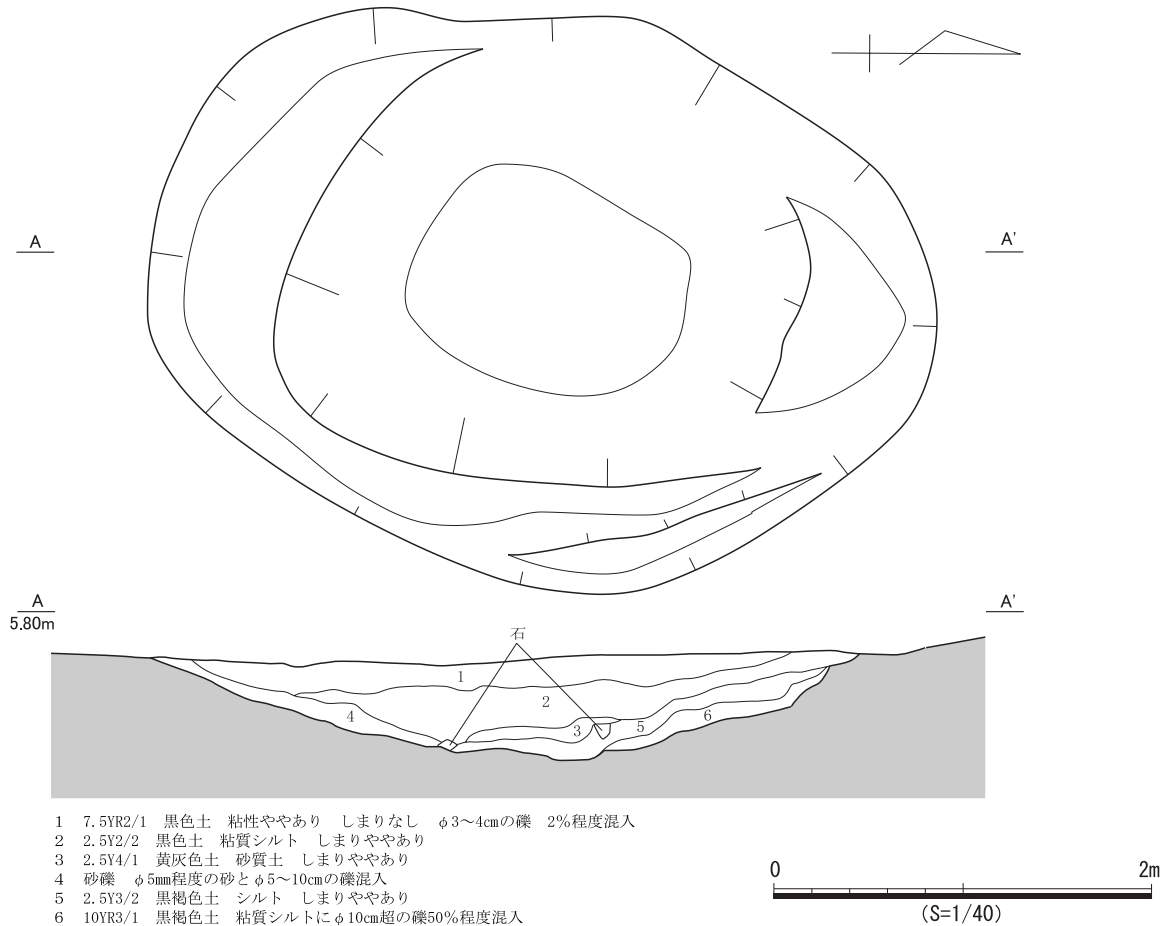


図80 SK04929 遺構図

#### SK04945 (遺構：図81、遺物：図82・83・84)

**検出状況** 西部西側中央のNR002の8層除去後に検出した。泥除未成品が出土し、それに関わる可能性のある石器類が出土したことから、木製品の生産に関連する土坑の可能性がある。

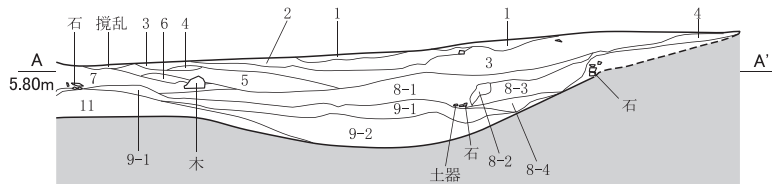
**形状** 南北長約12.0m、東西長約4.0mであり、南北に長い楕円形を呈する。深さは約0.6mで、底面は丸みを帯び、壁面の傾斜は緩やかである。なお、底面は南側が最も深く、北壁には長さ約1.0m~3.0mの平坦面が3箇所形成されている。

**埋土** 2層に分層した。自然堆積であり、下層は植物遺体を多く含む。

**遺物出土状況** 埋土中から土器1,303点、石器類2点、木製品22点が出土した。縄文時代晩期後半~I期前半の土器片が多く出土し、北壁の平坦面直下で泥除未成品3点(152~154)が近接した位置で横位で出土した。また、その約1.0m東側で磨製石斧(149)が出土した。土器類は埋土中から散在して出土した。

**出土遺物** 115~131は縄文時代晩期後半の土器である。115はやや磨耗の進行した深鉢口縁部片。口縁端部には押圧が認められる。幅の狭い突帯に間隔の狭いD字状の押圧が認められる。内面には1

本の沈線が加えられる。116、117は深鉢で口縁端部が尖り気味で、わずかに端部から下がった位置に突帯が貼付される。116は突帯上には間隔の狭い貝殻によるO字状の押圧が認められる。117は間隔の狭いD字状押圧をヘラによって加える。118は深鉢で口縁部がやや外反しながら立ち上がり、端



- |     |          |   |   |
|-----|----------|---|---|
| 1   | 10YR4/1  | 褐灰色土粘質土                                   | 炭化物混入 (NR002埋土)                             |
| 2   | 10YR2/1  | 黒色土                                       | 粘性ややあり 多量の有機物 (植物質) 混入 (NR002埋土)            |
| 3   | 10YR3/3  | 暗褐色土                                      | 粘性あり有機物 (植物質) 混入 (NR002埋土)                  |
| 4   |          | 黒色有機質土にφ2cm以下の小礫と灰色砂質土がブロック状に混入 (NR002埋土) |   |
| 5   | 2.5Y5/1  | オリーブ灰色砂質土                                 | 木質多く混入 (NR002埋土)                            |
| 6   | 7.5Y3/1  | オリーブ黒色土砂質                                 | シルト しまりなし (NR002埋土)                         |
| 7   | 2.5Y3/1  | 黒褐色土                                      | シルト しまりややあり (NR002埋土)                       |
| 8-1 | 10YR3/2  | 黒褐色土                                      | シルト しまりあり (3と同質であるものの植物質をあまり含まない) (NR002埋土) |
| 8-2 | 2.5YR4/2 | 暗灰黄色土                                     | シルト しまりあり (V層ブロック) (NR002埋土)                |
| 8-3 | 2.5Y4/1  | オリーブ褐色土                                   | シルト しまりあり (NR002埋土)                         |
| 8-4 | 2.5Y4/1  | 黄灰色土                                      | シルト 粘性ややあり (NR002埋土)                        |
| 9-1 | 5Y5/1    | 灰色土                                       | 粘土 (SK04945埋土)                              |
| 9-2 | 10YR3/2  | 黒褐色粘質土                                    | しまりなし 植物質含む (SK04945埋土)                     |
| 11  |          | 砂礫層                                       | φ1~2cmの小礫とφ10cm前後の礫 (壺門礫~円礫) 混入 (NR002埋土)   |

0 5m  
(S=1/100)

図81 SK04945 遺構図



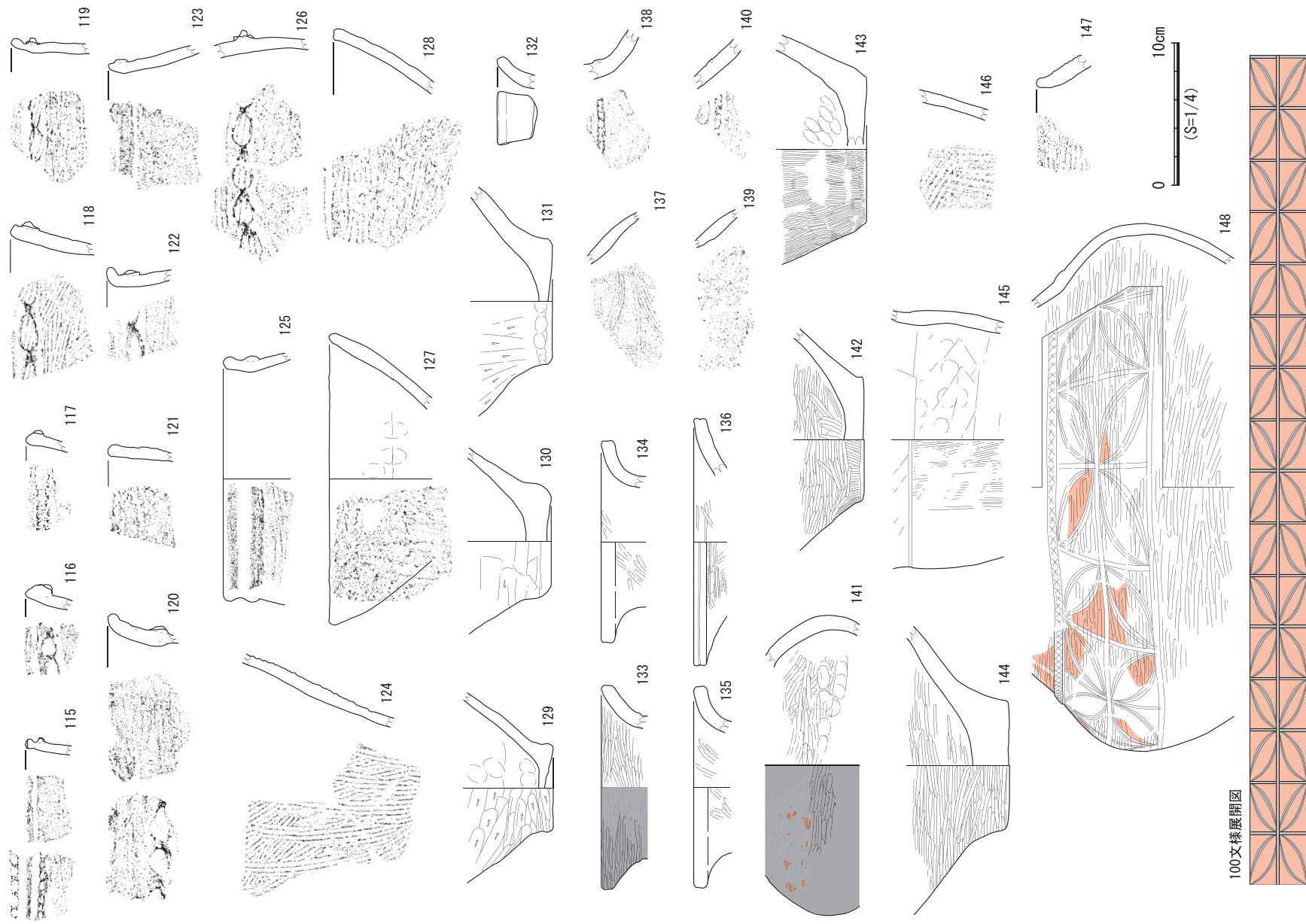


図 82 SK04945 遺物実測図 (1)



部は平坦気味となるが外面がわずかに突出する。突帯を端部からわずかに離れて貼付し、126と類似する間隔の大きな貝による〇字状の押圧を加える。突帯以下は右下がりの貝殻条痕が認められるが、やや方向がまちまちである。119、122は深鉢口縁。端部を折り返して、その下に突帯を貼付する。119は突帯上に貝による〇字状の押圧が認められる深鉢。122の突帯上には間隔の大きいユビによる押圧が認められる。突帯以下は貝殻条痕である。122はわずかに口縁部が内傾するが、端部で外反する。120は口縁部が緩やかに外反して、端部は凹凸が目立つ雑なつくりである。突帯にユビによる押圧が認められる。内面にはヨコ方向のケズリが認められる。121は口縁端部をやや肥厚気味にする。内外面ともナデによって仕上げられる。123は口縁部が内傾して、端部直下に断面の低い素文突帯が貼付される深鉢。突帯以下にはケズリ調整が認められる。124は深鉢の胴部片。数本単位のクシ状工具による条痕が認められる。右下がりの単斜状の条痕の上から、縦位の条痕が間隔をあけて加えられている。125は変容壺。口縁部が内傾し、端部が肥厚する。端部からやや離れて素文突帯が貼付され、突帯以下には貝による条痕が認められる。126は変容壺の肩部。肩部に間隔の大きい貝による〇字状の押圧が認められる。127は口縁部がやや外傾する鉢。端部はわずかに外反し、外面はユビナデの凹凸が顕著に残る。128は口縁部が127同様、外傾する大型の鉢。端部は凹面を形成するほど強いヨコナデが加えられ、外面は入念なケズリ調整が認められる。内面は丁寧なナデにより、平滑に仕上げられている。129～131は底部。胴部が外傾しながら立ち上がり、外面にはケズリ調整が認められる。胎土・焼成は128に類似する。底部中央がやや窪む。

132～148はI期の土器である。132～136は壺の口縁部。132はやや外反の弱い口縁部で端部が平坦である。133～135は頸部から短く口縁部が外反する。端部は平坦である。134、135は同一個体の可能性がある。133は頸部に削り出しの段が認められ、器面全体に黒色顔料を塗布する。後述する148の同一個体の可能性がある。136は外反の強い口縁部で端部に1本の沈線が認められる。137、139、141、148は壺の胴部。139は磨耗が著しいが、細い線による無軸木葉文が認められる。137も139と同様の無軸木葉文が施文されるが、間隔からみて137より大型品と考えられる。141は外面全体に黒色顔料を塗布し、磨耗のため観察が困難だが、一部に連弧状の赤彩を施文している。138は壺の頸部。削り出し突帯上に刺突文を加える。140は壺胴部片。138と文様が酷似し、同一個体と考えられる。142と144は壺底部。144は大型で142の外面には黒色顔料が付着する。143は甕の底部で、底部中央が接地面よりやや上がる。145は甕の胴部。器形の変化点に沈線が1本認められる。沈線以下に細かなハケが認められる。146は磨耗の顕著な土器片だが、羽状の条痕が認められる。I期の条痕文系の土器であろう。148は胴部3分の1程度が残存し、文様構成全体が復元可能な無軸木葉文が認められる。頸胴部境には削り出し突帯があり、その上に斜格子文、突帯の下端のみに太い沈線を施文する。木葉文は頸胴部境の沈線とその下にある2本1組の細い沈線によって区画された間に施文される。横位の沈線、縦位の沈線、木葉文の順に施文される。木葉文は3本1組の沈線による施文である。赤彩が認められる。磨耗のため観察が難しいが、3本1組の木葉文以外の部位を赤彩した可能性が高い。また、同様の文様意匠を突帯より上に赤彩のみで、施文した可能性がある。赤彩同様に磨耗のため判断が難しいが、黒色顔料の付着も認められる。

151～154は木製品、149と150は石器類である。149は長さ21.6cmの大型磨製石斧。刃部は両刃で基部とともに研磨により整えられている。基部中程には柄装着時に付着した可能性のある黒色の

付着物が認められる。150は粗製刃器。楕円礫の縁辺から作出した横長剥片を素材とし、下部に細かい剥離を施し刃部を形成している。151は編物・織機の関連具と考えられる。蔓植物を巻いて束にした製品である。152～154は柄穴が認められないので泥除未成品と考えられる。いずれも長さ約35

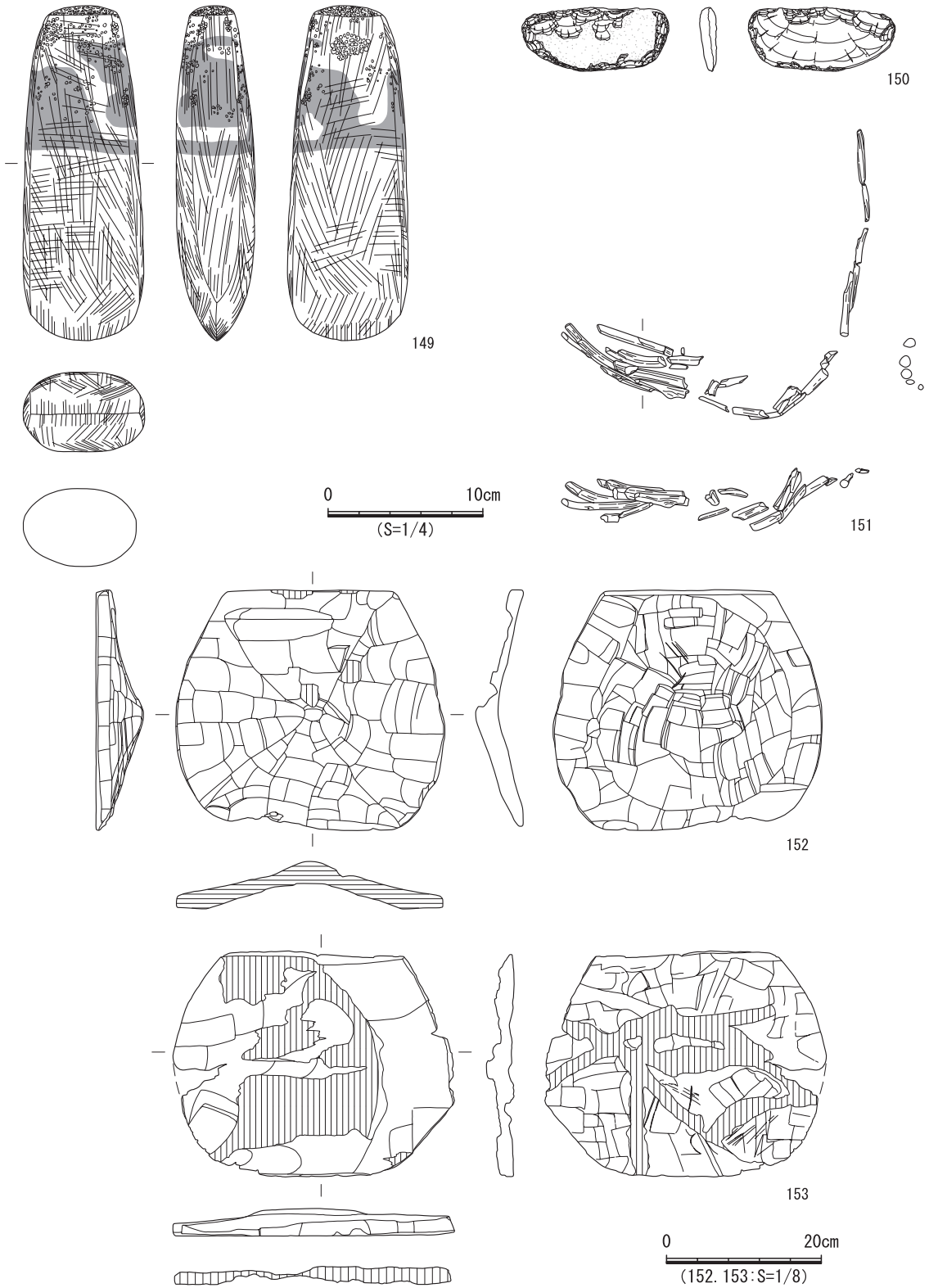


図 83 SK04945 遺物実測図 (2)

cmで陣笠形の形状が類似し、出土地点も近接することから、同一のみかん割材から切り離された段階のものと考えられる。152はほぼ完存している。中央が隆起し、断面形が逆V字形である。整形が中央の突起まで丁寧に行われており、裏面は周縁部が平坦に仕上げられている。153と154は陣笠型である。

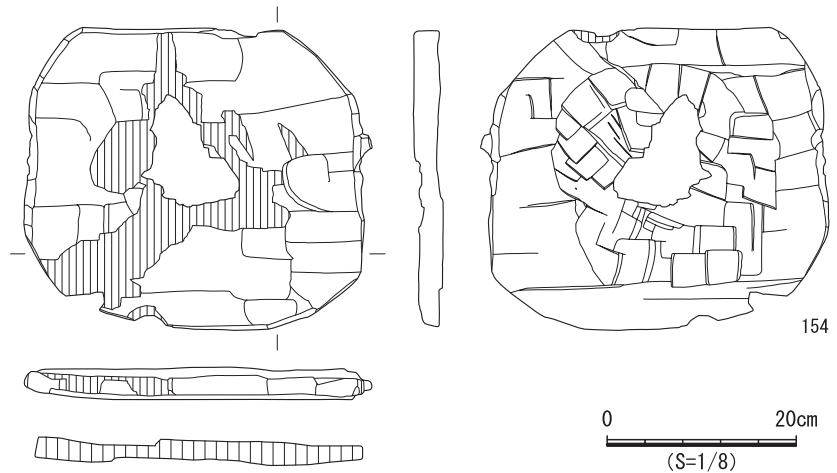


図84 SK04945 遺物実測図(3)

154の中央部裏面が切削により円形に窪む。153は中央部分がわずかに隆起し、裏面は中央まで整形が及んでいない。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期後半～I期前半と考えられる。

SK06085 (遺構：図86、遺物：図85)

**検出状況** 西部東側南寄りに位置する。南側は調査区域外にあり、平面形はやや不明瞭であった。

**形状** 長軸長約0.4mで、平面形は不整形を呈する。深さは0.1mに満たず、底面は平坦で、壁面の傾斜は緩やかである。

**埋土** ブロック土を含む暗灰黄色土が単層で堆積する。ほぼ中央で残りの良い土器が潰れたような状態で出土したことから、人為堆積と考えられる。

**遺物出土状況** I期壺(155)が口縁部を南に向けて潰れたような状態で出土した。壺の南東側には、径5mm程度の赤色顔料が確認できた。また、土器片を除去すると下から楔形石器(156)が出土した。

**出土遺物** 155はI期壺。遠賀川系の壺で、口縁部が短く外反し、口頸部、頸胴部の境界にそれぞれわずかな削出し段を形成し、その上下に太い沈線を加えている。胴部は膨らみが強い。156は黒曜石製の楔形石器。上下の縁辺がほぼ平行し、階段状の剥離が発達している。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。

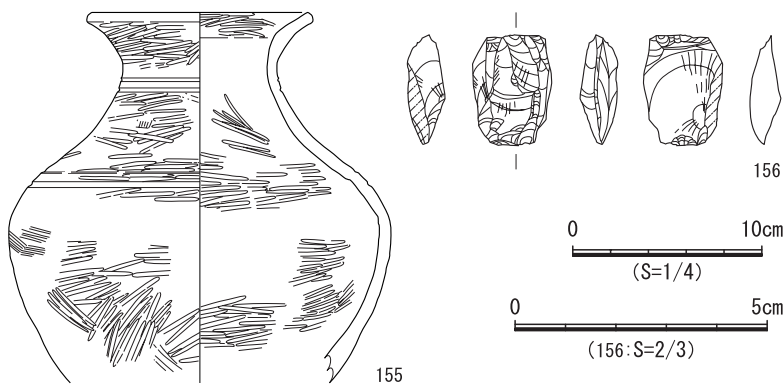


図85 SK06085 遺物実測図

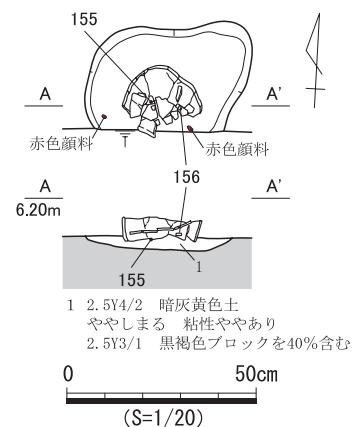


図86 SK06085 遺構図

- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色土 ややしまる 粘性ややあり
- 2 2.5Y3/1 黒褐色ブロックを40%含む

## 6 自然流路

縄文時代晩期～I期の自然流路として、NR009、NR010、NR014～NR017の6条について報告する。このうち、縄文時代晩期の遺物のみが出土した自然流路はNR010のみであり、他は縄文時代晩期～I期の遺物が含まれる。また、NR002下層では縄文時代晩期～I期の遺物が含まれるが、NR002については本章第4節にて記載する。

NR009 (遺構：図87～89、遺物：図90)

検出状況 西部西側中央に位置し、NR002底面で検出した。北西側から西側が2010年度の、東側が

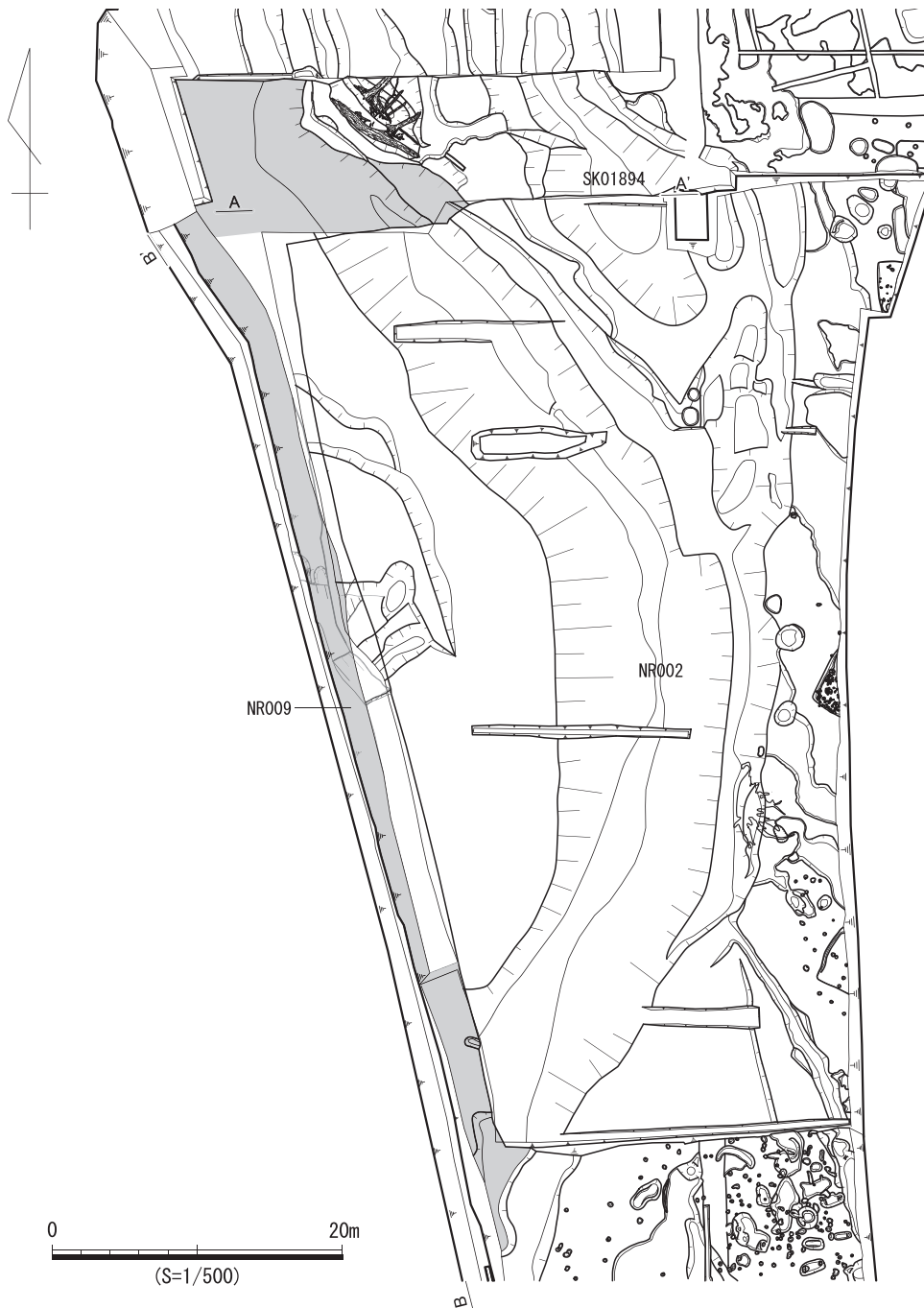


図87 NR009遺構図(1)



2008年度の調査区である。2008年度には平面形を把握できなかったが、2010年度ではNR002埋土をすべて掘削しても、その底面から縄文土器や弥生土器の小片が出土したため、2008年度との調査区境の壁面を精査した。すると砂礫層中にわずかに縄文土器やI期の土器が含まれていることが確認でき、本遺構は遺物を包含する自然流路と判断した。

**形状** 確認できた北東端と南端の壁面は、いずれもNR002の東壁面に連続していた。NR002下層（7～10層）は縄文時代晩期から弥生時代前期頃に埋没している（本章第4節参照）ことから、NR002下層の水流部が、本遺構の最終段階の河道であったと考えられ、それ以前の水流部の平面形は確認できていない。なお、NR002の底面から最大で1.7m下まで遺物を包含している。なお、確認できた北東端と南端の壁面の傾斜はいずれも緩やかであった。

**埋土** 8層に分層した。北側に堆積する砂礫（図89B-B'埋土20・28～31層）は、およそ水平に分層できた。20・29・31層は円礫が主体となる層で、上下関係なく直径約10cmの円礫が含まれていることから、洪水堆積層と考えられる。これらの層は、調査区中央付近で埋土14層に覆われる。14層は粗砂・微砂・直径1cm以下の円礫が主体の層であり、一定量の水による堆積と考えられる。14層は調査区南側で13層に覆われる。13層は14層より大きな円礫を含み、直径5～8cmの円礫も約1割程度含まれていることから、やや流れの強い水による堆積と考えられる。また、13層は9層と11層に覆われ、植物遺体や微砂が筋状に堆積していることから、最終段階は調査区南側が窪地として残ったと考えられる。

**遺物出土状況** 埋土より土器751点、石器類4点、木製品35点が出土した。土器はB-B'29層と30層から縄文時代晩期後半～I期の破片が比較的多く出土した。これらは数点が一定の範囲に散在して

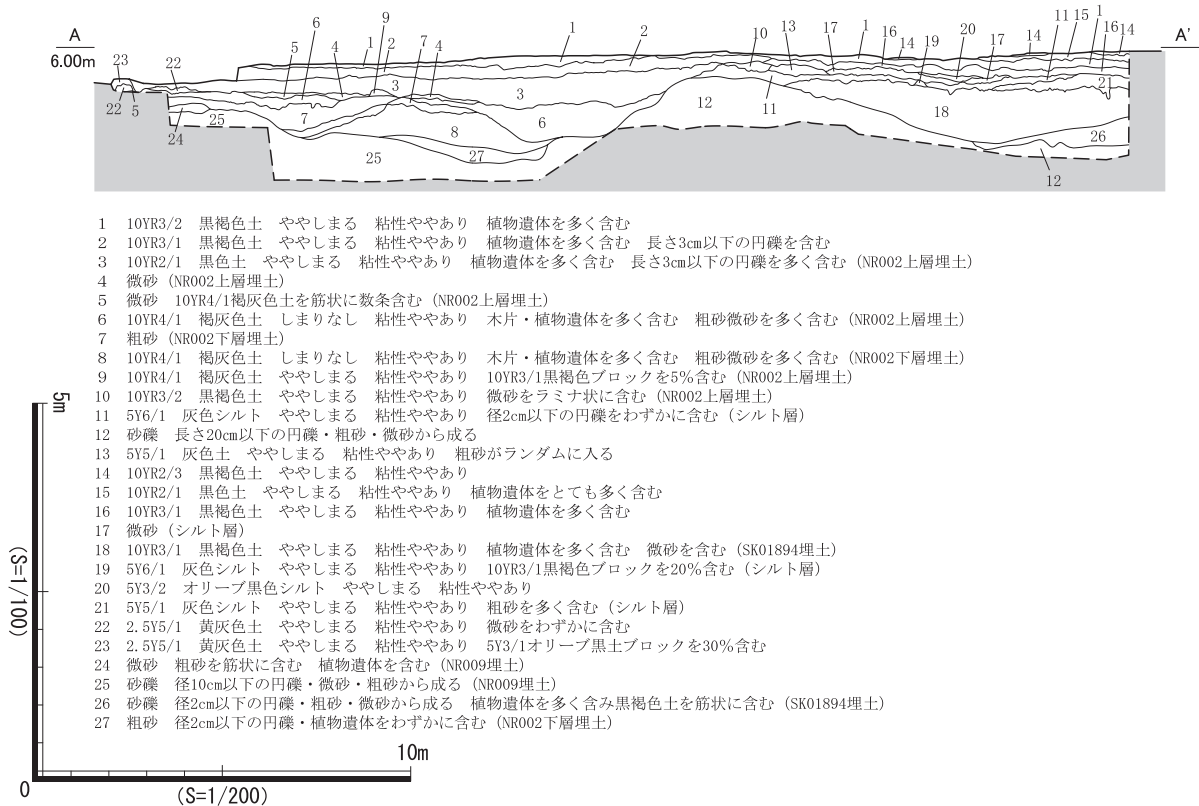


図88 NR009 遺構図 (2)

出土することが多く、ほとんど出土しない範囲もあり、平面的にみると出土量に粗密の差があった。また、13～14層より以南では751点中、約200点の土器が出土した。土器は縄文時代晩期後半～I期のもが多いが、遺物量は北側より少ない。また、埋土最上層である9層からV期高坏(176)が出土した。

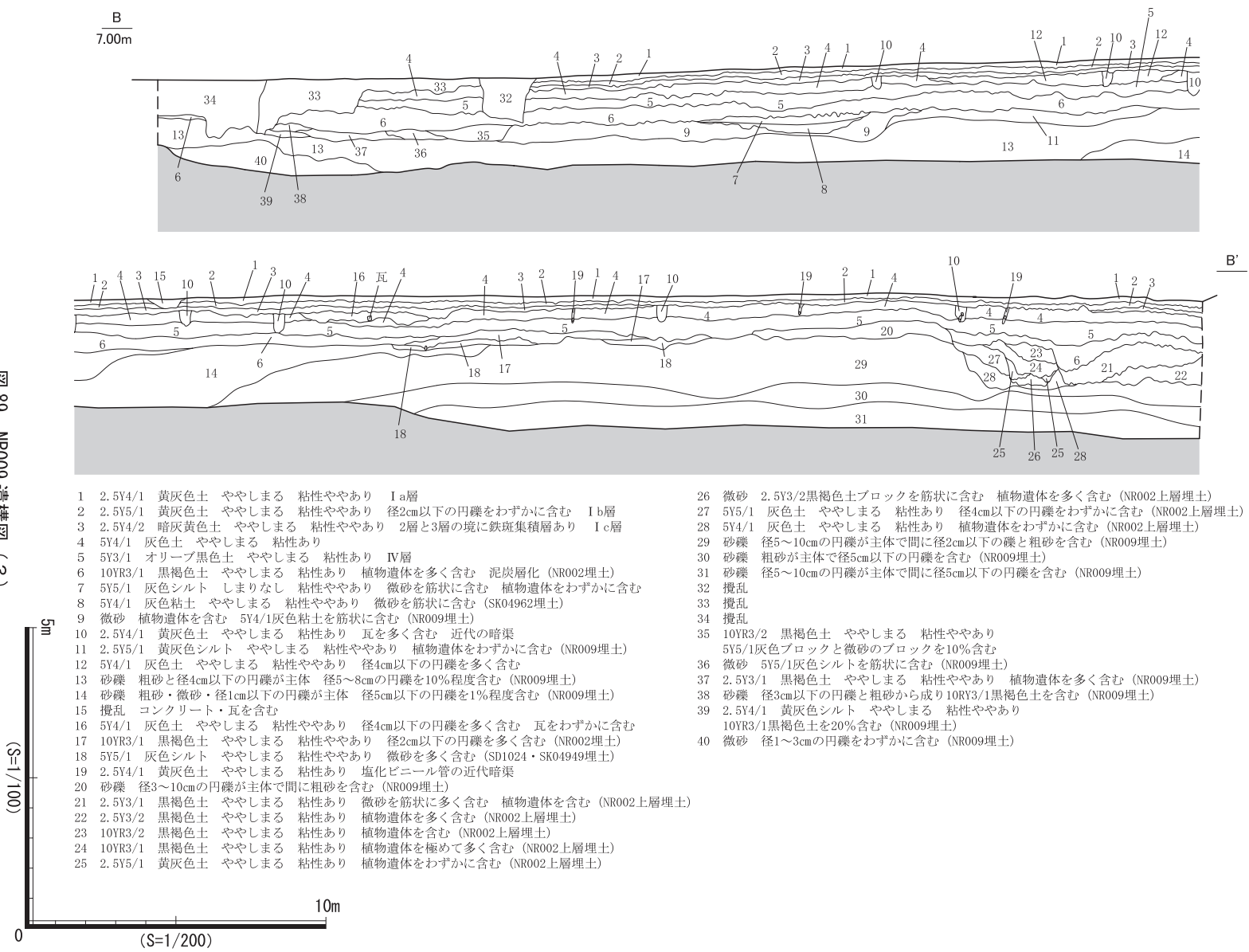


図 89 NR009 遺構図 (3)



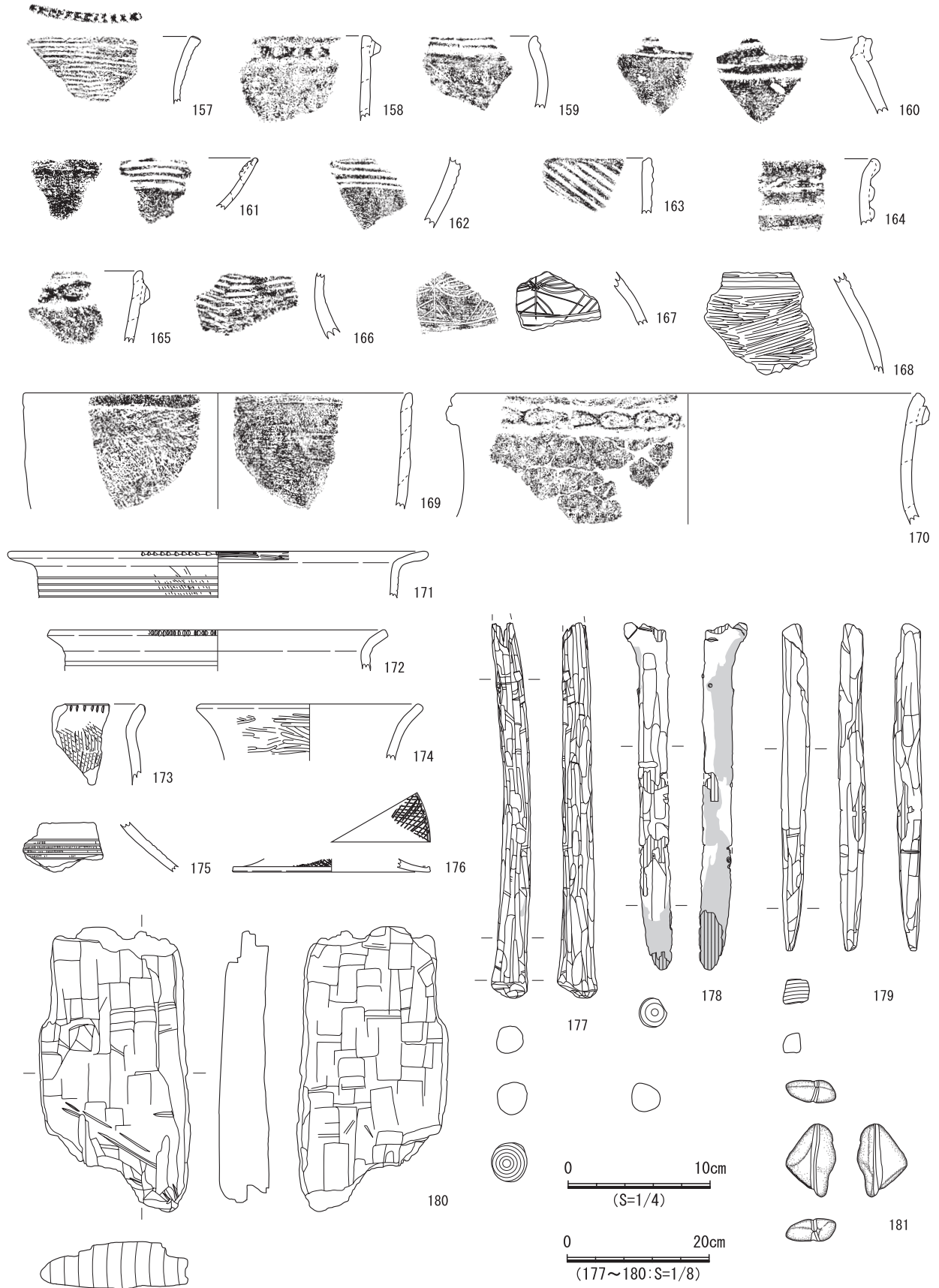


图90 NR009 遺物実測図

**出土遺物** 157は口縁部がやや外反する縄文時代晩期中葉の深鉢。端部が平坦で押圧が認められる。158は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部直下に断面三角形の突帯上をD字状の押圧が認められる。159～162は縄文時代晩期後半の鉢。159は口縁部が内傾し、端部には浮線文状にもみえる沈線が2本認められる。160はやや大型の鉢で、口縁部が山形を呈する。外面、端部、内面に三角形の抉りが認められる。161は口縁部内面を肥厚し、鍵の手状の一部とみられる浮線文を施文する。162は眼鏡状の浮線文が認められる。163は口縁部がわずかに内湾し、砲弾形を呈する深鉢。右下がりの条痕が認められる。164は縄文時代晩期終末の変容壺。素文突帯が2条貼付し、口縁部を肥厚する。165は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部が内湾し、端部はやや尖り気味である。端部からやや離れた位置に突帯を貼付し、その上を貝によるO字状の押圧を加える。突帯以下には右下がりのケズリが認められる。166はI期壺頸部。条痕が認められる。167、168はI期壺の胴部。167は有軸の木葉文、その下に山形文が認められる。168は削り出し突帯上に太い沈線を1条加える。169は口縁部がほぼ直立気味となる深鉢。外面にはケズリが認められる。170は縄文時代晩期終末の深鉢。口縁部がやや内傾し、丸みをもつ端部からわずかに離れた位置に突帯を貼付する。突帯上は指によるO字状の押圧が認められる。171～173はI期甕。171は口縁部が逆L字状に屈曲し、端部はやや尖り気味である。端部には刺突文、頸部直下には4本の沈線が認められる。内面にはミガキが施される。172は端部が平坦で刺突文を施文する。頸部には太い沈線が1条認められる。173は口縁部が短く弱く外反する。端部には刺突文を施文する。174はI期壺。口縁部が外反し、頸部には削り出しの段が認められる。175はI期壺胴部。削り出し段より下に沈線4条が認められる。176はV期高坏J類脚部。斜格子文が認められる。

177～179は棒材。177は表面に細かい加工が認められ、下端は斜めに成形されている。上方はやや湾曲するが、その用途は不明である。178は下端が炭化しており、中央から上部にかけて樹皮が残存している。179は断面方形を呈する削り出し材であり、下端は尖らせている。180は板材で、表裏面に縦方向の加工痕が残る。181は切目石錘であり、両側から斜め方向に擦り切った溝が素材を全周している。

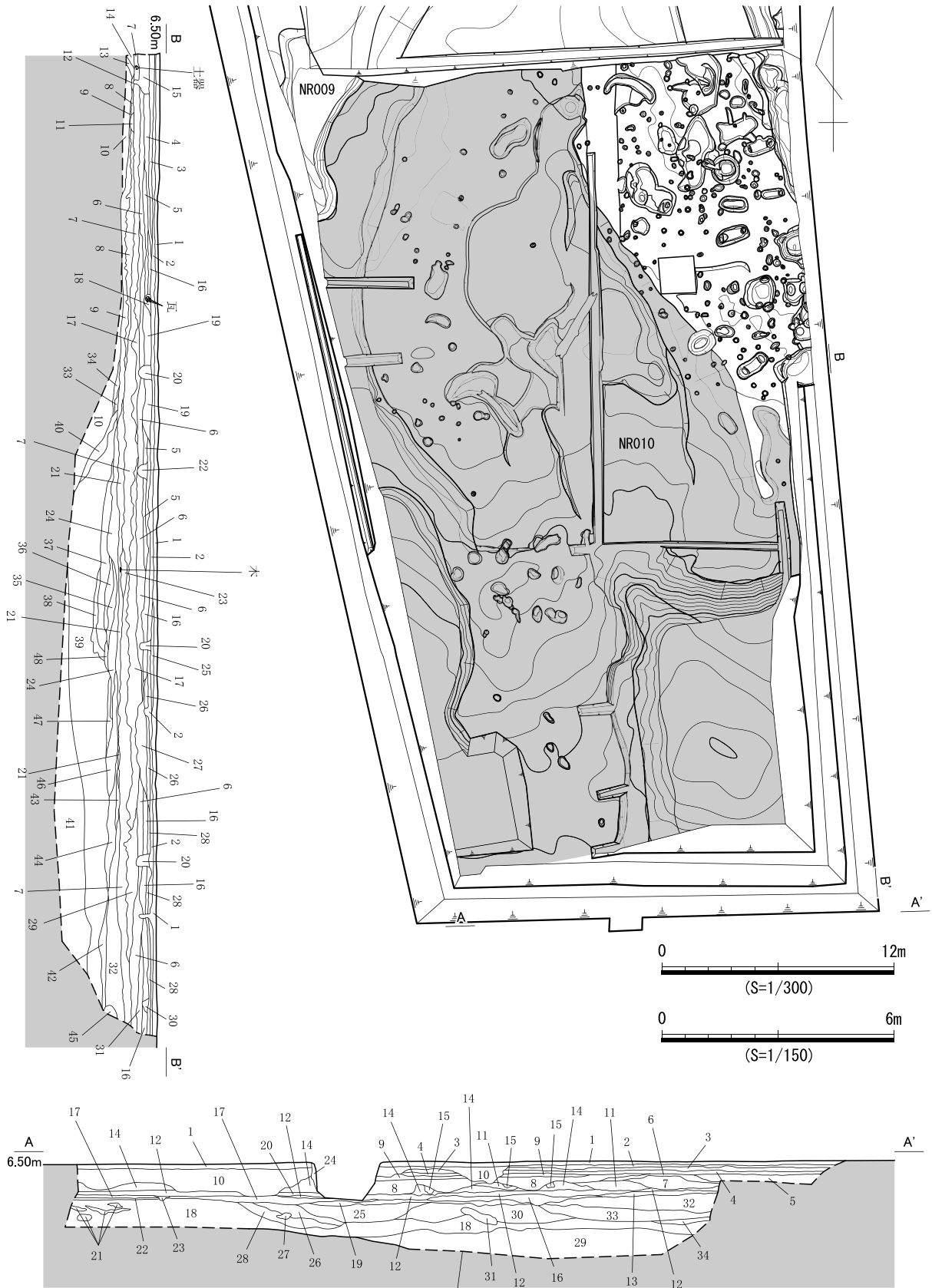
**時期** 出土遺物の時期から縄文時代晩期～I期にかけて水流があり、V期にはほぼ埋没して部分的に窪地として残ったと考えられる。

#### NR010 (遺構：図91・92、遺物：図93)

**検出状況** 西部西側南寄りに位置し、NR011の底面にて検出した。北端はNR009に切られており、本遺構埋土掘削後にSB446を検出した。

**形状** 調査区のほぼ全域が流路埋土で覆われているが、北東隅までは堆積が及んでいない。流路の幅は不明であり、調査区南壁沿いではIV層下から約1.8m掘削すると著しい湧水となり、底面を確認できなかった。底面は3箇所様相が異なる。調査区中央は浅い平坦面で南へ向かって緩やかに傾斜している。同南東側は微砂が厚く堆積する落ち込みがあり、その壁面は急傾斜である。同西側は調査区壁面に沿って西へ下降しており、自然流路の水流部が調査区の西側にあると考えられる。

**埋土** 上層に直径10cm以下の大きな円礫を含む砂礫が厚く堆積し、下層は微砂が主体となる層であり、南東側と西側の落ち込みに堆積している。なお、南東側の落ち込みの壁面沿いには、植物遺体を



湧水が著しく、掘削不能

図 91 NR010 遺構図 (1)

A-A'

- 1 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 1a層 現表土
- 2 2.5Y4/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 1a層
- 3 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 1b層
- 4 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 5 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y4/1灰色ブロックを15%含む
- 6 2.5Y3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y5/1灰色ブロックを3%含む
- 7 5Y5/1 灰色粗砂 ややしまる 粘性ややあり
- 8 2.5Y4/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 9 2.5Y5/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 10 攪乱
- 11 10YR4/1 褐灰色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を多く含む
- 12 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を多く含む (NR012埋土)
- 13 砂礫 径10cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る 10YR2/1黒色土を含む (NR011埋土)
- 14 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y6/1灰色ブロック10%含む
- 15 7.5Y6/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 10YR3/1黒褐色ブロックを20%含む
- 16 5Y5/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 微砂と植物遺体を多く含む (NR011埋土)
- 17 砂礫 径1cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る 径5cm程度の円礫をわずかに含む (NR011埋土)
- 18 砂礫 径10cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る (NR010埋土)
- 19 粗砂 植物遺体をわずかに含む (NR011埋土)
- 20 2.5Y5/1 黄灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR2/1黒色ブロック、植物遺体、径2cm以下の礫をわずかに含む
- 21 7.5Y6/1 灰色粘土 ややしまる 粘性ややあり 10YR2/1黒色ブロック、植物遺体を含む (NR010埋土)
- 22 5Y6/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり (NR011埋土)
- 23 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を含む (NR011埋土)
- 24 現代用水の掘方埋土
- 25 砂礫 粗砂と径1cm以下の円礫が主体で、径3~5cm程度の円礫をわずかに含む (NR011埋土)
- 26 砂礫 粗砂と径1cm以下の円礫が主体で、径3~5cm程度の円礫を多く含む (NR011埋土)
- 27 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を含む (NR011埋土)
- 28 N6/0 灰色粘土 ややしまる N4/0灰色粘土ブロックを40%含む (NR011埋土)
- 29 微砂 微砂が主体で部分的に粗砂を含み、径1cm以下の円礫をわずかに含む (NR010埋土)
- 30 砂礫 粗砂と径10cm以下の円礫から成る (NR011埋土)
- 31 2.5Y5/1 黄灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 直径30cm程度の流木含む (NR011埋土)
- 32 砂礫 径10cm以下の円礫・粗砂から成る (NR011埋土)
- 33 砂礫 粗砂と径3cm以下の円礫から成り、西側は粗砂の比率が高い (NR011埋土)
- 34 微砂 植物遺体を多く含む 10YR3/1黒褐色土を筋状に含む (NR011埋土)

B-B'

- 1 10YR5/1 褐灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 2 2.5Y5/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の円礫をわずかに含む
- 3 2.5Y4/1 黄灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 4 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の円礫をわずかに含む
- 5 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 6 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり
- 7 10YR2/1 黒色土 ややしまる 粘性あり 径2cm以下の円礫をわずかに含む 植物遺体と土器を多く含む
- 8 5Y3/2 オリーブ黒色シルト ややしまる 粘性ややあり 10YR2/1黒色ブロックを20%含む (NR012埋土)
- 9 微砂 径1cm以下の円礫をわずかに含む (NR011埋土)
- 10 砂礫 径15cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る
- 11 10YR3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の円礫をわずかに含む
- 12 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む
- 13 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径2cm以下の円礫・粗砂・微砂を含む
- 14 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 径1cm以下の円礫・粗砂を含む
- 15 10Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 10Y5/1灰色ブロックを30%含む
- 16 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 10YR3/1黒褐色ブロックを30%含む
- 17 10YR3/2 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 7.5Y4/1灰色ブロックを40%含む
- 18 7.5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 暗渠埋土
- 19 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 5Y3/1オリーブ黒色ブロックを5%含む
- 20 7.5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 暗渠埋土
- 21 2.5Y3/1 黒褐色土 ややしまる 粘性ややあり 木片・植物遺体を含む (NR012埋土)
- 22 5Y4/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり 暗渠埋土
- 23 粗砂 10YR3/1黒褐色土を筋状に含む 径1cm以下の円礫・木片をわずかに含む (NR012埋土)
- 24 微砂 植物遺体を含む (NR011埋土)
- 25 5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性ややあり
- 26 5Y3/2 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり
- 27 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性あり 植物遺体をわずかに含む
- 28 2.5Y6/1 黄灰色土 ややしまる 粘性あり
- 29 7.5Y5/1 灰色土 ややしまる 粘性あり 10YR3/1黒褐色土ブロックを5%含む
- 30 10YR4/1 褐灰色土 しまりなし 粘性ややあり 植物の根を多く含む
- 31 5Y5/1 灰色土 しまりなし 粘性ややあり
- 32 砂礫 径10cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る (NR011埋土)
- 33 砂礫 粗砂と径1cm以下の円礫から成る (NR010埋土)
- 34 5Y4/1 灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 植物遺体をわずかに含む (NR010埋土)
- 35 砂礫 粗砂・微砂・径1cm以下の円礫から成る (NR011埋土)
- 36 砂礫 粗砂・微砂・径3cm以下の円礫から成る (NR011埋土)
- 37 微砂 径2cm以下の円礫をわずかに含む2.5Y4/1黄灰色土を筋状に含む (NR011埋土)
- 38 粗砂 2.5Y3/1黒褐色土を含む (NR011埋土)
- 39 砂礫 径10cm以下の円礫・粗砂・微砂から成る (NR010埋土)
- 40 2.5Y4/1 黄灰色シルト ややしまる 粘性ややあり 植物遺体集積層を筋状に数条含む (NR010埋土)
- 41 微砂 微砂が主体で部分的に粗砂を含み径1cm以下の円礫をわずかに含む (NR010埋土)
- 42 微砂 植物遺体を多く含む 10YR3/1黒褐色土を筋状に含む (NR011埋土)
- 43 砂礫 粗砂と径1cm以下の円礫から成る (NR011埋土)
- 44 砂礫 粗砂と径3cm以下の円礫から成る (NR011埋土)
- 45 5Y3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 粘性ややあり 植物遺体を含む (NR011埋土)
- 46 微砂 粗砂と径5mm以下の小礫を含む (NR011埋土)
- 47 微砂 植物遺体と2.5Y5/1黄灰色土を筋状に含む (NR011埋土)
- 48 砂礫 粗砂と径2cm以下の円礫から成る (NR011埋土)

図 92 NR010 遺構図 (2)



筋状に含むシルト層が堆積している。

**遺物出土状況** 埋土から土器75点、石器類18点、木製品7点が出土した。遺物は検出面から約0.1m掘り下げると主に調査区南側から散在して出土し、南東側の落ち込みの壁面沿いから数点がまとめて出土した。しかし、埋土下層の微砂からは出土遺物を確認できなかった。

**出土遺物** 182は口縁部が外反する縄文時代晩期中葉の深鉢。端部が平坦で、押圧が認められる。口縁部には横走る条痕が認められる。183は口縁部が内湾する縄文時代晩期後半の深鉢。端部を肥厚し、その下に断面半円形の突帯を貼付する。突帯以下にはケズリが認められる。184、189は口縁部が内湾する縄文時代晩期後半の深鉢。184は口縁端部に断続的な強いナデが認められる。胴部は右下がりのケズリが認められる。185は口縁端部がやや尖り気味の縄文時代晩期後半の深鉢。端部からわずかに下がった位置に突帯を貼付し、突帯をO字状にユビで押圧する。突帯以下にはケズリが認められる。186、187、190は口縁部が外反し、端部直下に突帯を貼付する縄文時代晩期後半の深鉢。突帯上にはD字状の押圧が認められる。187の口縁端部は内傾する面を形成する。190の胴部は口縁部と境界でわずかに屈曲し、条痕が口縁部では横方向、胴部では左下がりとなる。188は口縁部がやや外反する縄文時代晩期後半の深鉢。外面には輪積みの痕跡がそのまま認められる。191は縄文時代晩期後半の口縁部が逆くの字状となる浅鉢。192はチャートのMF。縁辺に微細な剥離が観察できる。

**時期** 出土土器はいずれも縄文時代晩期後半であり、I期の土器が含まれないことから、縄文時代晩期後半に埋没したと考えられる。

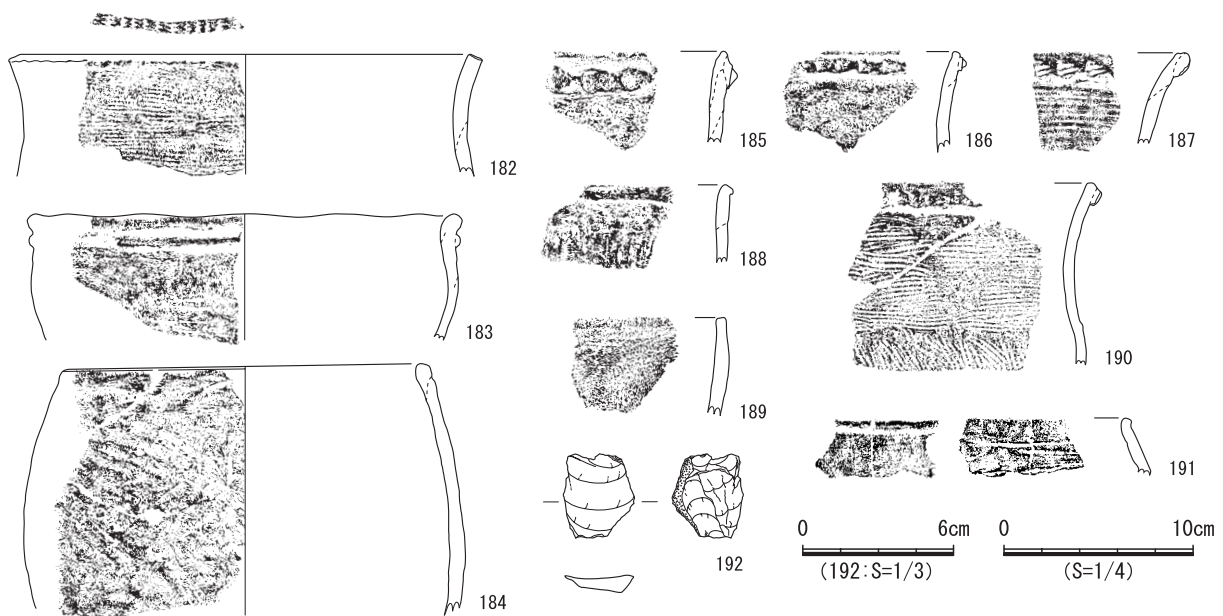


図93 NR010 遺物実測図

NR014 (遺構：図94、遺物：図95・96)

**検出状況** 西部西側南端に位置し、Ⅷ期頃に埋没したNR013完掘後に検出した。調査区域の北側は砂礫層が表出し、南側は黒色シルトが帯状に堆積していたため、黒色シルトの範囲を平面形として確定した。流路の北辺は明瞭に確認できたが、南辺は調査区域外に広がる。

**形状** 平面形は、東北東-西南西方向に主軸をもつ。断面形は皿状で、南側壁面の傾斜は緩やかで、南壁面には平坦面がある。規模は不明であるが、確認できた範囲は幅約10.0mである。底面には西側と東側にそれぞれ1箇所ずつ落ち込みが確認でき、東側の落ち込み底面が流路最深部であり、深さ約1.20mである。

**埋土** 埋土は主に粘性の高い黒色シルトであり、粗砂や微砂、灰色シルトなどがラミナ状に堆積する。また、埋土全体に草木の小枝や葉、植物繊維などの有機物が多量に含まれ、埋土の最下層からは複数の流木がまともって出土した。基本的に流水が緩やかな状態で堆積が続いたと考えられる。

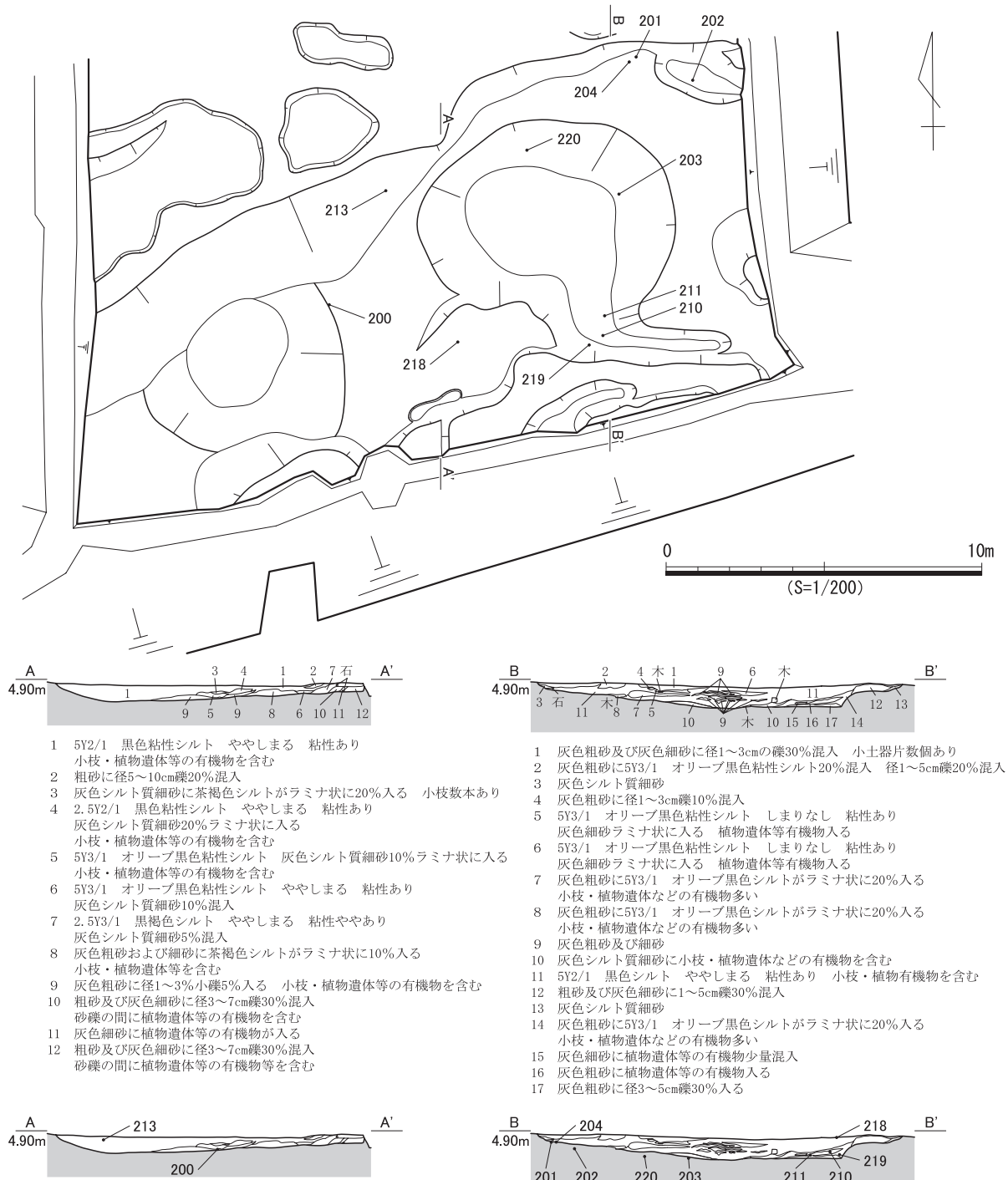


図 94 NR014 遺構図



**遺物出土状況** 埋土中から土器 1,163 点、石器・石製品 7 点、木製品 160 点、他に種子類が 132 点出土した。土器は壺、甕など I 期遠賀川系土器が主体となるが、少量ながら縄文時代晩期や II 期の土器も混入する。また、垂流遠賀川系、条痕文系、沈線文系の土器類も出土した。木葉文の施された壺胴部の破片や穿孔の認められる壺底部等が特徴的だが、いずれも破片のみの出土が大半である。上層の NR013 と比べると木製品は少なくなるものの、板材や紡績具などが出土している。種子はほとんどがクルミである。

**出土遺物** 193～196、199、202～204 は I 期遠賀川系土器の壺。193、194 は口縁部が短く外反する。193 は頸部にわずかな削り出し段を形成する。194 は頸部に沈線 1 条が認められる。195 は口縁部が大きく外反する。端部下端の刺突により、端部下端がわずかに拡張される。196 は頸部。削り出し突

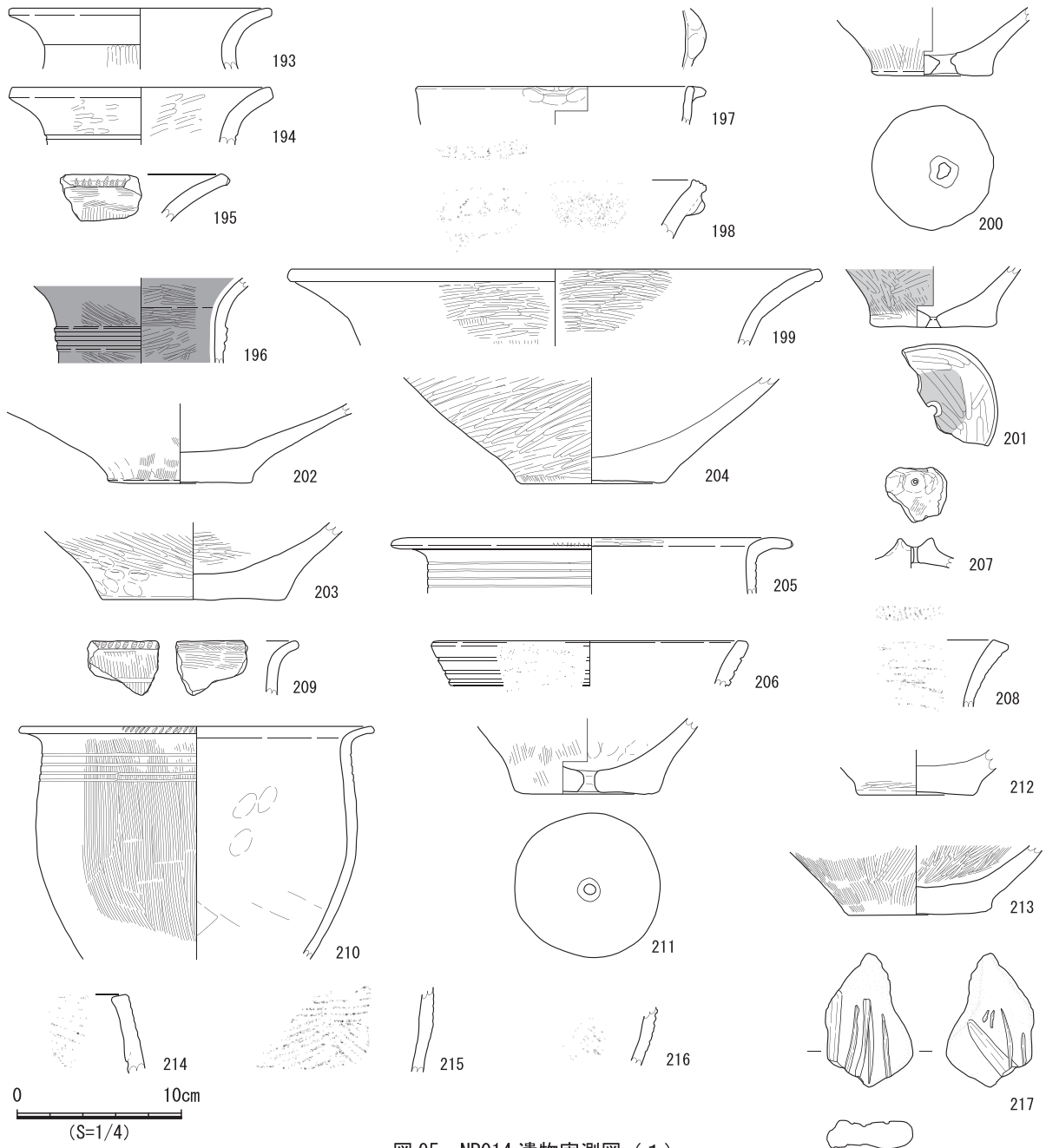


図 95 NR014 遺物実測図 (1)

帯を形成した上に、やや太い沈線が2条施文される。内外面ともにミガキ調整が施される。器面が摩耗しているが、黒色顔料塗布の可能性が高い。199は口縁部。大きく外反し、端部には平坦面を形成する。202～204は底部で、内外面にミガキを施す。203は摩耗が著しい。207は遠賀川系土器の壺蓋。天井部に穿孔があり、その両側2箇所に瘤状の突起が認められる。

200、209～212はI期遠賀川系土器の甕。200、211、212は底部で、200、211は焼成後の穿孔が認められる。212は割面の摩耗が顕著である。209は口縁部。逆L字状に開き、端部の平坦面には刺突が施される。外面には縦方向のハケ調整が認められ、屈曲部直下には太い沈線が1条施文される。210は口縁部が逆L字状となり、頸部に4条の沈線が認められる。胴部はなだらかに膨らむ。

197、213はI期遠賀川系土器の鉢。197は口縁部が弱く外反し、口縁端部に把手が貼付される。213は同じく鉢の底部で、外面はハケ、内面にはミガキによる調整が認められる。

206はI期甕。口縁部がやや外反し、端部が平坦である。半截竹管による沈線が2組認められ、沈線間には右下がりの条痕が認められる。214は内頸口縁の鉢。貝による右下がりの条痕が認められる。216はI期の沈線文系土器。壺もしくは鉢の胴部と考えられる。横方向の沈線の下に弧状となる文様が認められる。表面の一部や沈線の底面の一部にわずかに赤色化している箇所があり、赤彩されていた可能性がある。

198は条痕文系の壺。口縁端部直下にユビの押圧のある貼付突帯が認められ、端部には押し引きが認められる。内面には弧状の線刻状の痕跡が認められる。208はI期条痕文系の甕。口縁部が緩やかに外反し、端部に平坦面を形成してクシによる刺突を加える。外面には右下がりのクシによる条痕が認められる。215はI期条痕文系の深鉢。上半に横方向、下半に縦羽状の条痕が認められる。縄文時代晩期後半から続く横方向の条痕とI期にみられる縦羽状の条痕が組み合わさっている。

201は亜流遠賀川系土器の壺底部。内外面に煤が付着する。底部には焼成後の穿孔が認められ、穿

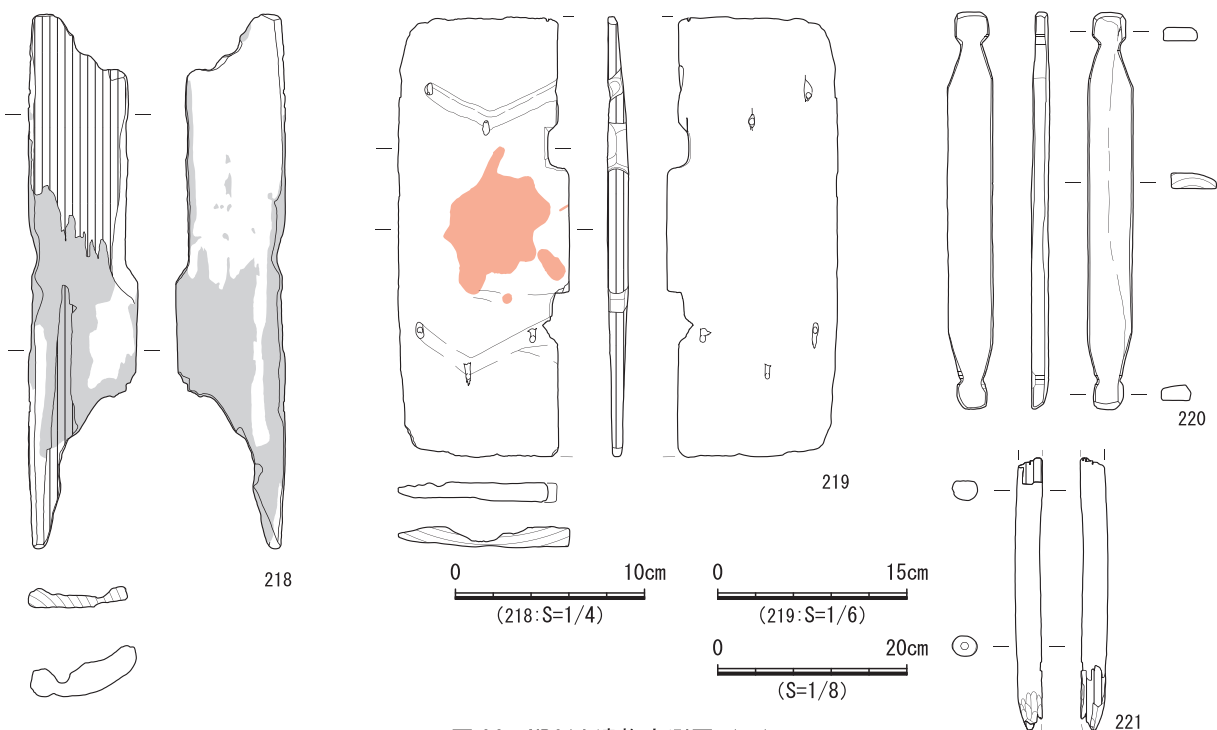


図 96 NR014 遺物実測図 (2)

孔の周囲には煤が付着しない。205は垂流遠賀川系土器の甕。口縁部が逆L字状に屈折して、端部に刺突が認められる。頸部には半截竹管による沈線が認められる。胎土は赤褐色で、雲母片が目立つ。

217は筋砥石。砂岩の表裏面に縦から斜め方向の複数の溝が確認できる。表裏面ともに溝が深く、下端の折損部の厚みは7mmである。

218は板材であり、表面の炭化が著しい。219は台か机の可能性があり。表面にV字状の浅い溝が上下2段に施され、それぞれの溝内に長さ約1cmの楕円形状の穿孔が2～3箇所確認でき、その内部に別の木材が入り込んでいる。また、右側面には長さ約3cmの欠き切りが2箇所にあり、表面中央部は大きく炭化している。220は有頭棒状材で、欠き切りの長さが右側面より左側面の方が長く、裏面の右側面はおよそ半分が斜めに傾斜している。紡織機の可能性がある。221は棒材であり、下端に細かい加工が施されている。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。

#### NR015 (遺構：図97、遺物：図98・99)

**検出状況** 西部西側南端に位置し、NR013完掘後に検出した。調査区域北側及び東側の排水溝壁面において大きな砂層の落ち込みを確認し、平面では砂礫層表出面において検出した。径のそろった礫が広がる範囲に、筋状にのびる細砂を確認し、流路の上端と判断した。

**形状** 西北西から東南東に向かって流れる流路であり、東西両端は調査区域外にのびる。東側で確認できる幅約5.0m、深さ約0.9mである。西側から浅い落ち込みが東にのび、北側からは深い落ち込みが合流し、水流は北西から東へと向かうと考えられる。東側の深い部分では、底面は丸みを帯び、壁面は緩やかに立ち上がる。

**埋土** 埋土は最深部で22層に分層した。上層には粘質土やシルト質の細砂が堆積しているが、下層になると粗砂や礫などの割合が多くなる。シルトや粗砂がラミナ状に入り、流水堆積であることが確認できる。全層にわたって、砂礫またはシルトの中に植物繊維などの有機物が混入する。

**遺物出土状況** 埋土中から土器2,462点、石器・石製品4点、木製品49点、種子類36点が出土した。東部北側の壁面際で一個体の鉢(245)が潰れたような形で出土しており、比較的遺存状態は良好である。出土する土器はほとんどが破片で、I期遠賀川系土器が主体となる。

**出土遺物** 222～237、240～244はI期遠賀川系の壺。222は小型品の壺。口縁部が短く外反して、端部は平坦である。端部には沈線1条が施文される。頸部には削り出し段を形成して、その下に沈線を施文する。口縁部には穿孔が認められる。223、224はともに、頸部から口縁部が短く外反する。頸部に削り出し突帯を形成し、その上に沈線を施す。224は端部にも沈線を施文する。225は口縁部が直立してから短く外反し、頸部には、削り出しによる段が形成される。226は丸くおさめた端部の一部に沈線状の凹みが認められる。227は直線的に外反し、焼成前穿孔が認められる。端部には沈線を施し、下端がやや拡張される。内外面とも黒色顔料が塗布される。228は頸部からの開きが直線的で、内面に黒色顔料が塗布される。229は、頸部外面に認められるやや太い沈線までの間は縦方向のハケ調整を施し、部分的にミガキも行っている。内面は全面にミガキを施す。焼成前穿孔が認められる。230は口縁部が大きく外反し、頸部に削り出し突帯が認められる。内外面ともに丁寧なミガキが認められ、突帯の幅は一定ではないが、突帯上にも丁寧なミガキが認められる。231は口縁部が大き

く外反する。穿孔が2箇所、頸部には連続しない沈線が認められる。232は口縁部が短く外反し、頸部に明瞭な削り出し段を形成する。径の小さい穿孔が認められる。233は壺頸部。削り出し段を形成しその下方に沈線を3条施文する。234は貼付突帯のある胴部片。突帯上にヘラによる刺突文が認め

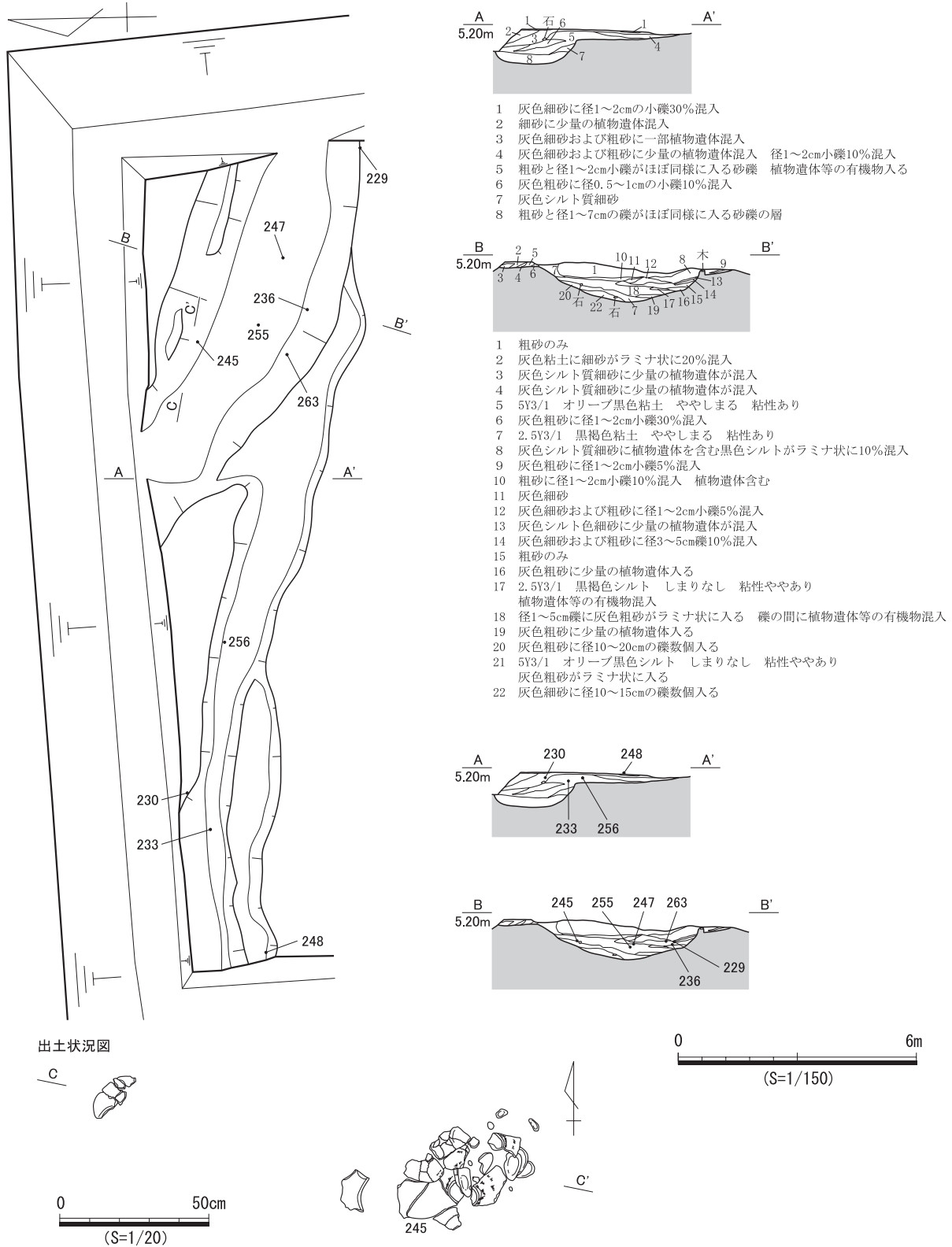


図 97 NR015 遺構図

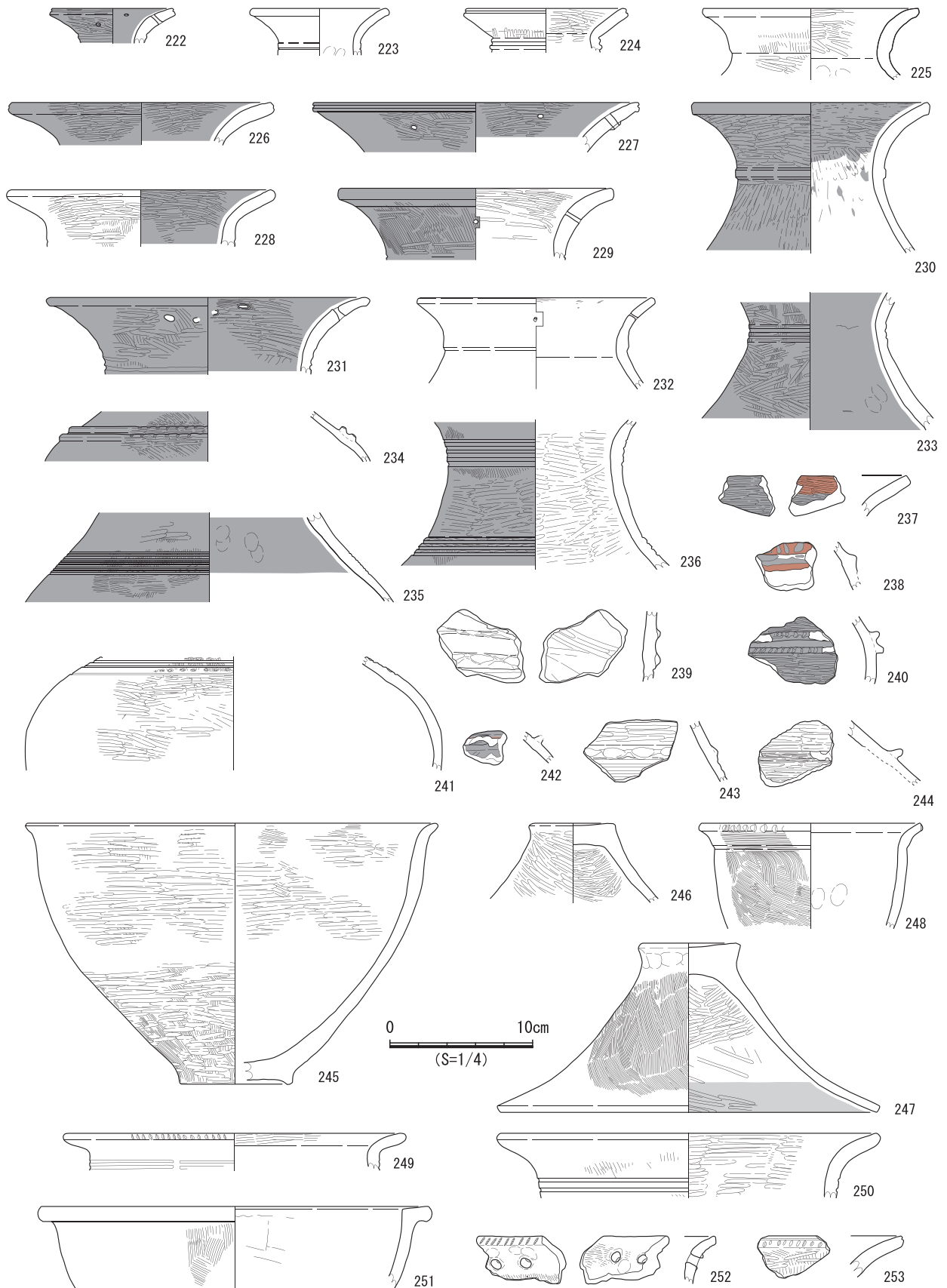


図 98 NR015 遺物実測図 (1)



られる。235は幅狭の沈線8条が認められる胴部片。244は丁寧なミガキのある貼付突帯が認められる。わずかに弧状を呈すことから、壺蓋の可能性もある。236は頸部と削り出し段より下に4条と3条の太い沈線をそれぞれ施文する。沈線間にはハケ調整が認められるが、頸部の沈線から削り出し段まで丁寧なミガキが認められる。237は内面に赤彩が認められる。240は胴部。2条の貼付突帯の上にヘラによるキザミが認められる。241は沈線間に円形刺突文を充填する。242はNR016出土264と同一個体の可能性のある貼付突帯のある胴部片。突帯周辺にわずかに赤色顔料の付着が認められる。243は壺胴部。胴部上半にユビの押圧のある突帯を貼付し、その直上はミガキ、直下に太い沈線を数条施文する。

248、250、252、254～256はI期遠賀川系の甕。246はI期遠賀川系の甕蓋で、天井部が完存する。254～256はいずれも底部。248は、頸部の削り出し段より口縁部が短く外反する。端部には刺突文が認められる。250は口縁部が外反して、頸部に沈線2条を施文する。252は径の大きい穿孔が2箇所認められる。端部には刺突文が認められる。

245、251はI期遠賀川系土器の鉢。245は口縁部から底部まで復元できた良好な資料。口縁部が短く外反し、胴部は口径を上回ることなく、なだらかに底部にいたる。内外面には横方向の丁寧なミガキが認められる。底部は両端がやや突出気味で、底部外縁にはハケ目調整が残る部位が認められる。251は口縁端部を水平に拡張する。259はI期深鉢。砲弾形を呈する深鉢の口縁部片。端部が強いヨコナデによって凹面を形成するとともに、左右に拡張される。外面にはケズリが認められる。

257はI期甕。口縁部が大きく外反する。端部を肥厚し、頸部以下にはケズリが認められる。258はI期条痕文系の甕。口縁部が外反して、内外面に条痕が認められる。端部には押し引きが認められる。260はI期内頸口縁鉢。端部が平坦で肥厚する。

238、239、247、249、253はI期垂流遠賀川系の土器片。238、239は壺。239は頸部片で、2条の押圧のある貼付突帯の下に沈線1条が認められる。238は眼鏡状の押圧のある貼付突帯のある胴部片。全体に黒色顔料の塗布が認められ、その上に赤彩による文様が認められる。突帯の上下端にそうようにして帯状の赤彩が認められ、さらに上部には、現状で4条の帯状の赤彩が縦方向に並んでいるのが認められる。小片のため、全体は不明だが、木葉文の一部の可能性もある。247は甕蓋で天井部から口縁部まで残存し全形の分かる良好な資料。胎土は赤褐色を呈し、胎土中に雲母片を多く含む。断面は傘形を呈し、天井部は平坦である。天井部両端はナデによってわずかに左右に肥厚される。外面は細かなハケ調整、内面にはミガキが認められる。口縁部内外面に円環状に煤や炭化物が付着する。249は甕。口縁部が逆L字状に屈折して、口縁部中程を肥厚する。端部と頸部にそれぞれ半截竹管による刺突文と沈線を施文する。253は甕口縁部で、緩やかに外反する大型品である。赤褐色の胎土である。端部下端を丸くおさめ、その上に沈線、刺突を加える。

261は縄文晩期後半の深鉢口縁部。262は縄文晩期後半の深鉢胴部で、焼成後に穿たれた小孔が認められる。

263は棒材であり、縦方向に細かい加工が施され、下端を尖らせている。

**時期** 出土遺物の時期から、I期と考えられる。



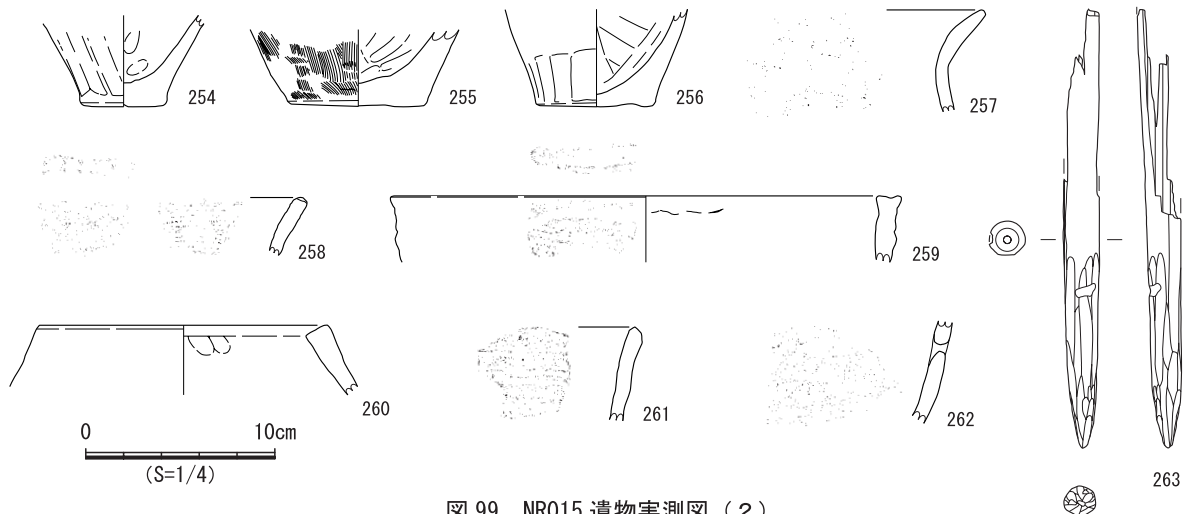


図 99 NR015 遺物実測図 (2)

## NR016 (遺構：図 100、遺物：図 101～104)

**検出状況** 西部西側南端に位置する。NR015 西側を精査し、調査区壁面にて NR015 の南辺よりさらに南側にて砂層が北に向かって落ち込むことを確認し、その砂層を流路の上端として平面形を検出した。

**形状** 平面形は南辺が NR015 より南にあり、北辺は調査区域外になる。底面の標高は西側が高く、東側に向かって緩やかに低くなる。遺構の平面形や流水方向から、本遺構の埋没過程で NR015 が形成されたと考えられる。

**埋土** 5層に分層した。砂礫が主体であり、植物遺体などの有機物が混入する。

**遺物出土状況** 埋土中から、土器 1,989 点、石器・石製品 1 点、木製品 20 点が出土した。土器はほとんどが破片であり、I 期遠賀川系土器が主体となる。穿孔が施された底部片や赤彩が施された胴部片などが特徴的である。東側底面からは長さ約 4.5 m の木材が出土し、表面に数箇所の削痕が確認できる。

**出土遺物** 264～265、268～277、279～282、285～287、290 は I 期遠賀川系の壺。264 は口縁部に突起がある希少な例で、口縁部から胴部にかけての部位が残る。口縁部が強く外反し、端部から長さ 1 cm 程度の突起がめぐる。破損した箇所も認められるが、復元すると 19 個の突起がめぐることになる。内面には突起の下端から幅 0.5 cm 程度、円周状に赤彩する。さらに、残存部位から突起部を 1 つおき赤彩していると考えられるが、これをもとに復元すると 1 箇所は突起の赤彩が隣り合う箇所が生じると考えられる。また、突起の下には 2 方向の穿孔が認められる。口頸部、頸胴部の境にはそれぞれ断面三角形の突帯が貼付され、眼鏡状の押圧が認められる。頸部と胴部には黒色顔料が塗布され、その上に赤彩による文様が認められる。頸部には縦方向と横方向の意匠が認められる。縦方向のものは中央が細く、その両側は幅広で下へ向かうにつれて太くなるように見える。残存部位が限られるため、全体は不明である。横方向は右上がりに弧状の文様が認められるが、その先が不明である。磨耗により観察できないのか、もとより文様がなかったのか判断できない。胴部にも頸部と類似した文様が認められる。残存部位がわずかのため全形は不明だが、弧状を呈する文様が認められる。265 はほぼ口縁部が完存し、端部には打ち欠きらしい痕跡が認められる。口縁部はなだらかに外反し、頸部に明瞭な削り出し段を形成する。段より上には太い沈線 2 条を施文する。266 は小型の壺。口縁部が短く外

反し、端部は平坦な部位と丸みのある部位があり、一様ではない。丁寧なミガキがあり、口頸部は縦方向、胴部は横方向に施される。口頸部と頸胴部の境にそれぞれ沈線が認められる。口頸部の沈線はミガキによって沈線が途切れる箇所が認められる。頸胴部の沈線には数箇所につなぎ合わせた箇所が認められる。内面には部分的に赤色顔料が付着する。267、268は遠賀川系土器の壺蓋。267は上部が残る。穿孔が認められ、その周囲に沈線が認められる。268は口縁端部から内面に煤が付着することから甕蓋とも考えたが、内面には黒色顔料が付着するようにもみえ、観察が難しい。壺の口縁部の可能性がある。269は器壁の厚い口縁部が強く外反し、端部を丸くおさめる。270は短く口縁部が外反し、端部がやや肥厚する。頸部に削り出し段を形成する。271は頸部片。削り出し段を形成し、そのわずかに内側に沈線を施文する。沈線より下には小さな円形刺突文を施文する。272は口縁部で短く外反する。内面はミガキ、外面にはナデが施される。端部は平坦である。273は胴部上半に2条の沈線が認めら

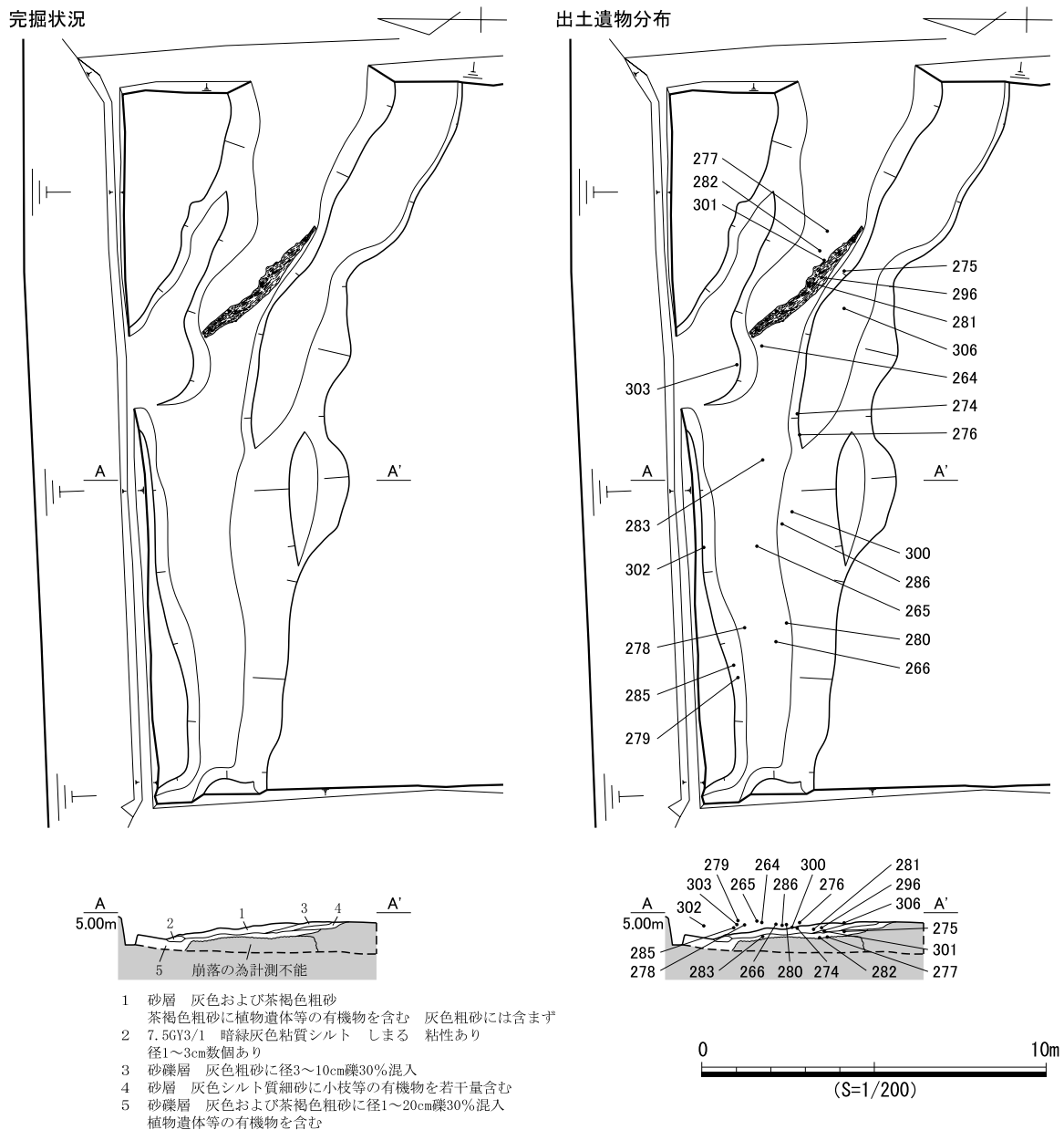


図 100 NR016 遺構図

れる。その上方にさらに、現状では2条の沈線が認められる。274は頸部と胴部の境に削り出し段を形成し、その下に沈線3条を加える。沈線上には部分的に赤彩が認められる。おそらく、本来は沈線の部位全面に赤彩が施されていた可能性が高い。また、残存部位の下端に沈線の一部が確認できる。数条の沈線が連続した可能性がある。275は外面に黒色顔料が塗布される。胴部上半を削って段を形成し、段の下に2条の沈線を施す。段と沈線の間、沈線間の一部には、竹管文が認められる。276は胴部上半に削り出し段を形成し、段直下に2条の沈線を施文する。沈線間にはハケ目が残る。段を境界に上方はミガキ、下方はハケの上からのミガキによる調整が認められる。277は頸部から胴部にかけての部位が残存する。頸部と胴部の境に削り出し突帯というより上下に削り出し段を形成して、その間に2条の幅の狭い沈線を施文する。削り出し段は不明瞭で、沈線間にも丁寧なミガキが加えられる。279は頸胴部の境に削り出し段を形成し、強く膨らむ胴部中央やや上部に太い沈線3条を加える。沈線の上部には部分的に削り出し段にみえる凹面が認められるが、横方向のミガキによって平滑に整えられている。280は肩部が強く膨らむ胴部片。頸部との境に明瞭な削り出し段を形成する。281はやや不明瞭な削り出し段を頸胴部の境に形成して、沈線3条を加える。3条の沈線は太さや施文の手法が異なる。中央の沈線が太く、あまり乱れることなく施文している。太い沈線の上下には細い沈線が認められる。細い沈線は沈線が重複したり、わずかに接合しなかったりするなどやや雑な施文である。太い沈線と類似する形状は削り出し段に認められるが、縦方向のミガキによって沈線状の断面を整え、沈線ではないような形状に調整している。胴部は丁寧な横方向のミガキが認められる。282は大型品で頸部から胴部が残存する。頸胴部の境に太い沈線3条を施文する。外面のミガキはやや雑で、ハケ目が部分的に残る。285は底部で、外面にミガキを施す。286は強く外反する口縁部内面に、幅1 cm程度帯状で口縁部に沿って赤彩が認められる。小片で壺としたが、壺蓋の可能性もある。287は264と同一個体の可能性が高い胴部片。貼付突帯上に眼鏡状の押圧が認められる。現存する破片の上端の剥落痕は突帯の剥落による可能性がある。290は胴部片で削り出し段直上に左下がりとなる刺突文が認められる。刺突文の間隔は一定で、刺突文間には刺突に先行して丁寧なミガキが施されている。このため、全体に文様が精緻なつくりの印象を受ける。削り出し段直下には段にそって赤彩が施される。

288、291、295、296はI期遠賀川系の甕で、口縁部が短く外反する。288は端部がやや尖り気味で、頸部は強いナデによってわずかに断面が窪む。295は頸部に沈線は認められず、縦方向の細かなハケ目が認められる。291は頸部にはヘラによる太い沈線3条が認められる。胴部にはなだらかに膨らみ、沈線直下あたりが最大径と考えられる。296は底部。外面には細かなハケ目が認められる。284はI期沈線文系もしくは渦巻文系の土器の底部。細い幅の沈線が3条認められる。胎土は遠賀川系土器に類似する。292はI期甕。口縁部が外反し、端部は肥厚させて平坦面を形成する。内外面ともに条痕が認められ、外面には半截竹管による沈線を施文する。293はI期の甕で、小片のため全形は不明である。瘤上の突起間に半截竹管による短沈線を施文する。299はI期鉢で、端部を丸くおさめる。底部の状況は不明だが、全形は球形状になると思われる。端部直下に穿孔が認められる。

278、283、289はI期垂流遠賀川系の壺。278は外面全体に黒色顔料の塗布が認められ、頸部と胴部の境を削って段を形成する。削った部分には縦方向のミガキを施し、段の下方には4条の太い沈線を施文する。その下方には無文帯をもって、さらに7条の沈線が認められるが、最上段の1条が下方

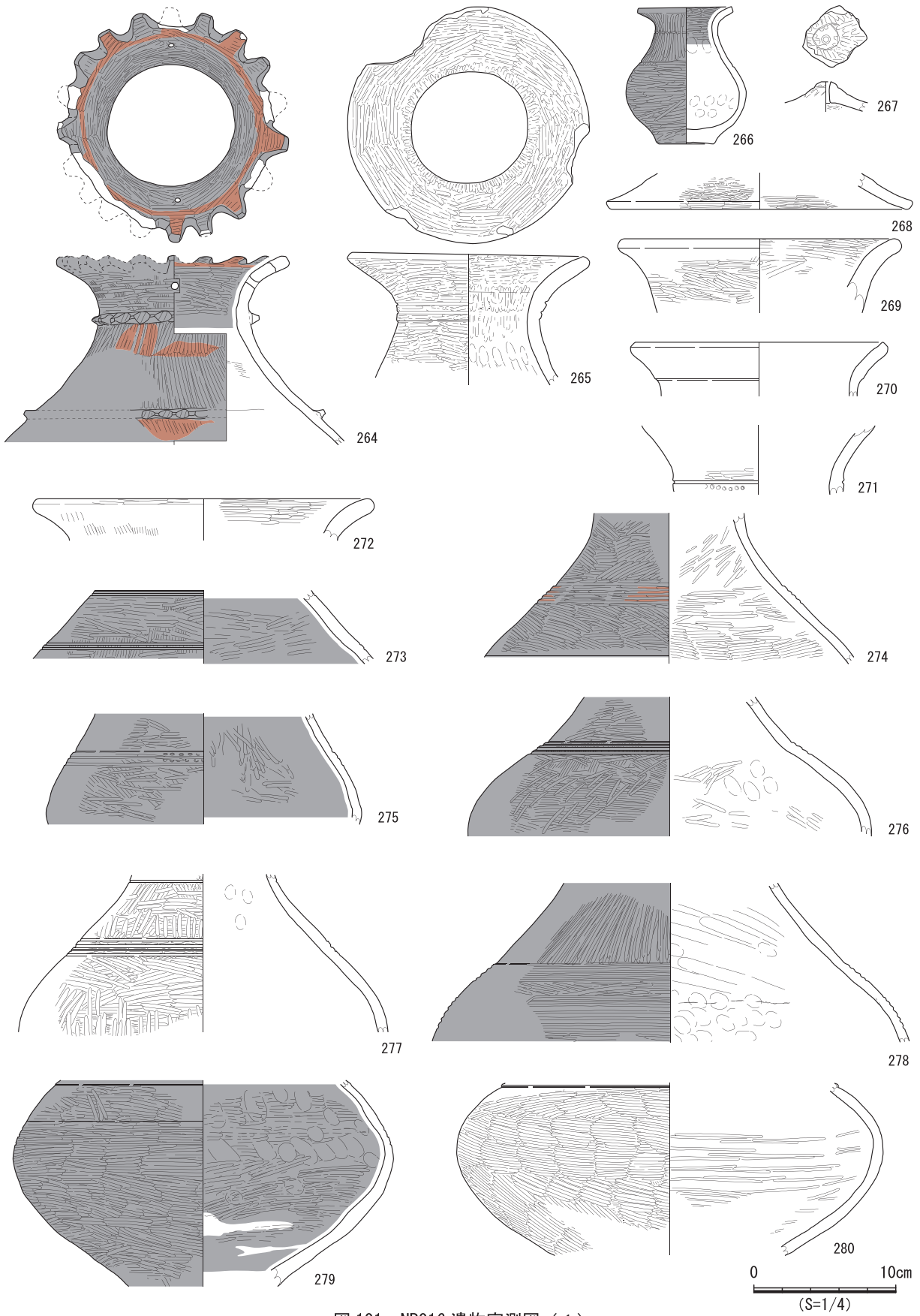


図 101 NR016 遺物実測図 (1)



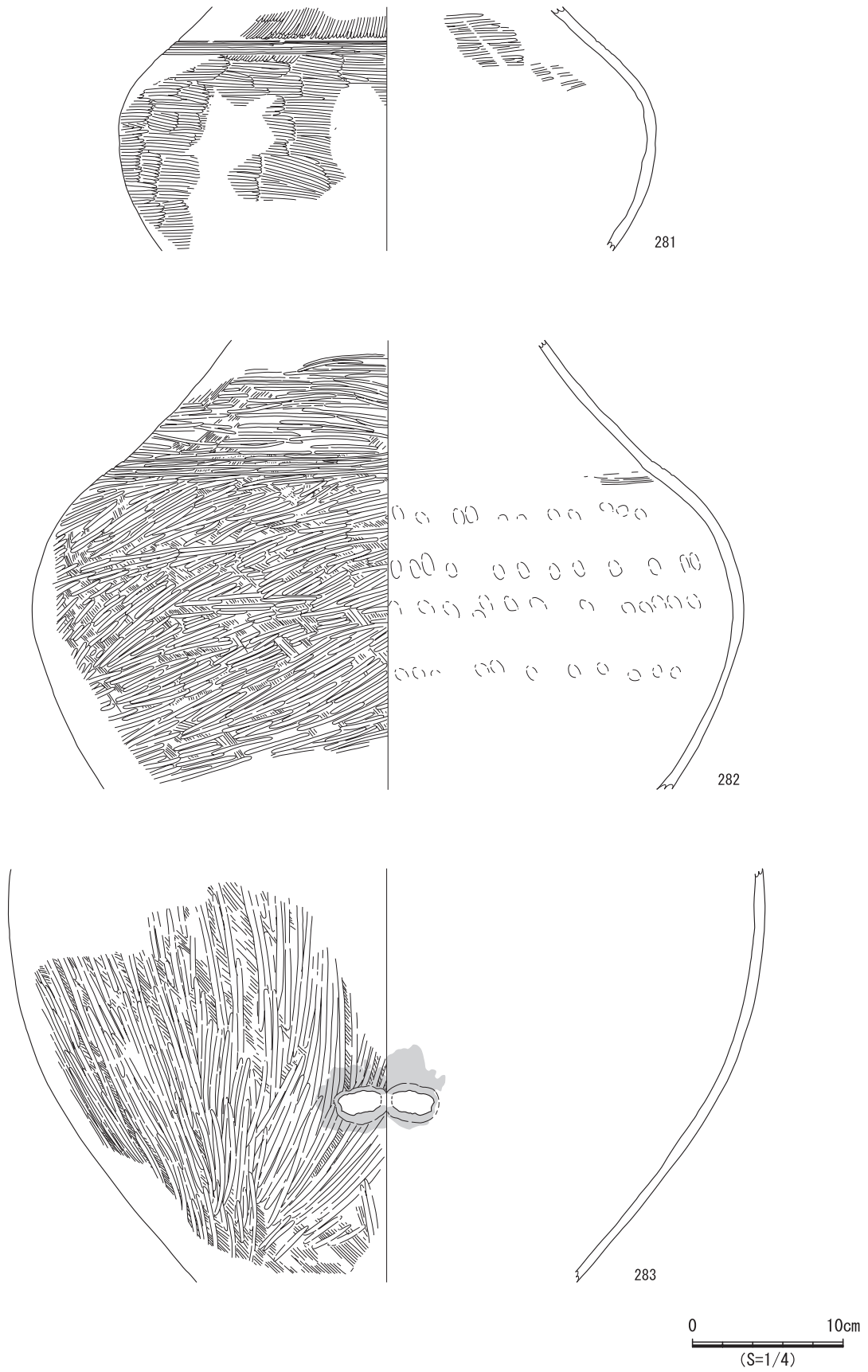


図 102 NR016 遺物実測図 (2)



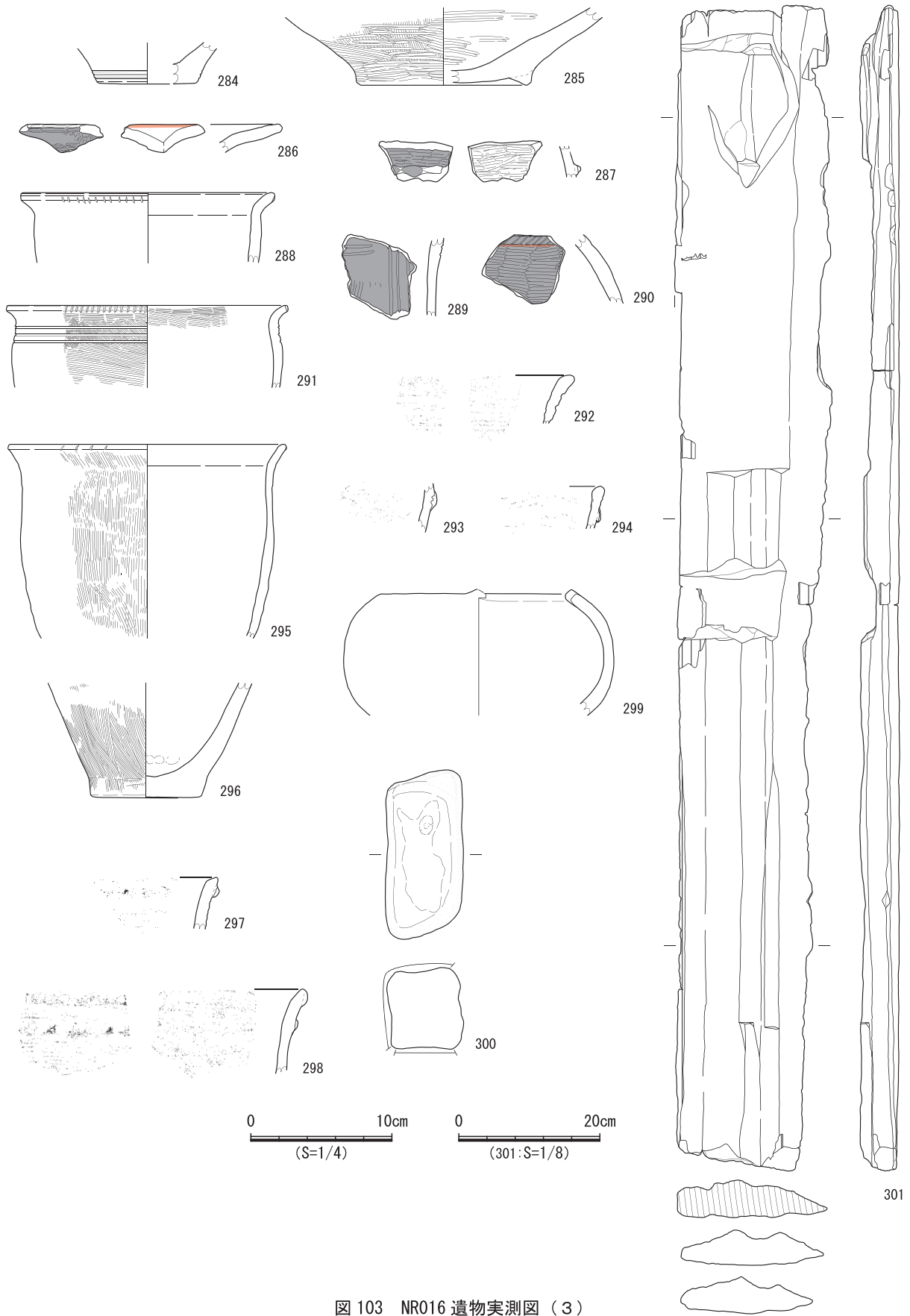


図 103 NR016 遺物実測図 (3)

へ屈曲する。沈線が施されている部分に区画を形成するようにも見えるが、残存部位から判断することは困難である。283は大型品の胴部片。ミガキがやや雑でミガキの及ばない部位にハケ目が認められる。打ち欠きによる穿孔が認められ、その両側には内外面ともに煤が付着する。289は頸部片で半截竹管による縦方向と横方向の文様が認められる。縦方向は2帯が認められるが、横方向は欠損しているため単位は不明であるが、直線というよりはわずかに弧状となっている。

294、297、298は縄文土器で、いずれも縄文時代晩期後半の深鉢。294、298は口縁端部がやや肥厚し、端部よりやや離れて断面の低い突帯を貼付する。294は突帯上に右上がりもしくは弧状の押圧が認められる。突帯と端部の間にも右上がりとなる条痕が認められる。298は内外面ともに条痕が認められる。

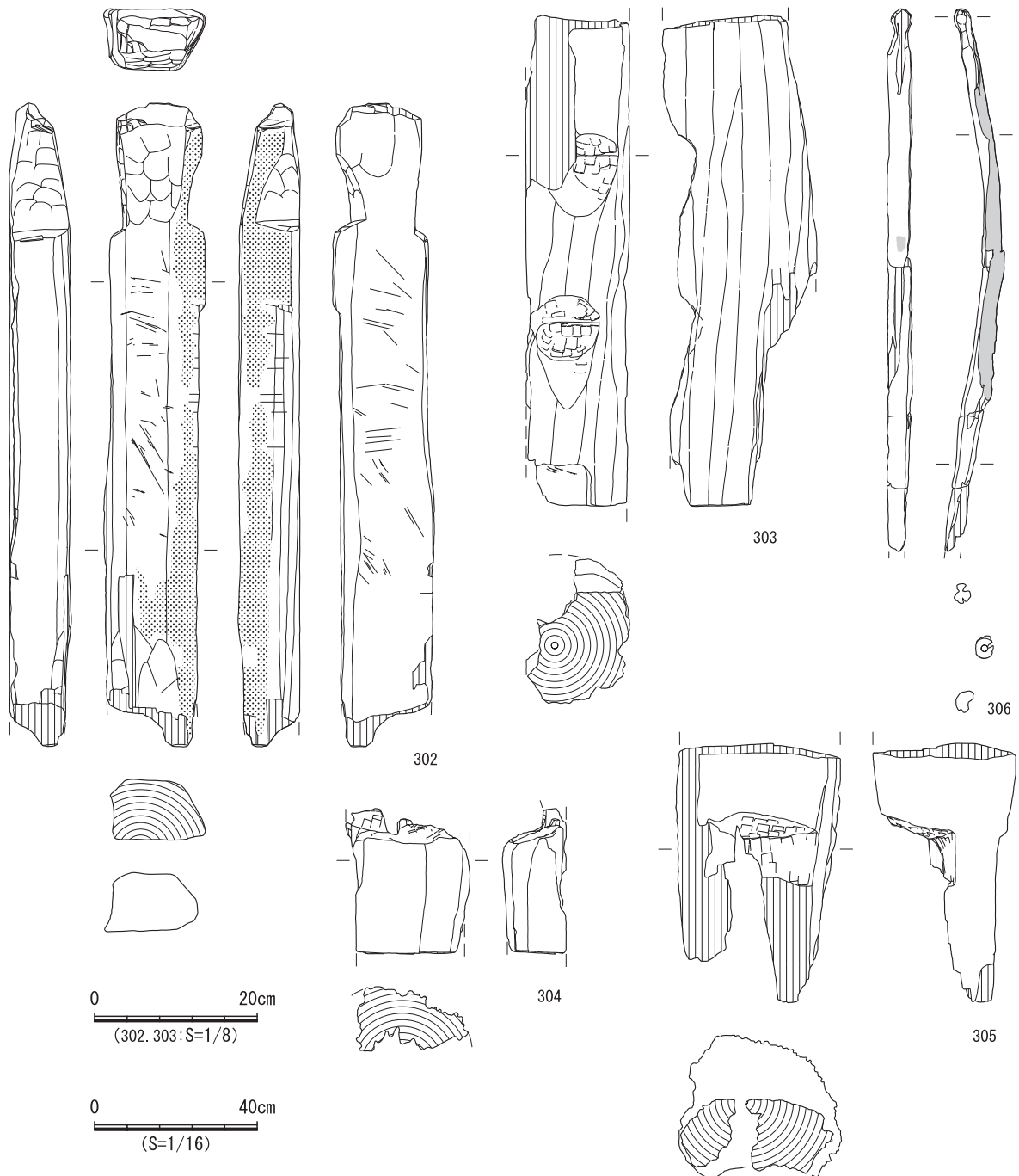


図 104 NR016 遺物実測図 (4)

貼付された突帯は断面が低く痕跡的な形状で、その上にユビによる〇字状の押圧を加える。297は端部がわずかに外反する。貼付突帯上には貝によるD字状の押し引きが認められる。

300は砥石。砥面が3面認められ、いずれも中央付近が窪む。301～306は木製品である。301は四連の鋏未製品。柄孔隆起が3箇所を確認でき、中央の2箇所が方形に成形され、下端は不整形の隆起のまま、上端は隆起を形成する前の段のみ観察できる。裏面は調整痕が観察できない。302は建築部材。長さ79.2cmの大型材であり、上方両側面に大きな抉り込みが施すことでホゾを作出している。303～305はその他の加工材とした。発掘調査時に長さ4.5mの材であることを確認したが、取り上げて持ち帰ることができなかつたため現地で全体形を図化し、加工が残る部分のみを持ち帰った。直径46cm以上に復元できる材である。303は一側面を2～3箇所に三角形に欠き切っているおり304は上端一箇所に大きな欠き切りがある。305は材の下端であり、欠き切り部が大きく欠落している。306は有頭棒状材であるが、破損が著しく、表面の加工状況は不明である。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期からI期と考えられる。

#### NR017 (遺構：図105・106、遺物：図107～111)

**検出状況** 西部西側南端に位置する。NR016を完掘した後には、新たな流路の肩部を検出できなかったが、砂礫が表出する調査面上には土器が散在するため、調査区域全体を本流路とした。

**形状** 調査区全域が流路埋土に覆われ、平面形は不明である。

**埋土** 埋土の主体は砂礫であり、堆積の過程で流入した粘質土の塊が散在していた。土層観察用畦の堆積土を26層に分層した。1～3層はNR015、4～8層はNR016の埋土であり、26層は無遺物層であった。9層から19層までの埋土が北側に向かって傾斜していることから、NR017内にも複数の流れがあり、その一部はNR016と同様に東西方向の幅の広い流れが存在していた可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土から土器6,080点、石器・石製品15点、木製品30点が出土した。土器はほとんどが破片で、縄文時代晩期～I期の土器が主体となる。

**出土遺物** 315、317、318、320～338、340～342、344～346、349、350、352、354～359、362、364～367、369、370、372～386、403、423、424、426、427はI期遠賀川系の壺である。307、308はI期遠賀川系土器の壺蓋。307は天井部から口縁端部にいたるまで傾斜が緩やかで、端部は平坦である。頂部に穿孔が認められる。外面には丁寧なミガキ、内面に幅広のハケ目が格子状になるのが認められる。308は口縁部片。丁寧なミガキが認められる。削り出し段を形成し、その外側に沈線2条を加える。沈線間の狭い部位にもミガキが加えられる。315はI期末に近い時期のもので、口縁部が外反する。端部は平坦で、下方に拡張する。内面にミガキ、外面にハケ目が残る。317、321、323、324、326は口縁部が短く外反し、内外面に細かなミガキが認められる。317には焼成後の穿孔が認められる。321、324は口縁端部が平坦で、頸部は削り出し段を形成し、321はその上に沈線を加える。また、沈線内に赤彩が認められる。324、326は頸部に削り出し段を形成し、326の口縁部には穿孔が認められる。318は口縁部が大きく外反し、無文である。320は口縁部が短く外反し、端部には沈線状の凹みが認められる。322は口縁部で強く外反する。内外面ともにミガキおよび黒色顔料の塗布が認められる。赤褐色の胎土で、亜流遠賀川系土器に類似する。325は口縁部が直線的に外反し、内外面ともにミガキおよび黒色顔料の塗布が認められる。頸部は削り出し突帯を形成し、そこに沈線を

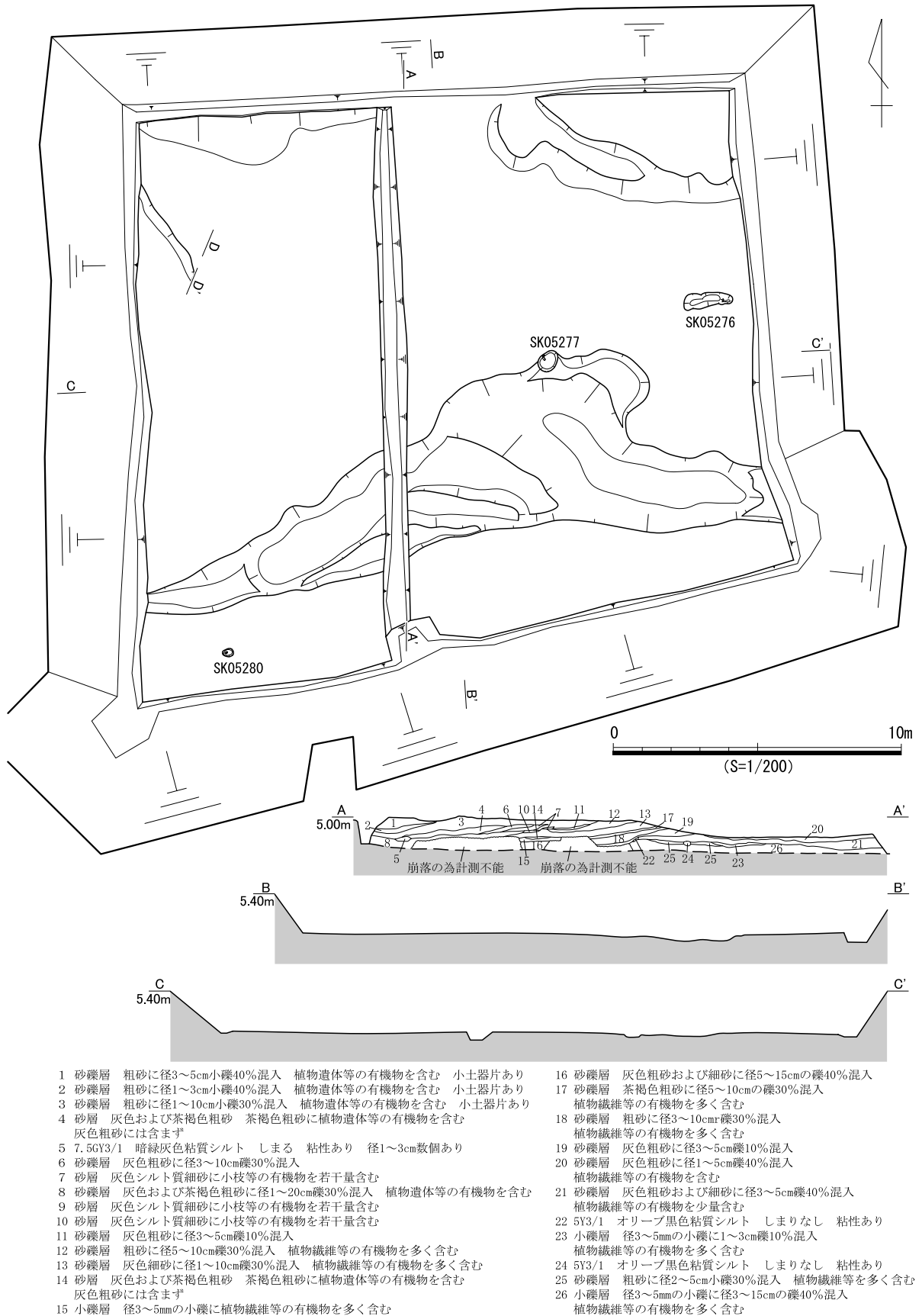


図 105 NR017 遺構図 (1)

2条施す。やや平坦な端部には明瞭な沈線が残る。327は焼成後の穿孔が認められる。328は口縁部が短く弱く外反する。端部は丸みをもち、やや幅広の沈線1条が認められる。329は内外面ともに黒色顔料を塗布し、頸部には削り出し段を形成する。330、331は口縁部が強く外反する。330は口縁部と頸部との境に削り出し段を形成し、その上に太い沈線2条を加える。口縁部は横方向、頸部は縦方向のミガキが認められ、沈線間にはハケ目がそのまま残る。331は口縁部が強く外反し、頸部に削り出し突帯を形成する。両端の段差はわずかで、突帯上に2本の沈線を加えている。口頸部、胴部のミガキは横方向、突帯上のミガキは斜方向である。突帯上のミガキは沈線施文後に行われているため、沈線断面が潰れ気味である。332は頸部に突帯を貼り付け、ヘラによるキザミを施す。333は頸部で、内

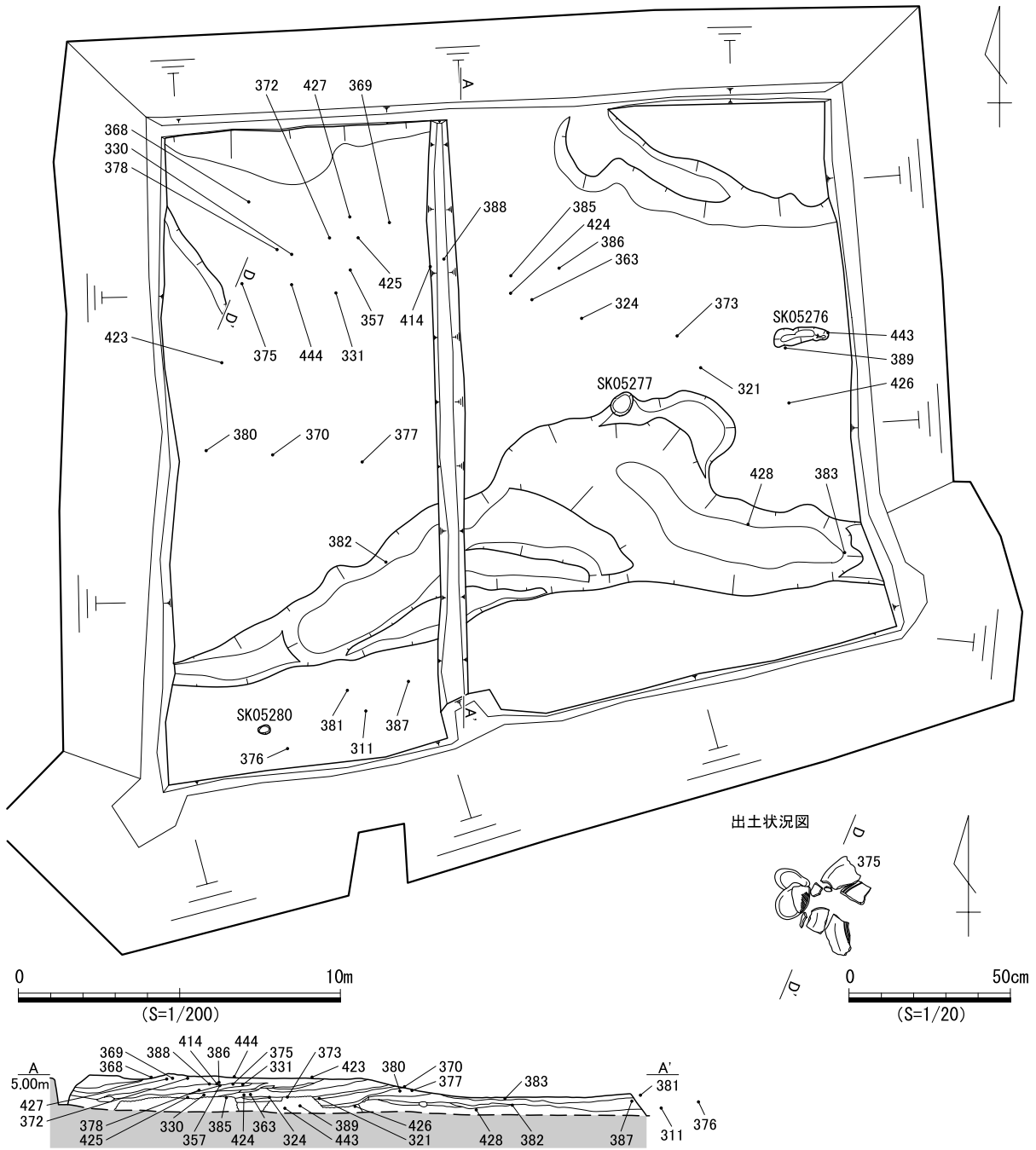


図106 NR017 遺構図(2)



外面ともにミガキが施される。削り出し突帯上に3条の沈線が認められ、沈線間にはハケ目が残る。334、342は頸部の破片。横位と縦位にそれぞれ、貼付突帯があり、その上に刺突が認められる。334の横位の貼付突帯より下位はミガキが施されるが、上位はハケ目調整のままである。335は頸部で、太い沈線が数条認められる。内外面ともにミガキを施す。336も頸部に削り出し突帯を形成して、その上に2条の沈線を加える。337は胴部の小片。貼り付け突帯上にユビによる押圧が認められ、直下に沈線を2条施す。胎土が赤褐色で、垂流遠賀川系土器に類似する。338は1条の貼付突帯上にヘラによるキザミが認められる。340は直線的に開く口縁部で、頸部には1条の沈線が認められる。内面には沈線状の凹みが認められる。341は胴部上半に貼り付け突帯を施し、二枚貝による押圧が認められる。344は断面三角形の貼付突帯の上下に赤彩が認められる。上の部位は磨耗のため、全面の赤彩か文様を意図したものかは不明である。下の部位は木葉文の一部と考えられる。突帯上にもわずかに赤色顔料が付着しているので、突帯も赤彩されていた可能性がある。突帯上にはヘラによる刺突が認められる。345は口縁部が短く外反し、内外面に細かなミガキが認められる。頸部径の大きい大型品で頸部に太い沈線が認められる。346は頸部で、削り出し段に沈線を1条加える。349は胴部片で沈線2条の上下に多条化した沈線による弧状の文様が認められる。木葉文の一部の可能性が高い。350は胴部上半に複数の沈線が認められ、沈線間にはハケ目が残る。沈線より下方にはハケ調整の上にミガキを施す。352、354、358は胴部上半で、352は削り出し段を形成する。354、358は小片だが無軸木葉文が認められる。355、356は胴部上半に削り出し段を形成し、355は削り出し段の直下に沈線を施文し、外面はミガキを施す。356は削り出し段の下方に沈線を1条加える。外面はミガキを施す。357は胴部片で、有軸木葉文が認められる。木葉文直上には削り出し段が認められる。359は削り出し段のある頸部から胴部かけての部位が残存する破片である。362、366は貼付突帯のある胴部片。362は突帯2条の下に剥落した貼付突帯による渦巻文の痕跡が認められる。366は突帯が2条認められ、その幅は狭くその上にヘラによる押圧が認められる。突帯上には沈線1条が認められる。364は胴部片で、断面の低い貼付突帯上に貝による刺突が認められる。365は渦巻文の痕跡が認められないが、362と胎土や突帯の形状が酷似する。367は頸部との境に段を形成し、下方に3条の沈線を施文する。369は胴部片で、有軸木葉文が認められる。縦横の沈線で区画内に木葉文を施文する。370は胴部片。2本の沈線内に円弧状の刺突文がやや雑に施文される。沈線の上下には赤彩による無軸木葉文が認められる。3本1組の線によって構成され、中央の1本の幅が狭い。取り上げ直後の赤彩は鮮明であったが、その後劣化が進み、現状ではやや不明瞭である。赤彩は沈線内にも認められる。一部にハケ目が認められる。372はハケ目の残る胴部片で、器面に太い沈線が2条認められる。373、374は胴部片で、外面に黒色顔料の塗布が認められる。373は内外面ともにミガキを施し、胴部上半に4条の沈線が認められる。375は胴部中位が強く膨らむ破片で、頸部と胴部の境に沈線が3条めぐる。376～380は胴部下半から底部までが残る破片。376は割れの単位が細かいことから、意図的に打ち欠いている可能性がある。377は底部がやや突出し、胴部が強く膨らむ。378は内外面ともにミガキが認められる。379の外面には丁寧なミガキが認められ、大型品である。380も大型品の底部で、底部外縁にはハケ目が残るが、他の部位の内外面には丁寧なミガキが認められる。381、382は底部で、いずれも底部と胴部の境が内側に反り、381の外面にはハケ目調整のみが認められる。383～386も底部で、いずれも内外面にミガキが施され、383の底面は完存する。403は大型品の口縁部で、内外面ともにミ

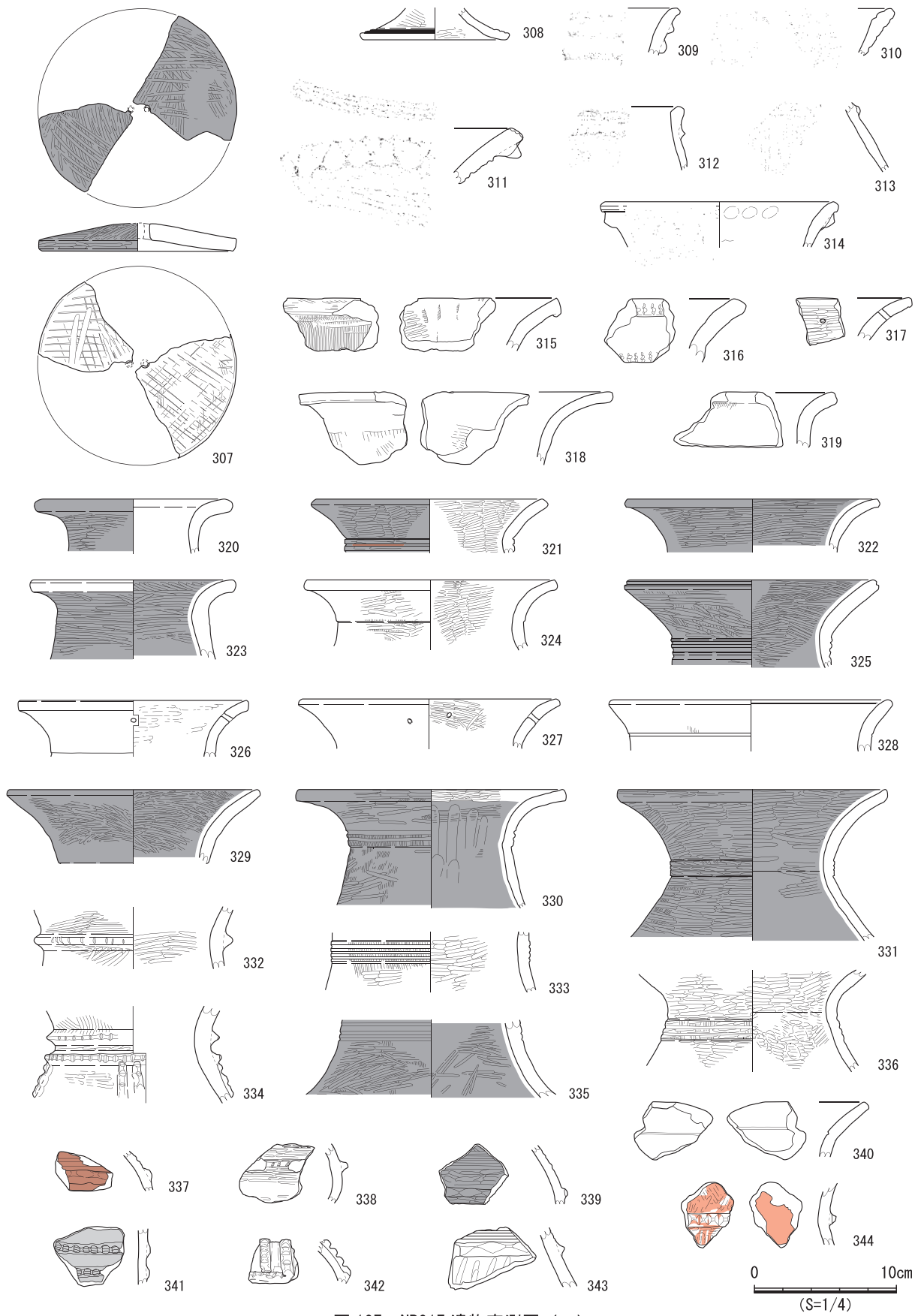


図 107 NR017 遺物実測図 (1)

ガキが施される。423は底部で、内面にミガキが確認できる。424は底部から胴部下半で、胴部下半はやや内側に反る。426は大型品の底部。部分的にしかミガキが認められず、大半はハケ調整のままである。

351、394、395、397、400～402、406、407、409～412、414、417、418、425、428はI期遠賀川系の甕。351は口縁部が強く外反し、端部は平坦である。端部はナデによって下端に粘土がわずかに突出し、頸部に削り出しの段が認められる。段の直上2cm程度の範囲に横方向のミガキが認められる。内面にも入念な横方向のミガキが認められる。387～389は甕蓋。口縁部が欠損するが、天井部は完存する。387、388は天井部外縁に粘土を貼付してつまみ上げて、鏝状を呈する。389は天井部の両端には1つずつ斜めに穿たれた穿孔が認められる。口縁部は天井部から大きく外反する。394は口縁部が短く屈曲し、外面には煤が付着する。端部下端にはヘラによるキザミを施す。395は口縁部が弱く外反し、端部は尖り気味である。沈線の下にやや乱雑な円形刺突文が施文される。397、401、411は口縁部と頸部で、いずれも口縁部が短く外反する。397は端部がやや肥厚し、端部上端に刺突を加える。401は端部に刺突を施し、屈曲部直下には2条の沈線が認められる。411は端部を欠損するが、屈曲部下に4条の沈線を施す。400は口縁部で、逆L字状に短く外反した口縁端部には刺突を加える。402は器壁が厚く、やや外反する。頸部には沈線もしくは削り出し段が認められる。406は口縁部が短く外反し、端部には刺突が認められる。屈曲部外面にはユビによる押圧痕が認められる。407は口縁部が弱く外反し、端部はやや丸みをもち、刺突文が認められる。胴部にはハケ目が残る。409は口縁部が短く外反し、頸部には沈線1条が認められる。410は口縁部が強く外反して、逆L字状にちかい形状を示す。頸部には4条の沈線が認められる。412は頸部で、太い沈線が1条認められる。414は頸部の屈折が弱く、口縁部が短く緩やかに外反する。端部は強いナデによって平坦面を形成する。417は胴部上半から頸部片。外面には縦方向のハケ調整が認められ、屈曲部直下には太い沈線が1条施文される。418は口縁部直下に刺突文が認められる。外面は磨耗が著しいため、沈線の有無は不明である。425、428は底部。425は器壁が厚く、内外面ともにミガキが認められる。428は中央に焼成後の穿孔が認められる。

319は遠賀川系鉢の口縁部。逆L字状に短く外反し、端部はやや平坦になる。頸部には削り出し段が認められる。441は内傾口縁鉢の口縁部。口縁部が肥厚し、平坦な端部はユビナデによって形成される。端部直下の外面には輪積み痕が認められる。442は遠賀川系の土器で把手のある鉢。外面には細かなハケ目が認められ、把手は頸部に位置する。

361、419～422は条痕文系土器の甕で、いずれも胴部片である。361は深く明瞭な羽状の条痕が認められる。破片であるため全容は不明だが、おそらく一定の間隔でジグザグ状に屈曲を繰り返す文様と思われる。422は貝による条痕が深く明瞭に残る。311、313、314はI期条痕文系の壺。311は口縁部片で、口縁部が大きく外反する。端部にはクシによる押し引きが認められ、端部直下には押圧のある突帯が貼付される。外面に残る条痕はクシによるものである。313は頸部の破片で、ピッチの短い押し引きのある貼付突帯が認められる。縦方向の条痕が認められる。314は口縁部が外反し、端部が丸みをもって下端がわずかに肥厚気味となる。直下には押圧のある貼付突帯が認められる。390～393、430はI期条痕文系の甕。390は小型品で口縁部短く外反する。端部に刺突が認められ、胴部はやや雑であるが縦羽状に見える条痕が認められる。391も口縁部片で形状は392に類似する。外面にクシ

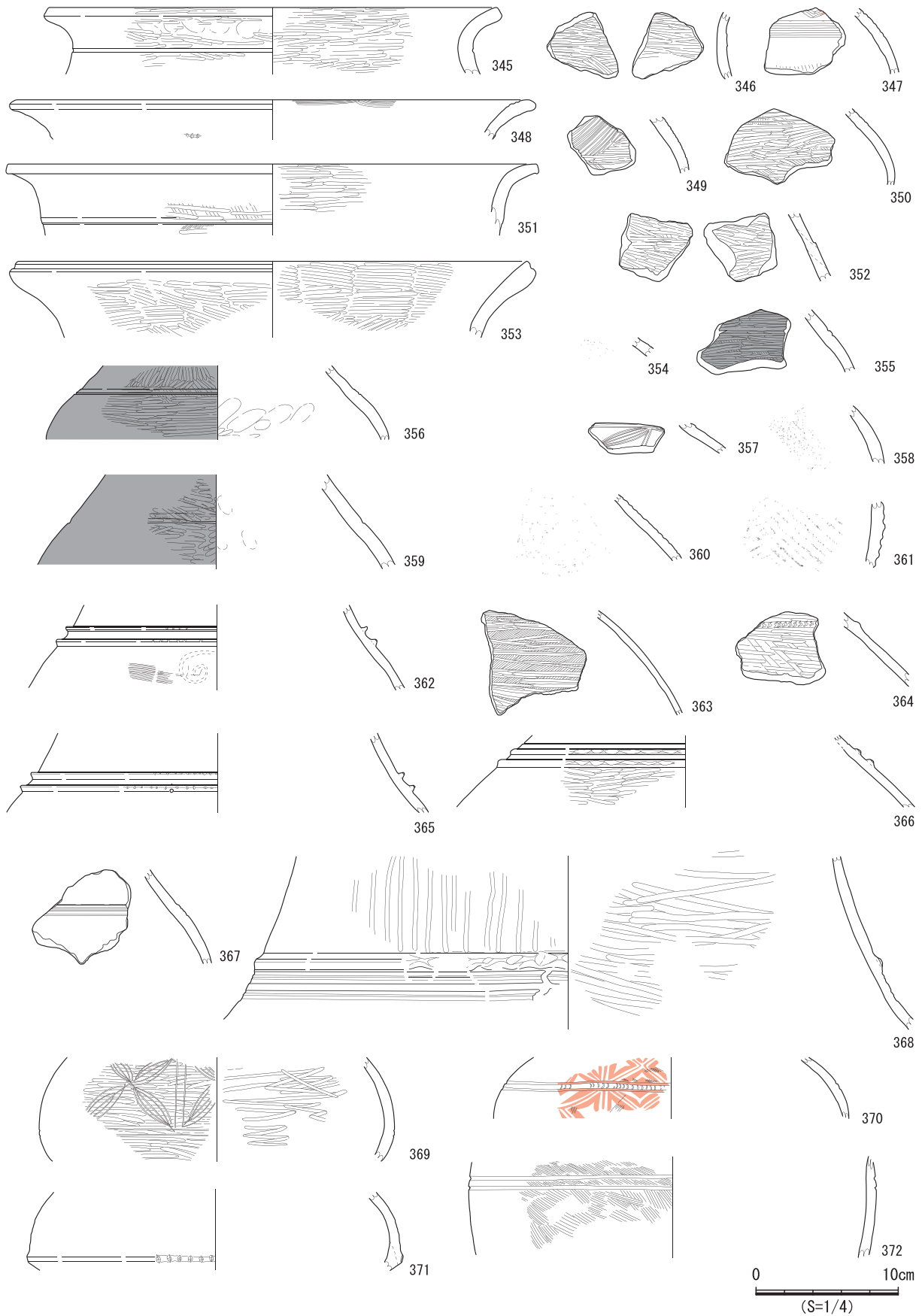


図 108 NR17 遺物実測図 (2)



による条痕、端部にはクシによる押し引きが認められる。392は口縁部がやや外傾して、端部は肥厚気味で強いナデのため凹面を形成する。また、半截竹管による押し引きが端部、両端に沿って認められる。外面の条痕原体は磨耗のため、不明である。393は口縁部が短く外反し、端部に刺突文が認められる。内面には条痕が認められるが、外面の条痕は磨耗や炭化物の付着によって確認できなかった。430は口縁部が強く外反して、端部に押し引きが認められる。外面の条痕が右下がりである。

310、360はI期沈線文系の壺。310は口縁部片。外傾する口縁部で、端部を内傾させて肥厚する。その上には沈線2条を施文する。外面には小片のため詳細は不明だが、眼鏡状もしくは鍵の手状の文様の一部と考えられる文様が認められる。360は胴部片で沈線間に羽状文を施文する。312はI期壺。口縁部が直立して、端部は肥厚して平坦に整えられる。端部よりやや下がった位置に断面三角形の突帯が貼付される。404はI期の甕。口縁部が外反し、端部は上下端が拡張気味になるほど顕著な平坦面を形成する。形状は条痕文系の甕に類似する。外面は幅の狭い半截竹管によって3条の沈線が認められるが、重複したり、方向がずれたりするなど施文は雑である。端部や内面にも外面と同様の沈線が認められる。

316、339、343、347、348、353、363、368、371、396、398、399、405、408、413、415、416はI期垂流遠賀川系の土器片。316は壺口縁部。短く外反し、端部下端とその下にある貼付突帯上に貝による刺突を加える。339は胴部片。4条からなる太い沈線とその直下に押圧のある貼付突帯が認められる。4条の横沈線の上部には、斜行すると思われる沈線状の凹みが確認できる。外面には、黒色顔料が塗布される。343は壺胴部。胴部上半にヘラによる押圧のある突帯を貼付し、暗文状のミガキを入れる。直下に沈線を数条施す。368と同一個体の可能性が高い。347は壺胴部片。4条からなる沈線とその上に2条の沈線からなる山形文状の文様が認められる。348は壺口縁部。内面に弧状の文様が認められる。353は壺で、口縁部が大きく外反する大型品である。端部を肥厚させ、太い沈線が認められる。363は壺の胴部で、ミガキが部分的であるためにハケ目が残る。368は大型の壺の頸部。貼付突帯の直下に幅広の半截竹管による沈線が2組認められる。突帯上にはヘラによる押し引き状にもみえる押圧が認められる。突帯より上には幅広で縦方向のミガキが間隔をおいて施されている。光沢があり、暗文状にみえる。内面にも同様のミガキが認められる。371は壺胴部で、ヘラによる押圧のある突帯を貼り付ける。396は甕口縁部で、逆L字状に屈折し、端部下端には刺突を施す。398、413はともに甕。短く屈曲した口縁端部を肥厚させる。屈曲部直下に沈線が数条認められる。399は甕。口縁部が緩やかに開く大型品で、端部に沈線を1条施文し、下端には刺突を施す。405は甕。口縁部が緩やかに開く大型品と思われ、端部には刺突を加える。408は甕口縁部が強く屈折して逆L字状を呈し、端部が肥厚する。下端には半截竹管による刺突、頸部には沈線と波状文が認められる。415は甕。口縁部がゆるやかに外反する。半截竹管による端部の刺突文、頸部の沈線が認められる。416は甕。口縁部が逆L字状に屈折し、屈曲部直下には沈線が数条認められる。やや肥厚する端部には刺突を施す。

309、429、431～440は縄文時代晩期の土器。309は縄文時代晩期後半の馬見塚式にあたる変容壺。口縁端部からわずかに下がった位置に素文の突帯が2条認められる。429は縄文時代晩期後半の浅鉢。口縁部が鍵の手状に屈曲する。内外面ともに丁寧なミガキが認められ、内面には沈線が認められる。431、433は縄文時代晩期中葉の深鉢。431は口縁部がわずかに外反し、端部からやや下がった位置に、



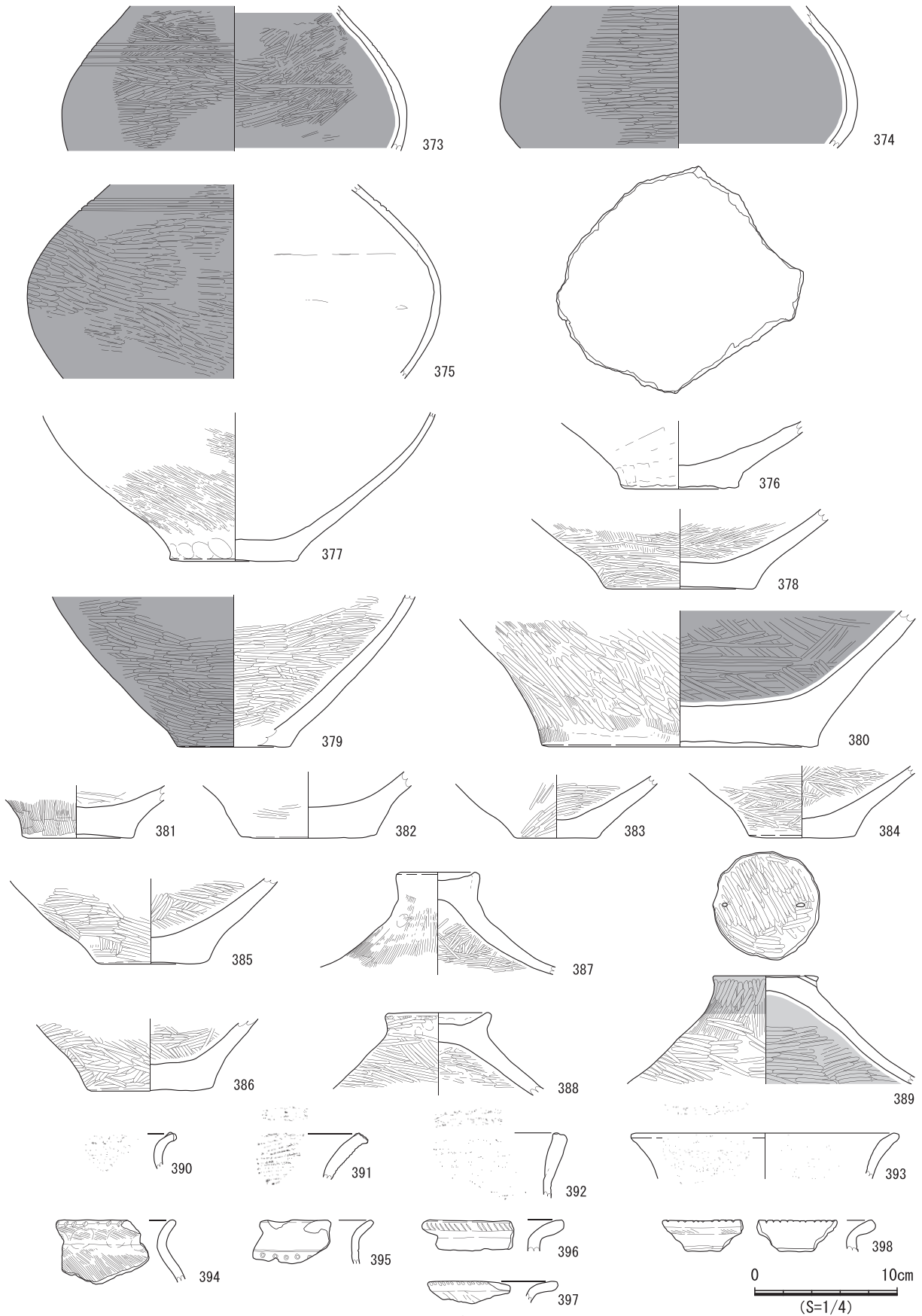


図 109 NR017 遺物実測図 (3)



図 110 NR017 遺物実測図 (4)

素文突帯を貼付する。433は口縁部に条痕、胴部にケズリが認められる。端部には押し引きらしい痕跡が認められるが、磨耗が著しく判断が難しい。内面に沈線が認められる。432は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁端部よりわずかに下がった位置にD字状の押し引きのある突帯を貼付する。434は口縁部がやや内湾する。435は深鉢。やや口縁部が肥厚し、平坦な口縁端部に沈線が認められる。436は深鉢で、口縁部がやや外反する。437は縄文時代晩期後半の砲弾形を呈する深鉢の口縁部。磨耗が著しいが、右下がりの幅広な条痕が認められる。438は条痕が明瞭に残る深鉢。口縁部がやや外反し、端部には二枚貝による押し引きが認められる。外面には吹きこぼれによると思われる炭化物粒が付着する。439は縄文時代晩期後半の深鉢。口縁部に2条の浮線状の文様が認められる。440は縄文時代晩期後半の口縁部が屈曲する浅鉢。端部がわずかに直立する。

443は流紋岩製の磨製石斧で、表面を敲打により成形し、その後に研磨を施している。両側辺はほぼ平行しており、刃部は使用による片減りがみられ、表裏面中央付近は楕円形状に摩滅している。444は刃器。横長剥片の縁辺を表裏から剥離調整し、刃部を整えている。

**時期** 出土遺物の時期から、縄文時代晩期からI期にかけて埋没したと考えられる。

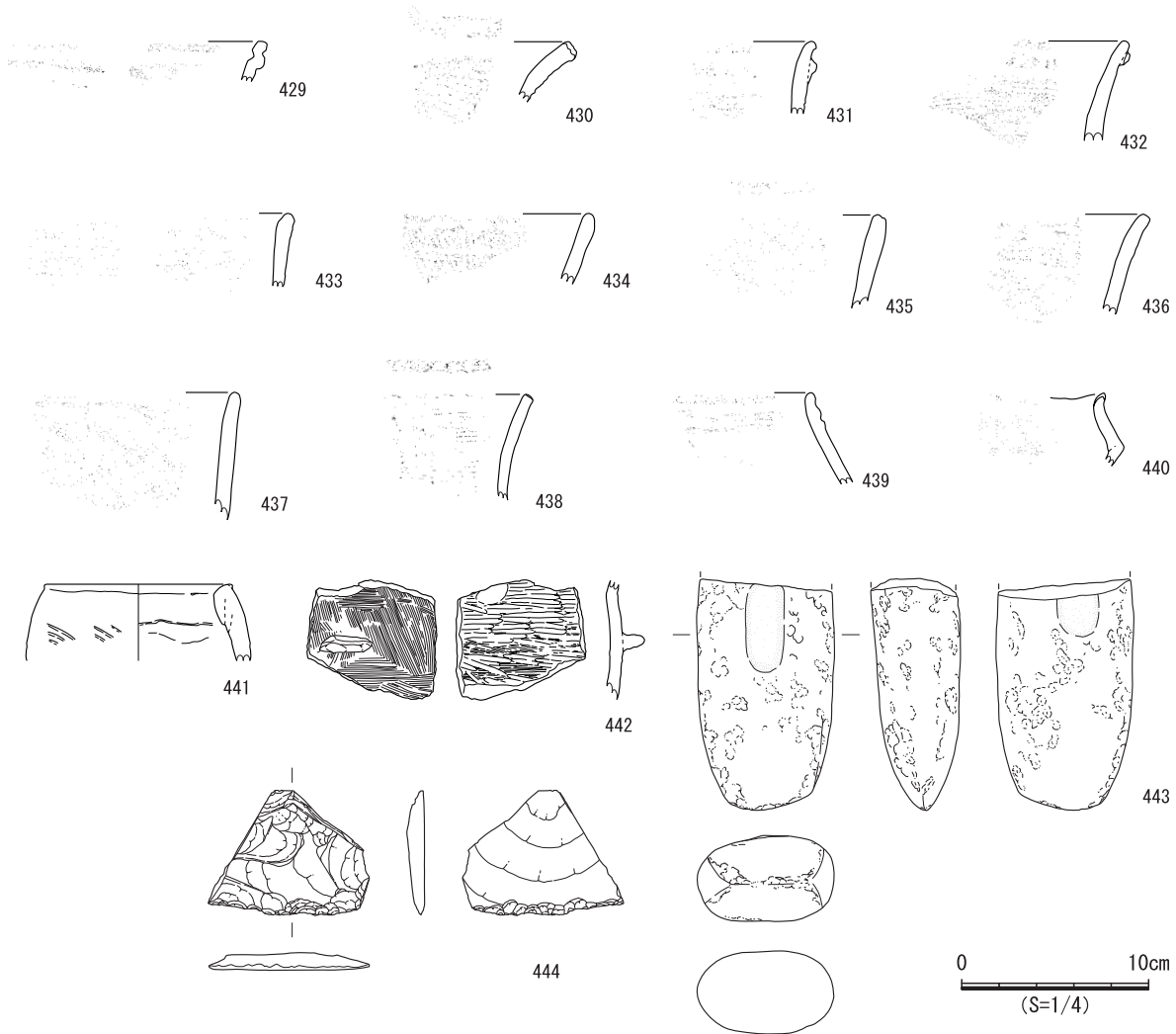


図 111 NR017 遺物実測図 (5)

## 第2節 弥生時代中期の遺構と遺物

西部域の弥生時代中期（Ⅱ期～Ⅳ期）の遺構として、方形周溝墓36基、溝状遺構1条、土坑3基、自然流路2条について、以下に報告する。その分布は、方形周溝墓が微高地上に部分的に重複しながらおよそ南北方向に帯状に並び、その間に溝状遺構や土坑が散在している。

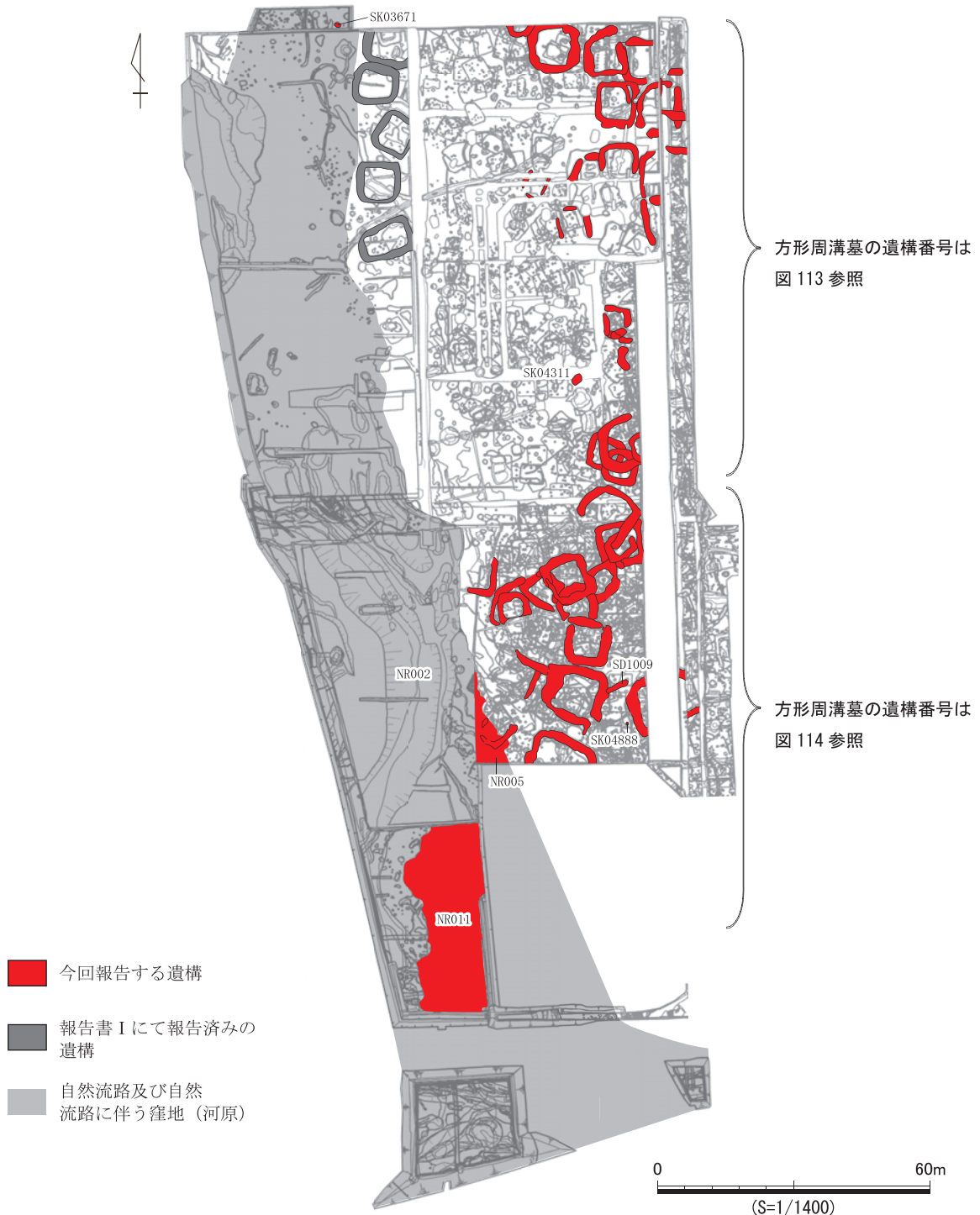


図 112 西部域の弥生時代中期の遺構分布図





図 113 西部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図 (1)





図 114 西部域の弥生時代中期の方形周溝墓分布図（2）

1 方形周溝墓

SZ115 (遺構：図115・116、遺物：図117)

**検出状況** 西部東側北寄りにあり、SZ119の東側及びSZ223の北側に位置し、東溝はSZ222を切る。東溝や南溝の検出は容易であったが、西溝や北溝は不明瞭であった。周溝内側は外側より早く確認できたが、西溝外側については検出が困難であったため、約10cm掘り下げたサブトレンチの断面観察によって確認した。

**方台部** 平面形は北溝が南溝と平行とならず、軸を変えているため、不整形である。東西長は幅約8.0m、南北長は約7.5mを測る。北側は一段下がってやや広い平坦面を有し、南東隅はやや突出して溝の幅が狭くなる。なお、墳丘盛土と主体部は確認できなかった。

**周溝** 北東隅が途切れて、陸橋部を形成する。東西溝は直線的で幅約1.5～2.0mである。深さは西溝が約0.7m、東溝が約0.6mと東溝がわずかに浅い。南溝は幅約1.1mと他の周溝に比べると幅が狭い。北溝は西溝北端から南溝と軸線を変えて、北東方向へのび、北端に向かって次第に幅を広げる。

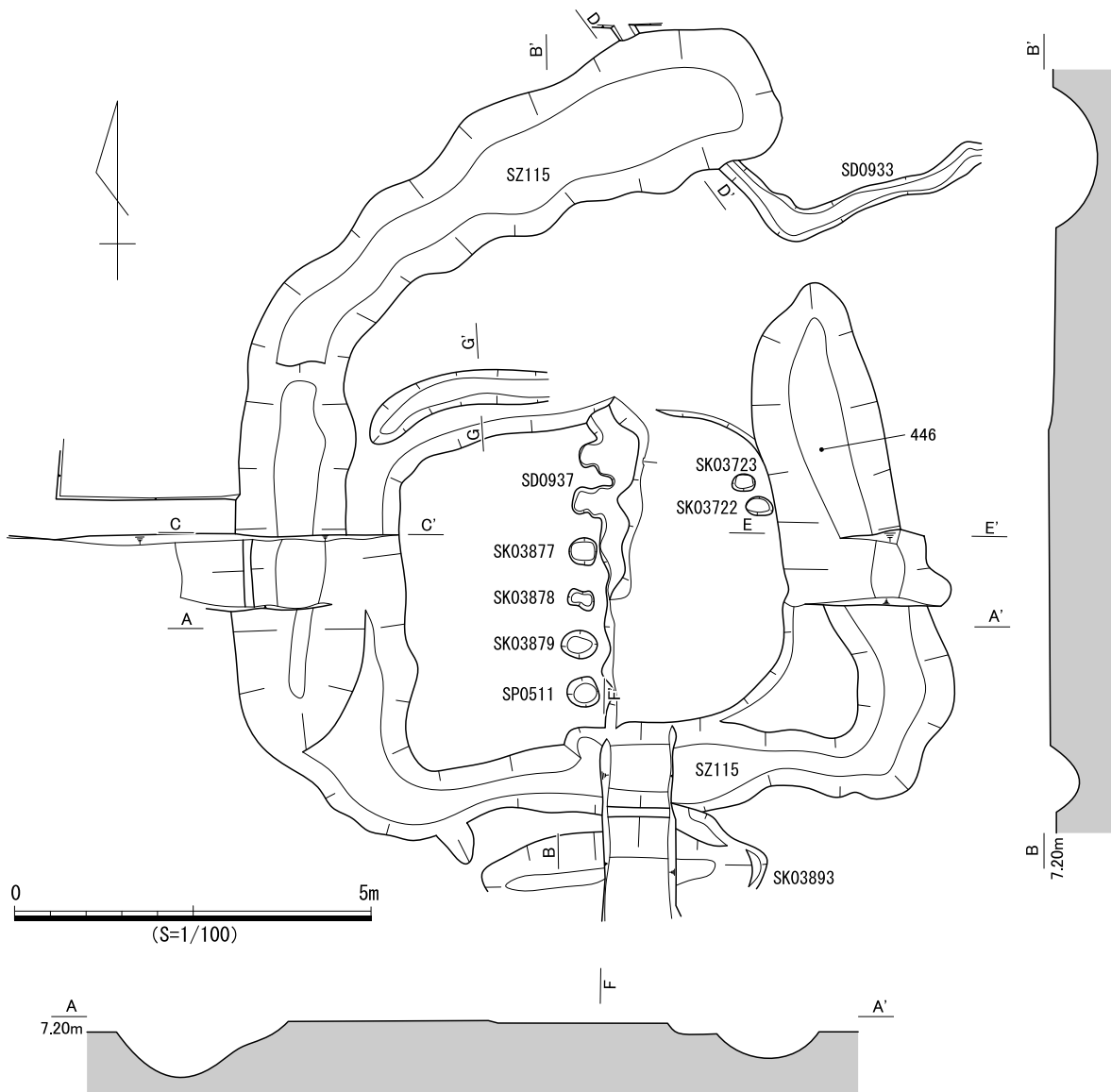
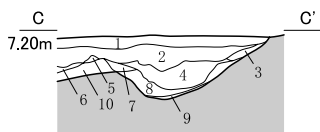
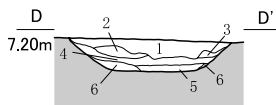


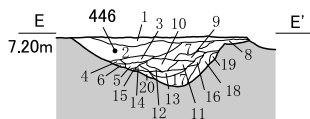
図115 SZ115遺構図(1)



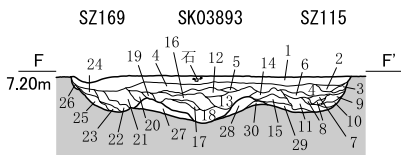
- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘性ややあり しまりややあり 径2.0cm礫2%含む  
径0.03cm炭化物10%混入
- 2 2.5Y3/2 黒褐色土 粘性あり しまりややあり 径0.02cm炭化物10%混入
- 3 2.5Y4/4 オリーブ褐色土 粘性ややあり しまりややあり
- 4 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性あり しまりややあり 径0.02cm炭化物5%混入
- 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 粘性ややあり しまりなし
- 6 5Y4/3 暗オリーブ色土 粘性ややあり しまりあり
- 7 5Y4/2 灰オリーブ色土 粘性ややあり しまりあり
- 8 7.5Y4/3 暗オリーブ色土 粘性ややあり しまりややあり
- 9 10Y4/2 オリーブ灰色土 粘性なし しまりなし
- 10 10Y4/2 オリーブ灰色土 粘性ややあり しまりややあり



- 1 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 2 5Y4/4 暗オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり  
5Y5/2 灰オリーブ色土ブロック10%混入
- 3 5Y5/3 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 4 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 しまりややあり 粘性ややあり  
5GY4/1 暗オリーブ灰色土ブロック20%混入
- 5 5GY2/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性あり
- 6 7.5GY5/1 緑灰色土 砂質シルト  
5GY5/1 暗オリーブ灰色土ブロック5%混入



- 1 2.5Y3/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.3cm炭化物5%混入 鉄分沈着あり
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 鉄分沈着あり
- 3 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり
- 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色土 しまりあり 粘性ややあり
- 5 5Y4/3 暗オリーブ色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 6 5Y5/3 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 7 10YR2/2 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.2~0.5cm炭化物5%混入
- 8 5Y4/2 暗オリーブ色シルト しまりあり 粘性ややあり 2.5Y3/2 黒褐色土ブロック10%混入
- 9 2.5Y3/1 黒褐色土 しまりややあり 粘性ややあり 木質わずかに(1%)含む
- 10 2.5Y2/1 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cm以下炭化物3%混入
- 11 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 12 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり 0.1cm以下炭化物2%混入
- 13 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y4/2 灰オリーブ色土ブロック10%混入
- 14 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 15 7.5Y5/3 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性ややあり
- 16 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 7.5Y4/2 灰オリーブ色土ブロック5%混入
- 17 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cm炭化物3%混入
- 18 7.5Y5/3 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり 5Y4/3 暗オリーブ色土ブロック2%混入
- 19 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり
- 20 10Y5/2 オリーブ灰色シルト しまりややあり 粘性ややあり



- 1 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.3cm炭化物3%混入 鉄分沈着あり
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまりあり 粘性ややあり 5Y4/4 オリーブ黄色土シルトブロック2%混入 鉄分沈着あり
- 3 5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりややあり 粘性ややあり 径0.1cm以下砂粒を30%混入 鉄分沈着あり
- 4 5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.3cmの炭化物を1%混入 鉄分沈着あり
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 5Y5/3 灰オリーブ色土ブロック20%混入 (SK03893埋土)
- 6 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり (SZ115埋土)
- 7 7.5Y2/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性あり (SZ115埋土)
- 8 5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり (SZ115埋土)
- 9 5Y2/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.2cm炭化物5%混入 (SZ115埋土)
- 10 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色シルトブロック10%混入 (SZ115埋土)
- 11 10Y3/1 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり シルト質 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルトブロック5%混入 (SZ115埋土)
- 12 5Y4/2 灰オリーブ色土 10Y4/2 オリーブ灰色シルトブロック3%混入 (SK03893埋土)
- 13 7.5Y2/1 黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cm炭化物3%混入 (SK03893埋土)
- 14 7.5Y5/3 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cm炭化物10%混入 (SZ115埋土)
- 15 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径1cm炭化物1%混入 (SZ115埋土)
- 16 7.5Y2/1 黒色土 しまりややあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック3%混入 (SK03893埋土)
- 17 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりややあり 粘性あり シルト質 (SK03893埋土)
- 18 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 粘性あり シルト質 径0.1~0.3cm炭化物3%混入 (SK03893埋土)
- 19 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 しまりあり 粘性ややあり (SK03893埋土)
- 20 10Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.1~0.5cm炭化物3%混入 (SK03893埋土)
- 21 10Y2/1 黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.2cm炭化物2%混入 (SZ169埋土)
- 22 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 10Y4/2 オリーブ灰色土ブロック5%混入 (SZ169埋土)
- 23 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.05cm炭化物3%混入 (SZ169埋土)
- 24 7.5Y3/2 オリーブ黒色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5cm炭化物2%混入 (SZ169埋土)
- 25 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 しまりあり 粘性ややあり 径0.5~1cm炭化物10%混入 (SZ169埋土)
- 26 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 粘性ややあり シルト質 しまりあり (SZ169埋土)
- 27 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 28 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり
- 29 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト しまりあり 粘性ややあり (SZ115埋土)
- 30 5GY4/1 暗緑灰色シルト しまりあり 粘性あり

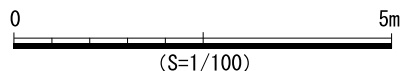


図 116 SZ115 遺構図 (2)



断面形は各周溝とも底面がやや丸いものの逆台形を呈する。北溝北端のD断面のみ底面が平坦である。西溝方台部側壁面に沿って崩落土の堆積が認められるが、他の周溝では類似する土層の堆積はあまり認められない。東溝・南溝の周溝外縁側では壁面崩落土の堆積が著しく、構築直後から壁面崩落が進行したと考えられる。

**遺物出土状況** 周溝の埋土上層を中心に土器486点、石器類1点が出土し、集中して出土した箇所は認められなかった。土器片の時期はⅡ期～Ⅶ期までの複数時期に及ぶが、いずれも摩耗の進んだ小片である。東溝から出土し、ほぼ完存するⅡ期の壺446は、東溝方台部側壁面付近の中層から出土した。供献土器と考えられる。Ⅳ期高坏445は南溝上層から出土し、混入資料と考えた。

**出土遺物** 445はⅣ期高坏A2類の脚部。これまでのⅣ期高坏例のなかでは大型品で柱状部が長い。鏢状口縁をもつ可能性がある。付根及び裾部に直線文を施文する。446はⅡ期壺A2類でほぼ完存する。頸部がやや直立気味で口縁部が緩やかに外反する。頸部及び胴部上半に貝による直線文を施文する。頸胴部の直線文帯と無文帯との境界はわずかな段が認められるが、痕跡的である。底部は突出気味で安定が悪い。

**時期** 供献土器の時期からⅡ期と考えられる。

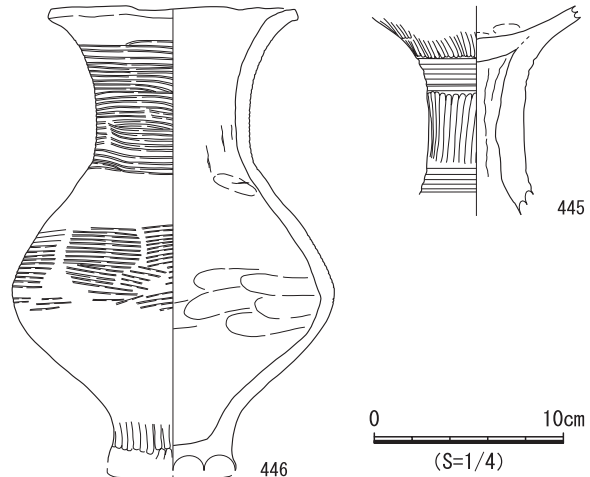


図 117 SZ115 遺物実測図

#### SZ118 (遺構：図 118、遺物：図 119)

**検出状況** 西部東側北寄りに位置し、周溝は上層にあるⅤ期～Ⅵ期のSZ117の東溝から北溝とほぼ重複して検出した。西溝はⅤ期のSZ116東溝に切られる。

**方台部** 東西長は約6.5mで、南北長が明らかにできないが、平面形は正方形もしくはやや南北に長い長方形と考えられる。墳丘・主体部は確認できなかった。

**周溝** 各辺とも比較的直線的である。幅は約1.5mで、深さが各周溝で異なり、残存状況や堆積状況の違いを示している。西溝は深さ約0.3mと浅く、壁面傾斜も緩やかで底面が平坦である。北溝は深さ約0.5mで、断面形は壁面傾斜の緩やかな逆台形を呈す。方台部側壁付近にはオリーブ灰色土の崩落土と外縁の壁面付近には壁面崩落土が当初堆積して、その後、黒色土が堆積して埋没している。東溝は深さ約0.7mと深い。底面は平坦で、断面形は壁面傾斜の急な逆台形である。底面にはオリーブ灰色土ブロック混じりの土が堆積し、一部に周溝外縁側に壁面崩落土が認められる。南溝が不明のため、現状ではコの字形を呈する。

**遺物出土状況** 周溝の埋土上層を中心に土器170点が出土した。Ⅳ期～Ⅵ期までの土器が認められるが、Ⅳ期の土器が比較的多く認められる。Ⅳ期甕447は東溝南端の底面直上で出土し、供献土器である可能性が高い。なお、東溝上面から粘土塊が出土した。

**出土遺物** 447～450はいずれもⅣ期の甕A類。447は口縁部から底部まで遺存する。口縁部は短く屈折し、胴部は頸部からゆるやかに膨らむ。胴部中位には刺突文が認められる。右下がりタタキ痕が

胴部中央から頸部付近まで認められる。胴部下半内面にはケズリ調整が残る。450は口縁部が受口状となり頸部に刺突文がわずかに残る。451は胴部の小片で、上部にわずかながら貝による条痕が認められる。条痕より下には2帯の半截竹管による押し引きが施文される。条痕が認められ、横走る文様帯がある点は烏丸崎型変容壺に類似することから、縄文時代晩期終末期～弥生時代初頭の資料と考えられる。

時期 供献土器の時期から、IV期と考えられる。

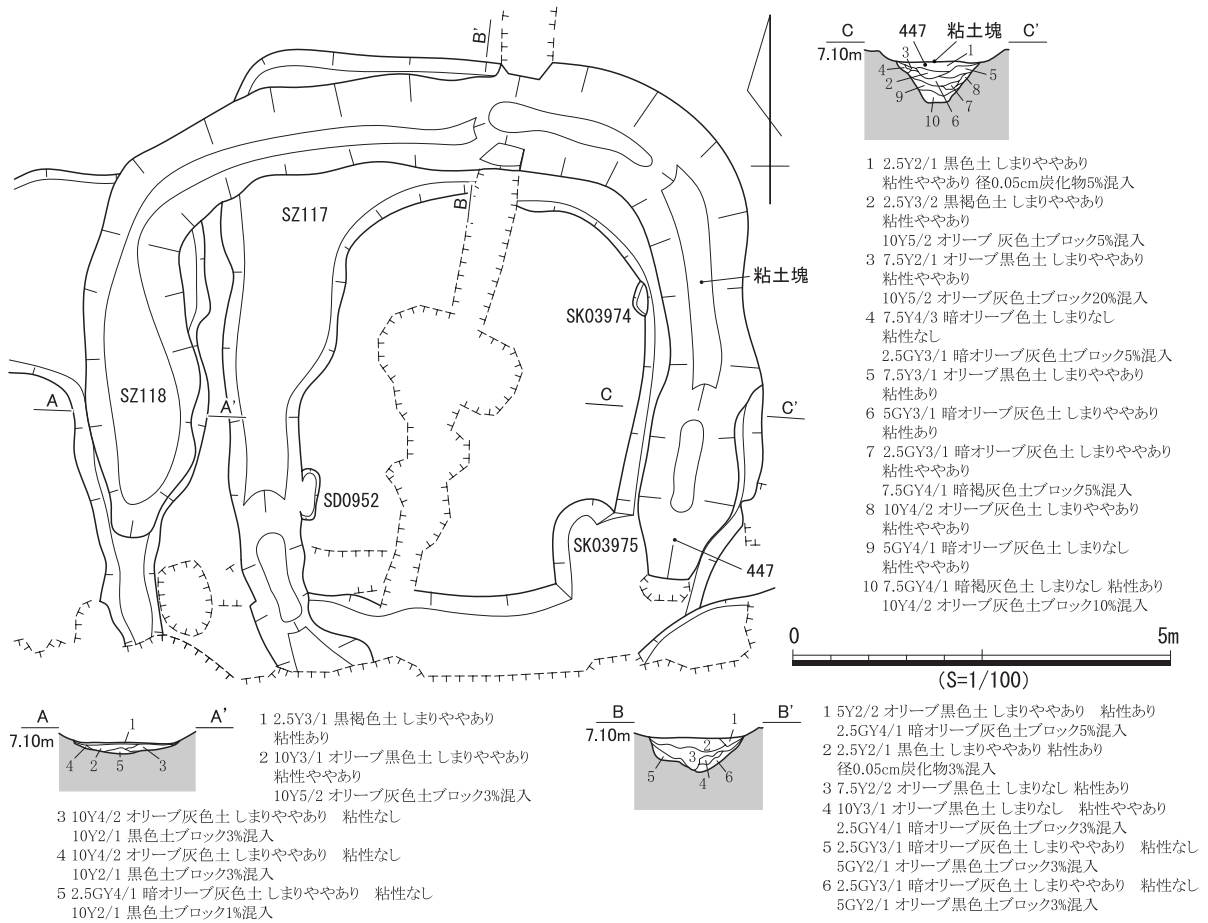


図 118 SZ118 遺構図

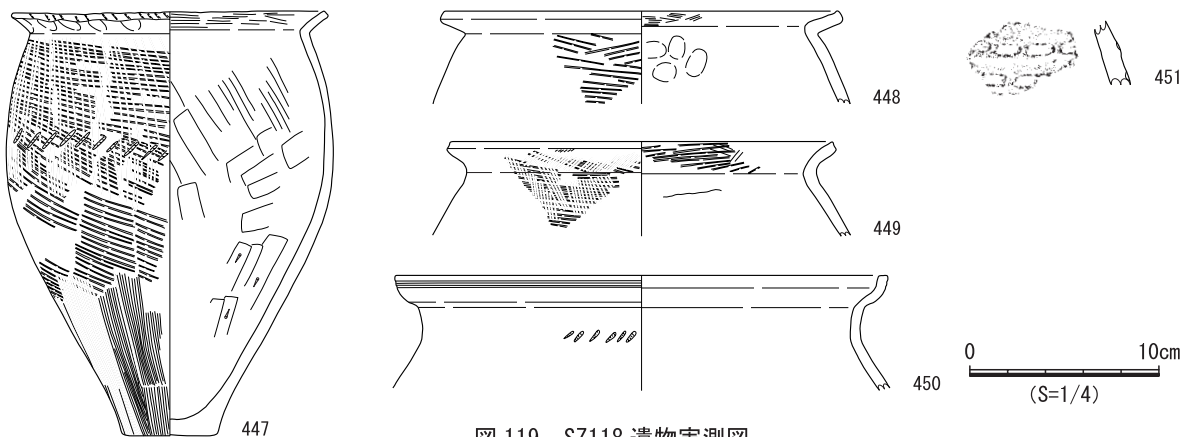


図 119 SZ118 遺物実測図



## SZ119 (遺構：図 120、遺物：図 121)

**検出状況** 西部東側北寄りで検出し、北溝北端が調査区域外にある。北東部をSK03692、北西部をSZ123に切られるが、周溝はほぼ全周する。SB205、SB206に切られるSK03687掘削後、その周辺でV層が確認できていなかったため、再度掘り下げたところ、平面形をVI層上面で確認した。東に隣接するSZ115との切り合いが不明瞭で、平面で新旧関係を確認できなかった。また、サブトレンチの断面観察によりそれぞれの周溝壁面を確認したが、それでも新旧関係は判断できなかった。なお、供献土器の時期から、SZ115がSZ119に先行して造営されていると考えられる。

**方台部** 南北約8.5～8.8m、東西約9.0mのやや東西に長い形状である。隅部はやや丸みをもつが各辺は比較的直線的である。方台部中央付近にSK03685が位置しており、墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

**周溝** 西溝は幅約2.0m、深さ約0.5m、南溝は幅約1.5m、深さ約0.5mを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦であり、残存状況がよい。方台部側壁には崩落土の堆積が壁面に沿って認められ、上層の黒色土が堆積して埋没したと考えられる。埋土上層では、炭化物がほぼ全域にわたって確認できた。東溝は幅約3.0mと幅が他の周溝と比べて広く、方台部側の壁面は急傾斜だが、反対側となる東壁面は傾斜が緩やかである。周溝南西部は他よりやや浅く、北西隅部は内縁に一段の平坦面を有する。

**遺物出土状況** 各周溝の上層を中心に土器1,255点、石器類2点が出土したが、特に遺物が集中して出土した箇所は認められなかった。遺物の時期はⅡ期～Ⅵ期までが認められる。457はⅣ期壺であり、東溝の方台部側壁付近で、横位の状態で出土した。周囲から転落したと考えられ、ほぼ完存しており、胴部下半に穿孔があることから、供献土器と考えられる。他に同時期の壺、甕が破片で出土した(452、455、456、458、459、460～463)。

**出土遺物** 452はⅣ期壺A1類。口縁部に凹線が認められる。453は摩耗が著しいⅡ期の壺A1b類。口縁端部に一部押圧が認められる。454はⅥ～Ⅶ期の壺A1b類。口縁部外面に刺突文、内面に羽状文が認められる。455、456ともにⅣ期の壺の胴部片。破片の大きさなどから大型品と考えられる。455には直線文と扇形文、456には直線文と波状文が認められる。457はⅣ期壺A2類の脚付壺。胎土は白色を呈し、在地のものとは異なる。頸部がやや短く、口縁部に凹線6条認められる。胴部は算盤玉状となり最大径は胴部中央よりやや下がった位置にあり、強く屈曲する。頸部から胴部最大径まで直線文4帯を施文し、その間に波状文を施文する。頸部直線文より上には刺突文、脚部付根にも直線文を施文する。脚部は短く外反して端部に平坦面をもち、高坏の脚部形状と類似する。胴部下半には打ち欠きによる穿孔が認められる。凹線が多条となることからⅣ期でも後半段階と考えられる。458、459はⅣ期甕A2類。いずれも外面にわずかにタタキ痕が残る。460、461はⅣ期甕B類。460は口縁部がやや内傾し、端部は強いナデによって凹面を形成する。また、屈曲部内面にも強い凹面が認められる。461は口縁部を欠損する。頸部から胴部上半まで直線文を施文し、その最下段に刺突文を加える。462、463はⅣ期甕A類底部。462は内面のケズリが底部付近にまで及ぶ。463には穿孔が認められる。464はⅥ～Ⅶ期の甕D類の脚部。裾部に折り返しが認められる。

**時期** 供献土器の時期から、Ⅳ期後半と考えられる。

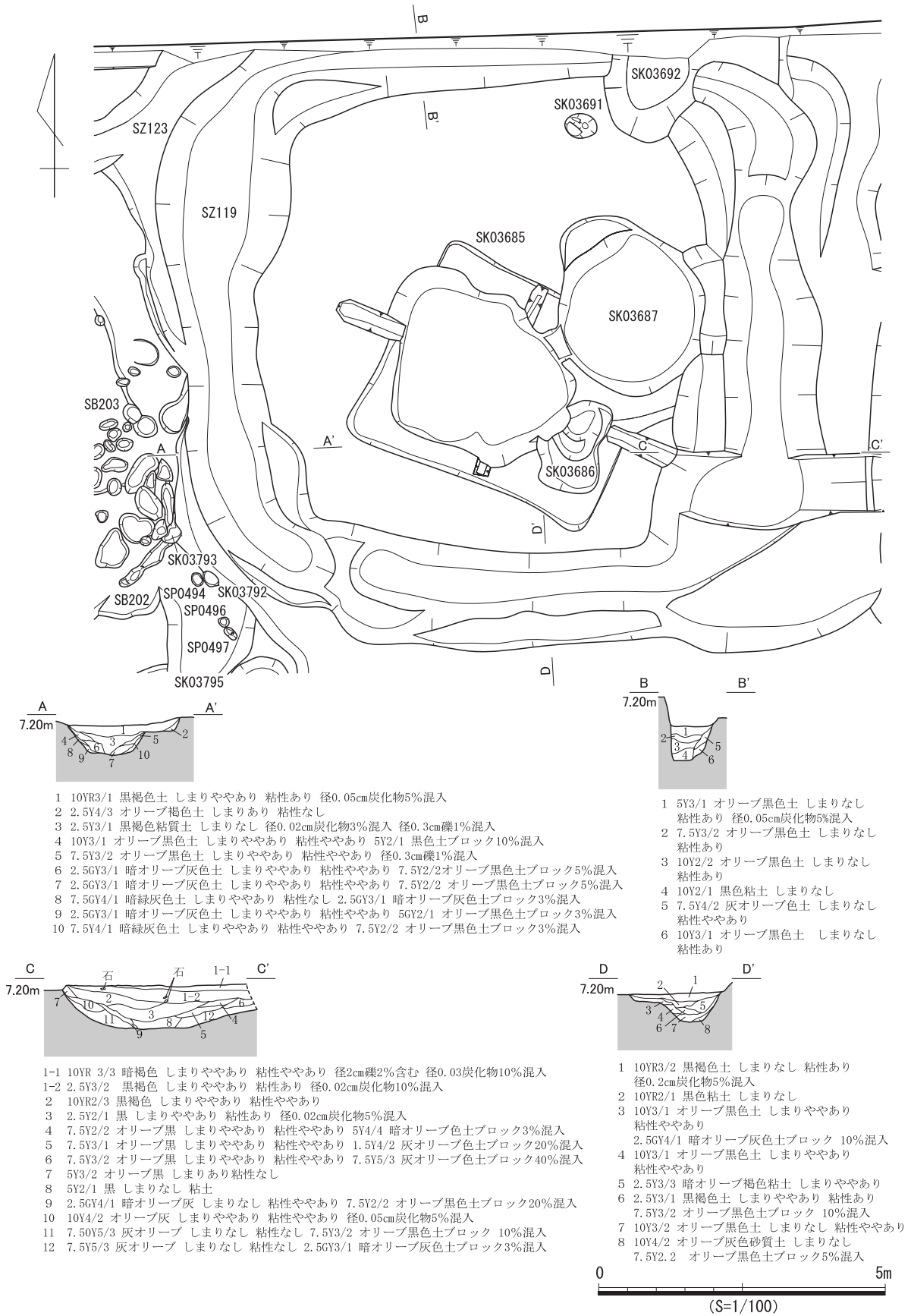


図 120 SZ119 遺構図

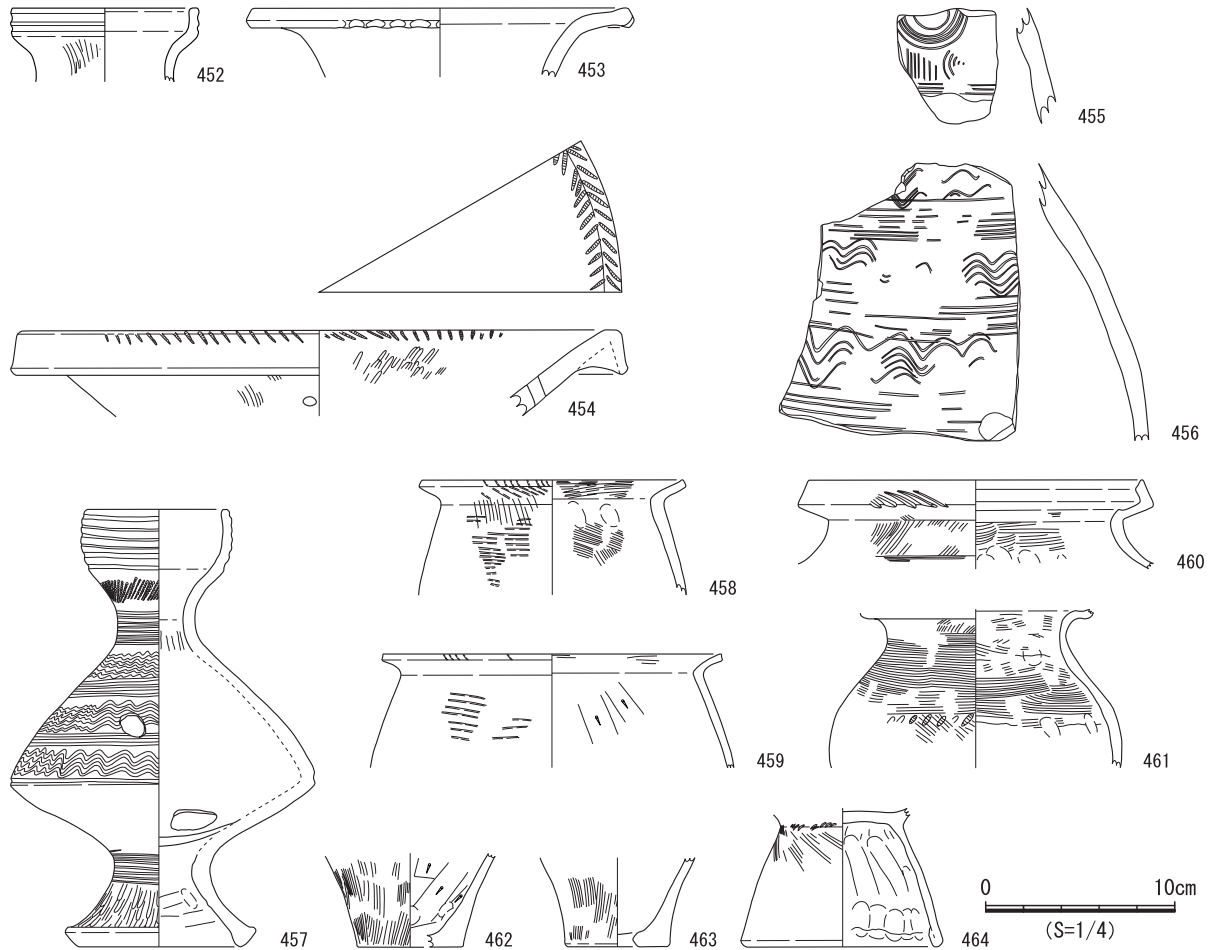


図 121 SZ119 遺物実測図

SZ120 (遺構：図 122、遺物：図 123・124)

**検出状況** 西部東側北寄りに位置し、SK03988底面において西溝と北溝の一部を確認した。北溝がSZ220の南溝を切り、南溝はSZ167の北溝と共有している可能性もある。

**方台部** 西辺は直線的だが、その他の形状は大半が調査区域外にあるため不明である。墳丘盛土や主体部は確認できなかった。

**周溝** 西溝は幅約1.2mで深さ約0.4mである。壁面傾斜が緩やかで、底面も緩やかな弧状を呈する。下層は壁面や墳丘などからの崩落土が堆積しており、上層はブロック土や土器片を多く含むので、人為堆積の可能性がある。北端が途切れ、北溝とともに陸橋部を形成する。南端も途切れているので陸橋部を形成する。北溝は幅約1.2m、深さ約0.2mで西溝と比べると遺存状況が悪い。

**遺物出土状況** 西溝から土器3,582点、北溝から土器397点が出土した。西溝は上層から中層にかけて、V期～VII期の土器が出土した。V期の土器は小片で出土量も少ないため周囲から二次的に混入した可能性が高いが、大半はVI期後半～VII期初頭の土器で占められる。特に、中央付近の中層付近からVI期後半～VII期初頭のまとまった土器が出土した。供献土器ではなく、周辺の竪穴住居等の構築・整地時に混入した可能性が高い。北溝の土器の出土状況は西溝と同様だが、小片が多く、まとまった出土状況は認められなかった。

**出土遺物** 465、466はVI～VII期の壺A類。465はスタンプ文を施文する。口縁部は外反して開き、端

部下端を拡張して、擬凹線と円形浮文を施文する。内面には2種類のスタンプ文が認められる。口縁部上端付近に沈線1条を配し、その下に双頭渦文のスタンプ文を1周させる。さらに双頭渦文の下には眼鏡状のスタンプ文を縦方向に施文する。眼鏡状のスタンプ文は間隔を置いて施文されるが、その間隔は確認範囲が1カ所のみのため不明である。眼鏡状のスタンプ文より下には、痕跡的な沈線が認められる。胴部外面にもスタンプ文を直線文と交互に施文する。直線文は2帯認められ、頸部直下には眼鏡状のスタンプ文、2帯の直線文の下には双頭渦文のスタンプ文を施文する。下段の双頭渦文より下には口縁部内面と同様、眼鏡状の縦方向の眼鏡状のスタンプ文が間隔を置いて施文する。さらに、眼鏡状のスタンプ文を含めて、その下位の部位には赤彩が施される。眼鏡状のスタンプ文は円形スタンプ文2カ所の間を2本線のスタンプ文で充填して構成している。スタンプ文は山陰～北陸地方にかけて日本海側からの要素と考えられるが、その他は在地的な構成である。胴部の文様構成は直線文と刺突文の組み合わせをスタンプ文に置き換えたものであり、壺の器形は壺A1類で赤彩も含めて、他

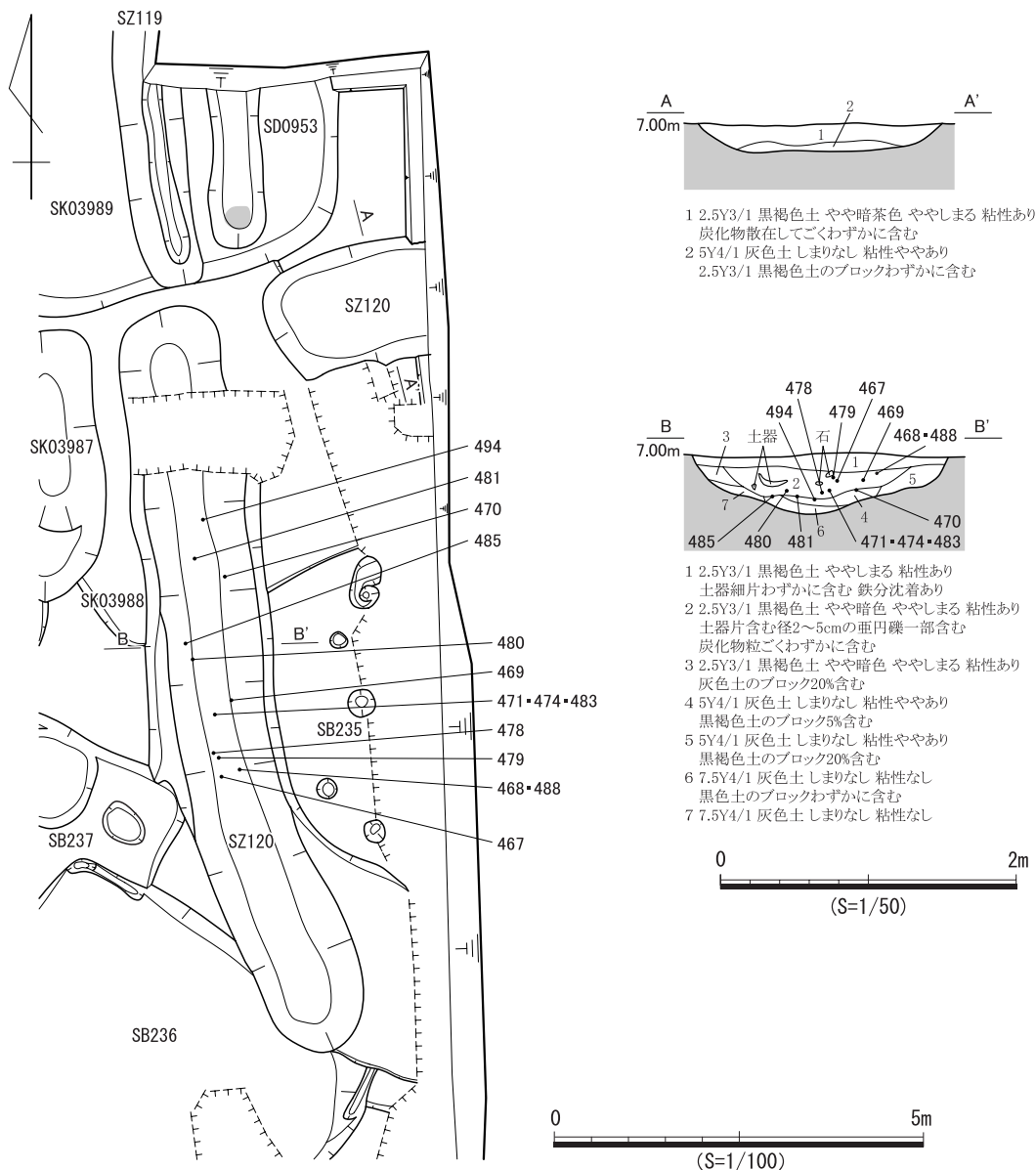


図 122 SZ120 遺構図



の壺A類とかわりがない。在地の資料に一部、外来的な要素が取り込まれた資料と考えられる。466は口縁部が強く開く。内面では一端屈曲して口縁部が開く部位が認められる。467はVI期～VII期の壺D3a類。口縁部がわずかに直立するが、端部は顕著な平坦面を形成する。468は下膨れの胴部の資料。VI期～VII期の壺B類の胴部であろう。469もVI期～VII期の壺C類で例外的に胴部上半に文様がある例。口縁部はやや外傾するが端部がわずかに内湾する。端部は平坦である。頸部以下には文様は直線文と刺突文、鋸歯文の組み合わせが認められるが、部位によってその構成が異なる。A面では直線文4帯、その間を刺突文と鋸歯文で施文する。B面では直線文帯は2帯で直線文帯間に刺突文、下段の直線文帯下には大きな線刻状の鋸歯文を配して、直線文を省略しているようにみえる。口縁部には3カ所の打ち欠きがある。470はVI～VII期の壺C類。口縁部がやや内湾し、端部に内傾面が認められる。胴部はほぼ球形で底部が小さい。471も壺胴部。胴部中央が強く膨らみ、底部の小さい資料である。頸部の径から壺C類の胴部と考えられる。時期はVI期～VII期と考えられる。472はVI～VII期の壺胴部片で線刻のある資料である。473はVI～VII期の壺H類の底部で中央に穿孔がある。474～476はV期～VI期の甕A類。474は文様が認められないが、口縁部が強く屈曲して、端部及び内面に強いナデによる凹面が認められる。475は胴部中位に刺突文があり、口縁部がわずかに直立し、端部には痕跡的な平坦面が認められる。476は頸部からの立ち上がりが長く、口縁部の屈曲が弱い資料。477はVI期甕D1a類。口縁部が鋭く屈曲し、端部上端がやや外方へ引き出される。外面には刺突文が認められる。478、479とともに甕B3類の好例。胴部最大径が中位よりわずかに下がった位置につき、口縁端部は断絶的な強いナデによって形成された凹凸が著しい。480はVI期～VII期の甕C2類。口縁部が内湾し、端部には内傾する平坦面が認められる。胴部はやや下膨れである。481はV期～VI期の鉢A1類。口縁部が直立し、端部はやや幅広の平坦面を形成する。頸部は直立気味で頸部直下には直線文と刺突文を施文する。口縁部には打ち欠きが認められる。482は胎土・調整からV期～VII期と考えられるが、形状が不明の資料。口縁部がやや内傾し、筒形の形状を示す。口縁部やや下に鐔状の突帯が貼付される。483、485、486は内面に多条沈線のあるVI期後半の高坏C2c類。口縁部はわずかに内湾しながら立ち上がる。483の脚部は透孔付近から内湾して開き、端部には打ち欠きが認められる。484はV期前半の高坏B3a類。口縁部が短く外反し、端部は外方へ拡張する。外面には波状文と直線文を施文する。487はV期後半～VI期前半の高坏B3a類。口縁部は強く外反する。488～492はVII期高坏G3類。488は口縁部上半に多条沈線4帯、その間に山形文、対向山形文を施文する。489は坏部底径が広いが、脚部は付根から強く外反する。多条沈線が口縁部上半に施文される。490～492は脚部でいずれも裾部が強く外反する。491は多条沈線、刺突文、山形文による施文が認められる。492はスタンプ文のある資料。沈線間を山形文、刺突文、S状のスタンプ文で施文する。493は内湾する脚部をもつVI期高坏G1類。494はV期の器台A類。直線的に開く口縁部をもち、脚部は付根から外反する。付根直下には直線文が認められる。脚部内面には線刻状の沈線が認められる。

**時期** 遺構の重複関係では、方台部に相当する箇所にはVII期のSB235が構築されていることや、北溝がIV期のSZ220を切ることから、IV期～VII期の構築といえる。また、出土遺物はVI期後半～VII期初頭の土器がまとまって出土しているが、周辺の堅穴住居構築時等に混入した可能性が高い。一方、本遺構周辺にはIV期のSZ220、SZ221などが並列して配置されている事実から、本遺構の時期をIV期と考えておきたい。



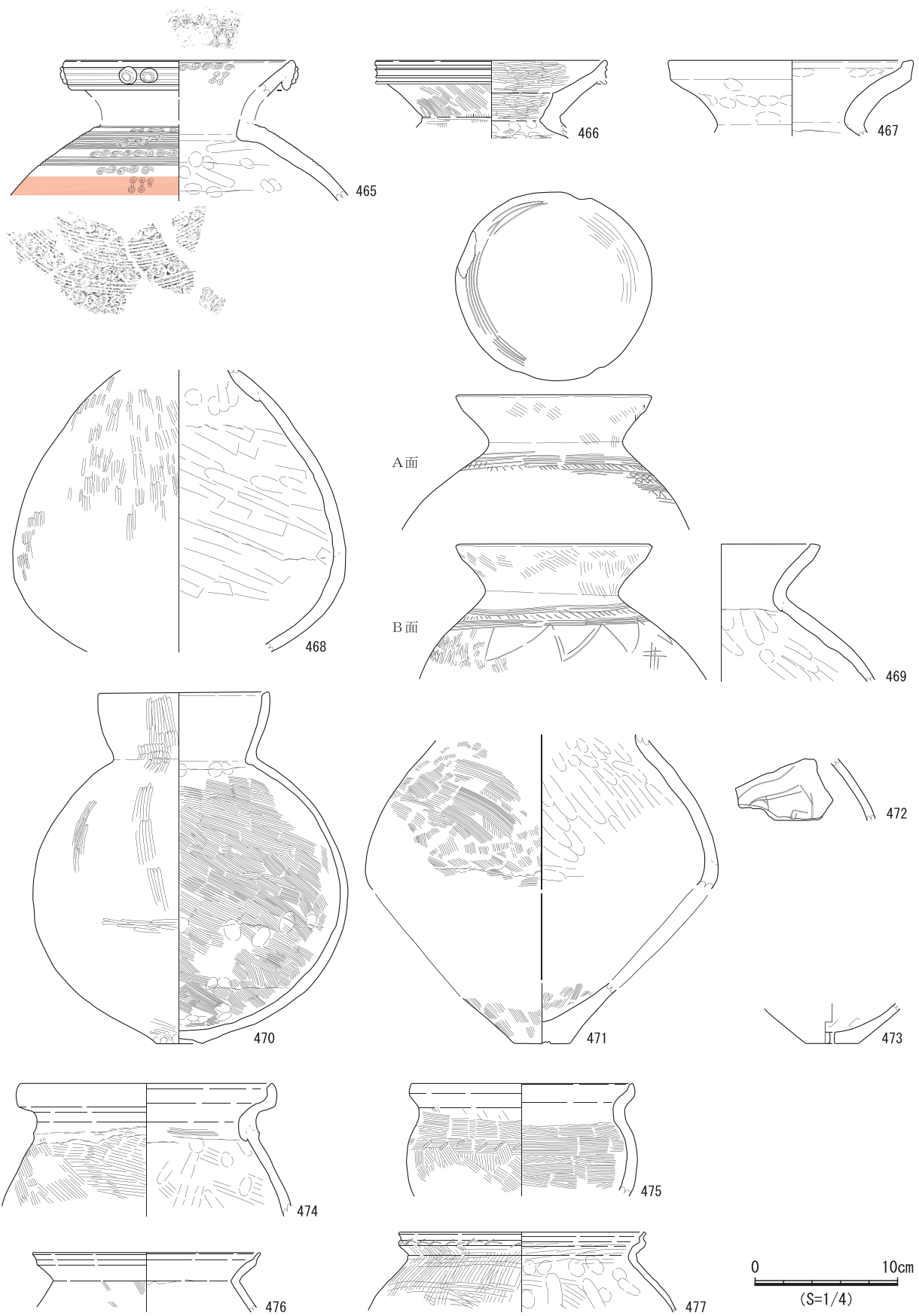


图 123 SZ120 遺物実測図 (1)

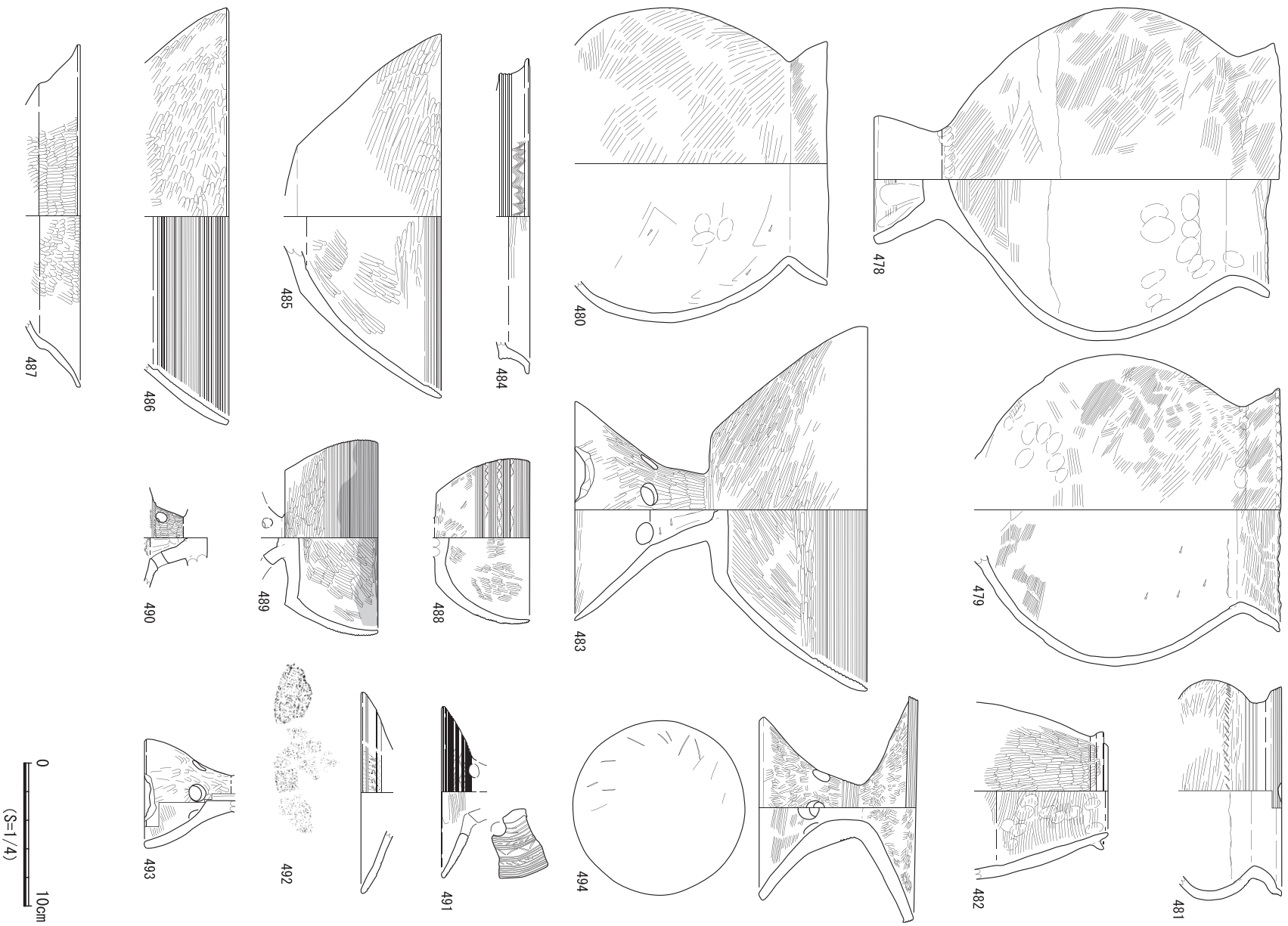


図 124 SZ120 遺物実測図 (2)